

『詩經』圖譜の基礎的研究
——圖譜の繼承と展開——

原田
信

目次

序章 本研究の背景と目的、方法	一頁
第一節 研究背景	一頁
第二節 研究目的と方法	三頁
第一章 歴代『詩經』圖譜の概要と特色	六頁
第一節 漢代から北宋までの『詩經』圖譜	六頁
第二節 南宋の『詩經』圖譜	十頁
第三節 元代の『詩經』圖譜	十七頁
第四節 明代の『詩經』圖譜	二十三頁
第五節 清代から中華民國期までの『詩經』圖譜	三十四頁
小結	五十一頁
第二章 『詩經』圖譜の形成と多様化	六十五頁
第一節 宋代における『詩經』圖譜の形成	六十五頁
第二節 宋元における『詩經』圖譜の多様化	七十頁
小結	八十四頁
第三章 『詩經』圖譜の定型化と改編	八十八頁
第一節 明代における定型の確立	八十八頁
第二節 清代における定型の改編	九十三頁
第三節 明代における改編	九十六頁
第四節 清代における改編	一〇三頁
第五節 宋元の經書圖譜に対する認識の變化	一一六頁
小結	一一八頁
第四章 宋元『詩經』圖譜の影響と消失	一二五頁
第一節 宋元『詩經』圖譜の影響	一二五頁
第二節 宋元以來の『詩經』圖譜の消失	一三七頁
小結	一四六頁

結語	一四九頁
主要參考文獻	一六一頁
初出一覽	一六八頁

序章 本研究の背景と目的、方法

第一節 研究背景

『詩經』は中國最古の詩集として、さらには經書の一つとして、古來より讀み繼がれてきた。その傳承の過程では、『詩經』の編纂意圖や篇章の構成、時代背景、語彙や用字、詩篇に詠み込まれた諸制度、自然現象、名物など、様々な面から『詩經』の解釋が試みられ、註釋が著されてきた。このような註釋には、文字で記されたものとともに、圖譜によって示されたものもある。特に、現存する宋代以降の『詩經』の一部には、書中に圖譜を附したものがあつた。また、専ら經書の圖譜を収録する書物にも、『詩經』に關する圖譜が見える。これらの書物に見える圖譜は、文字による註釋と同じく、『詩經』の内容を解釋した結果であり、『詩經』を讀み解く上で参照されたことだろう。

このように『詩經』註釋の一角を占めると考えられる圖譜について、『詩經』に關する従來の研究ではほとんど取り上げられることがなかつた。例えば、日中の二十世紀中の『詩經』研究に關する單行本、論文を分類収録した文獻目録には、『詩經』圖譜に關する研究は全く見られない^一。また、古代から近代に至るまで歴代の『詩經』解釋の特徴と變遷を記した學術史のなかでも、『詩經』圖譜は全く取り上げられていない^二。

『詩經』圖譜が顧みられない狀況は、經學が學問の主體であつた清代、そして民國初期にかけてもそれほど變わらなかつた。この時期における見解の一例を挙げると、江藩（一七六一〜一八三一）の『國朝經師經義目錄』や皮錫瑞（一八五〇〜一九〇八）の『經學歷史』、劉師培（一八八四〜一九一九）の『經學教科書』は『詩經』註釋に關わる重要な著作や參照すべき註釋書を列挙していながら、『詩經』圖譜には全く言及していない^三。この一方で、皮錫瑞は『經學通論』のなかで「多識草木鳥獸、乃足以證詩義。動植物學、今方講明。宜考毛傳、爾雅、陸疏、證以圖說、參以目驗（多く草木鳥獸を識らば、乃ち以て詩義を證するに足る。動植物の學、今方に講明されり、宜しく毛傳、爾雅、陸疏を考ふるに、圖說を以て證し、參ふるに目驗を以てすべし）」と圖譜參照の必要性を説いている。また、張之洞（一八三七〜一九〇九）や鄭振鐸（一八九八〜一九五八）は『詩經』を學んだり、研究したりする上で重要性の高い書物の一部に『詩經』圖譜を擧げている。しかし、そのなかに見えるのは徐鼎『毛詩名物圖說』と岡元鳳『毛詩品物圖攷』の二種のみである^四。多くの『詩經』圖譜は、經學を學び探究する上で重視されていたとは言い難い。

もう一つ、『詩經』圖譜を包括する分野には、印刷や版畫、挿圖がある。これらの歴

史が整理されるなかで、經書の挿圖も取り上げられている。しかし、より多く註目され取り上げられてきたのは、圖の内容が多様で藝術的評價も高い佛典や戯曲、小説の挿圖、畫譜などであり、經書の挿圖は、北宋の聶崇義『三禮圖』や陳祥道『禮書』、南宋の纂圖互註本などが挿圖發展の初期段階を代表する資料として位置づけられるだけで、體系的に論述されることはなかった^五。

しかし、『詩經』圖譜に關する研究が全く行われなかったわけではない。例えば、書物に収録された圖譜とは異なるが、南宋の畫家である馬和之が描いた繪畫「詩經圖」の傳來や特徴について分析した研究がある^六。また、『詩經』圖譜を含む宋代の『六經圖』や元代の『六經圖碑』の部分的な内容の特徴、流傳や變遷、清の潘宗鼎『六經圖考』に關する紹介や考察などもある^七。さらに、近年ではわずかながら『詩經』圖譜そのものを取り上げ、『詩經』圖譜の研究意義や、ほとんどが散佚した唐代以前の『詩經』圖譜の概要を取り上げた論考が發表されている^八。

これらの論考は、『詩經』圖譜を研究の俎上に載せたという點で少なからぬ意義があると同時に、『詩經』圖譜を研究する上での問題點も浮き彫りにしている。

まず、『詩經』圖譜の研究意義を論じた薛景「『詩經』圖學概況及研究意義」は、『詩經』解釋における圖譜の利用を「圖學」とし、『詩經』を「美術圖」と「名物圖」の二種に分類する。そして、漢代から清代までの『詩經』圖譜の一部を例として、『詩經』名物考證の發展の流れと『詩經』圖學の發展とを關聯付け、『詩經』研究における新たな研究對象として圖譜を評價している。この論考は、『詩經』圖譜に研究意義を認めた點で重要である。しかし、このなかでは名物考證の對象となった動植物や地理などと『詩經』圖譜の内容の類似性を比較するだけであり、例として挙げられている『詩經』圖譜は少なく、圖譜の編纂目的にも言及していない。現存する『詩經』圖譜によると、動植物や天文地理などの事物を圖示した「圖」だけではなく、一覽表である「譜」を合わせて収録する『詩經』圖譜も少なくない。また、論考の中に言及されている『詩經』圖譜には、名物考證の觀點から編纂されたか疑わしいものもある。『詩經』圖譜の「圖」のみを取り上げ、名物考證の發展との關聯性を前提としてしまうと、研究意義を論じることのできる『詩經』圖譜は限られてくる。

次に、李傑榮「漢之唐代的詩經圖」や張玖青、曹建國「唐前『詩經』圖考論」は諸書の記載から、ほぼすべて散佚した唐代以前の『詩經』圖譜の内容や特徴を指摘した論考である。この二つの論考は、早期の『詩經』圖譜をめぐる状況と特徴を詳細に考察している。しかし、唐代以前の『詩經』圖譜は繪畫が多く、宋代以降の圖譜との關係性

や影響についても、『詩經』を題材とした繪畫についてのみしか指摘していない。

以上のように、『詩經』に關する研究では『詩經』圖譜自體がほとんど取り上げられておらず、印刷や版畫、挿圖の歴史において一部の圖譜に言及されるだけであった。また、近年の『詩經』圖譜を對象とした研究でも、考察對象となつたのはごく一部、あるいは特定の時期の圖譜であり、宋代以降の經書圖解本や書物の附録に見られる『詩經』圖譜を對象とした研究はこれまでほとんど存在しなかった。

第二節 研究目的と方法

従來の諸研究において、『詩經』圖譜はほとんど取り上げられなかった。さらに、近年の『詩經』圖譜を對象とした論考では、「圖學」を主として研究意義を論じる、あるいは特定の時期の圖譜を整理するなど、その議論は初歩的な段階にとどまっております、『詩經』圖譜を研究する觀點も一様ではない。『詩經』圖譜は様々な分野から研究され得るだろうが、『詩經』圖譜はあくまで註釋であり、『詩經』を讀み解くために用いられたものである。このため、本研究では『詩經』圖譜を『詩經』註釋の一種として取り上げる。筆者がこれまで調査し得た『詩經』圖譜は散佚、現存するもの合わせて八十六種ある。

このなかで、現存する宋代から中華民國初頭までの『詩經』圖譜五十八種を通覽すると、五十種は全く同じか、一部によく似た圖譜を収録している。『詩經』圖譜の大半に見られるこの類似性は、宋代以降の多くの『詩經』圖譜の間に繼承關係、すなわち原型となる『詩經』圖譜が存在しており、それがそのまま、あるいは改編されて他の『詩經』圖譜に収録されていったことを示している。

このことは、『詩經』圖譜について一つの問題を示唆している。それは、繼承關係にあつて類似した多くの『詩經』圖譜が註釋としてどのような役割を擔つたのか、ということである。類似しているということは、言い換えれば獨自性に缺けるといふことでもある。様々な註釋が積み重ねられて發展していくことが學術の歴史だとするならば、『詩經』圖譜が長期にわたつてその姿を大きく変えることがなかったことは異様である。しかし、長期にわたつて編纂された以上、『詩經』圖譜は決して異様な存在ではなく、『詩經』を讀み解く上で普遍的に参照されたことだろう。歴代、數多の學者が自身の觀點から『詩經』を解釋し註釋を著した一方で、これとは對照的に圖譜は一貫して類似していながら、何らかの理由から編纂され、参照され續けたのである。

さらに、『詩經』圖譜が「圖譜」という體裁を取る以上、文字によって記された註釋とは異なる役割を擔つていたことも推測される。『詩經』註釋史を考える上で、その一

角を占める『詩經』圖譜は、文字による註釋とは異なるとはいえ、見逃してはならない資料であり、これが擔った役割は明らかにされるべき問題である。

しかし、冒頭でも述べたように、これまでの研究のなかで『詩經』はほとんど取り上げられることがなかったため、この問題を検討する手がかりを得る必要がある。そこで、本研究では、まず『詩經』圖譜をめぐる傳來状況や内容、編纂者、編纂目的、編纂形態といった情報を整理し、歴代の『詩經』圖譜の特色を把握する。次に、この特色から類似する圖譜と類似しない圖譜を辨別し、繼承關係の内實を考察する。最後に、この考察結果を手がかりとして、類似した『詩經』圖譜が長期にわたって存在した理由と、註釋として擔った役割を検討する。

序章 註釋

一 村山吉廣、江口尚純編『詩經研究文獻目錄』（汲古書院、一九九二年）および寇淑慧『二十世紀詩經研究文獻目錄』（學苑出版社、二〇〇一年）を参照した。

二 戴唯『詩經研究史』（湖南教育出版社、二〇〇一年）、夏傳才『詩經研究史概要』（清華大學出版社、二〇〇七年）、洪湛侯『詩經學史』（中華書局、二〇〇二年）を参照した。

三 江藩『國朝經師經義目錄』は『國朝漢學師承記』（中華書局、一九八三年）、皮錫瑞著、周予同註釋『經學歷史』（中華書局、二〇〇八年）、劉師培著、陳居淵註『經學教科書』（上海古籍出版社、二〇〇七年）を参照した。

四 皮錫瑞著、周予同註釋『經學通論』二「論鳥獸草木之名、當考毛傳爾雅陸疏而參以圖說目驗」（中華書局、二〇〇八年）による。張之洞『書目答問』（范希曾補正、孫文泱增訂『增訂書目答問補正』中華書局、二〇一一年による）は『詩經』を學ぶ上で参照すべき書籍五十二種列挙しているが、圖解は徐鼎『毛詩名物圖說』一種である。鄭振鐸「關於詩經研究的重要書籍介紹」（商務印書館『小說月報』一九三三年第三期）は二〇八種の『詩經』註釋書を挙げている。なかには附録として『詩經』圖譜を収録した書物も複数あるが、これらには一切言及されておらず、圖解として挙げられているのは徐鼎『毛詩名物圖說』と岡元鳳『毛詩品物圖攷』の二種である。

五 比較的早くに版畫や繪入り本に着目し収集、または整理刊行した人物には、日本では黒田源次や薄井恭一、中國では魯迅、鄭振鐸、王孝慈、馬隅卿、傅惜華、徐森玉などがある。このなかで黒田源次のコレクションを集めた『支那古版畫圖錄』（美術懇話會、一九三二年）や薄井恭一のコレクションを刊行した『明清插圖本圖錄』（薄井君入營記念會、一九四二年）、鄭振鐸が重要な繪入り本を集成した『中國古代版畫叢刊』（上海古籍出版社、一九八八年）およびこの事業を繼承して刊行された上海古籍出版社編『中國古代版畫叢刊二編』（上海古籍出版社、一九九四年）は、占書、啟蒙書、兵書、醫書、戲曲、小説、詩集など様々な書物の插圖を収録しているが、經書は『中國古代版畫叢刊』に収録されている聶崇義『新定三禮圖集註』一種のみである。また、鄭振鐸の「插圖之話」や「關於版畫」、「譚中國的版畫」（『漫歩書林』中華書局、

二〇〇八年に収録)、王伯敏『中國版畫史』(上海人民美術出版社、一九六一年)、周心慧『中國古代版畫史論集』(學苑出版社、一九九八年)や『中國版畫史叢稿』(學苑出版社、二〇〇二年)などの版畫史關係の論著、張秀民著、韓琦增訂『中國印刷史』(浙江古籍出版社、二〇〇六年)、米山寅太郎『圖說中國印刷史』(汲古書院、二〇〇七年)といった印刷史關係の論著では、佛典、戯曲、小説、本草書、金石圖、畫譜などの插圖を取り上げるものもあるが、經書に言及する記述の多くは、宋代の禮圖や纂圖互註本など一部である。わずかに、周心慧『中國古版畫通史』(學苑出版社、二〇〇〇年)は宋代の『六經圖』や清代の盧雲英『五經圖』、潘宗鼎『六經圖考』などを紹介している。一方、插圖の歴史を整理したものには、薛冰『中國版本文化叢書・插圖本』(江蘇古籍出版社、二〇〇二年)、祝重壽『中國插圖藝術史話』(清華大學出版社、二〇〇五年)、徐小蠻、王福康『中國古代插圖史』(上海古籍出版社、二〇〇七年)があるが、經書の圖解に關する記述は、版畫史、出版史の書物とそれほど大きな差はない。以上の他、文化的觀點から中國の插圖を研究した柯律格(Craig Clunas)著、黃曉鵬訳『明代的圖像與視覺性』(原題は *Pictures and Visuality in Early Modern China*) 北京大學出版社、二〇一一年)は經書に關して『易』圖を取り上げている。

六 馬和之「詩經圖」を考察對象とした論著には古原宏伸「詩經圖と孝經圖」(美術史學會『美術史』第十九卷、一九六九年)、楊仁愷「關於馬和之『詩經圖』的一些問題」(南京博物院『東南文化』二〇〇〇年二期)、揚之水「馬和之詩經圖」(教育部全國高等院校古籍整理研究工作委員會『中國典籍與文化』二〇一二年一期)、沈亞丹「詩經圖」: 一个宋儒的詩學圖像文本」(中國藝術研究院『文藝研究』二〇一二年九期)などがある。

七 南宋の『六經圖』に關する考察には、喬輝「楊甲『六經圖』之禮圖考論」(南京師範大學文學院學報二〇一六年三期)がある。『六經圖碑』については、その概要を紹介した王敏、徐自強「石刻『六經圖』記」(國家圖書館『國家圖書館學刊』一九八〇年三期)やその傳來を考察した汪前進「石刻『六經圖』綜考」(中國科學院自然科學史研究所『自然科學史研究』一九九三年一期)、吳長庚「六經圖碑述考」(中國孔子基金會『孔子研究』二〇〇三年二期)や吳長庚、馮會明『『六經圖』碑本書本之流傳與演變』(江西省社會科學院『江西社會科學』二〇〇三年二期)がある。潘宗鼎『六經圖』の刊刻年代については、楊艷燕『六經圖考』刊刻年代考辨」(上海圖書館學會『圖書館雜誌』二〇一一年七期)がある。このほか、「嶺南人文圖說之七十二」『六經圖』與鄭之僑」(廣東省社會科學界聯合會『學術研究』二〇〇九年十二月)では清代の鄭之僑『六經圖』の編者や内容の概要を紹介している。

八 『詩經』圖譜を對象とする論考には薛景「『詩經』圖學概況及研究意義」(『畢節學院學報』二〇一一年一期)、李傑榮「漢之唐代的詩經圖」(河北師範大學『河北師範大學學報』(哲學社會科學版)二〇一三年一期)、張玖青、曹建國「唐前『詩經』圖考論」(中國藝術研究院『文藝研究』二〇一三年三期)がある。

第一章 歴代『詩經』圖譜の概要と特色

これまで調査し得た『詩經』圖譜は、散佚、現存するものを合わせて八十六種、これらの圖譜の編纂は漢代から中華民國までと長期に渡って存在している^一。本章では歴代の『詩經』圖譜の傳存の有無、収録内容や出版形態、編纂者や編纂目的の概要を整理し、そこから導き出される傾向と特色を分析する。なお、本研究は書物に見える『詩經』圖譜を研究対象とするため、基本的に繪畫は取り上げない。ただし、北宋以前の『詩經』圖譜は繪畫が多いため、この時期の圖譜のみは繪畫を取り上げる。

第一節 漢代から北宋までの『詩經』圖譜

諸書の記載によると、『詩經』の内容や解釋を圖示する書物や繪畫は、遅くとも後漢には存在していた。この後、北宋以前に編纂された『詩經』圖譜は、諸書の記載に二十種が見える(次頁の表一)。この二十種は北宋の時に歐陽脩によって輯佚された鄭玄『毛詩譜』を除き散佚しており、その内容は圖譜の名稱や卷數、作者から推測するしかない。表一にて示したこの時期の『詩經』圖譜を名稱によって分類すると、「譜」は八種、「圖」は十三種ある。

第一項 漢代から北宋までの「譜」

『詩經』圖譜のなかでも早くに編纂されたのは(1)鄭玄『毛詩譜』である。これは『毛詩』の各詩篇の作成年代を一覧として示した年表である。鄭玄が編纂した当初の『毛詩譜』は散佚したが、北宋の時、歐陽脩によって輯佚された『鄭氏詩譜』が現在まで傳わっている。また、歐陽脩の輯佚とは別に、孔穎達『毛詩正義』には『毛詩譜』の「詩譜序」および「風・雅・頌」各篇の譜の解説の一部が収録されている^二。

(1) 『毛詩譜』の後、隋代までには(3) 『毛詩譜』、(4) 『毛詩答問駁譜』、(5) 『毛詩譜隱』、(9) 『謝氏毛詩譜鈔』、(14) 『毛詩譜』といった、『毛詩』に關する譜が編纂された。

なかでも、徐整の(3) 『毛詩譜』と大叔裘の(5) 『毛詩譜隱』は『經典釋文』の「序錄」に「鄭玄詩譜二卷、徐整暢、大叔裘隱」とあり、隋の劉炫(14) 『毛詩譜』は『隋書』卷三十二「經籍志」に「太叔求及劉炫註」と記されているように、いずれも鄭玄の(1) 『毛詩譜』の註釋書であった^三。また、(4) 『毛詩答問駁譜』の編者である王基は、『詩經』の解釋について毛傳を支持し鄭箋を非とする王肅に反駁する立場をとった人物であり、(4) は王肅の反論を列ねて「譜」にしたものかと推測される^四。

表一、漢代から北宋までの『詩經』圖譜

年代	作者	圖譜の名稱	出典／佚存
1	後漢 鄭玄	『毛詩譜』	『隋書』經籍志／歐陽脩輯『鄭氏詩譜』現存。
2	後漢・桓帝時 劉褒	『雲漢圖』／『北風圖』	張彥遠『歷代名畫記』。
3	三國吳 徐整	『毛詩譜』	『經典釋問序錄』／『隋書』經籍志等。
4	三國〰晉？ 王基？	『毛詩答問駁譜』	『隋書』經籍志。
5	三國〰晉？ 大叔表	『毛詩譜隱』	『經典釋問序錄』／『隋書』經籍志等。
6	晉 明帝（司馬紹）	『爾詩（爾風）七月圖』／ 『毛詩圖』	張彥遠『歷代名畫記』／高似孫『緯略』／朱謀壘『畫史會要』。
7	晉 衛協	『北風圖』／『黍離圖』／ 『毛詩圖』	『歷代名畫記』／裴孝源『貞觀公私畫史』／『太平廣記』引『畫斷』／高似孫『緯略』。
8	晉（梁？） 不明（蕭偉？）	『毛詩圖』／『毛詩孔子經圖』／ 『毛詩古聖賢圖』	『隋書』經籍志等。
9	晉 謝沈？	『謝氏毛詩譜鈔』	『隋書』經籍志。
10	劉宋 陸探微	『毛詩新臺圖』／『毛詩圖』	裴孝源『貞觀公私畫史』／高似孫『緯略』／『南宋館閣續錄』。
11	劉宋 劉斌	『黍離圖』	『歷代名畫記』。
12	梁 不詳	『韓詩譜』	『隋書』經籍志。
13	南北朝 不詳	『韓詩圖』	『歷代名畫記』。
14	隋 劉炫	『毛詩譜』	『隋書』經籍志。
15	唐 成伯璵	『毛詩圖』	鄭樵『通志』。
16	唐・開成（太和）年間 集賢院敕撰（程脩己畫）	『毛詩草木蟲魚圖』／『毛詩物象圖』	『太平廣記』引『畫斷』／『新唐書』藝文志／『玉海』藝文／『困學紀聞』引『名賢畫錄』。
17	唐？ 不詳	『吉日圖』	樓鑰『攻媿集』の「跋吉日圖」。
18	北宋・眞宗時 不詳	『五經圖』	『玉海』藝文。
19	北宋 歐陽脩	『鄭氏詩譜』	現存。
20	北宋 李公麟	『緇衣圖』	『宣和畫譜』。

※⑧について、明の朱睦㮮『授經圖義例』は三圖の作者を「蕭偉」とするが根拠は不明。

※『歷代名畫記』卷三に見える「詩緯圖」は緯書の圖譜と考えられること、南宋の鄭樵『通志』卷六十三「藝文略」に見える「小戎圖」二卷は時期不明のため、ここでは除いた。

このほか、『隋書』經籍志によると、梁代には編者不明の(Ⅲ)『韓詩譜』が編纂された。齊、魯、韓三家の『詩』は鄭玄の『毛詩』註釋が廣まるにつれて衰退したが、『韓詩』は『魯詩』や『齊詩』が早くに失われたのと異なり、隋代では學說を伝える者はいなくても書物のみは伝わっていた^五。梁代では、まだ韓嬰の學說を伝える者がおり、鄭玄の『毛詩譜』に倣って『韓詩』の譜を作成したのだろう。

隋代以後、「譜」と題した書物は、北宋の歐陽脩が『毛詩譜』を輯佚するまで見られない。この間、新たに「譜」が編纂されることはなかったようで、鄭玄より行われた「譜」の編纂は、一旦影を潜めた。

第二項 漢代から北宋までの「圖」

「譜」が隋代まで編纂された一方、「圖」は漢代から北宋の各時期に見られる。圖の内容はその名稱や諸書の記載からして、一様ではなかったと推測される。

まず、早くに見える『詩經』の圖は、後漢の劉褒が描いた⁽²⁾「雲漢圖」と「北風圖」である。『詩經』の「大雅・蕩之什」には、周代の早魃に苦しむ民眾、そして雨乞いを行い天に訴えかける周王の言葉を詠んだ「雲漢」詩があり、「國風・邶風」には寒々とした北風と大雪の情景から衛國君主の圧政に苦しむ人々が逃散するさまを詠みおこした「北風」詩がある。劉褒の二圖は、この二詩を題材としている。

孫暢『述畫記』や張華『博物志』は、二圖に對する評價を「(劉褒)曾畫雲漢圖、人見之覺熱。又畫北風圖、人見之覺涼(劉褒)曾て雲漢圖を畫き、人之を見て熱さを覺ゆ。又た北風圖を畫く、人之を見て涼を覺ゆ」と述べており、早魃や寒冷的な情景が寫實的であったと指摘している^六。この點から、「雲漢圖」と「北風圖」は『詩經』の情景を描いた繪畫であつたらしい。また、作者未詳の(Ⅳ)「吉日圖」は南宋の樓鑰(一一三七〜一二二三)が唐畫の風格を受けて描かれた古畫としている。その題名からして、(Ⅴ)「吉日圖」は「小雅」の「吉日」詩を題材とした繪畫であろう。樓鑰の跋文によると、「吉日圖」には周王の狩獵と車馬の様子が細かく描かれていたことから、これは明らかに情景畫である^七。

以上のことから見て、晉から唐の間に描かれ、『詩經』の詩篇名を題とした(Ⅵ)司馬紹「豳風七月圖」一卷、(Ⅶ)衛協「北風圖」と「黍離圖」各一卷、(Ⅷ)陸探微「毛詩新臺圖」一卷、(Ⅷ)李公麟「緇衣圖」一卷の諸圖も、同様に情景畫であつたと推測される^八。

一方、作者不明(あるいは梁の蕭偉)の(Ⅷ)『毛詩孔子經圖』十二卷と「毛詩古聖賢圖」二卷は「孔子」や「古聖賢」という畫題から、人物畫だろう。二圖の詳細を伝える記載

は伝わっていないが、前者は詩篇の内容ではなく孔子による『詩』の編纂や學習の様子を描いたもの、後者は『詩經』に登場する聖賢の肖像を描いたものかと推測される。

人物畫と同じく、『詩經』中の特定の事象を取り上げた圖譜に⁽⁶⁾『毛詩草木蟲魚圖』二十卷がある。これは大和年間(八二七〜八三五)、あるいは開成年間(八三六〜八四〇)、唐の文宗が集賢院に編纂を命じ、程脩己が描いたという^九。『畫斷』や『名賢畫錄』などの記載によると、晉代に衛協が描いた「毛詩圖」(恐らく表一の⁽⁸⁾と同じ)は「草木鳥獸、古聖賢之像」が實際の姿と異なっていたため、古代の事物を好んだ唐の文宗は程脩己に改めて作成することを命じ、結果として⁽⁶⁾『毛詩草木蟲魚圖』が描かれた。同圖の事物は、すべて經書によって名稱を定め、各地の風俗を採り入れたため、冠冕や動物は極めて詳細に描かれていたという^{一〇}。先述した、風景畫や人物畫と推測される圖の分量は概ね一卷、多いもので『毛詩孔子經圖』十二卷である。これに對して⁽⁶⁾『毛詩草木蟲魚圖』は『毛詩』と同じ二十卷あり、他の圖と比べて『詩經』の篇章ごとの事物を詳細に収録した可能性がある^{一一}。しかし、同圖が情景畫であったのか、それとも個々の事物を描いた百科圖鑒のようなものであったのか、明らかではない。

以上のほか、晉の明帝司馬紹の⁽⁶⁾「毛詩圖」、⁽¹⁰⁾「毛詩圖」、⁽¹²⁾作者未詳の「韓詩圖」、⁽¹⁵⁾唐の成伯璵「毛詩圖」、⁽¹⁸⁾北宋の「五經圖」は、圖の名稱しか傳わっておらず、その内容をうかがい知る手がかりはない^{一二}。

第三項 漢代から北宋までの『詩經』圖譜の特色

漢代から北宋の間、『詩經』に關する複數の「譜」や「圖」が編纂されていた。譜は内容が明らかな鄭玄の⁽¹⁾『毛詩譜』によれば、概ね各詩篇の年代考證の結果を示したものである。また、⁽⁴⁾『毛詩答問駁譜』が他者の『詩經』解釋への反論を一覽にしたと推測される。このことから、譜は『詩經』の考證や解釋を目的として編纂されたと考えられる。

「譜」に對して、「圖」の作成目的を明らかにする手がかりは乏しい。唯一、制作経緯が明らかな唐の⁽⁶⁾『毛詩草木蟲魚圖』は作者の程脩己が『詩經』中の名物を考證したとされるが、圖が鑒賞に供されたのか、それとも『詩經』を學ぶ上で實際に参照されたのか、その役割に關する明確な記述は殘されていない。しかし、張彥遠の「夫畫者、成教化、助人倫、窮神變、測幽微、與六籍同功。四時並運、發於天然、非繇述作(夫れ畫は、教化を成し、人倫を助け、神變を窮め、幽微を測り、六籍と功を同じくす。四時並運、天然に發し、述作に繇るに非ず)」という言葉に従うならば、「圖」を鑒賞するという

行為自體に『詩經』の意を體得し、人格や倫理の涵養する道德教育上の目的があつたと
 言えよう^{二三}。少なくとも漢代から北宋までの間の「圖」はあくまで鑒賞を目的とした繪
 畫だと推測され、「譜」のように『詩經』の考證や解釋を目的として編纂されたものは
 確認できない。

第二節 南宋の『詩經』圖譜

南宋の『詩經』圖譜には、書物の形式で編纂されたものが九種ある（本頁の表二）。こ
 のうち①と③は散佚したようで、未見である。

表二、南宋の『詩經』圖譜

	年代	編纂・刊行	圖譜の名稱	佚存／記載 収録状況
1	一一一五～一一八四の間	李燾	『詩譜』	散佚（『宋史』藝文志等）。
2	紹興年間（一一三一～一一六二）	楊甲	「毛詩正變指南圖」	『六經圖』に収録。原書は散佚、明代翻刻本が現存。
3	南宋（？～一一八四）	陳知柔	『詩聲譜』	散佚（朱彝尊『經義考』等）。
4	嘉泰元年（一一〇二）周必大序あり	唐仲友	「六義四始圖說」	現存、唐仲友『帝王經世圖譜』に収録。
5	孝宗（一一六二～一一八九）	書肆	「毛詩圖譜」と「四詩傳授之圖」	現存、『監本纂圖重言重意互註點校毛詩』収録。
6	同右	書肆	「毛詩圖譜」	現存、『監本纂圖重言重意互註點校毛詩』収録。
7	遅くとも光宗（一一九〇～一一九四）頃	書肆	『毛詩圖說』	現存、單行本。
8	寧宗（一一九四～一二二四）以後	書肆	「毛詩舉要圖」	現存、『纂圖互註毛詩』の附録と、圖譜のみの二種の版あり。
9	一一九七～一二七四の間	王柏	「二南相配圖」	現存、許謙『詩集傳名物鈔』収録。

散佚したと推測される圖譜は①『詩譜』三卷と②『詩聲譜』三卷である。①『詩譜』は李燾（一一一五～一一八四）の撰。李燾は紹興八年（一一三八）の進士、『宋史』に見える。彼は豊富な著作を残したが、その代表的著作である『續資治通鑑長編』を除き、全て散佚した^{一四}。『詩譜』は『宋史』藝文志「詩類」に三卷とある以外、内容に関する記載は傳わらない。ただし書名に「譜」とあること、そして鄭玄『毛詩譜』の巻数と近い三卷という巻数からして、當時存在していた歐陽脩輯佚の鄭玄『毛詩譜』に関する著述かと推測される^{一五}。

また、『詩聲譜』は陳知柔（？～一一八四）の撰。陳知柔は紹興十二年の進士、地方志などに傳が見える^{一六}。『詩聲譜』の記載は、陳知柔の傳に書名と巻数だけが記されている。書名からして、『詩聲譜』は『詩經』各詩篇の韻を表に示したものでだろう。

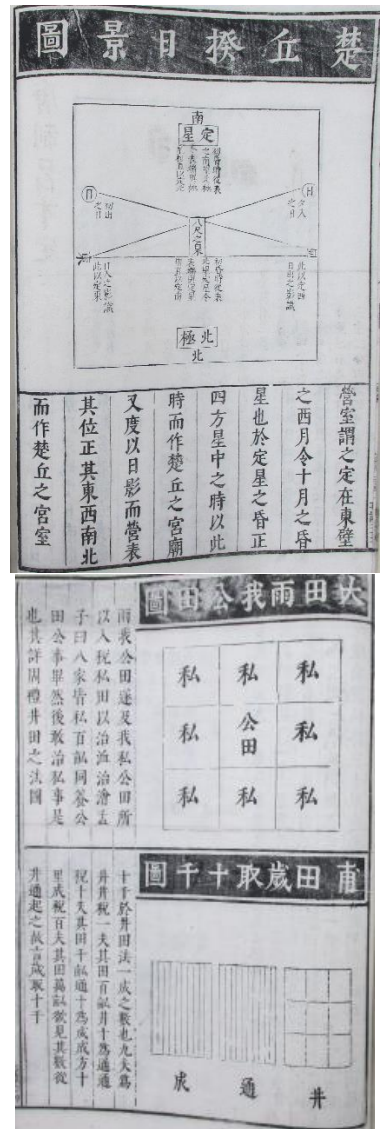
一方、現存する『詩經』圖譜は、個人と書肆が編纂したものに大別できる。

第一項 個人編纂の『詩經』圖譜

個人編纂の圖譜のなかでも、早くに編纂されたのは②「毛詩正變指南圖」である。同圖譜の内容は多岐にわたっており、詩篇の名稱や作詩年代、「國風」諸詩の成立に関わる王侯の系圖や『詩經』中の名物一覽表といった「譜」、そして天文地理、漏刻、土地、儀禮、建築、車馬などの「圖」を収録している（本頁および次頁の圖一）。

圖一、吳繼仕翻刻『六經圖』の「毛詩正變指南圖」（國立公文書館藏）

毛詩正變指南圖		
詩篇名		
周南十一篇		
關雎后妃之德	葛覃后妃之本卷耳后妃之志	樛木后妃逮下
采芣斯后妃子孫衆多	桃夭后妃之所致	兔置后妃之化
漢廣德廣所及	汝墳道化	麟之趾關雎之應
名南十四篇		
鶉巢夫人之德	采芣夫人不失職	草蟲夫妻以禮自防
采蘋大夫	采蘋大夫	采蘋大夫
循法度		
甘棠美名伯行	露名伯聽訟	羔羊鶉巢之功效
殷其雷	勸以義	

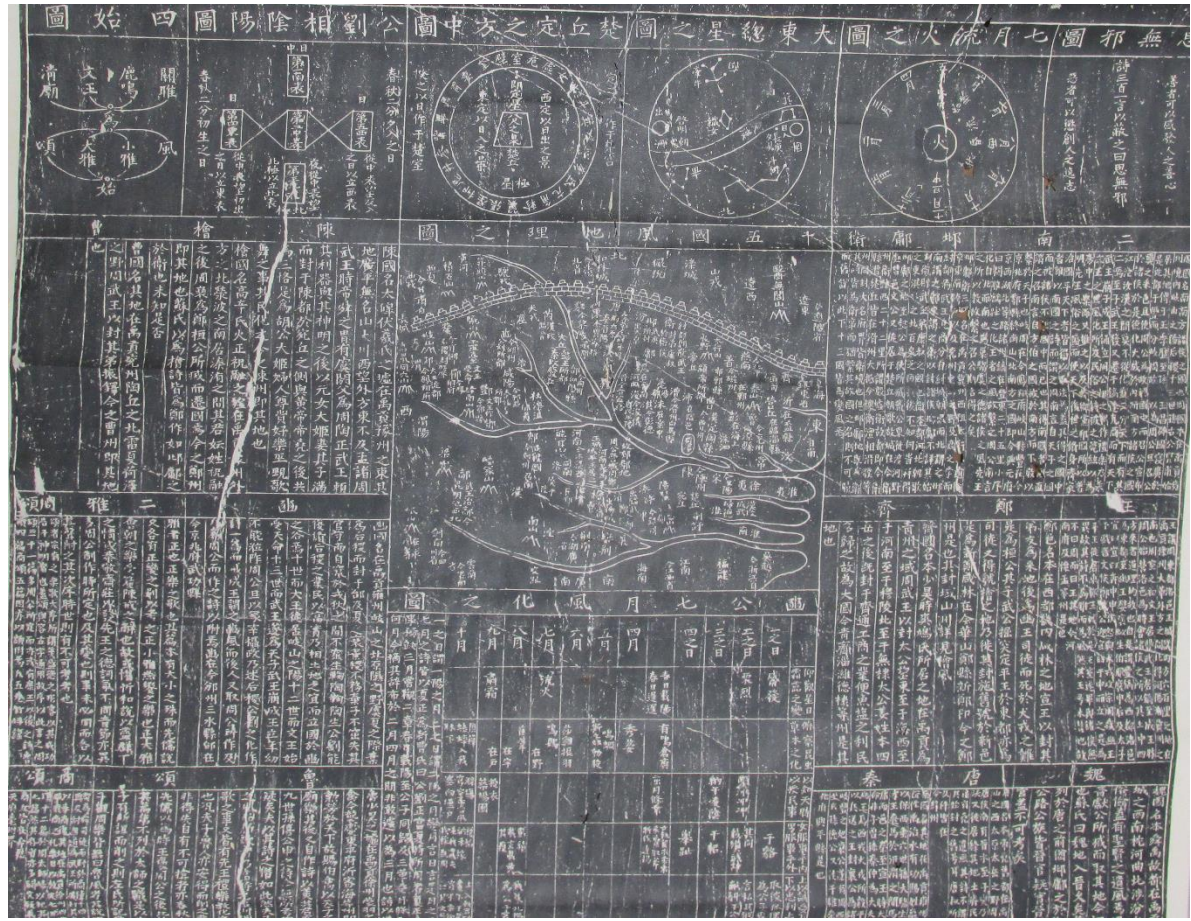


(2) 「毛詩正變指南圖」は紹興年間(一一三二～一一六二)、楊甲が編纂した『六經圖』に収録されている^{一七}。楊甲は昌元(現在の四川省重慶市)の人で字は鼎卿、「布衣」だったというが、北宋末期の大觀年間(一一一〇七～一一一〇)に都で聲望を集め、一時期出仕したが間もなく退き、靈泉山に隱棲したという傳もある^{一八}。

現在確認できる楊甲『六經圖』の最も早い時期の版本は、乾道元年(一一六五)、撫州州學教授の毛邦翰などが整理、校訂した版を、明の萬曆四十三年(一六一五)吳繼仕がさらに校訂、翻刻したものである^{一九}。このため、楊甲が編纂した原本の様子は明らかではない。しかし、毛邦翰刊刻の際に附された乾道元年の苗昌言の序には、毛邦翰より前に『六經圖』を刊刻した知撫州軍の陳森が、まず泮宮(學校)の教員に『六經圖』を「編類(内容)ごとに分類、列擧する」^{二〇}させたとあり、楊甲の編纂した原本は、現在傳わる『六經圖』のように圖譜が内容ごとに分類されたものではなかったらしい。また、楊甲『六經圖』を早期に著録した陳振孫『直齋書錄解題』と、ここに引用されている『館閣書目』には、毛邦翰本以前の刊本の記録が無い。これらの点から推測するに、楊甲の原本は、書物の體裁をとっていなかったのかもしれない。王象之(一一六三～一二三〇)の『輿地碑記目』には、楊甲の出身地昌州の郡學に『六經圖』の石碑があったと記されている^{二〇}。さらに、時代は下るが、元代に編纂され建立された『六經圖碑』は、碑の一

面に様々な圖譜がまとめて刻まれている（本頁の圖二）。楊甲が編纂した当初の『六經圖』は石碑であった可能性がある。

圖二、『六經圖碑』拓本「詩經圖」の部分（東北大學圖書館所藏）



『六經圖』には楊甲の編纂意圖を示す記載はない。しかし、毛邦翰本の苗昌言の序に記された刊刻の経緯には、陳森が知撫州軍として當地に赴任した際、科擧實施のために「試院（科擧の受験場）」を開設したことや、學生教育のため州學に『六經圖』の刊刻を命じたことが並記されている三。これとほぼ同じ状況は、陳厚由（？～一二〇九）の墓碑にも見える。このように、南宋當時、『六經圖』は經書の學習、特に科擧受験の學

習のなかで参照されたと考えられる^{二二〇}。

この後、個人によって編纂された圖譜には(4)「六義四始圖說」と(9)「二南相配圖」がある^{二二一}。(4)「六義四始圖說」の編者は唐仲友(一一三六〜一一八八)、東陽(現在の浙江省金華市)の人で紹興二十一年(一一五二)の進士、『宋元學案』などに傳が見える^{二二四}。(4)「六義四始圖說」は『帝王經世圖譜』卷六に収録されている。『帝王經世圖譜』は經書に見える天文地理や兵農、刑罰、祭祀、音律などの理論や諸制度、そして歴史的な出來事を分野ごとに圖や表で示したものである^{二二五}。同書のなかでも、特に『詩經』と關わるのは(4)「六義四始圖說」である。これは『詩經』の「大序」にある「六義(風・賦・比・興・雅・頌)」の簡潔な説明と「四始(十五國風・小雅・大雅・頌)」の「正」と「變」それぞれに分類される詩篇を列舉した一覽表であり、表に續けて「六義」と「四始」に關する歴史的背景や解釋を述べた總説が附されている。唐仲友は『詩經發題』の中で『詩經』の「綱維(綱領)」である「六義四始」を特に重視してこの圖を作成したという^{二二六}。

(9)「二南相配圖」の編者は王柏(一一九七〜一二七四)、婺州金華(現在の浙江省金華市)の人。初め朱熹の門人を訪ねて學問を學び、さらに朱熹の學を傳える黃榦の弟子何基に従い、後に麗澤、上蔡の兩書院で學問を教授した。その傳は『宋史』卷四三八に見える。

(9)「二南相配圖」は元の許謙(一二六九〜一三三七)の『詩集傳名物鈔』卷一に収録されて傳わっている^{二二七}。同圖は、『詩經』國風の冒頭「周南」と「召南」の二十五篇の詩のなかの二十二篇の主旨を『詩經』の「小序」や朱熹の註から摘録し、「周南」と「召南」から主旨の類似した詩篇の對應關係を示した一覽表である。

例えば、「周南」の「螽斯」詩と「召南」の「小星」詩の主旨はそれぞれ「不妬忌」と「無妬忌」というようにほぼ同様なので、これを一對としている。また、王柏は「召南」の「甘棠」、「何彼禮矣」、「野有死麕」三篇について、主旨の對應する詩篇が無いとして除外している。

第二項 書肆編纂の『詩經』圖譜

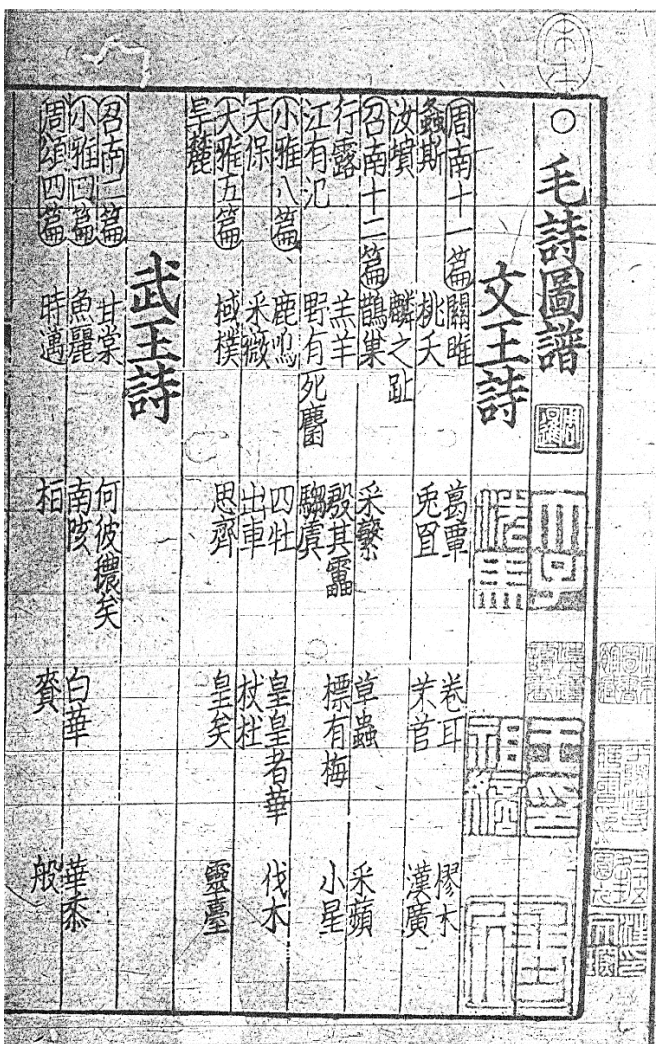
表二の(5)〜(8)の四種(8)の別版を含めると五種)はいずれも編者、刊刻者の氏名はなく、書肆が編纂、刊刻したと考えられる。これらの圖譜を収録する書物は、書中の避諱から、(5)〜(7)は南宋の孝宗の時、(8)は南宋の光宗の時に編纂されたと推測される^{二二八}。なかでも(5)「毛詩圖譜」と「四詩傳授之圖」、(6)「毛詩圖譜」、(8)「毛詩舉要圖」は、

科擧受験の學習に用いられたとされる、いわゆる「纂圖互註本」の『毛詩』巻首に附されてる二九。

一方、(7)『毛詩圖說』は殘卷である。清代にこれ入手した朱嘉勤なる人物により、同時に入手した『春秋圖說』の殘卷と合冊されている^{三〇}。また、(8)「毛詩舉要圖」には同内容の別版があり、これも圖譜のみが伝わっている^{三一}。この兩圖がもとは「纂圖互註本」の附録だったのか、あるいは單行の圖解本だったのか、明らかではない。

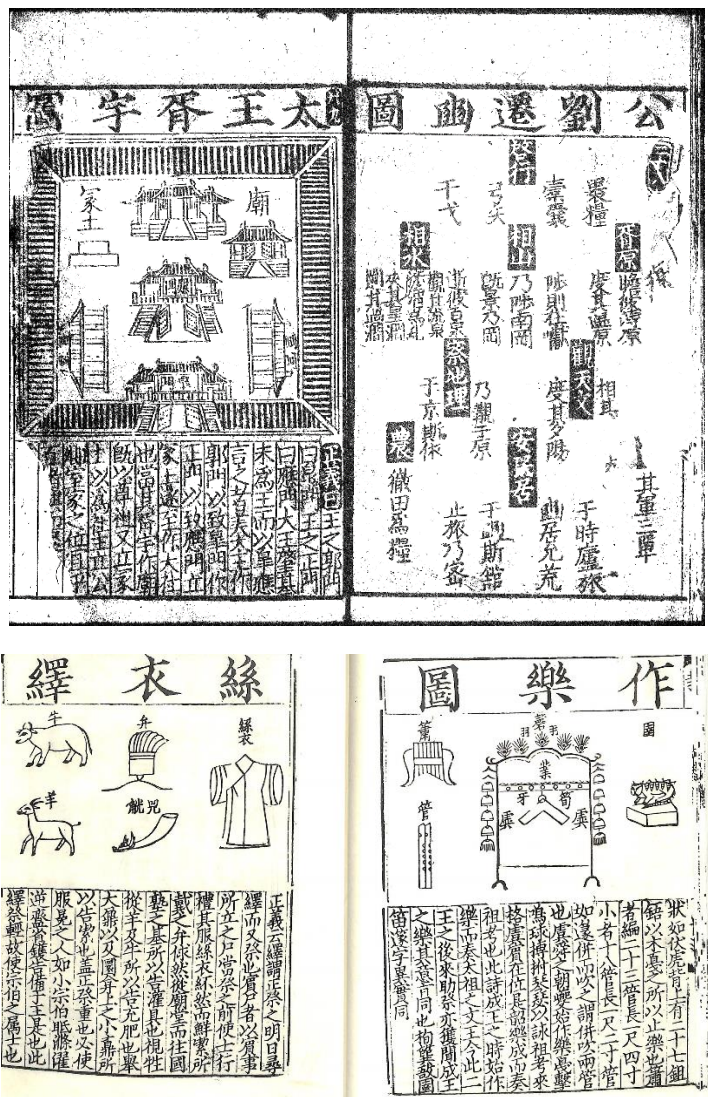
(5)と(6)の「毛詩圖譜」は、ともに『詩經』の詩篇を制作時期ごとに周の歴代の王と對應させた一覽表、(5)の「四詩傳授之圖」は魯、齊、韓、毛四家の傳授を示した系圖であり、ともに「譜」である(本頁の圖二)。(7)『毛詩圖說』と(8)「毛詩舉要圖」は楊甲の(2)「毛詩正變指南圖」によく似ており、『詩經』の系圖などの「譜」や天文地理や建築、土地など諸制度の「圖」を収録するほか、(2)「毛詩正變指南圖」にはない衣冠や樂器、祭器など器物の「圖」を多く収録している(次頁の圖四)。

以上四種の圖譜は、相互に類似した「譜」や「圖」があり、さらに(2)「毛詩正變指南圖」にも類似した内容が見える。



圖三、「監本纂圖重言重意互註點校毛詩」の「毛詩圖譜」(中國國家圖書館所藏)

圖四、臺灣故宮博物院所藏所藏の『毛詩圖說』(上)と『毛詩舉要圖』(下)



第三項 南宋『詩經』圖譜の特色

南宋の書物に見られる『詩經』圖譜には、北宋以前と同じく「譜」と「圖」がある。しかし、その内容は相当異なる。

現存する圖譜について言えば、各詩篇の作成年代を示した鄭玄『毛詩譜』と同内容の「譜」は、楊甲の②「毛詩正變指南圖」や書肆が刊刻した⑤⑧の圖譜に収録されている。これに對して、唐仲友の④「六義四始圖說」や王柏の⑨「二南相配圖」はともに「譜」だが、『詩經』の「六義四始」や二南の對應といった『詩經』の表現法や構成に關する内容を示しており、鄭玄『毛詩譜』とは全く異なる。

一方、「圖」は楊甲の②「毛詩正變指南圖」と、書肆刊刻の書物のうちの⑦、⑧に収録されている。いずれも天文や地理、建築や土地などの制度、車馬や衣冠、祭器といった個々の事物を圖示しており、百科圖鑒とも言うべき體裁をとっている。この點は、北宋以前の「圖」が情景や人物、動植物を描いていたのとは、相當な隔たりがある。

このように、北宋以前と南宋の『詩經』圖譜では、鄭玄『毛詩譜』を除き、影響關係は一切認められない。つまり、南宋の『詩經』圖譜の「圖」は、ほぼすべて新たに編纂されたものであったと考えられる。

また、南宋の『詩經』圖譜は、編纂目的から二つの群に區分することができる。一つ

は、楊甲の②「毛詩正變指南圖」や書肆の刊刻した圖譜のように、科擧受験の學習において参照するために編纂された一群である。もう一つは、唐仲友④「六義四始圖說」や王柏⑤「二南相配圖」のように、『詩經』の解釋に關して自説を示すために編纂された一群である。この二群の内容には全く共通性がなく、ともに『詩經』圖譜ではあるが、別個に論ずべきものである。また、前者の科擧受験の學習に關して編纂された一群は、相互に同内容の圖譜を収録している。なかでも楊甲の②「毛詩正變指南圖」が最も早くに編纂されたことから、その後刊刻された書肆の『詩經』圖譜は、②「毛詩正變指南圖」を改編したのではないかと推測される。

第三節 元代の『詩經』圖譜

元代以後の『詩經』テキストには、書名に「圖」や「譜」となくとも巻首に圖譜を附したものが散見され、網羅的に圖譜の有無を調査するのには困難がともなう。このため、あくまで暫定的な數ではあるが、これまで調査し得た『詩經』圖譜は八種ある(次頁の表三)。すでに散佚した可能性のある⑦『詩纂圖』は朱睦㮮(一五一八〜一五八七)の『授經圖義例』に四冊、⑧『詩圖說』は楊士奇(一三六六〜一四四四)の『文淵閣書目』に一冊とあり、冊數だけが記されている^{三〇}。また、黃虞稷(一六二九〜一六九二)の『千頃堂書目』は兩圖を元代の書物と記載している。しかし、いずれの記載もその著者や内容に言及しておらず、詳細は不明である。

これに對して、現存する①②③の圖譜の内容は概ね『詩經』の地理圖、詩篇の作成年代や王侯の家系などを示した一覽表、そして多様な内容を収録した総合的な圖譜の三種に分類できる。

第一項 『詩經』の地理圖

『詩經』國風の各國の位置と、元代の地名を示した地圖②「十五國風地理之圖」は、胡一桂『詩集傳附錄纂疏』(泰定四年建東陽翠巖劉氏家塾刻本)の巻首に収録されている^{三一}。胡一桂(一二四七?)、字は庭芳、徽州婺源(現在の江西省上饒市婺源縣)の人。十八歳の時に禮部試に落第してからは郷里に戻り講學を行ったとされる。『元史』に傳が見える^{三四}。

『詩集傳附錄纂疏』は、朱熹の『詩集傳』に、『朱子語類』などから『詩經』に關する文言を集めた「附錄」と、朱熹『詩集傳』の説と合致する諸儒の説をまとめた「纂疏」を加えたものである。

表二、元代の『詩經』圖譜

年代	編纂・刊行	圖譜の名稱	佚存／記載 収録状況
1 至正二十一年（一二八四）？	不詳	「詩經圖」	盧天翔建立の「六經圖碑」に収録。
2 泰定四年（一二二七）	劉君佐？	「十五國風地理之圖」	胡一桂『詩集傳附錄纂疏』に収録。
3 一二六九～一二三七	許謙	「詩譜」、「關詩次序」および「詩總圖」	許謙『詩集傳名物鈔』および吳燾『拜經樓叢書』収録。
4 至正十一年（一三五二）	雙桂書堂？	「詩傳圖」	羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』に収録。
5 至正十二年（一三五三）	宗文精舍	「詩圖」	元刊『詩集傳』収録。
6 至正十二年以前	劉瑾	「諸國世次圖」と「作詩時世圖」	劉瑾『詩集傳音釋』の一部版本に収録。
7 不詳	不詳	『詩纂圖』	散佚（楊士奇『文淵閣書目』／朱睦㮮『授經圖義例』／黃虞稷『千頃堂書目』）。
8 不詳	不詳	『詩圖說』	散佚（朱睦㮮『授經圖義例』／黃虞稷『千頃堂書目』）。

※⑥の年代は作者劉瑾の生没年が不詳のため、『鐵琴銅劍樓藏書目錄』等に見える元刊本の刊行年以前とした。

同書の「十五國風地理之圖」は、南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」や「纂圖互註本」に附された同名の地圖の地名を、元代のものに改めただけである。『詩集傳附錄纂疏』の刊行（泰定四年＝一三二七年）より四十年あまり前に建立された①「詩經圖」には、②と名稱、内容ともにほぼ同じ地圖が収録されている。②は既製の圖譜から地圖部分だけを摘録したのだろう。

劉君佐の刊記は「文場取士、詩以朱子集傳爲主明經也……學詩之士、潛心披玩、蜚英聲於場屋間者、當自此得之旨（文場士を取るに、詩は朱子集傳を以て主と爲し經を明らかにするなり……詩を學の士、潛心披玩し、英聲を場屋の間に蜚ばす者は、當に此れ自り之の旨を得るべし）」と、同書が科擧試験の學習のために有用であることを説いており、②「十五國風地理之圖」もその參考資料として附したと考えられる。

第二項 『詩經』の年代や家系の「譜」

『詩經』に登場する各國や詩篇の年代、および家系を示した「譜」には、③と⑥がある。

③「詩譜」、「邇詩次序」および「詩總圖」は、許謙『詩集傳名物鈔』八卷に収録されている^{三五}。『詩集傳名物鈔』は卷一の「周南」「召南」のみ王柏「二南相配圖」を収録しており、卷二以降の風・雅・頌の末尾には、それぞれ「衛詩譜」「王詩譜」「鄭詩譜」「齊詩譜」「唐詩譜」「秦詩譜」「陳詩譜」「曹詩譜」「小雅譜」「大雅譜」「頌譜」「魯頌譜」「商頌譜」があり、「商頌譜」に續けて「詩總圖」が附されている。ただし、邇風は「邇詩次序」が附されていて、檜風は何も附されていない。③「詩譜」は鄭玄『毛詩譜』と同じく各詩篇の作成年代の一覽で、『詩集傳名物鈔』では風・雅・頌ごとに分けられている。

「詩總圖」は風・雅・頌ごとの「詩譜」をまとめた一覽表、「邇詩次序」は邇風の「小序」にある各詩篇の作成背景によって、邇風中の詩の順序を並びかえた一覽表である^{三六}。

許謙（一二六九〜一三三七）、字は益之、金華（現在の浙江省金華市）の人。王柏や何基に學んだ金履祥に從つて學問を脩め、朱熹の學を發揚したと評された人物であり、元の黃潛『黃文獻公集』収録の「白雲許先生墓志銘」や『元史』の「儒學傳」などに傳が見える^{三七}。

このように許謙は朱熹の學説を信奉しており、『詩集傳名物鈔』も朱熹『詩集傳』を主とし、諸書を参照して『詩經』中の名物を考證した註釋書である。③「詩譜」、「邇詩次序」、「詩總圖」も同様に朱熹の『詩經』解釋を基準として、「詩序」や鄭玄『毛詩譜』を再考した「譜」である。

許謙はその傳に「於先儒之說有所不安、亦不敢苟同也（先儒の說に於いて安からざる所有らば、亦た敢えて苟同せざるなり）」とあるように、必ずしも先儒の說に從つたわけではない。『詩集傳名物鈔』でも王柏の「二南相配圖」を収録しながら、王柏が『詩經』國風三十二篇を削除した點には從わなかつた^{三八}。

しかし、「詩譜」についていえば、『詩集傳名物鈔』の吳師道序に「又以小序及鄭氏、歐陽氏譜世次多舛、一從朱子補定（又た小序及び鄭氏、歐陽氏譜の世次多く舛くを以て、一ら朱子に從い補定す）」というように、詩篇の作成年代で諸說に矛盾があれば、すべて朱熹の說に從つたことが記されている^{三九}。實際、「詩譜」には、鄭玄と朱熹の說で矛盾する場合、特に理由を述べず朱熹に從っている^{四〇}。このように、③「詩譜」は鄭玄『毛詩譜』を踏まえ、朱熹の解釋を基準として編纂された。

一方、「豳詩次序」は豳風の各詩篇の順序を以下のよう並び替えている。

- 七月【①】 豳國舊詩。周公遭變、居東時所陳。（詩序）
- 伐柯【⑤】 東人喜見周公。（集傳）
- 狼跋【⑦】 周公居東、詩人美之。（集傳）
- 鴟鴞【②】 周公居東二年而遺王。（集傳）
- 九罭【⑥】 周公將歸、東人願留。（集傳？）
- 東山【③】 周公東征、歸而勞士。（詩序・集傳）
- 破斧【④】 軍士答周公。（集傳）

※隅附括弧中の數字は『詩經』の収録順序、丸括弧中は順序の根據。

許謙は「詩序」と朱熹『詩集傳』の説を折衷することで、豳風の七篇が周の成王の時に発生した管蔡の亂を鎮圧する周公の行動に應じて作られた詩だとした。管蔡の亂と周公の東征は『尚書』の金縢篇などに記されており、「詩序」や『詩集傳』は元代の許謙にとつて、いずれも先儒の説である。つまり、「豳詩次序」における詩篇の並び替えは經書や先儒の説に違うものではなかった。しかし、詩篇の順序を変更することで豳風を一つの話をもぐる一聯の作品としたのは、許謙による發明であったといえるだろう。後に、顧炎武は『日知錄』のなかで、『周禮』の「鬲章」や、これを踏まえて「豳風」の「七月」詩一篇に風・雅・頌が含まれるとする鄭玄の説に依據して、『詩經』の基本構成を「二南」、「豳」、「雅」、「頌」とする「四詩」の説を提起した。「豳詩次序」は豳風を獨立した分類とする「四詩」説と相通しており、より早い時期のものである^{四一}。

許謙の作成した圖譜と同じく、「譜」の體裁をとるのは^⑥「諸國世次圖」と「作詩時世圖」である。この兩圖は、劉瑾の『詩傳通釋』に収録されている^{四二}。

劉瑾、字は公瑾、安福（現在の江西省吉安市）の人で、經史に廣く通じ、特に『詩經』を探究して『詩傳通釋』を著し、隱棲して仕えることにはなかつたという^{四三}。『詩傳通釋』は、朱熹『詩集傳』に漢唐から元代までの諸家の『詩經』註釋や小學、本草學など諸書の關聯する記載を加えたものである。

⑥のうち、「諸國世次圖」は『詩經』各詩篇に關わる諸國の歴代王侯の名稱を、國ごとに列舉した一覽表、「作詩時世圖」は商、周の王ごとに、作成年代の比定される詩篇を「正變」を分けて列舉した一覽表である。兩圖と同一内容のものは南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」に見えるが、⑥「諸國世次圖」は収録する時代の範圍がより廣い。また、「作

詩時世圖」は詩篇の「正變」まで分けており、その分類方法は「毛詩正變指南圖」よりも細かい。

第三項 総合的な『詩經』圖譜

(1) 「詩經圖」、(4) 「詩傳圖」、(5) 「詩圖」は、南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」のように、天文地理や建築、車馬、器物、家系圖など様々な圖や譜を総合的に収録した圖譜である。

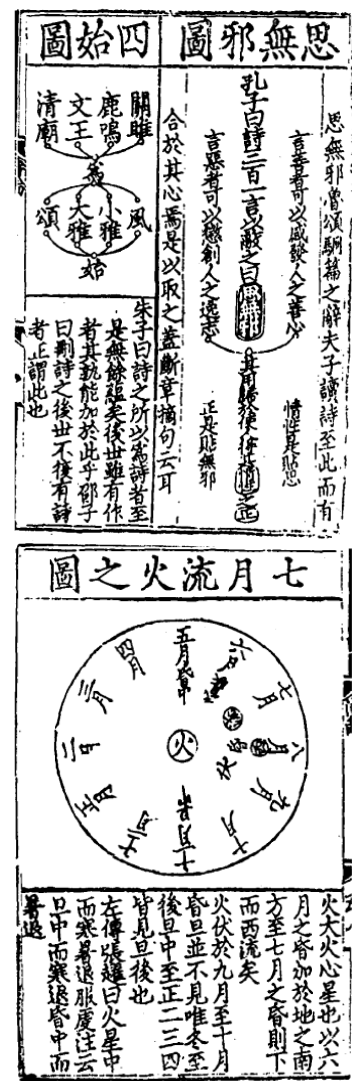
(1) 「詩經圖」は『六經圖碑』中の一圖である。『六經圖碑』は至正年間（一三四一〜一三七〇）、信州路（現在の江西省上饒市）總管の盧天祥が孔子廟に建立したものである。盧天祥は當地に學校を創設し儒者を招くなどしており、『六經圖碑』の建立も文教政策の一環として行われたのだろう^{四四}。なお、雍正『江西通志』によると、盧天祥は至元二十一年（一二八四）に信州路の學校を修築したが、この學校は間もなく火災で焼失したという。このことから、「六經圖碑」の建立は至元二十一年頃のことだろうと推測される^{四五}。

(1) 「詩經圖」は、南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」や書肆の圖譜と同じく、地理や天文、系圖などの一覽表、諸制度、衣冠や祭器などを収録した総合的な圖譜である。その圖譜は(1)「詩經圖」に初めて見える圖譜がある一方、南宋の「毛詩正變指南圖」や書肆の圖譜と共通するものが多く、南宋の『詩經』圖譜をもとに編纂された可能性が高い。しかし、圖譜の解説は、南宋の圖譜が概ね漢唐の註疏を引くのに對し、(1)「詩經圖」は主に朱熹『詩集傳』や『朱子語類』を引いている。

(4) 「詩傳圖」（「詩圖」ともいう）は至正十一年（一三五二）に重刊された羅復『詩集傳音釋』（雙桂書堂重刊本）巻首に収録されている^{四六}。『詩集傳音釋』は朱熹の『詩集傳』に、主に許謙『詩集傳名物鈔』などから集録した音註を加えたものである^{四七}。編者の羅復は諸書の記載に字が中行、廬陵（現在の江西省吉安市）の人だとあるが、その詳細な経歴は伝わっていない^{四八}。

(4) 「詩傳圖」は(1)「詩經圖」と同じく様々な「譜」や「圖」を収録した総合的な圖譜であり、圖譜の解説も(1)と同じくほとんどを朱熹の言説に依據している。(4)「詩傳圖」には(1)「詩經圖」に初見の圖譜が収録されている一方、一部には南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」のみに見える圖譜もある（次頁の圖五）。

圖五、羅復『詩集傳音釋』の「詩傳圖」（中國國家圖書館藏）



(4) 「詩傳圖」の編者について、明代の『詩經大全』は羅復としている。また、清代の陸心源は自ら收藏した『詩集傳音釋』（明初刊本）跋文のなかで、(4)「詩傳圖」が圖の下に朱熹の説が多く引かれている点を根據として、羅復の手になるものと推測している。しかし、よく似た圖譜は『詩集傳音釋』早期の刊本である至正十一年（一三五二）雙桂書堂重刊本が刊刻される七十年近く前に建立された『六經圖碑』の(1)「詩經圖」に見えるうえ、『詩集傳音釋』には羅復が「詩傳圖」を編纂したという記載はない。さらに、(4)「詩傳圖」の翌年、至正十二年（一三五二）に刊刻された宗文精舍刊刻の朱熹『詩集傳』の巻首には、全く同じ圖譜(5)「詩圖」が収録されている。この『詩集傳』の刊記には許謙『詩集傳名物鈔』と何伯善（何淑）の音釋を集めて附したことと、これまで通り巻首に圖譜を附したとあるだけで、羅復には一切言及していない^{四九}。以上の點から、「詩傳圖」の作者が果たして羅復なのか斷定しがたい。

第四項 元代『詩經』圖譜の特色

元代の『詩經』圖譜は、内容面について言えば、許謙の(3)「詩譜」、「爾詩次序」、「詩總圖」が朱熹や王柏の解釋を踏まえて自説を示すため新たに編纂されたほか、多くは南

宋の『詩經』圖譜に類似している。このことから、元代の『詩經』圖譜は南宋の圖譜に新たな圖を加え、解説を朱熹の解釋に置き換えることで改編されたと推測される。

また、編纂目的も南宋の『詩經』圖譜と同じく、多くは學習のために編纂された可能性が高い。(1)「詩經圖」を収録する『六經圖碑』は、學校の創設と合わせて建立されたことから、學習のために編纂されたと考えられる。また、(2)「十五國風地理之圖」を収録する『詩集傳附錄纂疏』や(3)「詩圖」を収録する朱熹『詩集傳』は、どちらも科舉試験の學習のために編纂されることが刊記に明記されている。羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の(4)「詩傳圖」や、劉瑾『詩集傳音釋』の(6)「諸國世次圖」と「作詩時世圖」も同じく朱熹『詩集傳』の註釋書の附録であり、學習を目的として編纂されたものだろう。

以上のように、元代の『詩經』圖譜は、概ね當時の『詩經』解釋の動向を採り入れて南宋の『詩經』圖譜を改編したものであり、その編纂目的も南宋の圖譜と同じく、主に學習の参考に供するためであった。

第四節 明代の『詩經』圖譜

明代の『詩經』圖譜は、書目のみに見え散佚したと推測されるものと、現存が確認されるものを合わせて二十一種が確認される(次頁の表四)^{五〇}。書目のみに見える圖譜には(1)周是脩『詩譜』、(2)鄭若曾『重輯詩譜』、(4)馮復京『說詩譜』のように「譜」と稱する圖譜や、諸王侯の系圖を考證したと推測される(3)潘谷『詩經圖譜世表』がある。これらの編者のなかで、馮復京が『六家詩名物疏』を著した以外、他の人物は『詩經』註釋史において必ずしも顕著な足跡を残してはおらず、その内容や特徴を推し測りがたい。

一方、現存する『詩經』圖譜について、その性質から以下では勅撰書の附録、宋元圖譜の翻刻、その他の圖譜に分けて述べる。

表四、明代の『詩經』圖譜

	年代	編纂・刊行	圖譜の名稱	佚存／記載・収録状況
1	一三五〇～一四〇一	周是脩	『詩譜』	散佚（『千頃堂書目』）。
2	永樂十三年（一四一五） 翻刻多數	胡廣等救撰	「詩經大全圖」	現存、胡廣等救撰『詩經大全』収録。
3	正統十二年（一四四七）	司禮監	「詩圖」	現存、司禮監刊『詩集傳』収録。
4	成化七年（一四七一）	王氏善敬堂	「詩經大全圖」	現存、『詩經大全』収録。
5	嘉靖十五年（一五三六）	呂柟	無し。	現存。呂柟『詩樂圖譜』に収録。
6	嘉靖二十九年（一五五〇）頃	胡明勗	無し。	現存、胡明勗『新刊詩經集成圖譜』に収録。
7	一五〇三～一五七〇	鄭若曾	『重輯詩譜』	散佚（『經義考』）。
8	嘉靖年間中後期？	胡賓	「詩經圖全集」	現存、胡賓『六經圖大全』に収録。
9	萬曆三十三年（一六〇五）	芝城建安書林 余氏	「詩經大全圖」	現存、葉向高『葉太史參補古今大方詩經大全』収録。
10	萬曆四十二年（一六一四）	盧謙、章達翻刻	「詩經圖」	現存、盧謙・章達『五經圖』収録。
11	萬曆四十三年（一六一五）	吳繼仕翻刻	「毛詩正變指南圖」	現存、吳繼仕『七經圖』収録。
12	萬曆四十四年（一六一六）	衛承芳翻刻	「毛詩正變指南圖」	未見（『摹刻宋板六經圖』郭若維序）。
13	萬曆四十五年（一六一七）	郭若維翻刻	「毛詩正變指南圖」	現存、郭若維『摹刻宋板六經圖』収録。
14	一五七三～一六二二	馮復京	『說詩譜』	散佚（光緒『重修常昭合志』）。
15	萬曆～崇禎？	顧起元撰、潘曉 輯	「毛詩正變指南」	現存、『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』 収録。
16	萬曆～崇禎？	鍾惺？	無し。	現存、『詩經圖史合攷』に収録。
17	崇禎十一年（一六三八）	陳重光翻刻	『毛詩正變指南圖』	現存、單行本。
18	崇禎年間（一六二八～一六四四）	張溥	「詩經大全圖」	現存、張溥『詩經註疏大全公纂』に収録。
19	不明	潘谷	『詩經圖譜世表』	散佚（宋慈抱『兩浙著述考』）。
20	不明	書林安正堂	「詩經大全圖」	現存、書林安正堂重刊の元・朱公遷『詩 經疏義』収録。
21	不明	計部大夫汝南 方公	「毛詩正變指南圖」？	未見、清の潘宗鼎『六經圖考』の自序に 記載あり。

第一項 総合的な『詩經』圖譜

明代において早くに編纂された総合的な圖譜は、『詩經大全』の卷首に附された⁽²⁾「詩經大全圖」である^{五二}。『詩經大全』は永樂帝が經書の解釋を統一するため編纂を命じた『五經大全』の一つであり、胡廣（一三七〇～一四一八）など四十二名が編纂し、永樂十三年（一四一五）に完成した。本書は國家が公認した『詩經』解釋として、明代では各地の學官に頒布されたほか^{五二}、表中の⁽⁴⁾のように書肆によつて刊行され、清代初期に至つても民間で刊刻されたことが確認される^{五三}。

例えば、⁽⁹⁾を収録する『葉太史參補古今大方詩經大全』は書肆が刊刻したと考えられ、書名には萬曆、天啓の間に内閣大學士として朝政に攜わつた葉向高（一五五九～一六二七）の名が、⁽¹⁸⁾を収録する『詩經註疏大全合纂』は、崇禎四年の進士で古學復興を目指す「復社」の結成を主導した張溥（一六〇二～一六四一）の名が冠されている^{五四}。また、⁽²⁰⁾を収録する『詩經疏義』は元の朱公遷が著し、明代の書林安正堂が刊刻したものである。これらは「詩經大全圖」と名稱・内容ともに概ね同じ圖譜を収録している。

明一代を通じて廣く参照された「詩經大全圖」の典據について、『詩經大全』の「凡例」には「名物等圖、一依廬陵羅氏所集。諸國世次及作詩世時圖、一依安城劉氏。存之以備觀覽（名物等の圖は、一ら廬陵羅氏の集める所に依る。諸國世次及び作詩世時圖は、一ら安城劉氏に依る。之を存し以て觀覽に備う）」とある。ここに見える「廬陵羅氏」と「安城劉氏」の圖譜は、既述した元代の羅復『詩集傳音釋』収録の「詩傳圖」と、劉瑾『詩傳通釋』収録の「諸國世次圖」および「作詩世時圖」のことである。「詩經大全圖」は、この二種の圖譜を一つに合わせただけのものであった。

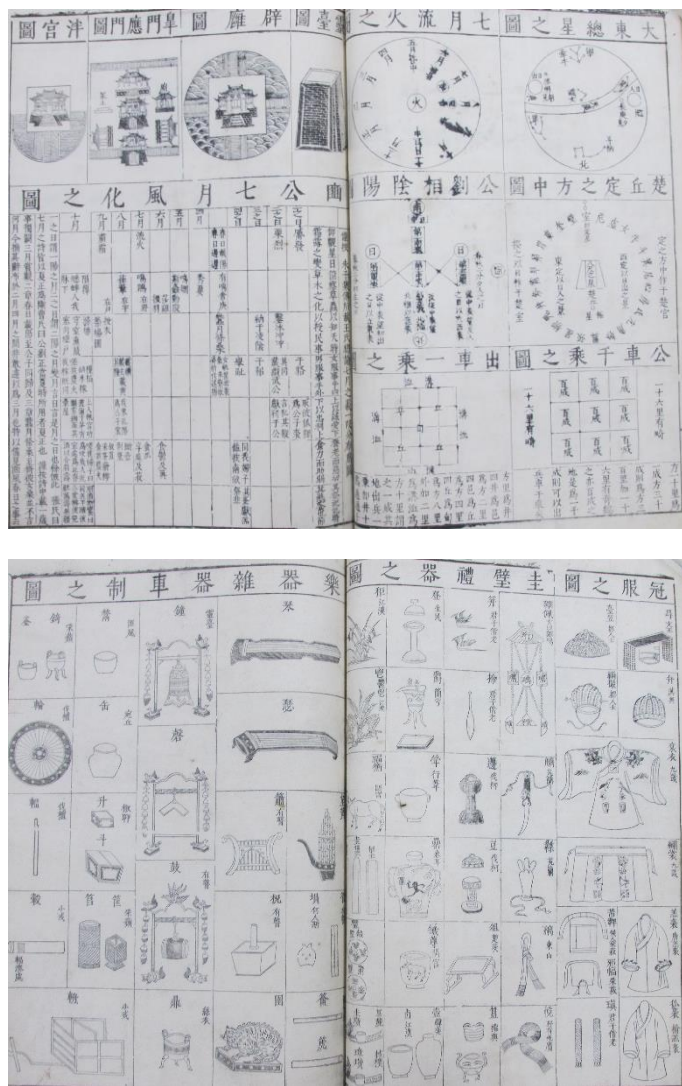
第二項 宋元『詩經』圖譜の翻刻と改編

⁽²⁾「詩經大全圖」は元代『詩經』圖譜をそのまま収録しているが、二つの圖譜をあわせて一つの圖譜とした點で翻刻とは言い難い。一方、宋元の『詩經』圖譜を原本に則り翻刻した早期のものは⁽⁹⁾「詩圖」である。これは、坊本の『詩經大全』に文字の誤りの多いことから正統十二年（一四四七）、司禮監が刊刻した『詩集傳』の卷首にあり、羅復の「詩傳圖」と全く同じ圖譜である。前節で述べたように、元の至正十二年宗文精舍刊『詩集傳』は、羅復の「詩傳圖」と同内容の「詩圖」を収録している。司禮監刊『詩集傳』の序は底本に言及していないが、恐らくは圖譜が附された元代の『詩集傳』を翻刻したのだろう^{五五}。

この後、萬曆末年になるとに翻刻はにわか盛んとなった。まず萬曆四十二年（一六

一四)には⑩「詩經圖」を収録する盧謙 章達『五經圖』が刊刻された。『五經圖』は「五經」と稱するが、實際は元代『六經圖碑』の翻刻であり、「易」「書」「詩」「春秋」「周禮」「禮記」の圖譜を収録している(本頁の圖六)。

圖六、盧謙・章達『五經圖』の「詩經圖」(國立公文書館所藏)



『五經圖』巻首の章達の序に記された編纂經過によると、翻刻者の章達は無爲州(現在の安徽省蕪湖市)知州として、管轄下の廬江縣(現在の安徽省合肥市)で學宮を脩繕し書物を購入するなど、學問振興政策を進めていた。この時、廬江の出身である盧謙は知縣を務めていた永豊(現在の江西省吉安市)から持ち帰った「五經圖石本」を章達に渡し、石に刻んで學生に示し伝えるよう願った。そこで、章達は石碑に刻んだが、これでは拓本を作成する手間がかかるうえ普及が見込めないことから、改めて書物の體裁に整理し、金陵で刊刻した^{五六}。

『五經圖』刊刻の翌年、萬曆四十三年には吳繼仕が南宋の『六經圖』に、『儀禮』に関する圖譜を加えた『七經圖』を刊刻した^{五七}。この『七經圖』には⑪「毛詩正變指南圖」が収録されている。吳繼仕は字を公信といい、徽州(現在の安徽省黃山市)の人。他に『音聲紀元』という著作がある以外、經歷は明らかではない^{五八}。

『七經圖』の自序によると、吳繼仕は家藏の宋刻『六經圖』が古の制度をよく傳えて

いると考え、公に参照されることを願い翻刻したという。『七經圖』は巻首の「舊序」から、毛邦翰増補本を底本としたことがわかる。

吳繼仕の翻刻に關して、『七經圖』の自序には吳繼仕が「考校（校正）」したとあり、(ii)「毛詩正變指南圖」の巻末に校正箇所数を「改三佰、刪三處」と記している。また、『七經圖』はすべて明朝體が用いられている。これらの點から、(iii)「毛詩正變指南圖」を含む『七經圖』は家藏の宋本を忠實に翻刻したのではないと考えられる。また、南宋の『館閣書目』（陳振孫『直齋書錄解題』に引用）に記載のある毛邦翰本と比べて『七經圖』の「毛詩正變指南圖」は圖が二つ少なく、そもそも翻刻の原本が南宋當時の「毛詩正變指南圖」の様子を完全には傳えていなかったのかもしれない^{五九}。

吳繼仕の後、萬曆四十四年には衛承芳が、同四十五年には郭若維が楊甲『六經圖』を翻刻した。衛承芳は字を君大といい、達州（現在の四川省達州市）の人。隆慶二年（一五六八）進士に擧げられ、萬曆年間には温州知府、山東參政、右副都御史を歴任し、南京吏部尚書に在任のまま卒して太子大保を追贈された^{六〇}。

衛承芳の翻刻した『六經圖』は未見である。これが吳繼仕『六經圖』の翌年に刊刻されたことは郭若維『六經圖』の自序に記されている。

衛承芳の後に『六經圖』を刊刻した郭若維は字を無虞といい、蘭谿（現在の浙江省蘭谿市）の人。萬曆三十七年（一六〇九年）の進士で廣德（現在の安徽省廣德縣）の知州を務めた^{六一}。郭若維の記した「重刻六經圖跋」によると、吳繼仕や衛承芳の『六經圖』は底本の誤りを幾らか傳えていることから、郭若維は家藏の宋本を増補、校定し刊刻したという^{六二}。これに關して、郭若維の「毛詩正變指南圖」の巻末にも吳繼仕の翻刻と同じく校正箇所数を「修吉堂考校三百九處」と示している。しかし、「毛詩正變指南圖」について言えば、郭若維と吳繼仕の翻刻は全く同じものであり、どの箇所を増補、校定したのか明らかではない。

以上三種のほか、明代には「計部大夫汝南方公」なる人物が翻刻した『六經圖』があったという。これは清代に潘宗鼎が翻刻した『六經圖考』の自序に見えるが、明代の書目などには見えず未見である。

吳繼仕以來、聯年行われた『六經圖』刊刻の後、しばらく時を隔てた崇禎十一年（一六三八）には陳重光が(ii)『毛詩正變指南圖』六卷を刊刻した^{六三}。これは吳繼仕などの翻刻とは異なり、『六經圖』中の「毛詩正變指南圖」だけを翻刻した單行本である。陳重光は字を瑞羲といい、華亭（現在の上海市）の人。自序に「先祖憲副公」とあることから、その祖に按察副使を務めた人物がいたらしい^{六四}。

(1) 『毛詩正變指南圖』の巻首には、徐孚遠、李是楫、鄭圻の寄せた序がある。編纂・刊刻の経緯は鄭圻の序に、陳重光が所藏していた宋本の誤りや圖の順序を校訂し、同好の士に示すために刊刻したとだけあり、吳繼仕などの翻刻には一切言及していない。このため、陳重光の翻刻は萬曆年間の『六經圖』翻刻とは關係なく行われたと考えられる。

陳重光の(1)『毛詩正變指南圖』は『四庫全書總目』に記載がある。しかし、こちらは冒頭に李雯の序があったと記されており、筆者が調査した復旦大學圖書館所藏本とは異なる版が存在したらしい。『四庫全書總目』はその體例が粗雑で古人の著作に似ず、内容に根據も無いことから陳重光が自ら編纂し宋本に假託したと疑っている^{六五}。復旦大學所藏本による限り、その内容は數箇所文字の異同を除いて、吳繼仕などが翻刻したものとはほぼ變わらず、陳重光が従前の翻刻を用いた可能性はあるが、新たに編纂したとは考えがたい。

このほか、後述する編纂者の経歴から萬曆以降の刊刻と考えられる『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』の巻首には(1)「毛詩正變指南圖」がある。この圖も名稱のとおり、南宋『六經圖』の圖譜と同一のものである。『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』は朱熹『詩集傳』に語彙註や難字の音註、「四書」が引く『詩經』の文字の韻註、各詩篇の主旨、「一字二三義」や「二字同一義」、「補考」、「難題秘旨」や「大題要旨」、「小題要旨」といった暗記や問題対策のための註釋を加えており、明らかに舉業書である(本頁の圖七)。

圖七、『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』(國立公文書館所藏)



『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』には①「毛詩正變指南圖」などの附録と朱熹序の後、本文第一卷の冒頭に、編纂・刊行に關わつた人物として、以下の四名が見える。

秣陵 顧起元 隣初父 著
 古宣 潘 曉 東生父 輯
 福清 林聲揚 子駿父 訂
 金谿 傅夢龍 見田父 梓

著者の顧起元（一五六五—一六二八）は萬曆二十六年（一五九八）の進士、官は吏部左侍郎兼翰林侍讀學士に至つた人物である^{六六}。しかし、書中には編纂経緯を示す序など一切なく、輯録者や校定者との關係を示す記載もない。また、それぞれの出身地も秣陵（江蘇省南京市）、古宣（安徽省宣城市）、福清（福建省福州市）、金谿（江西省撫州市）と共通性はない。これらの點から、顧起元が同書の編纂にどこまで關わつていたのか明らかではなく、編纂を主導したのは、おそらく輯録者の潘曉ではないかと推測される。

以上の宋元『詩經』圖譜のほか、單純な翻刻ではない⑧「詩經圖全集」も見られる。⑧「詩經圖全集」は胡賓『六經圖全集』の一卷であり、元代『六經圖碑』の「詩經圖」と、②「詩經大全圖」に共通する圖譜や、どちらか一方のみの圖譜を収録しており、兩圖譜を折衷した内容となっている（本頁の圖八）^{六七}。

圖八、胡賓『六經圖全集』の「詩經圖全集」（中國國家圖書館所藏）

詩經圖全集卷二			國風		
南京陝西道監察御史胡賓編輯					
毛詩小序					
關雎后妃之德也	葛覃后妃之本也	卷耳后妃之志也	關雎后妃之德也	葛覃后妃之本也	卷耳后妃之志也
摶木后妃逮下也	采芣后妃之采也	桃夭后妃之所致也	兔置后妃之化也	采芣后妃之采也	桃夭后妃之所致也
汝墳道化行也	麟之趾關雎之應也	漢廣惠廣所及也	采芣夫人不失職也	少虫大夫妻自防也	采蘋大夫妻能循法度也

『六經圖全集』には序や刊記がなく、その編纂経過や時期を示す記載はない。一方、編者の胡賓については同書の巻首に「南京陝西道觀察御史 胡賓 編輯」とあるほか『山西通志』に傳が見える。これによると字は汝觀、光州（現在の河南省信陽市）の人で嘉靖十四年（一五三五）の進士、嘉靖三十一年（一五三二）に母の喪に服した後、山西副使として赴任する前に卒したとある。胡賓はおおよそ弘治、正徳の間（一四八八〜一五二一）に生まれ、嘉靖年間（一五二二〜一五六六）に活動したようである。『六經圖全集』は嘉靖の中後期に編纂されたと推測される^{六八}。これは盧謙、章達が『六經圖碑』によって『五經圖』を刊刻した萬曆四十二年（一六一四）より四、五十年以上前のことである。胡賓は、明代でも早くに元代『六經圖碑』に着目し、刊刻した人物と言えるだろう。

第三項 その他の『詩經』圖譜

明代の『詩經』圖譜には、勅撰書の附録「詩經大全圖」や宋元『詩經』圖譜の翻刻とは異なる三種の圖譜が現存している。一つは、樂器十三種（鐘、鼓、金鐘、玉磬、琴、瑟、笙、蕭、笛、埙、篪、祝、敔）の圖譜^⑥である。これは嘉靖十五年（一五三六）、國子監祭酒の呂柟が主導して編纂した『詩樂圖譜』の巻首に附されている^{六九}。『詩樂圖譜』は『詩經』の中から歌うことの可能な詩篇を選び、その音階を示した樂譜である。^⑦について、『詩樂圖譜』の呂柟「詩樂圖譜序」や鄭汝舟「跋詩樂圖譜後」には説明がない。しかし、同様の樂器圖は北宋の聶崇義『三禮圖』以來、南宋の楊甲『六經圖』中の「尚書規範撮要圖」や「周禮文物大全圖」、元代の「六經圖碑」の「尚書圖」や「詩經圖」、「周禮圖」、明代の勅撰書『書經大全』の「書經大全圖」や先述した「詩經大全圖」など、明代以前の「書」「詩」「禮」の圖譜に廣く見られ、呂柟はこれらの圖譜を参照した可能性がある。

⑥と同じく嘉靖年間には、胡明勗が⑥『新刊詩經集成圖譜』を編纂した。同書は國風のうち「周南」、「召南」、「邶風」を収録した稿本の殘卷一卷が傳わっているだけで、本來どのような「圖譜」が収録されていたのか、その全容は明らかでない^{七〇}。そこで、現存する部分に見える各詩や各風の末尾に詩篇や篇章の構成と意義を示した一覽表を⑥『新刊詩經集成圖譜』の圖譜としておく。

⑥『新刊詩經集成圖譜』は巻首に嘉靖二十九年（一五五〇年）、羅田郷（現在の湖北省羅田縣）の進士胡明通が記した序がある。この序によると、胡明勗の字は汝召、號は龍田、序を記した胡明通の從兄であり、「北渠夫子」の子だという。序を記した胡明通は

弟の胡明書とともに擧人となり後に金華府通判となっていること、そして、巻首に「湖廣羅田縣後學胡明勗輯著 門下庠生胡泮校正 庠生高德脩全校」と弟子の氏名が見えることから、胡明勗は羅田の比較的有力な一族の出身者であり、同地で學問を教授していた人物のようである^{七一}。

『新刊詩經集成圖說』は胡明通の序に「誠に擧業の指南」とあるように、擧業書である。書名に「新刊」、巻首に「書林就正齊梓行」とあることから、刊行を預定していたらしい。しかし、同書に關する記載は明代の書目に見えず、刊本も傳わっておらず、恐らく刊刻され世に廣まることはなかったのだろう。

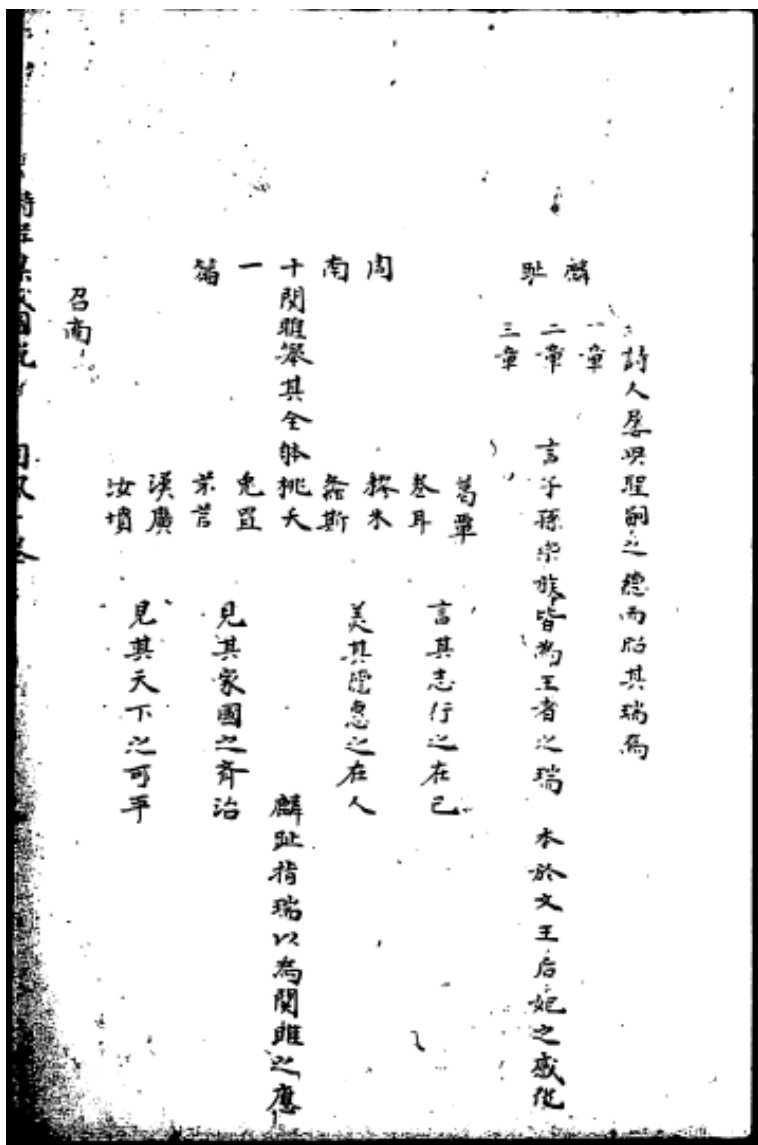
『新刊詩經集成圖說』全體の構成は序の後に附された「立意」に説明がある。ここに記された各項目とその役割は次のようになる。

- ① 【全題】 使人便看。
- ② 【講語】 以明其理。
- ③ 【主意】 以說其詳。
- ④ 【破】 以盡一章之意。
- ⑤ 【合題】 以見前後旨意之妙。
- ⑥ 【全意】 以括全章之意。
- ⑦ 【全破】 以該一詩之蘊。
- ⑧ 【全圖】 以示一篇之脈絡。

全體の構成は八つの部分から成っており、末尾の⑧が圖譜である。⑧は「以て一篇の脈絡を示す」というように、各詩の末尾に附され篇章ごとの要旨を圖示している。また、「立意」には見えないが、周南、召南、邶風の末尾には、各風の構成とその意義を示した圖も掲げられている（次頁の圖九）。

『新刊詩經集成圖說』の編纂は、「立意」に①「使人便看」や⑤「以見前後旨意之妙」とあるように、『詩經』各詩篇の概要や要旨、意義を効率よく、容易に理解させることを目的としていた。これは、本書が科擧受験の参考書として編纂されたからである。このため、その内容は『詩經大全』によったのだろうが、受験用文章の教材である「時文」を引用する以外に諸家の解釋は全く見えず、『詩經』の解釋面で新たな見解を示してはいない^{七二}。⑧の圖譜も受験参考書の一部として、學習者が各詩や風、雅、頌の構成を効率的に把握するために作成された。

圖九、胡賓『新刊詩經集成圖說』の圖譜（臺灣故宮博物院所蔵）



『詩樂圖譜』や『詩經集成圖說』の後、具體的な年代は不明ながら明末に刊刻されたと推測される『詩經』圖譜に⑩『詩經圖史合攷』がある^{七三}。同書は著者を鍾惺（一五七四〜一六二四）とするが、これは假託された可能性がある^{七四}。

『詩經圖史合攷』は専ら『詩經』の名物に関する註釋や諸書の記載を輯録した書物である。全部で一五五〇種余りの事物を収録しており、このうち圖が附されているのは十七種である。これらの圖は、各事物の解説に引用される書名や他の圖譜との比較から、主に北宋の聶崇義『三禮圖』や陳祥道『禮書』、陳暢『樂書』といった禮樂關係の圖譜から採録したらしい。しかし、なかには『詩經』圖譜のみに見える圖譜もある。

『詩經圖史合攷』には序などがなく、編纂目的は記されていない。その内容は『詩經』に登場する名物について、『本草綱目』や『列仙傳』などの諸書から關聯する記載を集めたものである。その採録は多岐にわたっており、なかには『詩經』の解釋と關係ないものもある。『詩經圖史合攷』は書名に『詩經』と冠してはいるものの、実際には『詩經』の名物にまつわる種々の記載を輯録した類書である。

その雑多ともいえる體裁は、清代になり批判された^{七五}。これは經學を尊ぶ觀點からなされたのだが、そもそも『詩經圖史合攷』の編者は、經書である『詩經』の解釋よりも、

類書の體裁をとることで、『詩經』の名物に關する多様な知識を讀者に提供しようとしたのだろう。

第四項 明代『詩經』圖譜の特色

明代の『詩經』圖譜の内容の大部分は、宋元『詩經』圖譜そのものであった。南宋『六經圖』の「毛詩正變指南圖」や元代『六經圖碑』の「詩經圖」の翻刻は言うに及ばず、最も廣く普及したであろう勅撰書の附録②「詩經大全圖」でさえ、元代の羅復と劉瑾が編纂したと傳わる圖譜をそのまま収録したものであった。そして、これらの圖譜は『詩經』の附録に収録され、あるいは單行本として刊刻され、さらに廣まっていた。なかには胡賓の⑧「詩經圖全集」のように、元代『六經圖碑』の「詩經圖」と明の②「詩經大全圖」を折衷した圖譜もあるが、これも結局は元代『詩經』圖譜の延長線上にある。

しかし、この一群の『詩經』圖譜の編纂目的は必ずしも一樣ではない。②「詩經大全圖」は科擧における『詩經』の標準的な解釋を定めた『詩經大全』の附録であり、その編纂目的は科擧の學習と關係している。宋元『詩經』圖譜の翻刻でも、元代『六經圖』の翻刻である盧謙、章達⑩「詩經圖」は同じく學習に供するためであった。これに對して南宋『六經圖』を翻刻した吳繼仕や郭若維、陳重光の⑪⑬、⑭「毛詩正變指南圖」は、いずれも傳來の少ない宋本を世に示すために刊刻された。「毛詩正變指南圖」も南宋當時は科擧受験の學習と密接に關係した圖譜であったが、明代では、むしろその文獻的價値が着目され初めたのである。

この文獻的價値への着目の背景には、勅撰書『五經大全』の附録として収録された圖譜が普及し、参照できるようになったことが關わっていると考えられる。吳繼仕が翻刻した『七經圖』の李維楨序には「國家頒五經大全、學宮皆有圖（國家五經大全を頒ち、學宮皆な圖有り）」とあるように、當時の人々にとって經書の圖譜としてまず想起される『五經大全』の附録であったろう。普及した圖譜と、宋元の經書圖譜の異同に氣づいたことも、翻刻が行われるようになった一つの要因だったのではないか。

ところが、このように文獻的價値が認められて翻刻された「毛詩正變指南圖」は、擧業書である『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』に収録されることで、再び科擧の學習と關わりを持つようになる。明代では普及の程度に差はあれ、南宋の「毛詩正變指南圖」、元代の『六經圖碑』、羅復や劉瑾の『詩經』圖譜がともに科擧試験の資料として参照されることになった。

以上のように、現存する多くの明代『詩經』圖譜の内容は、宋元以來の『詩經』圖譜

の枠組みを超えることはなかった。しかし、同じく科擧試験に關聯して編纂された稿本⑥『新刊詩經集成圖說』は普及することこそなかったが、宋元には見られなかった圖譜を編纂し収録したほぼ唯一の書物である。また、樂譜や類書に見える樂器の圖⑤と⑱『詩經圖史合攷』のように、『詩經』の解釋や學習とは異なる書物でも圖譜が収録された。これも、明代以降に初めて見られる狀況である。

第五節 清代から中華民國期までの『詩經』圖譜

清代から中華民國期までの『詩經』圖譜のなかで、筆者がこれまで調査し得たのは二十八種(再刻・重印を加えると三十四種)ある。これらの圖譜を通覽すると、その内容は同治年間(一八六二～一八七四)以前と光緒年間(一八七五～一九〇八)以後で全く異なる。このため、まず同治年間以前の『詩經』圖譜を次頁の表五に示した。

第一項 同治年間以前の『詩經』圖譜——勅撰書の圖譜「詩傳圖」

同治年間以前の『詩經』圖譜のなかでも、特に廣く普及し參照されたと推測されるのは、勅撰書『欽定詩經傳說彙纂』卷首の⑲「詩傳圖」である^{七六}。

清朝が勅撰經書の編纂に着手したのは順治十三年(一六五六)、順治帝が傅以漸(一六〇九～一六六五)に命じて明代の『周易傳義大全』を補訂し『易經通註』を編纂させたのが最初であった。これから數年の間、勅撰經書の編纂は行われず、再び編纂が開始されるのは康熙十九年(一六八〇)、康熙帝が『日講四書解義』と『日講書經解義』の編纂を命じてからである。そして康熙六十年(一七二一)、『詩經大全』に代わる勅撰書として朱熹の解釋を主とした『欽定詩經傳說彙纂』が王鴻緒などによって編纂され、雍正五年(一七二七)に刊刻された^{七七}。なお、乾隆二十年には勅命により傅恆などが『詩義折中』を編纂したが、こちらは圖譜を収録していない。

表五、清代（同治年間以前）の『詩經』圖譜

	年代	編纂・刊行	圖譜の名稱	佚存／記載 収録状況
19	同治十年（一八七二）	方玉潤	無し	現存、方玉潤『詩經原始』に収録。
18	同治三年（一八六四）	尹繼美	「詩地理圖」	現存、尹繼美『詩地理攷略』に収録。
17	咸豐五年（一八五五） 光緒十五年重刻	蔣光煦	「詩傳圖」	現存、元の羅復『詩集傳音釋』の翻刻。
16	乾隆三十七年（一七七二）	楊魁植	「詩經圖」	現存、楊魁植『九經圖』に収録。
15	乾隆三十六年（一七七二）	徐鼎	無し。	現存、徐鼎『毛詩名物圖說』に収録。
14	乾隆二十八年（一七六三）	鄒梧岡	「詩十五國圖」	現存、鄒梧岡『詩經備旨』に収録。
13	乾隆八年（一七四三）	鄭之僑	「詩經圖」	現存、鄭之僑『六經圖』に収録。
12	乾隆五年（一七四〇）	王皓	「毛詩正變指南圖」	現存、王皓『六經圖定本』に収録。
11	雍正五年（一七二七）	王鴻緒等救撰	「詩傳圖」	現存、『欽定詩經傳說彙纂』に収録。
10	雍正二年（一七二四）	盧雲英	「詩經圖」	現存、盧雲英『五經圖』に収録。
9	雍正元年（一七二三） 道光二十五年重刻	常定遠	「詩經圖」	現存、常定遠『六經全圖』に収録。
8	康熙六十一年（一七二二）	潘采鼎	「毛詩正變指南圖」	現存、潘采鼎『六經圖考』に収録。
7	康熙五十二年（一七一三）	高儕鶴	「詩經圖譜」	現存、高儕鶴『詩經圖譜慧解』に収録。
6	康熙五十年（一七一二） 道光十四年・光緒十一年重刻	高朝瓔	無し。	現存、高朝瓔『詩經體注圖考』に収録。
5	康熙四十八年（一七〇九）	江為龍	「詩經圖」	現存、江為龍『朱子六經圖』に収録。
4	康熙四十二年（一七〇三）	唐少村刊	「詩經大全圖」	現存、『黃際飛先生校訂五經大全』に収録。
3	康熙三十五年（一六九六）	唐少村刊	「詩傳大全圖」	現存、『徐九一先生訂五經大全』に収録。
2	康熙二十九年（一六九〇）	趙燦英	「詩經圖考」	現存、趙燦英『詩經集成』に収録。
1	康熙二十三年（一六八四）	姜文燦	「深柳堂詩經圖考」	現存、姜文燦 吳荃『詩經正解』に収録。

『欽定詩經傳說彙纂』の凡例には、「譜」や「圖」の學術的意義に續けて「今略存之。其中有辨證者、則附著於下（今略ぼ之を存す。其の中の辨證有る者は、則ち下に附著す）」とあることから、既成の『詩經』圖譜を収録し、考證を加えたことがわかる^{七八}。序文や凡例にこれ以上の記載はないが、(Ⅲ)「詩傳圖」の圖は「詩經大全圖」と全く同じであり、さらに解説には「案大全原圖」や「大全舊圖」、「胡氏廣纂大全圖曰」というように、明代の胡廣など勅撰『詩經大全』と「詩經大全圖」を参照したこと示す案語が複数ある。これらの状況から、(Ⅲ)「詩傳圖」は明代の「詩經大全圖」に依據して編纂されたと考えられる。

明代では、その初期に『詩經』の標準的解釋を示すために勅撰の『詩經大全』が編纂され、同書の附録である「詩經大全圖」もいわば公認の『詩經』圖譜として参照されたと考えられる。この状況と同じく、(Ⅳ)「詩傳圖」の編纂と刊刻も、公認された『詩經』圖譜の内容を世に示し、同時にそれが標準的な資料として人々に参照されたと考えられる。

第二項 同治年間以前の『詩經』圖譜——舉業書の附録

清代に編纂された種々の『詩經』圖譜のなかでも、早期に刊刻されたのは舉業書の附録であり、康熙年間から乾隆年間までに五種が確認される。

まず、康熙二十三年（一六八四）には(Ⅰ)「深柳堂詩經圖考」が、康熙二十九年（一六九〇）には(Ⅱ)「詩經圖考」が刊刻された。

(Ⅰ)「深柳堂詩經圖考」は『詩經正解』巻首に収録されている^{七九}。同書の編者は封面に姜文燦と吳荃の二名が見えるが、(Ⅰ)「深柳堂詩經圖考」はその冒頭に「丹陽姜文燦我英氏輯訂」とあることから、姜文燦が一人で編纂したものである。姜文燦は字を我英とい、丹陽（現在の江蘇省丹陽市）の人。別業の深柳堂で吳荃などの人士と交流しており、先に吳荃が編纂し刊刻した『四書正解』が人氣を博したため、書肆が姜文燦と吳荃に『詩經正解』の編纂を持ちかけたという^{八〇}。『詩經正解』の序には『詩經大全』の内容に準じて編纂された舉業書である顧夢麟の『詩經說約』や『詩經金丹』を整理して完成させたほか、「宗朱子以定舉業之杓指（朱子を宗とし以て舉業の杓指を定む）」とあり、『詩經正解』は舉業書である（次頁の圖十）。

圖十、『詩經正解』の「深柳堂詩經圖考」（北京大學圖書館所藏）



(1) 「深柳堂詩經圖考」の編纂から六年後の康熙二十六年（一六九〇）頃には(2)「詩經圖考」が刊刻された。これは趙燦英『詩經集成』の巻首に附されている^{八二}。趙燦英は字を殿颺といい常州（現在の江蘇省常州市）の人。封面の宣傳文や序文によると、趙燦英は先に編纂した『四書集成』が人氣を博したため、書肆の依頼により朱熹の新註を主とした『詩經集成』を編纂したという、先述の『詩經正解』とよく似た経過が記されている^{八二}。また、『詩經集成』の「凡例」には、編纂にあたって科擧の受験學習に役立つかどうかを重視したことが記されている^{八三}。これらの点からして、『詩經集成』も「舉業書」である。

(2) 「詩經圖考」の内容は(1)「深柳堂詩經圖考」とほとんど変わらず、「深柳堂詩經圖考」を収録したのである。ただし、(2)「詩經圖考」は(1)「深柳堂詩經圖考」に比べて天文圖が削除されているなど圖の数が少なく、改編が加えられている。

この後、康熙五十年（一七一二）には高朝瓔が(6)『詩經體註圖考』を編纂した^{八四}。高朝瓔は、同書の自序に「錢塘學人」とあるほか、『詩經體註圖考』の校正者に門人の氏名が複数見られることから、私塾で學問を教授していたのかもしれない。

(6)『詩經體註圖考』の編纂経過も、先の『詩經正解』や『詩經集成』とよく似ている。自序によると、高朝瓔は(6)『詩經體註圖考』完成の前年、書肆の要望に應じて『四書融註』を編纂しており、續けて「五經」註釋書の編纂を始め、まず『詩經』から着手したという^{八五}。『詩經體註圖考』は上部に各詩篇の概要と主旨、下部に詩の本文および朱熹

の新註を載せる體裁をとるほか、高朝璽が自序の中で同書を「帖括の資」と稱しており、
舉業書として編纂されたものである。

(6) 『詩經體註圖考』の圖は、ごく一部を除き、清代翻刻の(3)、(4)「詩傳大全圖」によく似ているが、圖に對應する解説はない。また、同書の圖は地理圖が本文の前にある以外、すべて書中上部に詩篇の概要や主旨の合間に置かれている。宋代以降の舉業書の附録圖譜は、ほぼ例外なく巻首にまとめて附されており、『詩經體註圖考』のように文中に圖を差し挟む形式をとる『詩經』圖譜は、この後、光緒年間になるまで確認されない。

(6) 『詩經體註圖考』が編纂された康熙年間後期から乾隆年間初期までは、舉業書の附録としての『詩經』圖譜は見られない。次いで確認できるのは、乾隆二十八年（一七六三）に編纂された『詩經備旨』の(4)「詩十五國圖」である^{八六}。この地圖には「北和」という地名が見える。これは元代『六經圖碑』や清代の「詩經大全圖」にある「嶺北省今和林城」を誤って収録したらしい。

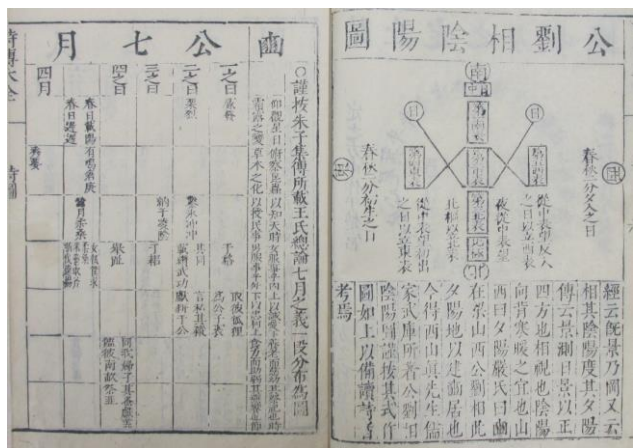
『詩經備旨』の序によると同書の編者は鄒梧岡、字を聖脈といい、長汀霧閣村（現在の福建省聯城市）の人だという。『詩經備旨』は鄒梧岡が編纂した『五經備旨』の一つであり、その自序には『詩經』解釋の流行や同書刊刻の経緯、そして退菴鄧先生（明の鄧林）の『四書備旨』に倣い『詩經』の「全旨」と「節旨」を上部に、『詩經』の本文と解説文を下部に記載したとある。一方、(4)「詩十五國圖」については全く言及がなく、収録した理由は明らかではない。

第三項 同治年間以前の『詩經』圖譜——宋元明『詩經』圖譜の翻刻と改編

舉業書に附録として『詩經』圖譜が編纂された康熙年間には、宋代から明代までの『詩經』圖譜の翻刻や改編も行われた。

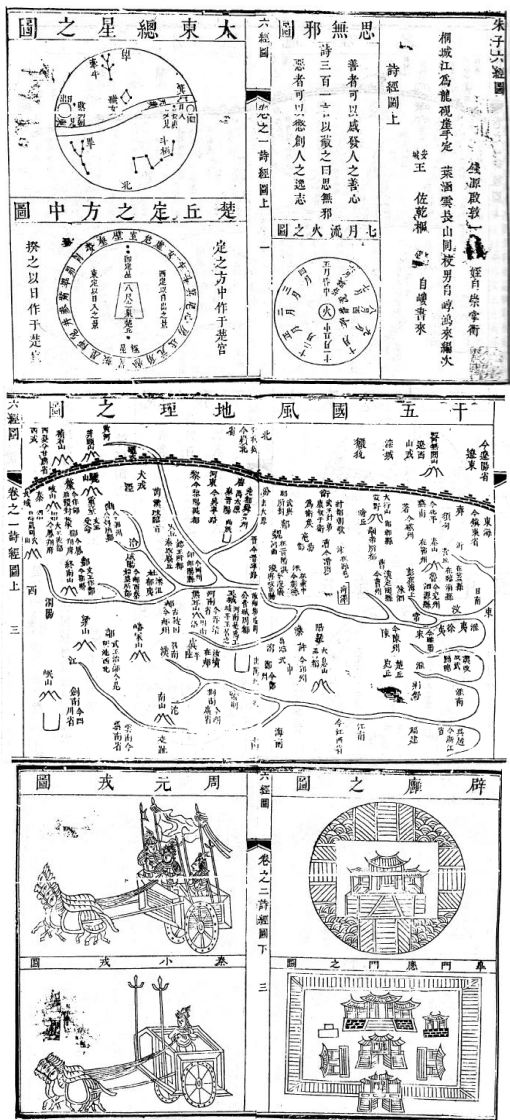
まず、康熙三十五年（一六九六）と康熙四十二年（一七〇三）には(3)、(4)の「詩傳大全圖」が刊刻された。これらはどちらも清代になり翻刻された『詩經大全』の附録である。(3)は『徐九一先生訂五經大全』、(4)は『黃際飛先生校訂五經大全』、すなわち明末の徐汧（字は九一）と康熙年間の進士である黃越（字は際飛）がそれぞれ校訂した異なる『詩經大全』に収録されているが、刊刻者はともに書肆の唐少村である（本頁の圖十二）^{八七}。(3)、(4)の「詩傳大全圖」は、どちらも一部の圖の内容が明代のものとは異なっている。

圖十一、『徐九一先生訂五經大全』の附録圖譜と唐少村の肖像印（國立公文書館所藏）



この後、清代では「詩傳大全圖」の翻刻は見られず、宋元『詩經』圖譜の翻刻が盛んとなった。なかでも早くに翻刻されたのは、康熙四十八年（二七〇九）の『朱子六經圖』に収録されている⑤「詩經圖」である（本頁の圖十二）。そして、康熙六十一年（二七二二）から雍正二年（二七二四）までの三年間には⑧「毛詩正變指南圖」、⑨「詩經圖」、⑩「詩經圖」が立て続けに翻刻され、さらに乾隆年間に三種、咸豐年間に一種が翻刻された。

圖十二、江爲龍『朱子六經圖』の「詩經圖」（南京大學圖書館所藏）



(5) 「詩經圖」を収録する『朱子六經圖』の翻刻者は江爲龍といい、桐城（現在の安徽省安慶市）の人、康熙三十九年（一七〇〇）の進士で知宜春縣、吏部主事などを歴任した^{八八}。

『朱子六經圖』の底本は、葉涵雲の序に「信州類宮（州學）の石碑」とあり、元代の『六經圖碑』であることがわかる^{八九}。翻刻の経緯や動機は江爲龍や葉涵雲の序に記されている。これによると、江爲龍は幼い時より經書を學び、疑義があれば廣く諸書を調べ考證しており、いずれその成果を書物にしようとしていた。しかし、若い時は科擧の學習に追われ、役人になると職務に追われ、その念願を果たすことはできなかった。この状況のなかで康熙四十七年（一七〇八）、官舎を訪ねてきた周子用より「朱熹の『六經圖』を贈られた。江爲龍はこの圖が經書の原義を探究する手がかりになると考え、また流傳が少ないことを鑒み、圖の順序を整え、さらに四書圖を加えて十六卷とし翻刻したという^{九〇}。どうやら、この頃には元代の『六經圖碑』の編纂者を朱熹と考えた人々がいたため、江爲龍は書名を『朱子六經圖』と題したらしい。

『朱子六經圖』から十數年を経た康熙六十一年には、⁸⁸「毛詩正變指南圖」を収録する『六經圖考』が翻刻された^{九一}。翻刻者の潘棗鼎は溧陽（現在の江蘇省常州市）の人で康熙四十八（一七〇九）年の進士、江夏知縣となった^{九二}。

『六經圖考』の自序に記された翻刻意圖によると、かつて流傳の少なかった『六經圖』を明の「計部大夫汝南方公」が翻刻したが、この版は大きく閱覽や攜帶に不便なため小型の版に改めてという^{九三}。この小型化のため、『六經圖考』のなかでも⁸⁸「毛詩正變指南圖」の内容のうち「譜（表）」に相當する部分が複數削除されており、「圖」に特化した圖譜となっている。

潘棗鼎の『六經圖考』を刊刻した翌年、雍正元年には襄城（現在の河南省許昌市）の太學生である常定遠が⁹¹「詩經圖」を収録する『六經全圖』を刊刻した^{九四}。これも先の江爲龍『朱子六經圖』と同じく、元代『六經圖碑』の翻刻である。

『六經全圖』の常定遠自序によると、常定遠は康熙六十年（一七二一）、陽翟（現在の河南省禹州市）で古書を賣る者から『六經圖』六卷を購入し、流傳の少ない「信州石本」や「廬江木本」を廣めることが世の經學研鑽の一助になると考え翻刻したという^{九五}。「信州石本」は元代『六經圖碑』の拓本、「廬江木本」は明の萬曆四十二年、廬江の盧謙、章達が『六經圖碑』を翻刻した『五經圖』六卷のことである。常定遠が購入した『六經圖』は「六卷」と卷數が記されており、明代の『五經圖』だったと推測される。また、常定遠自序には原本の卷數に従って翻刻したことや、入手した『五經圖』には章達や李

維禎の序文が缺けていたので収録しなかったと記されていることから、『六經全圖』は常定遠が購入した『五經圖』をそのまま翻刻したらしい。実際、『詩經』圖譜を見る限り、『六經全圖』は圖譜を示す順序など、『五經圖』と全く同一のものである。

さらに、常定遠による『六經全圖』刊刻の翌年、雍正二年には盧雲英が⁽¹⁰⁾「詩經圖」を収録する『五經圖』を編纂した^{九六}。これは明代の盧謙、章達『五經圖』の翻刻である。

盧雲英は『五經圖』の翻刻に関わった盧謙の後裔である。同書の楊恢基「重刻五經圖序」によると、盧雲英は祖父が翻刻した『五經圖』の流傳が少ないことを惜しみ、學習者の参考に資するため、家藏の『五經圖』を王暉なる人物に校訂させて翻刻したという。王暉の「重刻五經圖凡例」には、『五經圖』と『六經圖碑』を對照して縮尺や圖の収録順序を校訂したことや、南宋の『六經圖』以來刊刻された經書の圖譜と『六經圖碑』とが異なること、そして編者の姓名が傳わらない『六經圖碑』はおそらく一人の手になるものではない、と記されている。『六經圖碑』の翻刻は明代より行われてきたが、管見する限り、同碑の校勘を行い、その成立過程に言及したのは盧雲英『六經全圖』が初めてである。

乾隆年間の翻刻は、まず乾隆五年（一七四〇）に⁽¹²⁾「毛詩正變指南圖」を収録する『六經圖定本』が編纂された^{九七}。編纂者の王暉は先述した盧雲英『五經圖』に同姓同名の校訂者が見えるが、同一人物かどうか明らかではない。

王暉の自序には、元代の『六經圖碑』、南宋『六經圖』の翻刻である明の吳繼仕本などにに基づき校勘を試みたという。さらに、各經の末尾には「參訂」や「御書改正」という校勘説明があり、⁽¹²⁾「毛詩正變指南圖」では「欽定詩經傳說彙纂」の「詩傳圖」や吳繼仕本、坊本との異同を記している。このように、『六經圖定本』は主に南宋『六經圖』と元代『六經圖碑』を折衷、校勘した圖譜である。

この後、乾隆八年（一七四三）には⁽¹³⁾「詩經圖」を収録する『六經圖』が編纂された^{九八}。編者は鄭之僑、字は東里、乾隆二年（一七三七）の進士であり、鉛山知縣や寶慶府知府を歴任したという^{九九}。鄭之僑が『六經圖』を編纂した意圖は、その自序や雷鉉の序にみえる。鄭之僑は鉛山（現在の江西省上饒市鉛山縣）知縣の時、諸生に經書を講義し、諸生がよく理解できない際は『六經圖碑』の拓本を示した。しかし、『六經圖碑』に誤りが多かったため諸説を集めて校訂した。この校訂本を諸生に示したところ、初學者に役立つという理由で刊刻するよう願われたという^{一〇〇}。

序にあるように、⁽¹³⁾「詩經圖」の内容の大部分は『六經圖碑』の「詩經圖」と共通するが、圖や解説など他書によって改編されたと考えられる箇所も散見される。鄭之僑『六

『詩經』圖譜を校訂しようとした点では先の王崑『六經圖定本』と類似している。しかし、他書によって『六經圖碑』を補うなど、その編纂は校訂というよりも『六經圖碑』の増補や改編と言ったほうが適切である。

鄭之僑『六經圖』の編纂から三十年ほど過ぎた乾隆三十七年（一七七二）には、¹⁰「詩經圖」を収録する『九經圖』が翻刻された。これは楊魁植が編纂し、その子の楊文源が増訂した圖譜である¹⁰¹。『九經圖』にある複数の序によると、楊魁植の字は輝斗、號は乾齊、漳州長泰（現在の福建省漳州市長泰縣）の人、孝友方正に推薦されるも赴かず、生涯生員であった¹⁰²。楊魁植は藏書家で多くの圖譜を所藏しており、そのなかに、世にほとんど傳わらない元代の『六經圖碑』の拓本があった。楊魁植は學生が科舉對策の學習に努力するほど見聞を狭めていることを憂い、『六經圖碑』をもとに『九經圖』を編纂した。しかし、楊魁植は『九經圖』の原稿を残して没したため、その子の楊文源が原稿を増訂し刊刻したという¹⁰³。¹⁰⁴「詩經圖」の内容は概ね『六經圖碑』の「詩經圖」と同じである。しかし、原本にはなかった解説が附されている。

この後、咸豐五年（一八五五）には¹⁰⁵「詩傳圖」を収録する元の羅復『詩集傳音釋』が翻刻された。これは、清代における宋元『詩經』圖譜の翻刻としては遅い時期のものであり、同版が光緒十五年（一八八九）戸部により江南書局で重刻された後、宋元『詩經』圖譜の翻刻はほぼ見られなくなる。

¹⁰⁶「詩傳圖」の翻刻者は蔣光煦（一八一三～一八六〇）字は日甫、海寧（現在の浙江省海寧市）の出身で藏書家として知られた¹⁰⁷。書中の「校刻詩集傳音釋札記」によると、蔣光煦は『詩集傳音釋』の元至正辛卯雙桂堂刊本の影鈔本を所藏しており、この影鈔本と明代以來の版本には本文や註釋、音註は相當異なっていた。このため、同じく藏書家として知られた從弟の蔣光焞が『詩集傳音釋』の明の正統十二年刊本を翻刻しようとした際、蔣光煦は自らの影鈔本を用いることを提案した。また、翻刻にあたっては許丙鴻、管庭芬、朱元炘、陳錫麒、邵懿辰、伊樂堯、錢泰吉の協力を得て、先述の正統刊本、元の胡一桂『詩傳纂疏』元泰定四年刊本、朱公遷『詩傳疏義』書林劉氏安正堂と余氏克勤堂の明重刊本二種、許謙『詩名物鈔』通志堂本を主とし、さらに史書などによって校勘したという¹⁰⁸。この校勘は圖の解説にも及んでおり、「校刻詩集傳音釋札記」には先述の諸版本との異同が記されている。

第四項 同治年間以前の『詩經』圖譜四―情景畫を収録する『詩經』圖譜

清代には、情景畫を含む¹⁰⁹「詩經圖譜」を収録する『詩經圖譜慧解』が編纂された。

『詩經』の情景畫は本章第一節にあるように漢代から描かれていた。しかし、情景畫を参考資料として収録した書物は、高儕鶴の(7)「詩經圖譜」以前にほとんど類例がない。

『詩經圖譜慧解』全十卷は稿本であり、書中に康熙四十六年の「後愚詩說」や康熙四十八年の「詩經圖譜慧解引義」、康熙四十九年の「家訓」など異なる作成年代が記されている^{一〇六}。また、卷によつては編纂、校訂、重訂などを行った時々の年代が記されている。「家訓」には二十數年を費やして同書を編纂したと記されており、編者の高儕鶴は康熙二十年代末から三十年代初頭に編纂を始め、康熙五十二年(一七一三)ころに完成させたのだろう^{一〇七}。

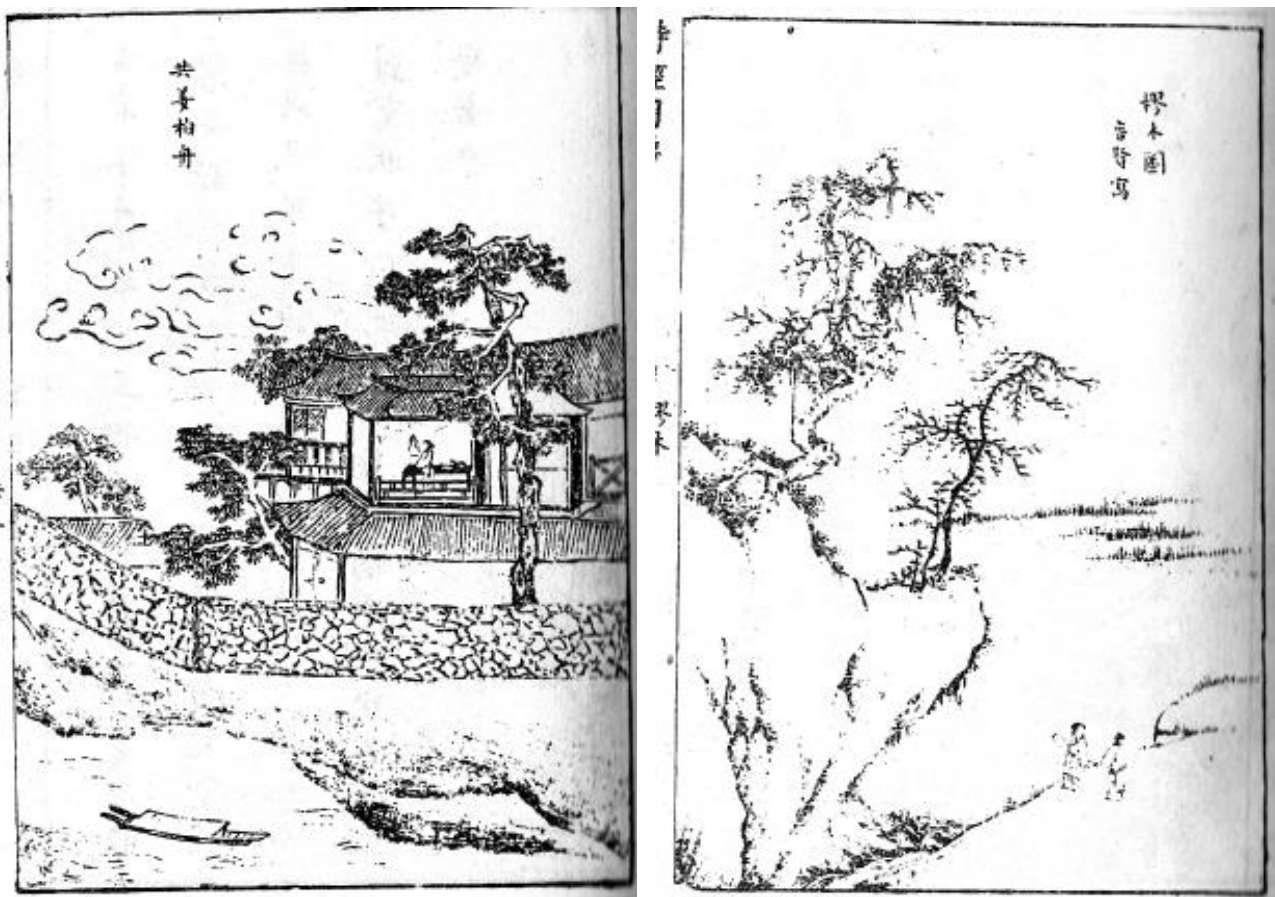
高儕鶴は自序などの署名から長洲(現在の江蘇省蘇州市)の人、字を後愚、號を蓼莊と稱したようだが、詳細な経歴は傳わらない。

『詩經圖譜慧解』最大の特徴である情景畫は、國風、大小雅、三頌の篇章の區切りごとに附されている。これらは、一人の手で描かれたのではない。圖のなかに「儕鶴」「蓼莊」「後愚」など高儕鶴の署名のほか、一部には「唐賢」、「臣楷」、「戴峻」、「高簡」など、高儕鶴以外の作者名も見える。

「後愚詩說」や「詩經圖譜慧解引義」には、高儕鶴が朱熹の新註のほか、明代の鐘惺、魏浣初、凌濛初などの註釋を重視して『詩經圖譜慧解』を編纂したとある。實際、同書は明代までの諸家の『詩經』解釋を踏まえて作成した註釋を各詩篇の章ごとに附しており、續けて「提綱」、「傳意」、「總意」といった當該の詩篇を容易に理解するための要點を記している^{一〇八}。このように、註釋に加えて詩篇の概要や要點を記す點は舉業書の内容と似ている。

しかし、『詩經圖譜慧解』は舉業書のように模範的な要點だけを説明するのではなく、「後愚詩說」や「詩經圖譜慧解引義」では『詩經』註釋史の變遷や、高儕鶴が特に重要だと考えた註釋の意義を述べているほか、「家訓」では自らの子孫に向けて、破損や紛失を避けるため他者に貸さないことや、刊刻してもよいが決して通俗的な解釋を収録しないよう戒めている。このように、『詩經圖譜慧解』は科擧對策に特化した一般向けの舉業書ではなく、あくまで高儕鶴が發明した『詩經』解釋を自らの家族や子孫に學ばせるために編纂した書物であったと考えられる(次頁の圖十三)。

圖十三、「詩經圖譜慧解」の「樛木圖」と「共姜柏舟」圖（臺灣國家圖書館所藏）

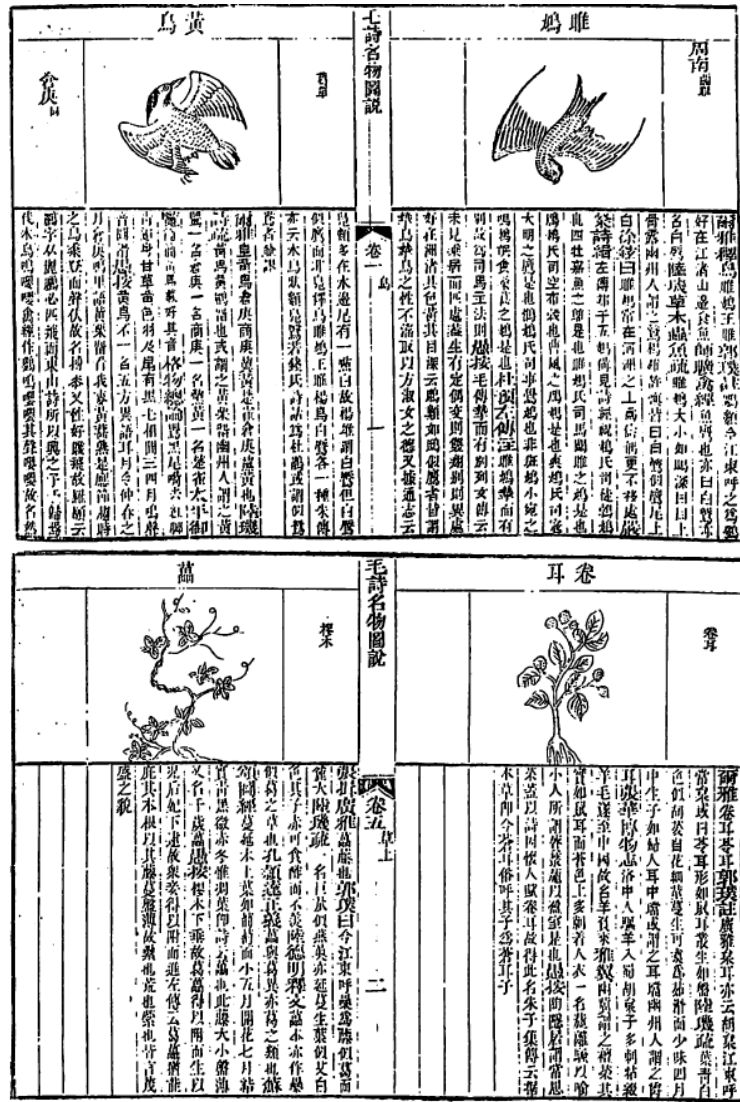


第五項 同治年間以前の『詩經』圖譜五——『詩經』動植物の考證と圖譜

乾隆三十六年（一七七二）には『詩經』の動植物を圖示した(15)『毛詩名物圖說』が編纂された。『詩經』の各詩篇を解釋する上で、そこに詠み込まれた動植物は重要な手がかりであった。また、『詩經』の解釋から派生して、三國吳の陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』のように、博物學的な觀點から動植物を考證することも古くから行われた。しかし、中國において『詩經』動植物の圖譜を収録した書物は極めて少なく、漢代から同治年間

の間に確認できるのはわずかに二種、唐代の『毛詩草木蟲魚圖』と(15)『毛詩名物圖説』のみである(本頁の圖十四)。

圖十四、徐鼎『毛詩名物圖説』(湖北省圖書館所藏)



(15) 『毛詩名物圖説』は、毎葉上部に動植物の圖を示し、下部に『毛詩』など經書の註疏や『韓詩外傳』、『爾雅』や『說文解字』、『埤雅』といった小學書、『陶隱居本草』などの本草書のように諸書の記載を引用している¹⁹。編纂者は徐鼎、字を實夫、號を雪樵といい、吳縣(現在の江蘇省蘇州市)の優貢生であった。その畫をはじめ清代の謝淞洲を學び、後に明の沈周を宗とした。著書には『毛詩名物圖説』のほか『靄雲館詩文集』があつたが傳わらない。その傳は、徐鼎の知人であつた馮金伯『墨香居畫識』や後の蔣寶齡『墨林今話』に見える²⁰。

(15) 『毛詩名物圖説』の編纂意圖と經緯は同書の自序に記されている。これによると、徐鼎は年少の時分、兄に『毛詩』を教授されて名物を知ることの重要性に氣づき、書肆を往來すること二十年、諸書の記載を集めたが書物上の學問では「格致多識の學」として不足を感じ、山川をめぐって民間の情報を集め、動植物の圖を描いた。後に、巡撫の幕下で講義を行つていた際、『毛詩名物圖説』の原稿を同僚に示したところ、刊刻を勸

められたという^{一一}。

第六項 同治年間以前の『詩經』圖譜六―『詩經』考證書の圖譜

清代でも同治年間より前の『詩經』圖譜、あるいは『詩經』圖譜が附された『詩經』の多くは既存の諸家の註釋を収録しており、新たな見解を示したものは少なかった。

一方、清代でも乾隆、嘉慶以後は考證學が盛んになった時代である^{一二}。このような状況のなかで、『詩經』の解釋や文字、音韻、名物などを對象として實證的に探究した様々な著作が著された^{一三}。前項の¹⁵『毛詩名物圖說』は、まさにこの實證を重視する氣風のなかで、動植物を考證し、新たに編纂された圖譜であった。しかし、この後に編纂された『詩經』考證書のなかで圖譜を附したものは少なく、筆者が調査し得たのは、同治年間に著された¹⁸「詩地理圖」と¹⁹『詩經原始』の二種である。

まず、同治三年（一八六四）に刊刻された尹繼美『詩地理攷略』の卷末には¹⁸「詩地理圖」が附されている^{二四}。尹繼美については書中の記載により永新（現在の江西省吉安市永新縣）の人とあること、そして『詩地理攷略』とほぼ同じ時期に『詩管見』を著した事以外、その経歴は未詳である。

『詩地理攷略』は書名の通り、『詩經』の地理を考證した書物である。同書の「題辭」によると、尹繼美は『詩經』中の地理が『詩經』に描かれた各地の風俗の由来を理解する上で重要と考え、同時に宋の王應麟『詩地理考』以降、『詩經』の地理考證に註力した學者がほとんど存在しなかったことから本書の編纂を企圖したという。これまでの『詩經』圖譜の地圖がごく単純な全體圖のみであったのに對して、¹⁸「詩地理圖」は全體圖「總圖」のほか、「周・召・豳・秦」、「邶・鄘・衛・王・鄭・鄆・陳」、「齊・魯・曹」、「唐・魏」の各地方ごとの地名や地形を詳細に記した地圖である。

また、同治十年（一八七二）の¹⁹『詩經原始』の卷首には、複数の圖譜が収録されている^{二五}。『詩經原始』の著者は方玉潤（一八一―一八八三）、字は友石など、寶寧（現在の雲南省文山州廣南縣）の人で、十數度にわたり科擧を受験するも合格せず、後に軍功によって隴西州同、隴州長寧驛州同などを歴任し、著述や講學に力を盡くした^{二六}。

方玉潤は『詩經原始』の著述意圖について、『詩經』の編者や「詩序」、そして朱熹の「傳」に對する疑義、さらに「序」や朱熹「傳」の間で『詩經』を論じた姚際恒『詩經通論』に不足を感じたと述べている。また、『詩經』解釋の方針は、古人が詩を作った意圖を明らかにするため、「序」か朱熹「傳」か、あるいは姚際恒『詩經通論』かにかかわらず、正しいと思われるものに從ったという^{二七}。

『詩經原始』の圖譜に収録されている圖譜は九圖、圖譜の總稱はない。圖譜の内譯は、地理や天文圖、諸國の家系や作詩時期を示した一覽表など、これまでの『詩經』圖譜にも見られたものが大部分を占める。しかし、これまでの『詩經』圖譜に見られなかった「詩無邪太極圖」も収録されている。

第七項 光緒年間以降の『詩經』圖譜

光緒年間（一八七五～一九〇八）以降の『詩經』圖譜は九種（重印を加えて十四種）ある（次頁の表六）。この時期には、康熙年間の舉業書^⑥『詩經體註圖考』や咸豐年間の翻刻本『詩集傳音釋』の^⑦「詩傳圖」がそれぞれ光緒十一年、光緒十五年に重刊されたが、この二種を除いて、いずれも書肆が刊行した『監本詩經』や乾隆年間の勅撰書『御纂詩義折中』の附録、あるいは『毛詩品物圖攷』の翻刻である。

『詩經』附録のなかの二種は、宋元の『詩經』圖譜以来の内容を収録している。

まず、従来の『詩經』圖譜の内容を採録したものには、宣統三年（一九一一）上海の書肆「章福記」が刊行した石印本^⑧『章福記監本詩經』の「圖」がある。同書の巻首には、建築、兵車、衣冠、器物の圖譜が附されている（次々頁の圖十五）^{二一八}。

^⑨『繪圖監本詩經』は刊刻年代が記されていない。刊刻者の錦章圖書局は光緒二十六年（一九〇一）に設立された書店であることから、この年以降に刊刻された書物である^{二一九}。

『繪圖監本詩經』は全四冊、第一冊冒頭に地圖があるほか、各冊冒頭には情景畫が二圖づつ附されている。同じく情景畫を収録した書物には高儕鶴『詩經圖譜慧解』の^⑩「詩經圖譜」がある。しかし、両者は全く異なる。そもそも、『詩經圖譜慧解』は稿本しか伝わっておらず、^⑪『繪圖監本詩經』の編者が参照したとは考えがたい。^⑫『繪圖監本詩經』の情景畫には署名など作者を知る手がかりは無く、何か基づく繪畫があったのか、それとも^⑬『繪圖監本詩經』の刊行に際して錦章圖書局が誰かに描かせたのか、明らかではない（次々頁の圖十六）。

以上二種の圖譜に比べて、光緒年間に最も多く翻刻、収録されたのは動植物を圖示した岡元鳳の『毛詩品物圖攷』である（次々頁の圖十七）。岡元鳳（一七三七～一七八七）は大坂の人、字を公翼、魯庵などと號し、醫業に従事した人物である^{二二〇}。

表六、清末（光緒・宣統年間）・民國初期の『詩經』圖譜

年代	編纂・刊行	圖譜の名稱	収録状況
20 同治・光緒年間（一八六二～一九〇八）？	森寶閣	無し。	現存、森寶閣發兌『毛詩品物圖攷』に収録。
21 光緒十二年（一八八六）	上海積山書局	無し。	現存、上海積山書局『毛詩品物圖攷』に収録。
22 光緒二十六年（一九〇一）以降	錦章圖書局	「十五國風地理之圖」 および情景畫八圖	現存、錦章圖書局『繪圖監本詩經』に収録。
23 光緒三十四年（一九〇八）	上海龍文書局	無し（『毛詩品物圖攷』）	現存、上海龍文書局『改良繪圖品物圖攷詩經監本』
24 宣統二年（一九一〇）	上海鑄記書局	無し（『毛詩品物圖攷』）	現存、上海鑄記書局『詩經讀本』に収録。
25 宣統二年（一九一〇） 民國十三年（一九二四） 民國三十年（一九四一）	掃葉山房	無し。	現存、掃葉山房『毛詩品物圖攷』に収録。
26 宣統三年（一九一一）	章福記	「圖」	現存、章福記『章福記監本詩經』に収録。
27 宣統三年 民國八年再版	小安樂書屋校 輯・自強書局板 印	無し（『毛詩品物圖攷』 および天文・車馬・器物 等の圖）	現存、小安樂書屋『御纂繪圖詩經詩意折中』に収録。
28 民國七年（一九一八）	上海天寶書局	「詩經圖考」	現存、上海天寶書局『監本詩經』に収録。

比較的早い時期に翻刻されたと推測されるのは、森寶閣が販賣した木刻本⁽²⁰⁾である。⁽²¹⁾これは訓點を削除しただけの翻刻であり、刊刻経緯などは一切記されていない。このため刊刻年代は不明ながら、同治、光緒頃に刊刻されたかと推測される。少なくとも、⁽²⁰⁾以外はすべて石印本であることから、他書よりは早い時期のものと考えられる。

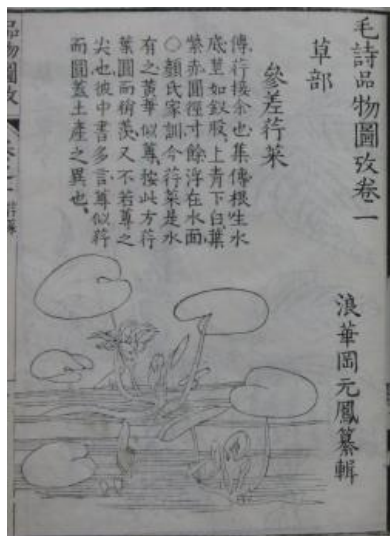
圖十五、章福記『章福記監本詩經』（北京大學圖書館所藏）



圖十六、錦章圖書局『繪圖監本詩經』（同右）



圖十七、森寶閣發兌の岡元鳳『毛詩品物圖攷』（同右）



この後も、『毛詩品物圖攷』は他の書肆により刊行された。光緒十二年（一八八六）には上海積山書局が(21)を、宣統二年（一九一〇）には掃葉山房が(25)を刊行しており、特に、掃葉山房は民國十三年（一九二四）と民國三十年（一九四一）にも再版した(23)。これらの版には、いずれも光緒丙戌（一八八六）孟冬（一月）に記された翰林編修戴兆春の序がある。上海積山書局の版は同年の秋に刊行されていることから、これが最初の版であり、掃葉山房の版は上海積山書局の版によって刊行したのである。

このように『毛詩品物圖攷』が翻刻されるなかで、『詩經』の附録にも『毛詩品物圖攷』の圖が収録された。

なかでも早くに刊行された光緒三十四年（一九〇八）の(23)上海龍文書局『改良繪圖品物圖攷詩經監本』は、書名に「品物圖攷」とあるように『毛詩品物圖攷』を収録したことを明示しており、巻首に圖をまとめて掲載している(23)。この一方で、その後刊行された(24)上海鑄記書局『詩經讀本』（宣統二年）、(27)小安樂書屋『御纂繪圖詩經詩意折中』（宣統三年・民國八年再版）、(28)上海天寶書局『監本詩經』（民國七年）は、『毛詩品物圖攷』を収録していることを明示しておらず、収録の體裁もそれぞれ異なり、(28)は巻首に圖を収録しているが、(27)は本文中に圖を置き、(24)は上圖下文となっている(24)。また、収録する内容もすべてが『毛詩品物圖攷』とは限らず、(27)『御纂繪圖詩經詩意折中』にはこれまでの『詩經』圖譜にも見られた天文、車馬、衣冠、祭器などの圖もあり、(28)『監本詩經』には圖譜の冒頭に地圖が附されている（本頁の圖十八）。

これらの『詩經』は、先述した(22)『繪圖監本詩經』や(26)『章福記監本詩經』を含めて、いずれも國子監が刊行した「監本」や乾隆年間の勅撰書『御纂詩義折中』といった、國家公認の版であることをアピールした書名をつけており、科擧受験の對策や初學者向けのテキストとして販賣されたのだろう。

圖十八、『御纂繪圖詩經詩意折中』（北京大學圖書館所藏）



第八項 清代『詩經』圖譜の特色

清代の學問といえは考證學の隆盛がよく知られるが、『詩經』の考證を目的に編纂された書物のなかで圖譜を収録するのはわずか三種、乾隆年間の徐鼎の⁽¹⁵⁾『毛詩名物圖說』と、同治年間に編纂された尹繼美『詩地理攷略』の⁽¹⁸⁾「詩地理圖」、方玉潤『詩經原始』の圖譜⁽¹⁹⁾のみである。

清代初期から同治年間までに編纂、刊刻された『詩經』圖譜の大部分は、むしろ明代と同じく、舉業書や勅撰書の附録、前代の圖譜の翻刻であった。翻刻は言うまでもなく、舉業書や勅撰書の附録に見える圖譜であっても、明代以前の『詩經』圖譜の内容を踏まえたものが多い。しかし、これらの圖譜のすべてが従前の圖譜を踏襲しているわけではなく、増補されたり、改編されたものが散見される。この點は、明代における附録や翻刻が宋元の『詩經』圖譜をほぼそのまま収録しているのと異なる。

また、翻刻について言えば、明代において南宋『六經圖』は四種翻刻されたが、元代『六經圖碑』は一種しか翻刻されなかった。これに對して、清代になると南宋『六經圖』を主とした圖譜は二種、元代『六經圖碑』を主としたものは六種が翻刻されている。明代に比べて、清代では『六經圖碑』がより高く評價されたようである。

このほか、清代『詩經』圖譜の特徴としては、明代以前に見られなかった情景畫や動植物の圖譜が書物として編纂され、あるいは附録として収録されたことが挙げられる。當初は康熙年間の高儕鶴『詩經圖譜慧解』の⁽⁷⁾「詩經圖譜」や乾隆年間の徐鼎⁽¹⁵⁾『毛詩名物圖說』のように、個人によって圖譜が編纂された。その後、情景畫は書肆刊行の『詩經』附録として一種が見られるだけに對して、動植物の圖譜は日本から傳わった岡元鳳の『毛詩品物圖攷』が書肆に翻刻され、さらに『詩經』の附録とされた。結局、清代『詩經』圖譜の中でも特徴的な動植物の圖譜は、日本の圖譜が廣く行われた。

小結

漢代から中華民國までの『詩經』圖譜の特色として、まずは北宋以前と南宋以後の『詩經』圖譜では、北宋の時に歐陽脩が輯佚した『鄭氏詩譜』を除き、關聯性が見られないことが指摘できる。つまり、南宋以降の『詩經』圖譜の成立や變遷は、現存する早期の圖譜である『鄭氏詩譜』や南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」が起點となっていると考えられる。

そしてもう一つ指摘できるのは、南宋以降の『詩經』圖譜の内容や編纂者、編纂目的や編纂形態には、時代によって異なる傾向が存在することである。

内容面では、圖像を示した「圖」と一覽表の「譜」に分けられる。このうち譜は、古くは詩篇の作成年代を示したものがあり、後世では『詩經』の理論や構造、解釋法などを示したものがある。圖は天文地理、建築などの制度、器物を示したものが多く、これら以外の情景畫や動植物圖は清代以降になって書物に収録されるようになる。

編纂者は概ね個人と書肆、國家に分けられる。個人は南宋以降一貫して主要な編纂者であったのに對し、書肆による編纂が明らかな圖譜は南宋と清代末期に多く見られる。また、國家による『詩經』圖譜の編纂は明、清の二代で行われた。

編纂目的は概ね三つ、科舉受験の對策を含めて『詩經』の學習に參考資料として供すること、流傳の少ない圖譜を普及させること、そして『詩經』解釋に關する自説を示すことが挙げられる。南宋以降の『詩經』圖譜で顯著なのは前二者であり、これに比して自説を示すために編纂された圖譜は少ない。

編纂形態は、概ね經書の圖譜を専門的に収録した書物や石碑、勅撰書や舉業書の附録、前代の圖譜の翻刻、『詩經』註釋、考證書の圖譜に分けられる。南宋から元代までに見られるのは主に圖譜を専門的に収録した書物・石碑と舉業書の附録である。明代以降の狀況は、石碑が見えないのを除いて同様であり、さらに勅撰書の附録や翻刻が見られるようになる。『詩經』の考證書の圖譜は清代から見られるが、附録や翻刻に比べて少ない。

本章で整理した歴代の『詩經』圖譜の概要、そして各時代における傾向や特色からは、南宋の時に楊甲の「毛詩正變指南圖」が登場して以降、類似した圖譜が繰り返し編纂、刊刻されていくという、一つの流れが浮かび上がる。この流れを整理すると、次のようになる。

南宋の時に楊甲が學習を目的として編纂した「毛詩正變指南圖」は好評を博し、その後、複数の書肆が「毛詩正變指南圖」に類似した内容の圖譜を附録とする纂圖互註本の『詩經』を學習者向けに刊刻した。元代になると、南宋のものに類似した『詩經』圖譜が石碑や『詩經』の附録として収録された。明代では元代の『詩經』圖譜が經書解釋の標準を定めた勅撰書の附録として収録され、他の舉業書にも収録された。このほか、明代後期には宋元の『詩經』圖譜が翻刻され、一部の舉業書に収録された。清代では、その初期より明以前のものに類似した『詩經』圖譜が舉業書の附録として収録されたほか、宋、元、明の圖譜が翻刻され、なかには改編されたものもあった。また、清代の勅撰書は、明代の勅撰書の圖譜を改編して収録した。

この流れのなかで編纂、翻刻された『詩經』圖譜は、相互に類似しているとはいえ、

變化がなかったわけではなく、従前の『詩經』圖譜を増補、削除したものもあれば、一部だけを取り出して収録したものもある。何が變わり、何が變わらなかったのか、次章ではこの變化を分別して、『詩經』圖譜の編纂と改編状況の詳細を明らかにする。

第一章 註釋

- 一 現存が確認できない『詩經』圖譜については、歴代の正史、『玉海』、『文獻通考』、『古今圖書集成』などのほか、歴代『詩經』註釋書の解題を記した劉毓慶『歴代詩經著述考（先秦～元代）』（中華書局、二〇〇五年）や『歴代詩經著述考（明代）』（中華書局、二〇〇八年）、夏傳才『詩經學大辭典』（河北教育出版社、二〇一四年）などを参照した。
- 二 朱傑人、李慧玲 整理『毛詩註疏』（上海古籍出版社、二〇一三年）収録の「詩譜序」による。
- 三 『經典釋文』の「暢」と「隱」について、王應麟は『玉海』卷三十八「漢詩細・詩譜・詩解」のなかで「……盖（徐）整既暢演、而（大叔）裘隱括之、求字訛也」と解釋している。
- 四 王肅と王基の學術的な立場は陸德明『經典釋文』卷一に「魏太常王肅更述毛非鄭。荊州刺史王基駁王肅、申鄭義」とある。
- 五 『魯詩』と『齊詩』の散佚、および『韓詩』の傳來については『隋書』卷三十二「經籍志」に「……齊詩魏代已亡、魯詩亡於西晉。韓詩雖存、無傳之者。唯毛詩鄭箋至今獨立」とあり、「韓詩二十二卷」、「韓詩翼要十卷」、「韓詩外傳十卷」が収録されている。
- 六 『述書記』や『博物志』の記述は張彥遠『歴代名畫記』卷四「後漢」に引用されている。
- 七 樓鑰『攻媿集』（臺灣商務印書館『四部叢刊初編』、一九七五年に収録）の「跋吉日圖」には「此圖古矣。意其出于唐人。是時六經未版行、本各不同、故滄浪錄舊文、而以今本證之。前有壯士驅羣醜、而前以待王射得悉率左右、以燕天子之意。然御者當居中以執轡、主將居左、必擇勇者爲右。此畫御者或在左或在右、殊未曉也」とある。
- 八 (6) 司馬紹「爾風七月圖」の作者について、唐の張彥遠『歴代名畫記』では「晉帝」としかないが、明の朱謀壘『畫史會要』では「明帝司馬氏、諱紹、字道幾、元帝長子」とする。ただし、そのように斷じる根據は『畫史會要』に記されていない。
- 九 『新唐書』卷五十七「藝文志」では開成年間とするが、『太平廣記』（人民文學出版社、一九五九年）卷二二三が引く『畫斷』や王應麟『困學紀聞』が引く『名賢畫錄』は大和年間のことだとする。
- 一〇 『毛詩草木蟲魚圖』に関する記載のうち、『新唐書』卷五十七「藝文志」には「毛詩草木蟲魚圖二十卷、開成中、文宗命集賢院修撰、并繪物象、學士楊嗣復、張次宗上之」とあり、圖を描いた人物、圖の詳細に関する言及はない。これに對し、『畫斷』（『太平廣記』卷二二三）

や『名賢畫錄』(『困學紀聞』卷三「詩」)にはより詳細な記述がある。より早い記載である『畫斷』には「唐程修己、其先冀州人……大和中、文宗好古重道、以晉明帝衛協畫毛詩圖草木鳥獸賢士忠臣之象不得其真、遂召修己圖之。皆據經定名、任士採拾、由是冠冕之製、生植之姿、遠無不審、幽無不顯矣」とある。

二 『毛詩』の巻数は、『漢書』の「藝文志」では二十九巻だが、『隋書』の「經籍志」以降は歴代二十巻となっている。

三 (Ⅱ)「毛詩圖」の作者陸探微については、その作品として本論で挙げた「毛詩新臺圖」もあったといい、あるいは同一の圖を指している可能性もある。

四 張彥遠撰、長廣敏雄訳註『歴代名畫記』(東洋文庫三〇一、平凡社、一九六三年)巻一「敘畫之源流」を参照した。

五 『宋史』卷三八八に傳が見える。

六 鄭玄『毛詩譜』は、『舊唐書』では二巻だが、『宋史』藝文志では三巻とある。

七 乾隆『福建通志』卷四十八(『景印文淵閣四庫全書』に収録)には「字體仁、永春州人。紹興十二年進士、授臺州判官……所著有易本例十二卷、詩話五卷。又有梅青傳、詩騷古賦雜著、古學并圖二卷、詩聲譜二卷、論語後傳十卷、皆行於世」とある。

八 楊甲『六經圖』の宋刊本は現存が確認されず、一般的には明の萬曆四十三年(一六一五)に吳繼仕が翻刻した乾道元年(一一六五)毛邦翰增補本が複数現存している。そこで、本論では中國首都圖書館所藏の『明熙春樓吳繼仕做宋刊本六經圖』影印本(學苑出版社、一九九八年)、國立公文書館所藏の吳繼仕刊『七經圖』(楊甲『六經圖』に「儀禮圖」を加えたものの)、四庫全書本の三種を参照した。

九 陳振孫『直齋書錄解題』卷三や『玉海』卷四一「紹興六經圖」が引く「中興書目」には、楊甲の字と出身地、そして「布衣」だったことしか記されていない。しかし、宋の陳思『兩宋名賢小集』卷三七四には「楊甲、字鼎卿、重慶昌州人。大觀時、遊京師頗有聲望。嘗仕於蜀、旋以事去官、寓居靈泉山中。有棣華館小集一卷」とやや詳しい傳が見える。一方、『四庫全書總目』は『成都文類』に依據して乾道二年(一一六六)の進士とするが、先に引いた南宋の諸書には進士に挙げられたという記載はない。恐らく、同姓同名の別人だろう。

一〇 南宋の版本を實見し、直接記録したのは『直齋書錄解題』が唯一の書目であり、後に明の萬曆年間に吳繼仕が家藏の宋本を翻刻するまで、諸書に記録が見えない。なお、乾隆帝勅撰『欽定天祿琳琅書目』巻一には、清代翻刻の『御題宋版六經圖』が吳繼仕翻刻の毛邦翰增補本とは異なるとあるが、『四庫全書』収録の『御題宋版六經圖』によると、「毛詩正變指南圖」について特に差異はない。

一〇 『輿地碑記目』卷四「昌州碑記」には「六經圖碑在郡學。郡人楊甲鼎卿所著也」とある。

二 苗昌言序の原文には「陳大夫爲撫之期年……既已創闢試院、以奉聖天子三年取士之制。又取六經圖、命泮宮職講肄者編類爲書、刊之於學、以教諸生」とある。

三 度正『性善堂稿』の「涪州教授陳厚由墓誌銘」には「(陳厚由)授昌州教授以歸、四方士子從講學者甚衆、學舍不能容。則請於州開貢院以館之。……乾道間昌元士人揚甲爲六經圖、頗便觀覽。好事者版行之、徧天下。厚由曰、此鄉先生之作、四方宜於此取正、而吾學無其書可乎。遂搜訪善本、重加校正、仍命工筆札善圖書者寫之、刻之石、以示學者」とあり、陳厚由の事績のなかに、陳森と同じく試院の開設と『六經圖』の刊刻を行ったことが記されている。

三三 『四庫全書』および『金華叢書』所収本を参照した。

三四 『宋元學案』卷六十「說齋學案」を参照した。

三五 『帝王經世圖譜』(嚴一萍編輯『百部叢書集成』九十五収録、藝文印書館、一九六八年所収)の胡鳳丹輯刊『金華叢書』の概要については同書収録の周必大序に見える。

三六 『詩經發題』(嚴一萍編輯『叢書集成三編』十九藝文印書館、一九七二年の胡宗楙『續金華叢書』所収の唐仲友『九經發題』に収録)には「至於六義四始、詩之綱維、別具圖說」とある。この點は、劉毓慶『歷代詩經著述考』先秦—元代卷の「六義四始圖說」條がすでに指摘している。

三七 『詩集傳名物鈔』(嚴一萍編輯『百部叢書集成』九十五収録、藝文印書館、一九六八年所収)の胡鳳丹輯刊『金華叢書』を参照。

三八 (5)、(6)は北京の中國國家圖書館所藏。この二種について、李致忠は『宋版書敘錄』(北京圖書館出版社、一九九四年)のなかで、その版式から建安書肆の刊、避諱より南宋孝宗の時のものと推測してる。現在、(7)、(8)は臺灣故宮博物院所藏。本研究では、(7)は國會圖書館所藏のマイクロフィルム「國會圖書館攝製北平圖書館善本書膠片」の『六經圖殘存二種』を、(8)は影印本『景印宋本纂圖互註毛詩』(故宮博物院、一九九四年)を参照した。阿部隆一『中華民國國立故宮博物院北平圖書館宋金元版解題』(『中國訪書志』所収、汲古書院、一九七六年)は、(7)、(8)はともに建安書肆の刊、避諱より(7)は南宋光宗以下には及ばない、(8)は南宋寧宗以後のものだと推測している。

三九 「纂圖互註本」は卷首に圖を附し、經書の内容を容易に暗記するための註釋が施された書物で、經書中の同一句や、同様の意を含む句を示した「重言」、「重意」の註釋が示されたものもある。この類の書物が經書の學習、特に科舉受験のため暗記などに供された「帖括之書」であったという指摘は、清代でも朱彝尊以降、諸家の解題に見える。本論では、朱彝尊『經義考』卷一一〇「纂圖互註毛詩」條、『欽定天祿琳琅書目』卷一「監本纂圖重言重意互註點校毛詩」條、陳鱣『經籍跋文』の「宋本毛詩跋」、傅增湘『藏園群書題記』卷一「監本纂圖重言重意互註點校毛詩跋」(陳鱣『經籍跋文』を引用)などを参照した。

四〇 本論で用いた版本については本章註釋(二八)を参照。同書は末尾には乾隆二十一年(一

七五六) 朱嘉勤の跋があり、自身の宋本收藏の経歴や書肆で『毛詩圖説』などの零葉百余葉を入手し装幀した経緯が記されている。

三二 (8)の別版は静嘉堂文庫所藏。『静嘉堂文庫宋元版圖録・解題篇』(汲古書院、一九九二年)に著録されている。(8)と別版は内容は全く同じだが、「禮」を「礼」とするなど互いに用いる字體が異なる箇所がある。

三三 『授經圖義例』は『詩纂圖』と『詩圖説』の書誌の出典を『文淵閣書目』としているが、前者は『文淵閣書目』に見えない。

三四 本論では顧廷龍等輯『續修四庫全書』第五十七冊に収録の影印および『静嘉堂文庫宋元版圖録・圖版篇』収録の『詩(集傳附錄纂疏)』収録の刊語を参照した。

三五 胡一桂の傳は『元史』卷一八九「儒學」に見える。

三六 『詩集傳名物鈔』は郭鵬點校『元代古籍集成』經部詩類(北京師範大學出版社、二〇一二年)および『四庫全書』(第七十六冊)本によった。

三七 清の姜炳璋『詩序補義』は豳風の末尾で「許氏豳風次序圖」「風」は「詩」の誤り)を引いており、圖譜の一種として扱っている。

三八 黃潛(一二七七〜一三五七)『黃文獻公集』卷八下「白雲許先生墓志銘」は「先生之學、卒以大顯於世。然則、程子之道得朱子而復明、朱子之道至先生益尊、先生之功大矣」とある。また、『元史』卷一八九の許謙傳には「何基、王柏及金履祥歿、其學猶未大顯。至謙而其道益著」とある。

三九 『四庫全書總目』卷十六「詩集傳名物鈔」條は「……至(王)柏所刪國風三十二篇、謙疑而未敢遽信。正足見其是非之公」と指摘している。

四〇 『詩集傳名物鈔』の至元重紀之五年(後至元五年・一三三九年)吳師道序による。

四一 例えば、「衛詩譜」では「朱子説詩與鄭不同、故不從鄭譜」とある。他にも同様の註釋が散見されるが、その理由には言及していない。

四二 顧炎武『日知録』卷三「四詩」による。このなかで顧炎武は『周禮』や『毛詩』鄭箋の説のほか、宋の程大昌が提起した「詩有南雅頌、無國風」という説(程大昌『考古編』収録の「詩論」)を引いており、許謙の説は引いていない。顧炎武は、直接的には程大昌の説を敷衍したのかもしれない。

四三 本論では静嘉堂文庫および北京大學圖書館所藏の元刊本、『四庫全書』本(第七十六冊)、國立公文書館所藏の嘉永三年和刻本、『元代古籍集成』整理校勘本(北京師範大學出版社、二〇一三年)を参照した。このうち、『四庫全書』本や和刻本には「諸國世次圖」と「作詩時世圖」が収録されておらず、版本によって収録状況が異なる。

四四 劉瑾の傳は李賢等撰『大明一統志』卷五十六(三秦出版社、一九九〇年)「吉安府」、朱彝

尊『經義考』卷一一「劉氏詩傳通釋瑾」條が引く『吉安府志』などに見える。

四四 李賢等撰『大明一統志』卷五十一「廣信府・盧天祥」の條には「至元中守信州。興學校、崇詩書、延儒生論理致。刻六經圖於石、立兩廡下」とある。盧天祥については、雍正『江西通志』（『四庫全書』所収）卷四〇「秩官」に元代の信州路總管とある。

四五 雍正『江西通志』卷十八「學校」の「廣信府儒學」條には「元至元二十一年、總管盧天祥修之、尋厄於火」とある。

四六 本論で参照した『詩集傳音釋』雙桂堂重刊本（北京中國國家圖書館所藏）巻首の圖解には「詩傳圖」とあるが、靜嘉堂文庫藏の明初刊本では「詩圖」となっている。

四七 『詩集傳音釋』の雙桂堂重刊本には、特定の書名はなく「詩朱熹集傳」とだけある。後世朱彝尊『經義考』、『鐵琴銅劍樓藏書目錄』などで『詩集傳音釋』と稱されており、本論ではこれに従った。なお、第一巻巻首に「東陽許謙名物鈔音釋、後學廬陵羅復纂輯」とあることから、書名は『詩集傳音釋纂輯』や『詩集傳名物鈔音釋纂輯』などともいう。

四八 『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の凡例には「廬陵羅君中行、博學而善記」とあり、明の黃虞稷『千頃堂書目』には「字中行、廬陵人」とある。また、朱彝尊『經義考』巻一百九十一「李氏琪春秋王霸列國世紀編」が引く李琪自序には「今廬陵羅中行、以家藏善本梓而傳之」と見える。

四九 宗文精舎刊刻の朱熹『詩集傳』は足利學校藏本を参照した。同書の刊記には「書傳舊有鄒氏音釋、詩傳獨闕。讀者不無遺憾。本堂今以許益之（許謙）詩名物鈔内音義纂釋爲之、仍間以何伯善（何淑）音釋附焉、俾二書經傳有音釋。仍各纂圖于前、以備參考」とある。

五〇 表四には収録しなかった圖譜が三種ある。まず、復旦大學圖書館所藏の『採輯名家批評詩經刪補』は明の徐奮鵬著、楊居廣編次、魏浣初、鐘惺同較とあり、編纂關係者だけを見れば明代の書物となる。しかし、書物の體裁は清代のものであり、誤字が多いことから、後世徐奮鵬などに假託して刊刻されたものかと考えられる。同書の巻首には題名の無い『詩經』圖譜が附されている。その内容を見ると、元代「六經圖碑」の「詩經圖」や明代の「詩經大全圖」を折衷したようだが、それまでの『詩經』圖譜には見えない解釋も記している。この點、興味深い圖譜だが、明代の書物と確定できない。また、萬曆三十一年（一六〇三）の朱載堉『鄉飲詩樂譜』（『樂律全書』収録）には『禮記』などの記載を元に復元した『詩經』の樂譜があるが、これは『詩經』の學習や解釋とは關聯性のない譜である。このほか、唐文獻（一五四九〜一六〇五）の『詳訓精講新意備題標圖詩經會達天機妙發』（尊經閣文庫所藏）は、書名から圖譜を収録していると推測されるが未見である。以上の理由により、本論ではこの三種の書物を取り上げなかった。

五一 「詩經大全圖」の名稱は版本によって「詩傳圖」や「詩圖」など異なるが、ここでは「詩

經大全圖」に統一する。

五二 明・萬曆四十二年（一六一四）の盧謙、章達編『五經圖』（國立公文書館所藏、經〇三七一〇〇〇九）の李維楨序には「國家頒五經大全、學宮皆有圖」とある。

五三 『詩經大全』の傳本は多く、筆者が實見した版本のうち、刊刻年代の明らかなものには、永樂年間の刻本、成化七年刊本、嘉靖元年の建寧書戶劉輝刻本、嘉靖二十七年宗文堂刻本刊本があり、時期不明ながら刊刻者が明らかなものには德壽堂刻本、詩瘦堂刻本、樹駿堂刊本などがある。本論では宮内庁書陵部所藏の永樂年間刻本（四五〇函六號）、成化七年刊本は國立公文書館藏（江二七五―二五二）を参照した。その他、建寧書戶劉輝刻本は浙江圖書館、嘉靖二十七年宗文堂刻本は吉林圖書館や南京圖書館、德壽堂刻本は宮城縣圖書館伊達文庫（一〇三〇五）、樹駿堂刊本は東大総合圖書館、詩瘦堂刻本は北京大學所藏であり、各圖書館の書目によった。

五四 『葉太史參補古今大方詩經大全』は傳本が多く、年代、刊刻者の明確なものには萬曆三十三年・明芝城建邑書林余氏刻本がある。本論ではこの余氏刻本（國立公文書館所藏、別〇〇三―〇〇〇一）および早稲田大學圖書館藏本（貴重書庫イ二―〇〇〇一六）を参照した。『詩經註疏大全合纂』は北京大學圖書館藏明崇禎刻本影印（『四庫全書存目叢書』第七十冊収録）を、『詩經疏義』は靜嘉堂文庫所藏明刊本（一函二二架）を参照した。

五五 内閣文庫藏の淺見綱齊校訂本（二七三―一八五）を参照した。『中國古籍善本書目』經部（上海古籍出版社、一九八五年）によると、正統年間の司禮監刊本は、中國では三十一部の所藏がある。また、同書目には重慶市圖書館に明初刻本『詩集傳』と「詩圖」があるというが筆者は未見。なお、司禮監刊本の序には「聖旨五經四書經註書坊刊本字有差譌。恁司禮監將易程朱傳……詩朱熹集傳……都謄寫的本、重新刊印、便於觀覽、欽此」とあるだけで底本については述べていない。

五六 章達の序には刊刻の経緯について「余始蒞任……乃以次繕緝學宮、購子史諸書、皮之閣上、令有志者就中繙閱。而侍御芳菱盧公、所謂邑聞人也。嘉惠之意、較余倍焉。自永豐令歸、攜信州學宮五經圖石本以授余、且曰、公幸割俸鑄之、以示承學。余展玩、不忍釋手……亟命工刻石、樹之學宮。已又念摹搨之難、不及行遠、更損爲卷帙、屬所知程敬敷刻於金陵」とある。章達については、『五經圖』の序に「加陞無爲州知州仍掌廬江縣事楚人章達」とある以外は不詳。盧謙は字が吉甫、萬曆三十二年の進士で永豊知縣から監察御史、江西右參政を歴任し、後に病を得て郷里にもどった。崇禎八年、張獻忠の反亂軍により廬江が陥落した際、服従しなかったため殺された。『明史』卷二九二「忠義」に傳が見える。

五七 『七經圖』については、内閣文庫所藏本（經〇三七―〇〇一〇）、中國首都圖書館所藏『六經圖』影印本（學苑出版社、一九九八年）、『四庫全書』収録本（第一八三冊）を参照した。

中國首都圖書館所藏本は、『七經圖』に見える『儀禮』の圖譜や焦竑や吳繼仕の序文がない。

『七經圖』の吳繼仕「七經圖叙」には南宋の時に『儀禮』の圖がなく朱熹が憂え楊復が編纂したこと、そしてその意をうけて『儀禮』の圖譜を収録し『七經圖』としたことが記されている。これらの状況から、吳繼仕が刊刻した本来のものは『七經圖』であり、『六經圖』は後の人が楊甲『六經圖』の舊に復するために改刻したのではないかと推測される。

五八 吳繼仕の字や出身地、その著書『音聲紀元』六卷については『四庫全書總目』卷三十四「七經圖」條に見える。

五九 『直齋書錄解題』卷三「六經圖」には「昌州布衣楊甲鼎卿所撰、撫州教授毛邦翰復增補之：詩四十七、今同」とあり、毛邦翰増補本の「毛詩正變指南圖」収録の圖は楊甲のものと同数であったことがわかる。これに對して、吳繼仕『七經圖』の「毛詩正變指南圖」は四十五圖である。

六〇 『明史』卷二二一の衛承芳傳による。

六一 郭若維の字は『六經圖』自序に、經歷は雍正『浙江通志』（『景印文淵閣四庫全書』所収）卷一百四十に記載がある。

六二 郭若維翻刻の『六經圖』は國立公文書館所藏本（經〇三七—〇〇八）を参照した。「重刻六經圖跋」には「我朝經學日明、古書迭見。于是、新都吳氏繼仕者首梓於家、冢宰衛公承芳者復梓于署。要皆黨枯護朽、不無承譌襲舛、欲使按圖詮理觀象、忘言抑又難矣。識者憾焉。余家舊藏宋本、近勘翻刻。其中異同雜見、因而補闕正訛、授之剞劂」とある。

六三 復旦大學圖書館所藏本（〇三九六）を参照した。

六四 『毛詩正變指南圖』陳重光自序による。

六五 『四庫全書總目』には「是書爲明末陳重光所刻、前有李雯序、謂其書爲宋人未竟之本、故詳於大而畧於小。……其義例淺陋、不似古人著作、且亦別無佐證。疑卽重光自輯而託之舊本也」とある。

六六 『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』（國立公文書館所藏、二七三—〇二四四）の編纂に關わった人々のうち、經歷が明らかなのは顧起元だけである。顧起元の傳は『江南通志』卷一六三「人物志」などに見える。

六七 國家圖書館藏本（徐乃昌舊藏一三〇七）によった。

六八 清の雍正『山西通史』（『四庫全書』所収）卷八十五「名宦」には「胡賓、字汝觀、光州人。嘉靖乙未進士。性莊重、立朝無所依附。庚戌由太僕寺丞擢山西僉事。會當防秋急詣繁峙、激厲將士、督修城堡、嚴守備。壬子聞母喪、即日奔歸。後陞山西副使、未至任疾卒」とある。なお、胡賓が進士に擧げられた年について雍正『河南通志』（『四庫全書』所収）卷四十五「選舉」にも嘉靖乙未（十四年・一五三五年）と記されるが、『千頃堂書目』卷三には嘉

靖壬辰（十一年・一五三二年）とある。

六九 『詩樂圖譜』は国立公文書館所蔵の嘉靖十五年國子監刊本（経〇一五—〇〇〇四）によつた。呂柟、字は仲木、号は涇野、高陵（現在の陝西省西安市）の人。正徳三年（一五〇八）の進士であり、官は南京禮部右侍郎に至つた。『明史』（中華書局、一九七四年）卷二八二に傳が見える。

七〇 國會圖書館所蔵の「國會圖書館攝製北平圖書館善本書膠片」（YD七五—二三八）による。原本は臺灣故宮博物院所蔵。現存するのは卷一、周南十一篇、召南十四篇、邶風十九篇である。邶風の最後に胡明勗の按語があることから、邶風までが卷一だったようである。ただし、マイクロフィルムには「殘存八卷」とある。

七一 雍正『湖廣通志』卷五十二が引く『分省人物考』による。

七二 『詩經集成圖說』は殘卷であるため、全體の内容は見られないが、時文を引用したことは「立意」に明示されている。

七三 本論では吉林省圖書館藏明末刻本影印『四庫全書存目叢書』經部・第六四册收録』によつた。

七四 陳廣宏『鍾惺年譜』（復旦大學出版社、一九九三年）の「傳略」には、鄒漪『啟禎野乘』卷七の「鍾學憲傳」にある「公書既行於世、諸評斷小語皆布流海内、竊附者或偽託以傳、然而莫能私焉」という記載を引いた上で鍾惺の評選の著作が世間で人氣を博したため、その名に託した書物が多かつたと述べている。また、李先耕『鍾惺著述考』（黑龍江大學出版社、二〇〇八年）四十頁は國家圖書館所蔵『詩經圖史合攷』の擁萬堂刊本を例に、この書肆が鍾惺の名義を用いた書物を多く刊刻していたことを指摘している。

七五 『四庫全書總目』卷十七は『詩經圖史合攷』を批判するなかでその特徴を「是書雜考詩之名物典故、亦間繪圖故稱圖史合攷。然名雖釋經、實則隸事。如周南桃夭篇首引本草綱目載桃仁去瘀血桃梟療中惡腹痛一條…（中略）…次引列仙傳綏山桃一條、其文遂畢於經義一字無關。全書所載皆類於此、不知其何所取也」と概括している。

七六 本論では『四庫全書』（經部第八十三册）収録本を参照した。『欽定詩經傳說彙纂』の頒布と普及について、『欽定大清會典則例』卷六十七「學校」の乾隆元年の命として「聖祖仁皇帝御纂性理精義、書、詩、春秋三經傳說彙纂、每省每書各發二部、一部令其重刊流布、一部以備校對」、『清史稿』卷二十二「穆宗本紀・同治六年五月」條に「諭廣購書籍、並重刊御纂欽定經史、頒發各學」とあるなど、清代では繰り返し刊刻された。

七七 清初から乾隆年間に至るまでの勅撰經書の編纂經過は江藩『國朝漢學師承記』卷一に述べられている。

七八 『欽定詩經傳說彙纂』凡例の第四條には「詩有譜、有圖。譜以臚諸國世次、而考其時代、

圖以存三代以上制作之舊。古人左圖右書、其遺意也。今略存之。其中有辨證者、則附著於下」とある。

七九 本論では北京大學圖書館所藏本（NC／〇四三五／八四〇九）及び『四庫全書存目叢書』（經部第八十冊）収録本を用いた。

八〇 『詩經正解』葛筠の序および『四庫全書總目』卷十八『詩經正解』による。

八一 復旦大學圖書館所藏の高燮舊藏本（五七五五）を用いた。

八二 『詩經集成』自序には「余纂四書集成、既行、謬爲海内同志所許可。于是、四方好學者復欲得余諸經講義而觀之」とあるほか、封面の宣傳文には「先生四書集成一編風行海内。本坊以先生專智毛詩、復懇覓纂。是書一一傳註爲指歸、不襲箋疏之參錯、有疑必析」とある。

八三 『詩經集成』自序には「余家世習毛詩、而于傳註恪遵朱子。況今所懸諸學宮學士所習爲舉子業者」とある。『四庫全書總目』卷十八「詩經集成」條もその體裁を「大旨爲揣摩場屋之用」としている。

八四 本論では北京大學圖書館所藏の道光十四年・晉祁書業堂刊本（X／〇九三二／〇〇四一・

二）を参照した。

八五 高朝環自序には「上年、坊間請總四書融註、次第成五經、而以先以詩」とある。

八六 北京大學圖書館所藏の道光十四年刊本によった。

八七 徐沂は『明史』卷二六七に傳が見え、長洲（現在の江蘇省蘇州市）の人、崇禎元年（一六二八）の進士で、清によって南京、蘇州、常州が相次いで陥落すると虎丘で自害した。黄超は『江南通志』（景印文淵閣四庫全書）所収）卷一六五「人物志・文苑」に傳が見え、上元（現在の南京市）の人、康熙二十四年（一六八四）の進士で廣く文名を知られたという。『徐九一先生訂五經大全』と『實際飛先生校訂五經大全』はともに國立公文書館所藏（經〇二九一〇〇〇二および經〇三〇一〇〇〇一）。

八八 江爲龍の經歷は『四庫全書總目』や周中孚『鄭堂讀書記』（黄曙輝註釋、上海書店出版

社、二〇〇九年）卷二『朱子六經圖』條、光緒重脩『安徽通志』卷一百八十などにみえ、李

麟『虬峰文集』卷十六「筠圃江先生傳」（江爲龍の父の傳）にも言及がある。

八九 『四庫全書存目叢書』第一五二冊所収の南京大學圖書館藏清康熙刻影印によった、

九〇 江爲龍の幼少期からの學習と考證については、自序に「余自童年以來、每遇經書疑義、輒博覽考核、以求其故、必使瞭然胸中。而後已幾欲廣搜備攷、匯爲成書、以告來學。乃始束縛於貼括家言、已而挾策走四方、通籍後復映掌於簿書。歲月悠悠虛願莫酬」とあり、『朱子六經圖』入手の經過は「（康熙）戊子小春、豫章廣之永豐周生子用爲余乙酉分校所得士、過從宜陽官舍、攜朱子六經圖以贈。披閱之下見其繪象圖形、窮原竟委、凡經學之淵源繁曠、莫不燦如指掌」とある。また、翻刻に際して圖譜の順序を整理したことは葉涵雲の序に「圖舊勒石於信州領宮、以摹印維難致。其傳不廣、且碑碣參伍位置錯綜、加以裝潢家割裂倒亂、不便觀

覽。余同表兄硯崖江先生彙次成帙、條分縷析、因類屬編、更益以四書圖、共得十六卷」とある。

九一 復旦大學圖書館所藏本によった。

九二 清の『江南通志』卷一二四、『陝西通志』卷二三、『湖廣通志』卷二十五（すべて『四庫全書』所収）などに見える。

九三 自序には「乾道初、知撫州陳森屬教授毛邦翰等爲之（楊甲『六經圖』）也。是六藝之津梁窮經之指南也。陳撫州之書鮮行於世。明計部大夫汝南方公刻而嘉惠後學、詞臣江寧顧先生序而傳之。然其書長尺有五、廣二尺餘、若置諸几之小者則溢出於外、攜以遊則衍篋、不能容。：今又以書之弗良於讀也、斂其式、以便於人」とある。

九四 本論では京都大學文學部圖書館所藏の道光十一年張洪範刻本（桑原文庫A / IXa / 八）および中國國家圖書館所藏の道光二十五年汪根敬刻本によった。雍正元年の版本は未見。

九五 自序には「康熙辛丑歲、陽翟有鬻故書者、購得六經圖六卷。展視之、回憶少時所受茫如墜煙霧者」や「信州石本、廬江木本流布絕少、鋟而行之、誠窮經者之一助也」とある。

九六 『四庫全書存目叢書』一五二冊所収の遼寧省圖書館藏清雍正二年刊本影印によった。

九七 『四庫全書存目叢書』所収の北京國家圖書館藏乾隆五年刻本影印を用いた。

九八 國立公文書館所藏本（二七六—〇〇〇一および二七六—〇〇〇三）、北京大學圖書館所藏本によった。

九九 『四庫全書總目』卷七十七「鄭之僑驚湖講學會編十二卷」條に經歷が見える。

一〇〇 鄭之僑の序には「諸生若信若疑、問出所藏六經圖對叩……披閱梗概、編次工密、位置井然。先儒表章聖經、厥功鉅哉。迺細按、其奇偶之分、日星之度……以迄鳥獸草木之名、舛錯頗多。不知者竟以雜偽誣其真本」や「爰公餘、挑燈按規求矩、手自摹畫。於碑碣之訛者正之、其殘缺者補之、參益諸儒集說。歷數寒暑而圖成。以質諸生、諸生以爲裨於初學、請付開雕」とある。

一〇一 『四庫全書存目叢書』所収の南京圖書館藏乾隆三十七年刻本影印を用いた。

一〇二 劉希周の序には「朝廷開孝友方正之科、大吏廉其名以薦、卒以孝養不赴徵」や「先生以名諸生、久困場屋、顧不屑屑舉子業」とある。「孝友方正之科」は『清史稿』卷一百九「選舉志」にある「孝廉方正科」のことだろう。また、羅鶴齡の序には「泰庠名士」とある。

一〇三 陳夢得の序には「楊公輝斗篤學嗜古、家中縹緗萬卷、而古刻圖譜尤多。其所藏六經圖、信州真本也」や「公常念舉業之家所好、雖篤而每苦其無力。是以多隘於見聞。因願纂輯諸圖、專刻成書」とあり、陳士誠の序には「家藏六經圖真本世罕有傳、特以代久年湮、不無殘缺。先生加意補苴、參以諸家論說、又折中于御纂諸經、集爲九經圖。未脫稿而賁志以歿」、劉希周の序には「積歲窮經、并留意于圖考、收錄是書、以信州圖爲本、其間闕失、補以先儒之說。于御纂諸經所有者、則恪遵焉」とある。

一〇四 梁戰、郭群一編著『歷代藏書家辭典』（陝西人民出版社、一九九一年）を参照した。

一〇五 蔣光煦「校刻詩集傳音釋札記」による。蔣光煦翻刻本は、光緒乙丑戸部刊影印本（中國書店）によった。

一〇六 『詩經圖譜慧解』影印本（江蘇廣陵古籍刻印社、一九九一年）によった。

一〇七 盧錦堂「詩情書意——『詩經圖譜慧解』國家圖書館古籍善本雜詠之五」（國家圖書館（臺灣）編『全國新書資訊月刊』二〇一〇年十月号）は、『詩經圖譜慧解』の構成や、同書中の記載から現存する稿本が三度の修訂を経たものであること、同書が國家圖書館の前身である中央圖書館に購入、收藏される過程で鄭振鐸の盡力があつたことを紹介している。

一〇八 「後愚詩說」には、「鄭箋毛傳僅屬註疏。自前明王唐瞿薛、皆以詩學名家、說詩者遂不下數百種。而鍾伯敬、魏仲初二先生之說詩、尤出意表、他如陳行之、徐玄扈、鄒嶧山、徐敬弦、唐士雅諸公、于詩亦多探討。愚因備采群言、思得風人真趣」とある。また、同書が参照、引用した書目「詩義參詳」に列挙されているのは「子夏大小序」から明の凌濛初の『聖門傳詩嫡冢』までの書物であり、清代の書物は含まれていない。

一〇九 北京中國國家圖書館所藏の乾隆三十六年刻本および宮城縣圖書館所藏の文化五年翻刻本（小一三三・三〇・一・二）を用いた。

一一〇 徐鼎の傳は馮金伯『墨香居畫識』卷六や蔣寶齡『墨林今話』卷三に見える。『墨香居畫識』は『中國歷代畫史匯編』第四卷（天津古籍出版社、一九九七年）、『墨林今話』は周駿富輯『清代傳記叢刊』藝林類九（明文書局、一九八五年）を参照した。

一一一 『毛詩名物圖說』の自序には「余丁束髮時、兄授以毛詩三百篇、輒遇耳目聞見之物、欣然有所得。乃欲博考名物、搜羅典籍、往來書肆不憚煩、不揆禱味、編而輯之、閱二十年矣。尤恐於格致多識之說、未精詳也。凡釣叟、邨農、樵夫、獵戶、下至輿臺阜隸有所聞、必加試驗而後圖寫」とある。

一一二 皮錫瑞『經學歷史』、錢穆『國學概論』（商務印書館、一九九七年）による。

一一三 一例として江藩『國朝經師經義目錄』（『漢學師承記』中華書局、一九八三年に収録）は『詩經』考證の代表的著作として惠周惕『詩說』、戴震『毛鄭詩考正』、顧炎武『詩本音』、錢坫『詩音表』を挙げている。このほか張之洞『書目答問』卷一「經部・詩」には陳奐『毛詩傳疏』、馬瑞辰『毛詩傳箋通釋』、胡承珙『毛詩後劄』、陳啟源『毛詩稽古編』、段玉裁『詩經小學』、丁晏『毛鄭詩釋』、毛奇齡『續詩傳鳥名』、焦循『陸璣疏考證』など清代の著述四十種ほどを挙げている。

一一四 『續修四庫全書』（經部第七十六冊）収録本（復旦大學圖書館所藏同治三年鼎吉堂刻本）を参照した。同書の「詩地理攷略題辭」は咸豐三年（一八五三）に記されており、この年には脱稿していたと考えられるが、「凡例」は刊刻年と同じく同治三年に記されているため、最終的

に完成したのは同治三年であろう。

二五 『續修四庫全書』(第七十三冊) 収録本(北京大學圖書館所藏同治十年隴東分署刻本)および李先耕點校、方玉潤撰『詩經原始』上下(中華書局、一九八六年)を参照した。

二六 李春龍審定、江燕・文元明・王珏點校『新纂雲南通志』(雲南人民出版社、二〇〇七年) 卷二〇〇「列傳」(第八冊)の「方玉潤傳」を参照した。

二七 『詩經原始』自序には「迨秦火既烈、而偽序始出、託名子夏、又曰孔子。唐以前尚無異議、宋以後始有疑者。歐陽氏(歐陽脩)、鄭氏(鄭樵)駁之於前、朱晦翁(朱熹)辯之於後、而其學遂微……自漢迄今、未有大詁、徒懸疑案於兩間、而無一人焉起而正之、不大可痛而可惜哉……最後得姚氏際恒通論一書讀之、亦既繁徵遠引、辯論於序、傳二者之間、頗有領悟、十得二三矣。而剖抉未精、立論未允、識微力淺、義少辯多、亦不足以鍼盲而起廢。乃不揣固陋、反覆涵泳、參論其間、務求得古人作詩本意而止、不顧序、不顧傳、亦不顧論、唯其是者從而非者正、名之曰原始」とある。また「凡例」には「讀書貴有特識、說詩務持正論、然非蒼萃諸家、辨其得失、不足以折衷一是。自來說詩、唐以前悉遵古序、宋以後獨宗朱傳、近日又將反而趨序、均兩失道也。故姚氏起而論之、其排傳也、尤甚於排序、而其所論、又未能盡與古合。是以編中所論、只以三家爲重、三家定則羣喙息。其或眾說有互相發明、足以起予者、亦旁及之」とある。

二八 北京大學圖書館所藏本(X〇〇九三・二二二五四〇・二三〇二)によった。

二九 北京大學圖書館所藏本(X〇〇九三・二二二五四〇・二二)によった。錦章圖書局の設立年代については、上海出版志編纂委員會編『上海出版志』(上海社會科學院出版社、二〇〇〇年)を参照した。

三〇 岡元鳳の傳については竹岡友三『醫家人名辭書』(芳賀登、杉本つとむ等編『日本人物情報大系』藝編一四に収録)を参照した。

三一 北京大學所藏本(X〇〇九三・八七七・七一)を参照した。

三二 上海積山書局版、掃葉山房版はいずれも上海圖書館に複製所藏されている。

三三 北京中國國家圖書館所藏本によった。

三四 『御纂繪圖詩經詩意折中』、上海天寶書局『監本詩經』はともに北京大學圖書館所藏。

第二章 『詩經』圖譜の形成と多様化

前章で指摘したように、南宋以降の『詩經』圖譜の多くは、楊甲の「毛詩正變指南圖」が原型であったと考えられる。また、「毛詩正變指南圖」には歐陽脩『鄭氏詩譜』の影響が見られる。このため、本章では『鄭氏詩譜』と「毛詩正變指南圖」の編纂を『詩經』圖譜の形成、そして「毛詩正變指南圖」の内容をもとに編纂されたと推測される南宋、元代の『詩經』圖譜の編纂を多様化の時期と位置づけ、各圖譜の内容の共通点や異同から、『詩經』圖譜の形成と改編の経緯を考察する。

第一節 宋代における『詩經』圖譜の形成

第一項 歐陽脩による鄭玄『毛詩譜』の輯佚

後漢の鄭玄が編纂した『毛詩譜』は、「風」「雅」の各詩と、これらの詩が作られたとされる時代の周王、諸侯の名稱を對照させた一覽表である¹⁾。『毛詩譜』が示す作成年代は、各詩篇の背景にあると考えられた意義と、これより演繹される「正變」の問題を解釋する上で基本的な情報である。個々の詩篇の解釋は、各詩篇の作成年代をどのように結論づけるかによって全く異なることになる。このため、鄭玄は自身の『毛詩』解釋を示すために『史記』の年表と『春秋』の記載によって『毛詩譜』を編纂した²⁾。

『毛詩譜』は、北宋の時にはほとんど伝わっていなかった。日頃より『毛詩譜』を探し求めていた歐陽脩（一〇〇七～一〇七二）は慶曆四年（一〇四四）、絳州（現在の山西省運城市）で入手したが、首尾は失われ誤字、錯簡が多かったため、『春秋』や『史記』の本紀及び世家年表、「毛鄭之說」をもとに自らが編纂していた『詩圖』十四篇（すでに散佚）や孔穎達の疏などによって二百七文字を補い、八百八十三文字を修訂して『鄭氏詩譜』とした。以上の経過は同書に附された「詩譜補亡後序」に記されている。このように、現在傳わる『鄭氏詩譜』の内容は、歐陽脩が輯佚、校訂したものである。

南宋以降には『鄭氏詩譜』を引用した『詩經』註釋書があることから、『鄭氏詩譜』は現存する早期の『詩經』圖譜というだけでなく、南宋以後、一般に廣く参照された圖譜としても、ほぼ最初のものであった。

第二項 楊甲「毛詩正變指南圖」の編纂と構成

「毛詩正變指南圖」は紹興年間（一一三一～一一六二）、昌元（現在の四川重慶市）の楊甲が編纂した『六經圖』中の圖譜である。南宋の中後期になると『六經圖』は盛ん

に刊刻されて良劣様々な版本が存在し、石碑にも刻まれていたが、これらの版本や石碑はほとんど散佚した。唯一、早期の様子を伝えるのは、南宋の毛邦翰等が乾道元年（一一六五）に増補した版を明の萬曆四十三年（一六一五）に吳繼仕が翻刻したものである。吳繼仕本は「摹刻」と稱しているが、實際は明朝體を用いており、宋代の記載にある「毛詩正變指南圖」よりも圖が二つ少ないなど、必ずしも毛邦翰増補本の様子を完全に傳えているわけではない。しかし、『直齊書錄解題』によれば、毛邦翰等の増補は「毛詩正變指南圖」に及んでいなかった。現存する吳繼仕本は、翻刻であり圖が少ないという先の二點を除けば、楊甲が編纂した當時の様子を概ね傳えていると考えられる。

吳繼仕本によると、「毛詩正變指南圖」が収録する圖譜は、次の表七に示した二十八圖ある。

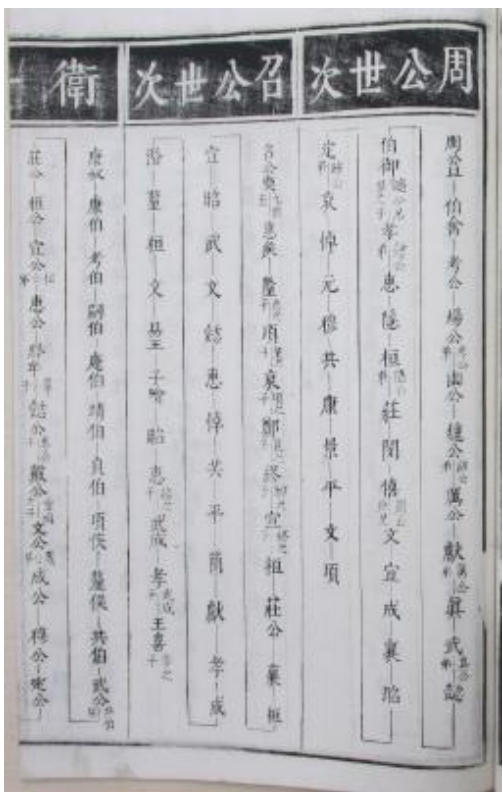
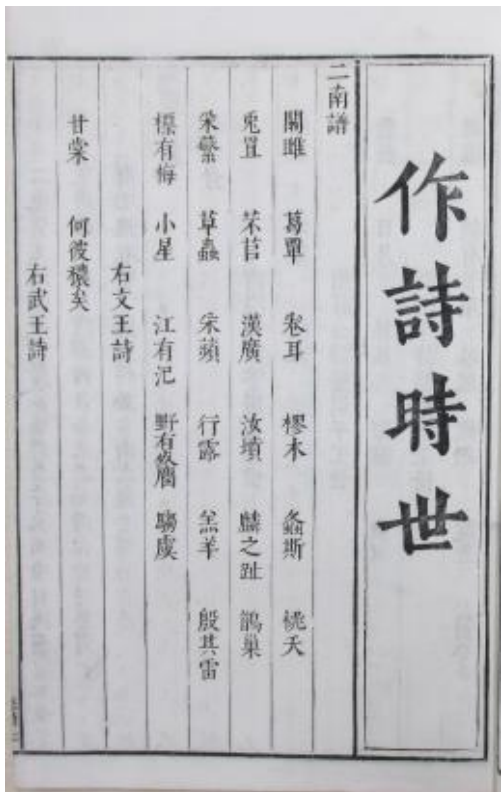
表七、「毛詩正變指南圖」の収録項目

名	a24 釋衣服制	圖	a20 斯干考室	圖	a15 載芟藉田	壺氏圖	a10 齊國風挈	譜	a5 十五國風	a1 詩篇名
名	a25 釋車馬器	戎圖	a21 秦國風小	圖	a16 時邁巡狩	公田圖	a11 大田雨我	地理圖	a6 十五國風	a2 作詩時世
	a26 釋禮樂器名		a22 商頌王畿圖		a17 我將明堂圖	千圖	a12 甫田歲取十		a7 日居月諸圖	a3 周、召、衛、齊、鄒、曹、陳、晉、秦、宋世次
名	a27 釋兵農器	蟲、魚、馬名	a23 釋草、木、菜、穀、鳥、獸	圖	a18 清廟閟宮		a13 百夫之田	陽圖	a8 公劉相陰	
圖	a28 四詩傳授			圖	a19 辟雍泮宮		a14 萬夫之田	景圖	a9 楚丘揆日	a4 族譜

「毛詩正變指南圖」は「譜」と「圖」をととも収録している^{三〇}。「譜」には『詩經』詩篇の名稱、詩篇の作成時期、王侯の家系や登場人物の血縁關係、動植物や衣冠、祭器、兵器などの名稱、魯、齊、韓、毛四家の傳授關係など十圖ある（a1～a5およびa23～a28）。これに對して、「圖」は地理、天文、計測、漏刻、土地制度、天子巡幸の行程、建築、車

馬など十八圖ある。「毛詩正變指南圖」は「圖」と題されているが、全體の三割以上は「譜」である（本頁の圖十九）。

圖十九、「毛詩正變指南圖」の「譜」の例



『六經圖』には楊甲が何を参照し、どのように編纂したのか、その経緯は一切記されていない。しかし、圖譜の一部には典據が示されており、楊甲が用いた資料の一端がうかがえる。例えば、「齊國風挈壺氏圖」(a10)には、「唐制呂才定」と「今制燕肅定」と題する二つの圖がある(次頁の圖二十)。この註には「今因舊圖取唐之呂才、今之燕肅所制、列之于圖」と記されており、唐の呂才『呂才刻漏經』一卷と北宋の燕肅『蓮花漏法』一卷に依據したことが示されている四。

圖二十、「毛詩正變指南圖」の「齊國風擊壺氏圖」

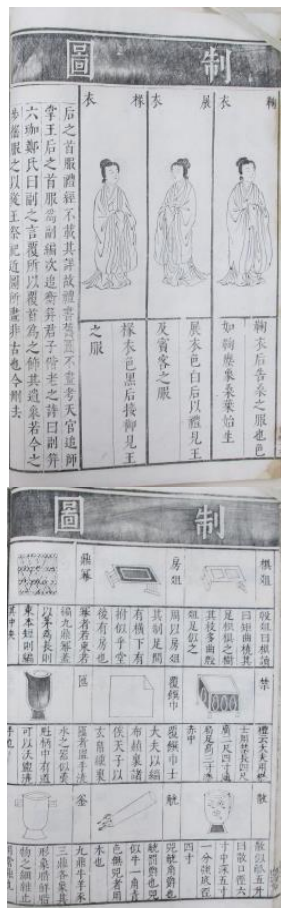
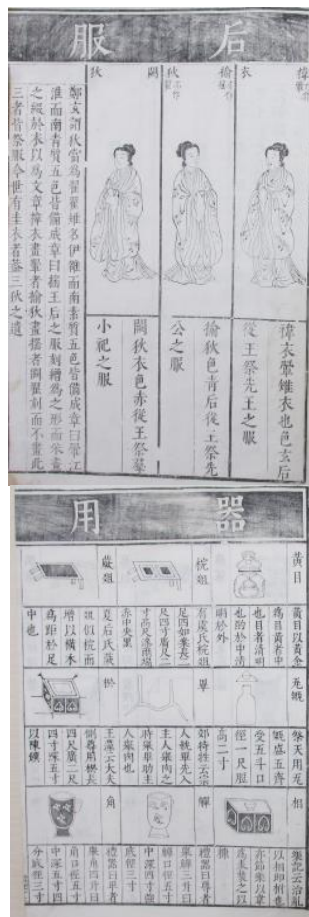


また、衣冠、車馬、祭器や兵器などの譜である「釋衣服制名」「釋車馬器名」「釋禮樂器名」「釋兵農器名」(a24～a27)の末尾には、「已上形制並見二禮圖」とある。つまり、『六經圖』の「周禮文物大全圖」や「禮記制度示掌圖」のほうに該当する圖を収録しているため、「毛詩正變指南圖」では圖を省略したのである。「周禮文物大全圖」や「禮記制度示掌圖」には北宋の聶崇義『三禮圖』や陳祥道『禮書』と考えられる禮圖が採録されており、楊甲はこれらの書物も参照したのだろう(次頁の圖二十一)五。

さらに、「十五國風譜」(a5)は『鄭氏詩譜』と同じ内容の圖である(次頁の圖二十二)。しかし、『鄭氏詩譜』が「風」「雅」「頌」各項目の中で歴代の周王ごとに詩の篇名を列挙して分類しているのに對して、「十五國風譜」は國風の詩に限って詩の篇數のみを列挙しており、兩圖の體裁は異なる。「十五國風譜」の註釋には「歐譜」を参照したことが明記してあり、末尾に附された「右自文王至頃王凡二十世、其可考者陳齊衛晉曹鄭魏、

此變風之先後也」の一文は、歐陽脩「詩圖總序」の抜粹である。このように、楊甲は歐陽脩補訂『鄭氏詩譜』も参照していた。

圖二十一、楊甲『六經圖』の「周禮文物大全圖」(上)と「禮記制度示掌圖」(下)



圖二十二、楊甲『六經圖』の「十五國風譜」

十五國風譜	
文王詩三十七篇	時一國有詩
武王詩十篇	時亦無詩
成王詩四十九篇	時一國有詩
幽王詩七篇	時一國有詩
康王詩	時亦無詩
昭王詩	時一國有詩
穆王詩	時一國有詩
共王之詩	時一國有詩
宣王之詩	時一國有詩
幽王之詩	時一國有詩
厲王之詩	時一國有詩
周王詩六篇	時一國有詩
衛風四篇	時一國有詩
邶風七篇	時一國有詩
鄘風七篇	時一國有詩
齊風六篇	時一國有詩
魯風六篇	時一國有詩
魏風六篇	時一國有詩
唐風六篇	時一國有詩
秦風六篇	時一國有詩
豳風六篇	時一國有詩
小雅三十一篇	時一國有詩
大雅三十一篇	時一國有詩
周頌三十一篇	時一國有詩

風譜	
桓王詩三篇	時一國有詩
莊王詩三篇	時一國有詩
景王詩三篇	時一國有詩
靈王詩三篇	時一國有詩
獻王詩三篇	時一國有詩
定王詩三篇	時一國有詩
哀王詩三篇	時一國有詩
思王詩三篇	時一國有詩
平王詩三篇	時一國有詩
周王以下無詩	時一國有詩

それでは、楊甲が出典を明示していない箇所はどうだろうか。これまで調査した限り、わずかながら楊甲が獨自に作成した箇所とは言いい切れない箇所もある。一例を挙げれば、圖では「我將明堂圖」(a17)は聶崇義『三禮圖』の「明堂圖」に、「四詩傳授圖」(a28)は現在傳わる陸璣の『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』末尾に同様のものが見える^六。また、圖に對應する解説の中にも、他書を参照したらしき箇所がある。「時邁巡狩圖」(a16)の解説の前半は「巡狩」について「時邁」詩小序の「鄭箋」、「正義」に見えるが、後半の「時邁」詩の背景は歐陽脩『詩本義』に見える^七。

「時邁者、是武王滅紂、已定天下、以時巡守、而其臣作詩、頌美其事、以爲告祭柴望之樂歌也」

(歐陽脩『詩本義』卷十二「時邁」本義)

「王者以時巡行邦國、柴告天地、望秋山川、徧于羣神。時邁之詩、武王滅紂、已定天下、以時巡狩。而其臣作頌、美其事、以爲告祭柴望之樂歌也」

(「時邁巡狩圖」の解説)

「時邁巡狩圖」の解説の「武王滅紂」以下(網掛け箇所)は、「其臣作」の後に「詩」字が無い以外、全く同じである。同様に、「載芟藉田圖」(a15)の解説では「鄭箋」と「正義」とともに蘇轍『詩集傳』の註釋が見える^八。楊甲は「毛詩正變指南圖」の編纂にあたって漢唐の註疏だけではなく、北宋の『詩經』解釋も参照していたようである。

一方、「毛詩正變指南圖」の構成は、冒頭に篇名、年代や家系に關する譜、次に天文や地理、土地、祖廟、建築など諸制度の圖、そして最後に四家詩傳授の譜を配置する形式をとっている。この形式は、「毛詩正變指南圖」だけではなく、同じく『六經圖』に収録の「尚書軌範撮要圖」や「禮記制度示掌圖」と共通している。特に最後に學問傳授の「四詩傳授圖」(a28)を置くのは、「大易象數鉤深圖」や「春秋筆削發微圖」、「周禮文物大全圖」の各圖も同様である。このような形式とした理由は不明だが、楊甲は『六經圖』の編纂にあたって各經圖譜に共通する配列基準を考えており、それにしたがって「毛詩正變指南圖」を編纂したのでらう。

第二節 宋元における『詩經』圖譜の多様化

第一項 南宋書肆の編纂した『詩經』圖譜

「毛詩正變指南圖」の後、南宋の孝宗(一一六二～一一八九)から光宗(一一九〇～

一一九四)の頃にかけて編纂された「毛詩圖譜」と「四詩傳授之圖」、「毛詩圖說」、「毛詩舉要圖」は、いずれも書肆が刊刻した書物に収録されており、その編纂者も書肆だと推測される。

一、「毛詩圖譜」及び「四詩傳授之圖」

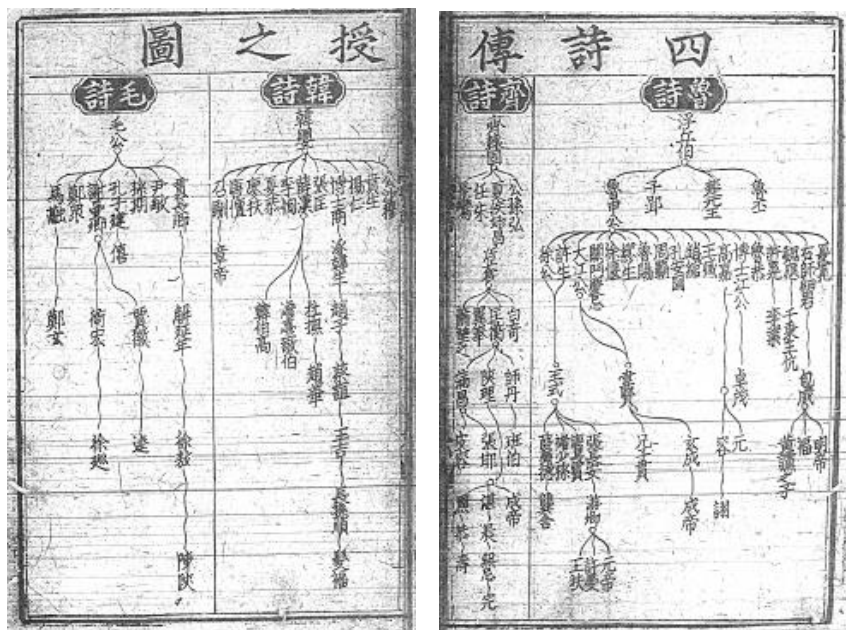
「毛詩圖譜」と「四詩傳授之圖」は、書中の缺筆から孝宗の在位時に書肆が編纂したと推測される『監本纂圖互註重言重意互註毛詩』の巻首に附された圖譜である。『監本纂圖互註重言重意互註毛詩』の版本は二種が現存しており、ともに北京國家圖書館所藏、全二十卷の完本と、十一卷の殘卷がある^九。完本と殘卷は全く同じ内容だが、字樣、版式の細部が異なつた別版である。このうち、完本は「毛詩圖譜」と「四詩傳授之圖」をともに収録しており、殘卷は「毛詩圖譜」のみを収録している。

「毛詩圖譜」は、先述した『鄭氏詩譜』や楊甲「毛詩正變指南圖」の「十五國風譜」(a5)と同じく、詩篇の作成年代とその時在位していた周王を對照させた一覽表である。ただし、『鄭氏詩譜』や「毛詩正變指南圖」は「風」、「雅」、「頌」の項目の中で作成年代を歴代の周王ごとに分類しているが、「毛詩圖譜」は「文王」と「武王」、「惠襄之間」、「頃王」の四項目のみを立て、このなかで「風」「雅」「頌」の各詩を分類している。また、収録する詩篇も五十二篇だけであり、多くが省略されている。このような異同はあるが、「毛詩圖譜」の末尾には「毛詩正變指南圖」と同じく歐陽脩「詩圖總序」の抜粹「右自文王至頃王凡二十世、其可考者陳、齊、衛、晉、曹、鄭、魏、此變風之先後也」の一文がある。恐らく、書肆は「毛詩正變指南圖」から節略して「毛詩圖譜」を編纂したのだろう。

また、完本では「毛詩圖譜」に續けて「四詩傳授之圖」がある。「四詩傳授之圖」は魯、韓、齊、毛四家の系譜を前漢末期まで示した表であり、「毛詩正變指南圖」の「四詩傳授圖」(a28)と全く同じものである(次頁の圖二十三)。

二種の『監本纂圖互註重言重意互註毛詩』に附された「毛詩圖譜」は、どちらも末尾に「毛詩圖譜終」とあり、他の圖が脱落したのではなく、初めから「毛詩圖譜」だけが附されていたことがわかる。また、完本の「四詩傳授之圖」は、「毛詩圖譜終」とある葉の次葉に附されている。これらの點から、殘卷のように「毛詩圖譜」のみを附した版が先に存在しており、後から「四詩傳授之圖」を加えた版が刊刻されたと考えられる。

圖二十三、『監本纂圖互註重言重意互註毛詩』の「四詩傳授之圖」



『詩經』圖譜の形式を考える上で興味深いのは、完本にある「毛詩圖譜」、「四詩傳授之圖」の収録順序である。わずかに二つの表ながら、内容が共通する「毛詩正變指南圖」の「十五國風譜」(a5)、「四詩傳授圖」(a28)と同じ順序で配されている。前節で既述したように、これは楊甲が『六經圖』の編纂にあたって採用した配列である。

書肆は『監本纂圖互註重言重意互註毛詩』編纂の際、楊甲の「毛詩正變指南圖」から必要な譜を抜き出して節略し、「毛詩正變指南圖」の順序に従って収録したの可能性が高い。

二、『毛詩圖說』

『毛詩圖說』は「毛詩圖譜」などと同時期か、やや後に編纂されたと推測される。これは、圖譜のみを収録した巾箱本であることから、攜帶し参照するために編纂されたのだろう。『毛詩圖說』は残巻であり、圖譜は全體の半分ほどしか残っていない。だが、巻首の「毛詩圖總目」に全體の項目名が記されているため、「譜」や「圖」を収録し、諸事物を圖示した総合的な圖譜であったことがわかる(次頁の表八)。

表八、『毛詩圖說』の収録項目

獸・蟲・魚・馬名【a23】 b66 釋草・菜・木・華果・禾・禽・ b67 車飾名	b61 二禮歌詩總圖	b56 祭天圖	b51 朝服圖	b46 小戎■	【a19】 b41 魯國泮宮圖	b36 藉田祈社稷圖	b31 文武豐鎬圖	b26 挈壺圖【a10】	b21 七月流火圖	b16 族譜【a3】	b11 小雅正變譜	【a5】 b6 國風王鄭譜	【a1】 b1 詩篇名(毛詩 篇目)
	b62 季札觀歌圖	b57 樂舞器圖	圖 b52 后夫人婦人服	圖【a12】 b47 甫田歲取十千	b42 絲衣繹賓尸圖	圖【a16】 b37 巡狩告祭柴望	B32 成王守成圖	b27 后稷封部圖	b22 三星在天圖	【a2】 b17 作詩時世圖	b12 大雅正變譜	【a5】 b7 國風齊魏譜	b2 逸詩篇名
	b63 師乙宜歌圖	b58 器物圖	b53 冠冕弁圖	圖【a11】 b48 大田雨我公田	b43 有瞽始作樂圖	【a19】 b38 靈臺辟雍圖	b33 宣王復古圖	b28 公劉遷豳圖	b23 邇詩紀月圖	圖【a6】 b18 十五國風地理	b13 三頌之譜	【a5】 b8 國風唐秦譜	b3 詩篇重名
b64 春秋賦詩圖	b59 兵器圖	b54 帶佩芾圖	【a23】 b49 商頌邦畿圖	b44 ■■■	b39 閼宮路寢圖	b34 千旄美衛圖	b29 太王胥宇圖	【a8】 b24 公劉度夕陽圖	革圖 b19 十五國地名因	b14 歐陽詩說	【a5】 b9 國風陳檜譜	【a5】 b4 國風周召譜	
b65 詩傳授圖【a28】	b60 鄉飲登降笙歌圖	b55 衣裳皮帛圖	b50 商九■圖	b45 秦小戎圖【a21】	b40 我將明堂圖【a17】	b35 駟頌僖公圖	b30 宣王考室圖【a20】	b25 楚丘定星中圖【a9】	b20 大東總星圖	【a3】 b15 ■■(周召衛齊鄒 曹陳晉秦宋)世次	【a5】 b10 國風曹邶譜	【a5】 b5 國風邶鄘衛譜	

※■は缺けて不明な文字。網掛け箇所は楊甲「毛詩正變指南圖」にも見える項目。丸括弧内は現存する圖譜での項目名。隅付括弧内は「毛詩正變指南圖」の内容と共通する項目番號。

表八のなかで、圖譜が現存するのは b1、b13、b15、b31 である。『毛詩圖說』は解説の出典を明示しており、現存する部分によると、主に『鄭氏詩譜』、『詩經正義』、『詩本義』、『春秋』、『爾雅』、『史記』を参照したらしい。特に、歐陽脩の『詩經』解釋の引用は「歐譜同…」（二十三箇所）、「歐云…」（三十箇所）、「歐作…」（二箇所）、「歐並作…」（一箇所）、「文忠公云…」（一箇所）と複数箇所に見える。また、「豳詩紀月圖」（b23）には「伊川曰」とあり、程顥の解釋も参照したことがわかる¹⁰。

『毛詩圖說』は「毛詩正變指南圖」に見えない圖譜を多く収録し、圖譜の配列も相當異なる。しかし、『毛詩圖說』には「毛詩正變指南圖」と同じく冒頭に「詩篇名」（b1）、末尾近くに「詩傳授圖」（b65）があり、さらに表八の網かけで記した項目のように、「毛詩正變指南圖」と共通する内容の項目が複数存在する。現存しない b14 および b31 以降の圖譜については、項目名が共通、あるいは類似する項目のみ、網かけにしてある。

「毛詩正變指南圖」と共通する内容の項目のなかで、圖が現存する「詩篇名（毛詩篇目）」（b1）、「■」（周、宋）世次」（b15）、「族譜」（b16）、「十五國風地理圖」（b18）は「毛詩正變指南圖」に同名の圖譜がある。これらの圖譜は、字樣など僅かな差異を除けば、全く同じ圖である。

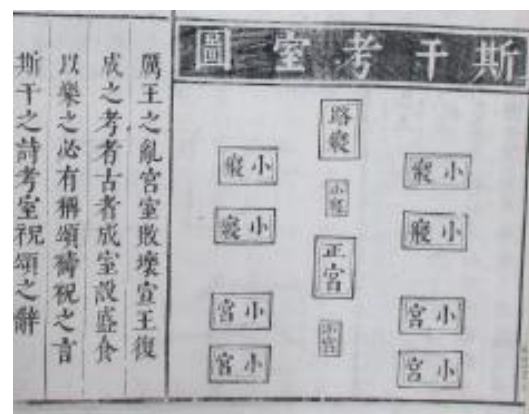
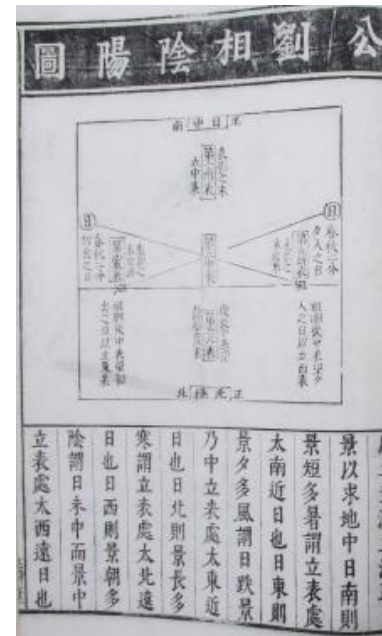
これに對して、國風各國の諸侯と詩篇の作成年代を對照させた「國風譜」（b4、b10）及び「作詩時世圖」（b17）、測量法や天文を圖示した「公劉度夕陽圖」（b24）や「楚丘定星中圖」（b25）、漏刻を圖示した「挈壺圖」（d26）、王宮の建築物配置を圖示した「宣王考室圖」（b30）は「毛詩正變指南圖」にもほぼ同名稱、同内容の圖譜がある。しかし、圖示の方法が異なり、圖の解説は『毛詩圖說』の方が詳細である。

例えば、各國の「國風譜」（b4、b10）は「毛詩正變指南圖」の「十五國風譜」（a5）や『監本纂圖互註重言重意互註毛詩』の「毛詩圖譜」に相當する圖譜であり、ともに歐陽脩輯佚の『鄭氏詩譜』と同内容の圖である。「毛詩正變指南圖」では周王の名稱とその當時作成された詩篇數を羅列するだけに對し、『毛詩圖說』では周王と詩の篇名の關係を棒線をつないで圖示し、さらに『毛詩正義』や『春秋』、『史記』年表、歐陽脩の詩説を引用している。

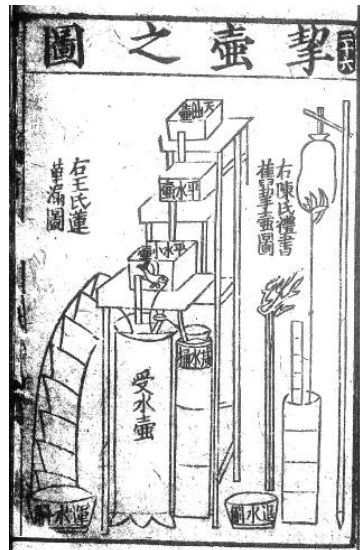
また、『毛詩圖說』の「公劉度夕陽圖」（b24）や「楚丘定星中圖」（b25）、「宣王考室圖」（b30）では、「毛詩正變指南圖」にはない星座や建物の形狀を加えたり、楊甲が記した解説を『毛詩』の註や疏に置き換えたりしている（次頁の圖二十四）。このほか、「挈壺圖」（b26）は「毛詩正變指南圖」の「齊國風挈壺氏圖」（a10）が引用する唐の呂才や北宋初期の燕肅の圖よりも新しい、北宋中期の陳祥道『禮書』や北宋末期から南宋にかけ

ての王普が作成した『蓮花漏圖』の漏刻圖を収録している（本頁の圖二十五）。

圖二十四、天文圖と建築圖の一例（右は「毛詩正變指南圖」、左は『毛詩圖說』）



圖二十五、『毛詩圖說』の漏刻圖と解説



王考室圖... 厲王之亂宮室敗壞宣王復成之考者古者成室設盛食以樂之必有稱頌禱祝之言... 斯干之詩考室祝頌之辭

唯一、「作詩時世圖」(b17)のみは「毛詩正變指南圖」の「作詩時世」(a2)よりも簡略であり、「毛詩正變指南圖」にあつた詩題を省略し、篇数だけを列挙している。

以上のように、『毛詩圖說』の編纂者は「毛詩正變指南圖」に依據した可能性が高く、數量面では大幅に圖譜を増補し、内容面でも視覚的に工夫したり、より新たな資料に差し替えたりするといった變更を加えた。また、『毛詩圖說』は各國の「國風譜」(b4、b10)のように『鄭氏詩譜』との關聯性から歐陽脩の説を引用する圖譜以外にも、獨立した項目として「歐陽詩說」(b14)を収録しており、『毛詩圖說』は歐陽脩の『詩經』解釋を主體として編纂されたことが推測される。このような『詩經』圖譜は、筆者が管見した限り、後にも先にも唯一のものである。

三、「毛詩舉要圖」

「毛詩舉要圖」は南宋光宗の紹熙年間(一一九〇～一一九四)、書肆が編纂した『詩經』圖譜と推測される。「毛詩舉要圖」は楊甲「毛詩正變指南圖」と同じく「譜」や「圖」を収録しており、その内容は諸事物に及ぶ。「毛詩舉要圖」が収録する項目は次の表九のとおりである。

「毛詩舉要圖」に収録の圖譜は全三十項目、「毛詩正變指南圖」の二十八項目とほぼ同じであり、『毛詩圖說』の六十七項目よりは少ない。このうち「毛詩正變指南圖」と「毛詩舉要圖」に共通するのは「十五國風地理圖」(c1)、「秦小戎圖」(c19)だけである。これ以外は、「毛詩舉要圖」のみに見える項目名を除くと、全體のほぼ八割にあたる二十三項目は『毛詩圖說』のみと共通している(次々頁の圖二十六)。

項目名だけではなく、「毛詩舉要圖」と『毛詩圖說』は内容面でも共通する點が多い。例えば、「毛詩舉要圖」にある「大東總星之圖」(c2)、「七月流火圖」(c5)、「三星在天圖」(c6)、「太王胥宇圖」(c8)は『毛詩圖說』に初めて見える圖であり、「公劉度夕陽圖」(c3)や「楚丘定星中圖」(c4)、「挈壺之圖」(c7)は、「毛詩正變指南圖」にも類似した名稱の項目があるが、圖は『毛詩圖說』のものである。これらの圖譜は、圖と解説とともに『毛詩圖說』と一字一句違わず全く同じものである。

表九、「毛詩挙要圖」の収録項目

【b55】 c26 衣裳幣帛之圖	【b42】 c21 絲衣繹賓尸圖	c16 諸侯泮宮之圖	【b36】 c11 春藉田祈社稷圖	【b22】 c6 三星在天圖	【a6 / b18】 c1 十五國風地理圖
c27 祭器之圖	【b51】 c22 朝服之圖	【b59】 c17 兵器之圖	【b37】 c12 巡守柴望告祭圖	【b26】 c7 挈壺之圖	【b20】 c2 大東總星之圖
【b57】 c28 樂舞器圖	【b52】 c23 后夫人婦人之服圖	c18 周元戎圖	【b38】 c13 靈臺辟雍之圖	【b29】 c8 太王胥宇圖	【b17】 c3 公劉度夕陽圖
c29 器物之圖	【b53】 c24 冠冕弁圖	【a21】 c19 秦小戎圖	【b39】 c14 閼宮路寢之圖	【b30】 c9 宣王考室圖	【b18】 c4 楚丘定星中圖
【b65】 c30 四詩傳授之圖 上、下	【b54】 c25 帶佩芾圖	【b43】 c20 有鼓始作樂圖	c15 我將明堂之圖	【b31】 c10 文武豐鎬之圖	【d21】 c5 七月流火圖

※圖の對應：『毛詩圖說』のみの項目は網掛け、「毛詩正變指南圖」と『毛詩圖說』の両方に見える項目は枠付きとした。隅付括弧内の数字のうち、aは「毛詩正變指南圖」、bは『毛詩圖說』に對應する項目番號。

※表中の「秦小戎圖」(c19)は、「毛詩正變指南圖」では「秦國風小戎圖」とあり「毛詩舉要圖」とは名稱が異なるが、実際には全く同じ圖解であるため、「毛詩正變指南圖」ともに對應する項目とした。また、「我將明堂之圖」(c15)と「器物之圖」(c29)は『毛詩圖說』のb58の項目名と比べて「之」字が多いただが、『毛詩圖說』では散佚した箇所であり比較できないため、ここでは「毛詩舉要圖」にのみ見える項目として扱った。

また、項目の配列についても、表中の括弧内に示した『毛詩圖說』の項目番號からわかるように、「大東總星之圖」(c2)、「秦小戎圖」(c19)、「有鼓始作樂圖」(c20)の三箇所が『毛詩圖說』の順序とは前後する以外、すべて『毛詩圖說』の順序通りである。

以上に述べた項目名稱と内容、そして配列順序の共通性からは、「毛詩舉要圖」が現存する『毛詩圖說』か、これと同類の圖譜に依據したと推測される。

それでは、「毛詩舉要圖」と『毛詩圖說』との異同についてはどうか。「毛詩舉要圖」に初見の「周元戎圖」(c18)など一部の圖譜については、「毛詩舉要圖」の編纂者が附け加えたものか、あるいは何か他に基づいた圖譜があったのか、明らかにはしがたい。

これに對して、『毛詩圖說』にあり「毛詩正變指南圖」に見えない項目は、『毛詩圖

説』冒頭にある「詩篇名」(b1)と「作詩時世圖」(b17)および「釋草・菜・木・華・果・禾・禽・獸・蟲・魚・馬名」(b66)と「車飾名」(b67)である。これらは詩の篇名や作成年代、動植物の説明を示した「譜」であり、『詩經』の構成を把握し、詩序との関わりから各詩の意義、そして基礎的な知識である動植物といった、『詩經』を理解する上で重要な事柄である。「譜」に相當する項目がないために、「毛詩舉要圖」は『詩經』の意義や動植物の知識よりも、天文地理や儀禮に關わる衣冠、祭器、車馬、土地、建築などの圖が主體となっている。

なお、「毛詩舉要圖」の編者が参照した資料については、圖譜の解説中に明示された典據に見える。多くは従前の『詩經』圖譜に見られた『毛詩正義』や陳祥道『禮書』だが、『樂書』(c28)や陸佃『禮象』(c22、c24、c26、c28)、そして『詩經』註釋では李樞『毛詩解』(c29)を引用している¹⁾。

圖二十六「秦小戎圖」(上は「毛詩正義指南圖」、下は「毛詩舉要圖」)



第二項 元代における『詩經』圖譜の改編

元代の『詩經』圖譜のなかで、南宋の『詩經』圖譜と類似性が確認されるものは全五種、編纂された年代の順に盧天祥『六經圖碑』の「詩經圖」、胡一桂『詩集傳附錄纂疏』の「十五國風地理之圖」、羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の「詩傳圖」、宗文精舍刊『詩集傳』の「詩圖」、劉瑾『詩集傳音釋』の「諸國世次圖」と「作詩時世圖」である。このうち宗文精舍の「詩圖」は、羅復の「詩傳圖」と全く同じ圖譜であるため、本項では取り上げなかった。

一、『六經圖碑』の「詩經圖」

『六經圖碑』は元の至正年間（一三四一〜一三七〇）に盧天祥が信州に赴任し學校を興した際、建立した石碑である。『六經圖碑』のなかで『詩經』に關する圖譜は「詩經圖」と題されている。収録項目は次頁の表十のとおりである。

「詩經圖」は「圖」と「譜」をともに収録している。これまでの『詩經』圖譜と異なり、圖譜に對應する解説は一切ない。そして、圖譜のうち、四割強に相當する十一項目には「毛詩正變指南圖」や『毛詩圖說』、「毛詩舉要圖」に對應する圖が確認される。

このなかで「毛詩正變指南圖」まで遡ることのできる圖譜は「十五國風地理之圖」(d8)と「公劉相陰陽圖」(d2)、「鳥獸草木之名」(d23)の三圖であり、残りの八圖は『毛詩圖說』か「毛詩舉要圖」に収録されている。このように「詩經圖」には「毛詩正變指南圖」、「毛詩圖說」、「毛詩舉要圖」の圖譜が混在しており、「詩經圖」の編者が南宋書肆の『詩經』圖譜を参照したことは疑いない。

この他の、約六割を占める圖は、南宋の『詩經』圖譜には見えない。この六割のさらに六割にあたる「四始圖」(d1)、「思無邪圖」(d6)、「十五國風・大小雅・三頌譜」(d7)とd8)、「詩有六意三經三緯之圖」(d11)、「經緯正變之圖」(d10)の各圖、「毛詩小序之圖」(d22)は、いずれも孔子の詩論や「風」・「雅」・「頌」、「正變」、「比」、「賦」、「興」といった、『詩經』の理論や意義の解釋を示した圖である。なかでも「思無邪圖」(d6)と「經緯正變之圖」(d10)の説明はすべて朱熹『詩集傳』を引用しており、「詩經圖」が朱熹の解釋を主として編纂されたことがわかる。本圖譜が南宋の圖譜のように「毛詩」と稱さず「詩經圖」になっているのも、朱熹を中心とした宋代の學者が提起した新たな解釋を重視したからであろう。

第一面

d1 四始圖	d2 公劉相陰陽圖 【a8】	d3 楚丘定星中圖 【b25/c4】	d4 大東總星之圖 【b20/c2】	d5 七月流火之圖 【b21/c5】	d6 思無邪圖
d7 陳、檜、曹、豳、二雅、周頌、魯頌、商頌		d8 十五國風地理之圖 【a6/b18/c1】		d7 二南、邶鄘衛、王、鄭、齊、魏、唐、秦	
		d9 豳公七月風化之圖			
d10 經緯正變之圖 (經緯總圖、賦比興兼義圖、正變風雅之圖、笙歌間歌笙詩圖)				d11 詩有六意三經三緯之圖	

第二面

d12 樂器周車戈 矛之圖	d13 辟廱之圖 【b38?/c13】	d14 靈臺之圖 【b38?/c13】	d15 冠服俎豆圭 璧之圖
	d16 皋門應門之圖	d17 泮宮之圖 【b41/c16】	
	d18 秦小戎圖 【a21/b19?/c19】	d19 周元戎圖 【c18】	
	d20 出車一乘之圖	d21 公車千乘之圖	
d22 毛詩小序之圖			
d23 鳥獸草木之名 (鳥獸名、蟲魚草名、木名、菜穀、金玉) 【a23/b66】			

※「詩經圖」と他の圖解との對應は項目名ではなく、實際の圖の類似性による。「毛詩正變指南圖」、「毛詩圖說」、「毛詩學要圖」に對應する項目は網掛けし、對應關係を括弧内に示した。括弧内の數字のうち上から a は「毛詩正變指南圖」、b は『毛詩圖說』、c は「毛詩學要圖」に對應する項目番號。また『毛詩圖說』の破損箇所にある項目には「？」を附した。

二、胡一桂『詩集傳附錄纂疏』の「十五國風地理之圖」

泰定四年（一三二七）、建東陽翠巖劉氏家塾が刊刻した胡一桂『詩集傳附錄纂疏』の巻首、「詩集傳序」と「詩傳附錄姓氏」の間には「十五國風地理之圖」が附されている。

これまで見てきたように、同名の地圖は南宋の「毛詩正變指南圖」以來、大部分の『詩經』圖譜に収録されている。南宋ではすべて「十五國風地理圖」と稱しており、元代では先の『六經圖碑』の「詩經圖」以降、「十五國風地理之圖」と「之」字が加わっている。『詩集傳附錄纂疏』の地圖も同様の名稱であり、内容もほぼ「詩經圖」と變わらない。このため、『詩集傳附錄纂疏』の地圖は獨自に作成したのではなく、『六經圖碑』の「詩經圖」か、あるいは當時流通していた類似の『詩經』圖譜から採録したのだろう。

ただし、『六經圖碑』と『詩集傳附錄纂疏』とでは一點だけ異なる箇所があり、現在の北京に相當する地域を、前者は「今北平」、後者は「大都」と記し、さらに枠で圍って首都であることを強調している。

『詩集傳附錄纂疏』には胡一桂がこの圖を作成、または収録したという記載はなく、また本書の内容からして②「十五國風地理之圖」だけを巻首に附す必然性はない。このため、同圖を収録したのは胡一桂の意圖ではなく、本書を刊行した「劉氏家塾」の劉君佐かもしれない。

三、羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の「詩傳圖」

元の羅復が編纂した『詩集傳名物鈔音釋纂輯』のうち、現存する早期の刊本である至正二十八年（一三六三）雙桂書堂重刊本の巻首には、「詩傳圖」が附されている。「重刊」とあることから、「詩傳圖」は至正二十八年よりも前には存在していたはずだが、現存は確認されていない。「詩傳圖」の項目は次頁の表十一のとおりである。

『詩集傳名物鈔音釋纂輯』収録の圖譜は、同じく「雙桂書堂重刊本」でも、北京國家圖書館所蔵の元刊本と、咸豐五年（一八五五）蔣光煦が家蔵の影鈔本を元に翻刻した版では収録する項目数が異なり、前者は「衣裳圖」（e15）の「狐裘」から「兵器服圖」（e23）の「弓」までの間が無く、「衣裳圖」の途中から「兵器服圖」の内容が聯續する不自然な内容となっている。北京國家圖書館所蔵本の圖譜はこの箇所が脱落してしまったのだろう。そこで、表十一は蔣光煦翻刻本により作成した。

表十一、羅復「詩傳圖」収録圖一覽

e1 思無邪圖	e2 正變風雅之圖	e3 四始圖	e4 詩有六義之圖	e5 十五國風地理之圖
e6 靈臺辟靡之圖	e7 辟靡圖	e8 泮宮圖	e9 大東總星之圖	e10 七月流火之圖
e11 楚丘定之方中圖	e12 公劉相陰陽圖	e13 豳公七月風化之圖	e14 冠服圖	e15 衣裳圖
e16 佩用之圖	e17 禮器圖	e18 樂器圖	e19 雜器圖	e20 車制之圖
e21 周元戎圖	e22 秦小戎圖	e23 兵器服圖		

網掛け箇所は「毛詩正變指南圖」、「毛詩圖說」、「毛詩舉要圖」に見える項目。白黒反転箇所は元代の「詩經圖」に初めて見える項目。

「詩傳圖」は南宋の『詩經』圖譜のように、「譜」と「圖」をともに収録し、圖に對應する解説も収録している。まず、南宋の『詩經』圖譜と共通する項目のなかで、「毛詩正變指南圖」と全く同じ圖なのは「公劉相陰陽圖」(e12)のみである。ただし、同圖の解説には「今得西山眞先生儒家武庫所著公劉相陰陽圖。謹按其式、作圖於上、以備讀詩者考焉(今西山眞先生儒家武庫著す所の公劉相陰陽圖を得たり。謹しんで其の式を按じ、圖を上にして、以て詩を讀む者の考うるに備う)」とある。「西山眞先生儒家武庫」は南宋の眞德秀(號は西山)と關わりのあるようだが、眞德秀が「公劉相陰陽圖」を編纂したという記載は傳わらない。少なくとも「公劉相陰陽圖」(e12)は「毛詩正變指南圖」を直接参照したわけではないらしい。また、「十五國風地理之圖」(e5)は「毛詩正變指南圖」以來見られる地圖だが元代の地名に改られており、「大都」を示している點で胡一桂『詩集傳附錄纂疏』の地圖と同じものである。

これに對して、e6、e8、e11、e21、e22の七項目は、南宋の書肆が編纂した『毛詩圖說』や「毛詩舉要圖」に見える項目である。このうち、「七月流火之圖」(e10)と「楚丘定之方中圖」(e11)の圖示の方法が異なる以外、圖は全く同じものである(次頁の圖二十七)。

「詩傳圖」を『六經圖碑』の「詩經圖」と比べて見ると、e1、e4、e7、e13、e15の八

項目が共通している。なかには、「正變風雅之圖」(e4)のように名稱が異なる項目や、「冠服圖」(e14)と「衣裳圖」(e15)のように分類が異なる項目はあるが、「譜」や「圖」は、すべて同一である。

このように、「詩傳圖」の「譜」や「圖」は南宋の『詩經』圖譜、なかでも書肆の編纂した圖譜と、元代の『六經圖碑』の「詩經圖」を採録し、折衷したものであったと言える。一方、圖に對應する解説は、従前の『詩經』圖譜と全く異なる。「詩傳圖」では解説の典拠を示した箇所があり、『毛詩正義』や『春秋左傳』、『爾雅』と言った經書や禮圖の陳祥道『禮書』のほか、『語錄』(e1)、「朱子」(e3、e4)、「朱子初解」(e6)。「朱子引王氏」(e13)、「集傳」(e16)といった、『朱子語類』や『詩集傳』などから朱熹の解釋を引用した箇所が見える。また、嚴粲『詩緝』からの引用を示す「嚴氏」(e12、e18)、蘇轍『詩集傳』からの引用を示す「蘇氏」(e14)、李樗『毛詩解』からの引用を示す「李解」(e19)がある。『詩傳圖』の編者は、編纂にあたって朱熹を中心とする南宋諸儒の『詩經』解釋を多く参照したと考えられる。

圖二十七、羅復「詩傳圖」の部分



四、劉瑾『詩集傳音釋』の「諸國世次圖」と「作詩時世圖」

「諸國世次圖」と「作詩時世圖」の編者は劉瑾、その著書『詩集傳音釋』の巻首に附されている。「諸國世次圖」は『詩經』に登場する諸國の家系圖、「作詩時世圖」は詩篇を作成された時期ごとにまとめ、その當時の王侯の名稱と對應させた一覽表である。兩圖は、南宋の「毛詩正變指南圖」の「周、召、衛、齊、鄒、曹、陳、晉、秦、宋世次」(a3)や「作詩時世」(a2)、『毛詩圖說』の「■(周、召、衛、齊、鄒、曹、陳、晉、秦、宋)世次」(b15)や「作詩時世圖」(b17)に相當し、内容もほとんど變わらない。ただし、劉瑾「諸國世次圖」は「毛詩正變指南圖」よりも「衛」が多く、『毛詩圖說』よりも「商」、「周(邠)」、「岐周」が多く、從來のものに對して、特に周王の家系(「毛詩正變指南圖」と「作詩時世」の「周」は「周公」の家系)に着目し増補したことがわかる。

また、劉瑾の「作詩時世圖」は詩篇名を示し、殷周の王を即位した順序で配列している。「毛詩正變指南圖」でも詩篇の名稱は示すが『詩經』の篇章の順序で配列しており、『毛詩圖說』は詩篇の數しか示していないが、周王の即位順によって示している。このように、劉瑾の「作詩時世圖」は「毛詩正變指南圖」と『毛詩圖說』兩方の特徴を折衷したものである。

小結

南宋の楊甲が北宋の『鄭氏詩譜』やその他の圖譜、『詩經』註釋などを參照、引用して「毛詩正變指南圖」を編纂して以降、南宋中後期の書肆は様々な『詩經』圖譜を編纂した。その形態には「纂圖互註本」の附録や單行本といった違いはあるが、いずれの内容も「毛詩正變指南圖」と共通性がある。

「毛詩正變指南圖」を収録する楊甲の『六經圖』は南宋の時、大變好評を博したように、優劣様々な版が各地で刊刻されたという^三。また、陳振孫『直齋書錄解題』によると、毛邦翰本、葉仲堪、劉游が増補校訂した版もあった^四。當然、『六經圖』の一篇である「毛詩正變指南圖」も好評を博し、廣く普及したと考えられる。書肆はこの状況を踏まえて「毛詩正變指南圖」を増補、改編して賣り出したのではないだろうか。

この後、元代に至るまでの『詩經』圖譜は、改編を繰り返すことで多様化していった。南宋の「毛詩舉要圖」はその類似性からして、内容の多くを『毛詩圖說』から採録しており、書肆が改編した『詩經』圖譜から、さらに新たな『詩經』圖譜が生み出されていた状況がうかがえる。また、元代でも早い時期に編纂された『六經圖碑』の「詩經圖」

には、南宋の「毛詩正變指南圖」と、書肆の編纂した『毛詩圖說』や「毛詩舉要圖」との共通点があり、さらに羅復の「詩傳圖」の内容は、南宋書肆の『詩經』圖譜と『六經圖碑』との共通点が主體となっている。

このように多様化する過程では、その時々廣く行われたであろう『詩經』解釋によって新たに作成された圖譜があった。南宋の『毛詩圖說』に見える「歐陽詩說」(b14)は歐陽脩の説を反映した圖譜であろうし、元の『六經圖碑』に見える「思無邪圖」や「四始圖」は特に朱熹の説を示した圖譜である。

一方、多様化の過程では失われた圖譜もあった。全體的には『詩經』圖譜編纂の原点とも言える「毛詩正變指南圖」の要素、特に「毛詩正變指南圖」の内容の多くを占める「譜」は次第に見られなくなった。「譜」は『詩經』附録で削除される傾向があり、南宋の「毛詩舉要圖」は「四詩傳授之圖」(c30)以外の譜を収録しておらず、元代の羅復「詩傳圖」では冒頭の四圖のみである。恐らく附録という形態上の原因から、「譜」に多くの紙幅を割くことができなかつたのだろう。『詩經』圖譜の多様化と圖譜の取捨選擇の過程で、南宋から元代にかけての『詩經』圖譜の原型と言える「毛詩正變指南圖」の内容は失われていった。

また、「譜」や「圖」に對應する解説も變化した。『詩經』註釋書についていえば、南宋の『詩經』圖譜では、『毛詩正義』など基礎的な資料のほか、主に歐陽脩や蘇轍、李樗に依據している。これに對して、元代では朱熹の解釋が中心となった。これは、南宋後期、特に理宗が公認したことによる朱子學の廣まり、そして元の延祐二年(一三一五)における科擧の再開と、『詩經』の經義については朱熹の解釋に準據した影響を受けたからだろう^{一五}。「譜」や「圖」が多様化したのに對して、解説はこのような學術潮流の變化や國家の政策の影響を受けて、朱熹の解釋へと収束する傾向が現れた。

第二章 註釋

一 本論では王雲五主編『四部叢刊續編』(臺灣商務印書館、一九六六年)収録の上海潘氏滂喜齋(潘祖蔭)藏宋本『詩本義』にある『鄭氏詩譜』を用いた。

二 『毛詩註疏』収録の鄭玄「詩譜序」には、『毛詩譜』が作成年代を示した意義について「欲知源流清濁之所處、則循其上下而省之。欲知風化芳臭氣澤之所及、則傍行而觀之。此詩之大綱也。舉一綱而萬目張、解一卷而衆篇明」と述べており、『毛詩譜』編纂にあたって依據した資料については「夷厲已上歲數不明、大史年表自共和始、歷宣幽平王、而得春秋次第、以立斯譜」とある。

三 「毛詩正變指南圖」の圖數は諸國の世次圖（a3）と諸物の名稱圖（a23）をそれぞれ一圖とするかどうかで変わる。筆者の論文『詩經』註釋史における「毛詩舉要圖」の意義（『日本中國學會報』第六十四集、二〇一二年）や『詩經』圖譜本の變遷…宋から明初まで」（早稻田大學中國文學會『中國文學研究』第三十八輯、二〇一二年）では別圖として數えたが、本論では煩雜になるのを避けるため、一圖として數えた。

四 呂才と燕肅の著書は、ともに『宋史』卷二〇七「藝文志・曆算類」にみえる。

五 聶崇義『新定三禮圖』宋淳熙二年本影印（鄭振鐸編『中國古代版畫叢刊』一、上海古籍出版社、一九八八年）と陳祥道『禮書』至正七年福州路儒學刊明修本影印（北京圖書館古籍出版編輯組編『北京圖書館古籍珍本叢刊』三經部、書目文獻出版社、一九八八年）を参照した。

六 陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』は『津逮祕書』収録本（藝文印書館影印、一九六六年）を参照した。

七 「時邁巡狩圖」の解説は「王者以時巡行邦國、柴告天地、望秋山川、徧于羣神。時邁之詩、武王滅紂、已定天下、以時巡狩。而其臣作頌、美其事、以爲告祭柴望之樂歌也」である。この「武王滅紂」以下は、歐陽脩『詩本義』卷十二「時邁」の本義「時邁者、是武王滅紂、已定天下、以時巡守、而其臣作詩、頌美其事、以爲告祭柴望之樂歌也」とほぼ同じ文である。

八 「載芟藉田圖」の解説は「藉者借也。借民力而耕之也。天子千畝、諸侯百畝。孟春之月、天子帥三公、諸侯、九卿、親耕于藉田、以祈社稷。天子三推、諸侯九推。祈社稷、禮、王爲民立社曰大社、自爲立社曰王社。在藉田中、藉田所祈也」とあるが、このうち「禮、王爲民立社曰大社…」以下は、蘇轍『詩集傳』卷十八「載芟」詩の註釋と全く同じである。

九 『監本纂圖互註重言重意互註毛詩』殘卷の藏書番號は「〇七九一六」、完本は「〇七九一七」である。

一〇 該當箇所には「斯螽、莎雞、蟋蟀、說者雖爲三物、然考詩意、恐是一物隨■」とある。

これは『河南程氏經說』卷三「詩解」（『二程全書』臺灣中華書局影印『四部備要』、一九六五年）にも同じ文が見える。

一一 『樂書』は北宋の陳暢が著したものが知られるが、解説の文言は陳暢の樂書には見えず、他の書物を参照したのかもしれない。陸佃『禮象』は佚書である。また、「雜器圖」（c29）の「鬻」の解説にある「李黃云、上天下小曰鬻。孫炎曰甑若非」は、孫炎の註も含めて李樞・黃樞『毛詩集解』卷十六「匪風」の李註を要約したもののようだが、「上天下小」は見えない。

一二 「嚴氏」の引用のうち「公劉相陰陽圖」（e12）の解説「嚴氏曰、豳在梁山西。公劉相此夕陽地、以建豳居也」は、嚴粲『詩緝』卷二十八「公劉」に「豳國在梁山之西、故言自公劉相此夕陽之地、以建豳居」とあり、「詩傳圖」の解釋は原文を節略したものであることがわかる。同じく「嚴氏」を引く「樂器圖」（e18）の「笙簧」には「嚴氏曰、笙以匏爲之。十三管列匏

中、而施簧管端、吹笙則鼓動其簧而發生」は『詩緝』卷十七「鹿鳴」に見え、「冠服圖」

(e14) の「狐裘」の解説にある「蘇氏曰此狐裘、狐白裘也」は蘇轍『詩集傳』卷六「終南」に類似の註が見える。「李解」(e19) については、既出の「毛詩舉要圖」にも同様の圖解が見えており、羅復が引用したものではない。

一三 度正『性善堂稿』(『景印文淵閣四庫全書』第一一七〇冊) 卷十三「涪州教授陳享由墓誌

銘」には陳享由(？〜一二〇九)が『六經圖』の石碑を建立した時の状況として「好事者版行之、徧天下」や「遂搜訪善本、重加校正、仍命工筆札善圖畫者寫之、刻之石、以示學者」とあり、南宋のころ『六經圖』には良劣様々な版本が存在していたらしい。

一四 陳振孫『直齋書錄解題』卷三「六經圖」條には毛邦翰增補本や葉仲堪重編本に関する記載がある。また同箇所の「隨齋批註」には建安の儒者劉游が『六經圖』を増補、刊刻し、この版には南宋の洪景盧(洪邁)の序があったという。

一五 理宗が朱熹を信奉し、その學が公認されたことは『宋史』卷四十一「理宗本紀・寶慶三年」條や『宋史』卷四十二「理宗本紀・淳祐元年」條に朱熹の事績を讃える詔が見える。前者の詔には「朕觀朱熹集註大學、論語、孟子、中庸、發揮聖賢蘊奧、有補治道。朕勵志講學、緬懷典刑、可特贈熹大師、追封信國公」とあり、後者には「朕惟孔子之道、自孟軻後不得其傳、至我朝周惇頤、張載、程顥、程頤、眞見實踐、深探聖域、千載絕學、始有指歸。中興以來、又得朱熹精思明辨、表裏混融、使大學、論、孟、中庸之書、本末洞徹、孔子之道、益以大明于世。朕每觀五臣論著、啟沃良多、今視學有日、其令學官列諸從祀、以示崇獎之意」とある。また、元代の科擧において、『詩經』では朱熹の經書解釋が基準とされたことは『元史』卷八十一「選舉一・科目」に「經義一道、各治一經、詩以朱氏爲主」とあり、ほかにも明の王圻『續文獻通考』卷四十四「選舉考」等にも同様のことが記されている。

第三章 『詩經』圖譜の定型化と改編

南宋から元代まで『詩經』圖譜が形成され多様化していく間には、同一の圖譜が複数の書物に附されることがあった。現存する圖譜では、例えば元の至正十二年（一三五二）に宗文精舎が刊刻した朱熹『詩集傳』の附録「詩圖」は、羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の附録「詩傳圖」と全く同じものである。

このようにある特定の『詩經』圖譜が廣まる傾向は、明清の時、勅撰經書に附録として『詩經』圖譜が収録されたことで一挙に強まった。勅撰の經書は標準的な解釋を示すため、國家によって編纂され、大きな権威を背景として普及が促された書物である。その附録である『詩經』圖譜も、個人や書肆の編纂、刊刻した宋元の圖譜とは異なり、標準的な内容を示した資料としてより廣く参照された。このように特定の『詩經』圖譜が大量に普及したことは、『詩經』圖譜が「定型化」していく過程だったと考えられる。

だが、明清の際には前代の『詩經』圖譜の改編も同時に見られる。例えば、明代以降に行われた翻刻は、必ずしも底本に忠實な翻刻ではなく、なかには改編されたものがある。また、清代に編纂された『詩經』圖譜の多くも、明代以前の『詩經』圖譜の内容を受け継ぎつつ、改編された形跡が見られる。本章では、明清における『詩經』圖譜の定型化と改編という對照的な状況の経過を考察する。

第一節 明代における定型の確立

國家が初めて編纂した『詩經』圖譜は、永樂帝の命で編纂され永樂十三年（一四一五）に完成した『詩經大全』の附録「詩經大全圖」である。「詩經大全圖」について、『詩經大全』の凡例には「名物附圖一依廬陵羅氏所集、諸國世次及作詩世時圖、一依安城劉氏、存之以備觀覽（名物附圖は一ら廬陵羅氏集むる所に依り、諸國世次及び作詩世時圖は一ら安城劉氏に依り、之を存し以て觀覽に備う）」と記されている。廬陵羅氏の「名物附圖」とは元の羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の「詩傳圖」、安城劉氏の「諸國世次」と「作詩世時圖」とは、元の劉瑾『詩集傳通釋』の「諸國世次圖」と「作詩世時圖」のことである。この通り、「詩經大全圖」の内容は羅復と劉瑾の兩圖譜と全く同じものである。兩圖譜についてはすでに前章で考察したが、清代勅撰書の圖譜と比較するため、以下に収録項目と引用文獻および人名を次頁の表十二、引用數の割合を次々頁の表十三に示した¹⁾。

表十二、「詩經大全圖」の収録圖及び引用文献・人名一覽

<p>f21 周元戎圖 (鄭箋)・(王應麟 玉海注小字注)</p>	<p>f22 秦小戎圖 (詩經小戎本文)</p>	<p>f23 兵器服圖 甲(禮書)・(周禮)／胄【說文】／干(方言) 戈(周禮考工記)／戚(不明)／揚(毛詩疏) ／安(毛傳)・(禮書)／矛(朱傳)／弓(周禮) ・(不明)／矢【說文】・【釋名】／虎韞(朱傳) ・(毛傳)／魚服(周禮鄭注)・(毛詩疏)／旗 旒(毛傳)・(鄭箋)・(朱傳)／侯(朱傳) ・(不明)・(毛詩疏)・(周禮註)／旒(朱傳) ／旒(朱傳)／旌(朱傳)／決(毛詩疏)／拾 (朱傳)／鞞(朱傳)</p>	<p>f24 諸國世次圖</p>	<p>f25 作詩時世圖</p>	<p>f1 思無邪圖 (論語)・(朱傳) ④・(蘇傳)・(語類 ③)</p>	<p>f2 四始圖 【朱子詩傳綱領】</p>	<p>f3 正變風雅之圖 【朱子詩傳綱領】・(朱傳) ③</p>	<p>f4 詩有六義之圖 【語錄語類】 ⑤・(朱傳) ⑧・ 【周禮】</p>	<p>f5 十五國風地理之 圖 引用文無し</p>	<p>f6 靈臺辟雍之圖 (朱傳) ②・【朱子 初解讀詩記】</p>	<p>f7 皋門應門圖 (不明)・(朱傳)</p>	<p>f8 泮宮圖 (朱傳)</p>	<p>f9 大東總星之圖 (朱傳)</p>	<p>f10 七月流火之圖 (朱傳)・(不明)・【左 傳左傳疏】</p>	<p>f11 楚丘定之方中圖 (朱傳)・(詩緝)</p>	<p>f12 公劉相陰陽圖 【經詩經公劉】・(朱傳)・【嚴 氏詩緝】・【西山真先生儒家武 庫所著公劉相陰陽圖】</p>	<p>f13 關公七月風化之圖 【朱子集傳所載王氏總論】／朱傳引王安 石・(朱傳)・【張氏曹氏詩緝引張栻曹 粹中】・(詩經大全圖)</p>	<p>f14 冠服圖 罽(說文解字)／ 臺笠(毛傳)／陸氏 草木疏)／弁(鄭 箋)／讀詩記引周 禮正義)／緇撮 (毛傳)・(朱 傳)・(三禮圖)</p>	<p>f15 衣裳圖 袞衣(通典)・朱傳)／ 羔裘(朱傳)・(不明)／ 狐裘(朱傳)・【蘇氏 蘇傳】／繡裳(毛傳) ／芾鞞(鄭箋)／邪幅 (朱傳)／瑱【正義註 ／毛詩疏】・(詩緝)</p>	<p>f16 佩用之圖 雜佩(朱傳)／觶(家 山圖書)／鞞【古注 ／鄭箋】・(詩緝) ／【爾雅】・【孫氏 爾雅孫炎注】・【集 傳朱傳】／【說文】 ／【注禮記鄭玄 注】／【說文】／【搢 (詩經旁通)・詩緝</p>	<p>f17 禮器圖 籩(周禮鄭注)／豆(詩集傳名 物鈔)／俎(朱傳)／簋(孝經鄭 注)／登(朱傳)・三禮圖)／爵(不 明)／罍(毛詩鄭箋)・【孔氏毛 詩疏】／【壘(不明)・【孔氏周 禮疏】／犧尊(朱傳)／壺【禮器 注禮記鄭玄注】／【柶(朱傳)・ 【詩經早麓】／【卣(爾雅)・【孫 炎爾雅孫炎注】・【郭璞爾雅郭 璞注】／【福衡(朱傳)／圭璧(朱 傳)・【曹氏曹粹中】・(鄭箋)・ 【孔氏周禮疏】／圭瓚(鄭箋)・ (朱傳)・(詩緝引曹粹中)・【祭 統禮記】</p>	<p>f18 樂器圖 琴(讀詩記引爾雅疏)／笙簧【嚴氏詩緝引 廣雅、朱傳】・【禮書】／瑟(三禮圖引舊圖) ／簫(朱傳)・【王氏孔疏引爾雅郭璞注及應 劭風俗通】／管(朱傳)／篳(鄭箋)・【或曰 爾雅郭璞注】／祝(朱傳)／圉(朱傳)／埙 簫(朱傳) ② 『詩經旁通』引「毛詩樂舞器 圖」／鍾(朱傳) ⑦ 何伯善註】・(禮 記)・(禮記注)／虞(朱傳)・【孔氏毛詩疏】</p>	<p>f19 雜器圖 鼎(三禮圖)・(不 明)／鬯(毛傳)・ 【李解毛詩李 黃集解】／鍤(朱 (毛傳)／缶(孔 疏)・(不明)／升 斗(漢書律曆志) ／筐(詩緝引曹 粹中)・(毛傳)</p>	<p>f20 車制之圖 輪(周禮考工記)／輻 (周禮考工記)／轂 (朱傳)／輶(古今韻 會舉要)</p>
---	------------------------------	--	------------------	------------------	--	----------------------------	--------------------------------------	--	-----------------------------------	--	-------------------------------	------------------------	---------------------------	--	----------------------------------	---	---	--	--	---	---	---	---	--

※隅付括弧内は「詩經大全圖」中に明示された書名または人名、出典がわかるものは隅付括弧内に斜線で区切り示した。

また、出典が推定できるものは、最も早い時期の書名を丸括弧内に記し、出典不明の箇所は「不明」とした。『朱子語類』は「語類」、朱熹『詩集傳』は「朱傳」、蘇轍『詩集傳』は「蘇傳」、呂氏家塾讀詩記は「讀詩記」と略した。一つの項目において同じ出典の引用が複数有る場合は、括弧の後○中にアラビア数字で引用数を示した。

表十三、「詩經大全圖」引用文献・人名の割合

年代	引用人名・書名(典據不明10箇所を除いて全173箇所)	引用
唐以前	周禮及び同注疏(11)／詩經本文(9)／毛詩毛傳(9)／毛詩鄭箋(9)／毛詩孔疏(9)／禮記及び同注疏(6)／爾雅及び孫炎・郭璞注(6)／說文解字(4)／毛詩草木鳥獸蟲魚疏・論語・春秋左氏傳疏・孝經注・漢書・方言・釋名・通典(各1)	71
北宋	聶崇義三禮圖(3)／陳祥道禮書(3)／蘇轍(2)	8
南宋	朱熹の詩集傳・朱子語類・家山圖書・詩傳綱領(71)／嚴粲詩緝(9)／呂祖謙呂氏家塾讀詩記(3)／玉海・曹粹中・眞德秀の西山眞先生儒家武庫所著公劉相陰陽圖・毛詩李黃集解(各1)／	87
元代・明代	梁益詩經旁通(2)／詩經大全圖(2)／何伯善・詩集傳名物鈔・古今韻會舉要(各1)	7

「詩經大全圖」の収録項目は「思無邪圖」(f1)から「兵器服圖」(f23)までは羅復「詩傳圖」と、「諸國世次圖」(f24)、「作詩時世圖」(f25)は劉瑾の編纂した同名の圖譜と、項目の名稱、圖の内容ともに全く同じである。

「詩經大全圖」の引用は、不明なものを除いて一七三箇所ある。最も引用数が多いのは南宋の文献である。これに次ぐのは、毛傳、鄭箋といった『詩經』の註釋や、『周禮』、『禮記』、『爾雅』など名物に関する記載の多い經書の本文や註疏など、唐代以前の文献である。なかでも突出しているのは朱熹の『詩經』に関する言説である。七十一箇所と個人の言説としては最も多く、唐代以前の文献全體と同数が引用されている。

引用数の面から見て、朱熹の『詩經』解釋が傳統的な註釋とともに重視されていたことは明らかだが、朱熹の解釋が持つ重要性はこれだけではない。前頁の表十二にある「十五國風地理之圖」(f5)以下は主に南宋の『毛詩圖說』や「毛詩舉要圖」などに見える名物の圖譜をそのまま収録しているのに對して、冒頭にある「思無邪圖」(f1)、「四始

圖」(f2)、「正變風雅之圖」(f3)、「詩有六義之圖」(f5)の四圖は、いずれも朱熹の言う人間性の陶冶といった『詩經』を學ぶ上での意義や、詩の「四始」、「正變」、「六義」といった『詩經』全體の構成、内容の解釋に關する概念を朱熹の言説に基づき圖示したものである(本頁の圖二十八)。元代より前の『詩經』圖譜は、南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」を除き、冒頭に「十五國風地理之圖」を置き、その後王侯の系圖、建築、天文、衣冠、器物など『詩經』に登場する歴史背景や個々の事象、名物の解釋を圖示したものであった。『詩經大全』の編纂者は、これらの事象や名物よりも、まずは朱熹の考えによる『詩經』解釋のあり方を學習者に伝えるという羅復の「詩傳圖」の特徴に着目して収録したのでらう。

圖二十八、「詩經大全圖」冒頭の圖譜(國立公文書館所藏成化七年刊『詩經大全』)

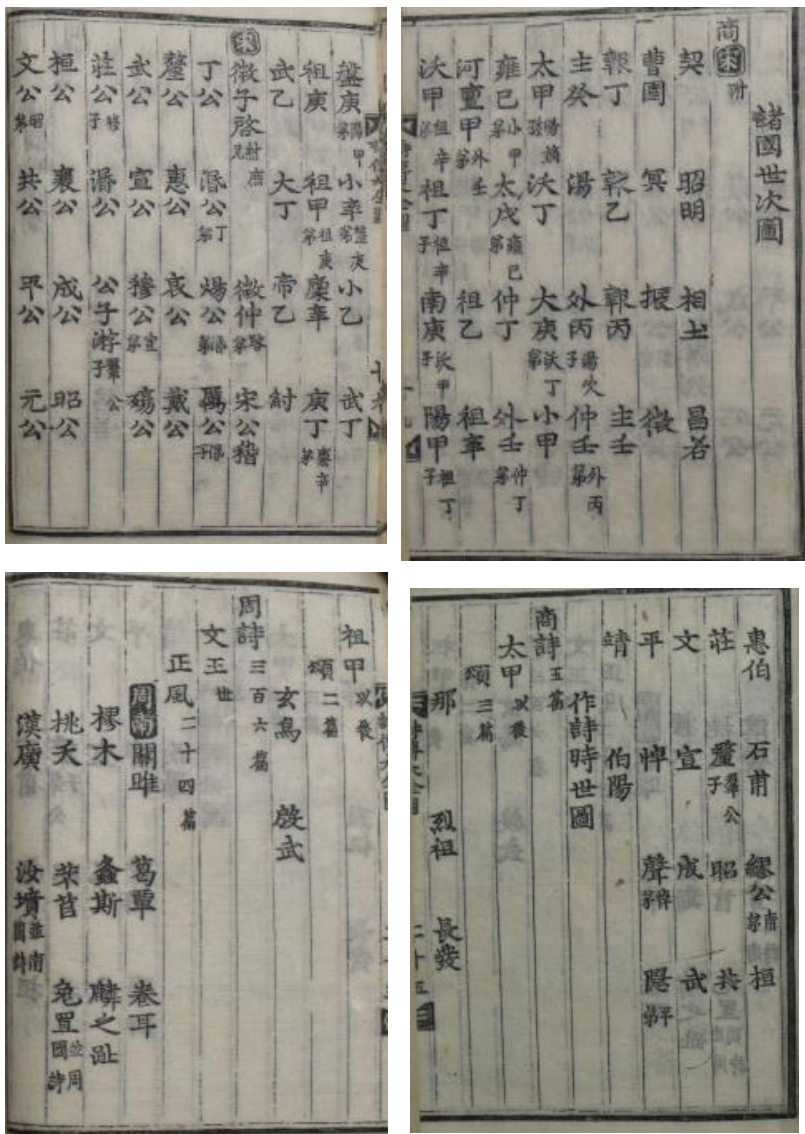


このように『詩經大全』の編纂者が朱熹の言説を重んじたのは、朱子學が廣まったからである。明朝は元代に朱熹の『詩經』解釋が隆盛し延祐二年(一二二五)には科擧の基準となった狀況をそのまま受け継ぎ、朱熹の解釋を公的な解釋とした²⁾。このため、『詩經大全』や「詩經大全圖」が朱熹の解釋を根幹とするのは當然のことであった。

劉瑾が編纂した「諸國世次圖」(f24)、「作詩時世圖」(f25)の内容は『鄭氏詩譜』と概ね同内容である(本頁の圖二十九)。これにも関わらず『詩經大全』の編纂者が特に劉瑾の圖譜を収録のしたのも、劉瑾が朱熹の學を尊重した学者であったことから、「諸國世次圖」や「作詩時世圖」にその學問姿勢が反映されていると考えたのかもしれない^三。また、顧炎武や朱彝尊などが指摘するように、『詩經大全』は劉瑾の『詩集傳通釋』をわずかに改編しただけの書物であった^四。このため、『詩集傳通釋』の附録であった「諸國世次圖」と「作詩時世圖」も、特段の意圖はなく、そのまま収録したのかもしれない。

しかし、『詩集傳通釋』と『詩經大全』の関係だけでは、羅復の「詩傳圖」を収録した理由を測り難い。羅復と劉瑾の『詩經』圖譜を収録した理由は、この二人と『詩經大全』の編纂責任者であった胡廣の出身地も関わりがあるかと推測される。胡廣は吉水(現在の江西省吉水縣)、羅復は廬陵(同吉安縣)、劉瑾は安成(同安福縣)というように極めて近い地域の出身であった^五。胡廣が兩者の著作を容易に入手できる、あるいは二人の學問的影響を受けやすい条件にあったことは、羅復と劉瑾の圖譜を収録した理由の一つかもしれない。

圖二十九、成化刊本「詩經大全圖」の「諸國世次圖」(上)と「作詩時世圖」(下)



第二節 清代における定型の改編

『詩經大全』が編纂されてから三百年の間、勅撰による『詩經』の編纂が行われることはなかった。そして清代になり、康熙帝の命により『詩經大全』に代わる勅撰書として王鴻緒などが『欽定詩經傳說彙纂』を編纂し、同書は康熙六十年（一七二一）に完成、雍正五年に刊刻された^六。この『欽定詩經傳說匯纂』の卷首附録が「詩傳圖」（本章では欽定「詩傳圖」とする）である。

欽定「詩傳圖」は第一章で既述したように、圖が「詩經大全圖」と全く同じであり、解説には、明代の胡廣など勅撰『詩經大全』と「詩經大全圖」を参照したこと示す案語が複数あることから、「詩經大全圖」をもとに編纂されたと考えられる。

しかし、欽定「詩傳圖」と「詩經大全圖」とを比べると、圖は「十五國風地理之圖」（g5）が清代の地名に変更している以外、全く同じであるのに對して、解説のほうは多くが異なっている。欽定「詩傳圖」の解説は、「詩經大全圖」では明記されることの少なかつた出典をすべて挙げており、これらを一覽にすると次頁の表十四、引用典據と時代ごとの割合は次々頁の表十五のようになる^七。

表十四にあるように、欽定「詩傳圖」の註釋は、「詩經大全圖」の方には註釋がない。「作詩時世圖」の引用数を除くと、『毛詩』の註疏を中心として唐以前の註釋が最も多い。これに次いで多いのは、陳祥道が大部分を占める北宋の註釋と、朱熹に代表される南宋の註釋である。この割合は、「詩經大全圖」において南宋諸家の説が最も多く引用され、唐以前の註釋がこれに次いだのとは對稱的である。

『欽定詩經傳說彙纂』の雍正帝の序や凡例には、同書の編纂方針として朱熹の『詩集傳』を主とすること、そして漢から明までの諸家の説のなかでも、朱熹の説に合致するものや義理に詳しく言及し『詩經』の主旨を補うものを本文の註として収録し、朱熹の説と異なっているも義理に長じた説は附録に収録したとある^八。『欽定詩經傳說彙纂』の編纂方針は、朱熹の解釋を根幹に据えるという點こそ『詩經大全』と共通しているが、『詩經大全』の編纂が朱子一尊を標榜したのに對して、『欽定詩經傳說彙纂』は朱熹の説を主體としながらも、廣く諸家の説を採録することを標榜していた。兩書に収録された『詩經』圖譜の相違も、それぞれの編纂方針の相違に由來するものであった。

表十四、欽定「詩傳圖」の収録圖及び引用文献・人名一覽

<p>g1 思無邪圖 【論語】・【朱子】</p>	<p>g6 靈臺辟離之圖 【鄭氏康成】【孔氏穎達】【朱子】 【劉氏瑾】</p>	<p>g11 楚丘定之方中圖 【鄭氏康成】【朱子】</p>	<p>g16 佩用之圖 雜佩【朱子】／觿 【毛氏萇】／鄭氏康成 【鄭氏康成】 【陳氏祥道】／納 【爾雅】／【孫氏炎】 【朱子】／【內則】 【鄭氏康成】 【嚴氏粲】 【笄】 【毛萇】 【孔穎達】</p>	<p>g17 禮器圖 籩【鄭氏康成】／豆【聶氏崇義】／俎【陳祥道】 【登】 【陳氏祥道】 【爵】 【聶氏崇義】 【禮記明堂位】 【鄭氏康成】 【壘】 【陸氏德明】 【櫜】 【尊】 【朱子】 【壺】 【許氏慎】 【鄭氏康成】 【秬鬯】 【毛氏萇】 【孔氏穎達】 【朱子】 【爾雅】 【孫氏炎】 【郭氏璞】 【福衡】 【孔氏穎達】 【圭璧】 【周禮典瑞】 【鄭氏康成】 【圭瓊璋瓚】 【陳祥道】</p>	<p>g23 兵器服圖 甲【考工記】 【陳氏祥道】 【胄】 【許氏慎】 【陳氏祥道】 【干】 【揚氏雄】 【陳氏祥道】 【戈】 【考工記】 【陳氏祥道】 【戚】 【毛氏萇】 【劉氏熙】 【揚】 【孔氏穎達】 【女】 【陳氏祥道】 【矛】 【考工記】 【陳氏祥道】 【弓】 【陳氏祥道】 【矢】 【許氏慎】 【劉氏熙】 【虎韞】 【朱子】 【魚服】 【朱子】 【周禮司常】 【鄭氏康成】 【考工記】 【侯】 【周禮司裘】 【鄭氏康成】 【陳氏祥道】 【禮司常】 【考工記】 【旄】 【朱子】 【旌】 【朱子】 【決】 【陳氏祥道】 【拾】 【陳氏祥道】 【鞞】 【朱子】</p>	<p>g22 秦小戎圖 【朱子】</p>	<p>g21 周元戎圖 【毛氏萇】 【朱子】</p>			
<p>g2 四始圖 【朱子】</p>	<p>g7 皋門應門圖 【鄭氏康成】 【孔氏穎達】 【朱子】</p>	<p>g12 公劉相陰陽圖 【朱子】 【嚴氏粲】 【胡氏廣大全】</p>	<p>g18 樂器圖 琴【陳氏祥道】 【瑟】 【陳氏祥道】 【笙簧】 【陳氏祥道】 【嚴氏粲】 【簫】 【應氏邵】 【郭氏璞】 【孔氏穎達】 【管】 【鄭氏康成】 【郭氏璞】 【籥】 【毛氏萇】 【朱子】 【祝】 【郭氏璞】 【壎】 【陳氏祥道】 【圉】 【郭氏璞】 【篪】 【賈氏公彥】 【鍾】 【陳氏祥道】 【磬】 【陳氏祥道】 【鼓】 【陳氏祥道】 【鄭氏康成】 【大】 【記】 【爾雅注】 【虞】 【考工記】 【毛氏萇】 【鄭氏康成】 【孔氏穎達】</p>	<p>g13 關公七月風化之圖 【胡氏廣】 【張子】 【朱子】 【曹氏粹中】 【胡氏廣】 【胡氏廣】</p>	<p>g24 諸國世次圖</p>	<p>g25 作詩時世圖 【序】 64 箇所 【鄭氏康成】 20 箇所 【孔氏穎達】 44 箇所 【朱子】 129 箇所</p>	<p>g2 正變風雅之圖 【朱子】④</p>	<p>g8 泮宮圖 【朱子】</p>	<p>g14 冠服圖 【朱子】 【陳氏祥道】 【弁】 【孔穎達】 【註】 【臺笠】 【鄭氏康成】 【陸氏璣】 【孔穎達】 【緇】 【毛氏萇】 【陳氏祥道】 【朱子】</p>	<p>g5 十五國風地理之圖 【周氏斯盛】 【地理志】 【詩】 【蔡傳】 g10 七月流火之圖 【孔穎達】 【朱子】</p>
<p>g3 正變風雅之圖 【朱子】④</p>	<p>g8 泮宮圖 【朱子】</p>	<p>g13 關公七月風化之圖 【胡氏廣】 【張子】 【朱子】 【曹氏粹中】 【胡氏廣】 【胡氏廣】</p>	<p>g18 樂器圖 琴【陳氏祥道】 【瑟】 【陳氏祥道】 【笙簧】 【陳氏祥道】 【嚴氏粲】 【簫】 【應氏邵】 【郭氏璞】 【孔氏穎達】 【管】 【鄭氏康成】 【郭氏璞】 【籥】 【毛氏萇】 【朱子】 【祝】 【郭氏璞】 【壎】 【陳氏祥道】 【圉】 【郭氏璞】 【篪】 【賈氏公彥】 【鍾】 【陳氏祥道】 【磬】 【陳氏祥道】 【鼓】 【陳氏祥道】 【鄭氏康成】 【大】 【記】 【爾雅注】 【虞】 【考工記】 【毛氏萇】 【鄭氏康成】 【孔氏穎達】</p>	<p>g19 雜器圖 鼎【陳氏祥道】 【鬯】 【毛氏萇】 【許氏慎】 【鑄釜】 【毛氏萇】 【陸氏德明】 【缶】 【孔氏穎達】 【升斗】 【班氏固】 【陳氏祥道】 【筐筥】 【陳氏祥道】</p>	<p>g24 諸國世次圖</p>	<p>g25 作詩時世圖 【序】 64 箇所 【鄭氏康成】 20 箇所 【孔氏穎達】 44 箇所 【朱子】 129 箇所</p>	<p>g2 四始圖 【朱子】</p>	<p>g8 泮宮圖 【朱子】</p>	<p>g14 冠服圖 【朱子】 【陳氏祥道】 【弁】 【孔穎達】 【註】 【臺笠】 【鄭氏康成】 【陸氏璣】 【孔穎達】 【緇】 【毛氏萇】 【陳氏祥道】 【朱子】</p>	<p>g5 十五國風地理之圖 【周氏斯盛】 【地理志】 【詩】 【蔡傳】 g10 七月流火之圖 【孔穎達】 【朱子】</p>

表十五、欽定「詩傳圖」における引用文献、人名の割合

年代	引用人名・書名（「作詩時世圖」を除いて全167箇所※）	
唐以前	鄭玄（19）／孔穎達（13）／毛萇（12）／考工記（7）／周禮（5）／郭璞（…爾雅郭注5）／爾雅（4）／許慎（…說文解字4）／陸德明（…經典釋文2）／孫炎（…爾雅孫注2）／劉熙（…釋名2）／詩（…詩經本文1）／國語（1）／班固（…漢書1）／揚雄（…方言1）／陸氏璣（1）／賈公彥（1）／地理志（…漢書1）／爾雅注（1）／唐徐彥公羊解（1）	84
北宋	陳祥道（…禮書31）／聶崇義（…三禮圖2）／蘇氏（…蘇轍詩集傳1）／張子（…張載1）／曹粹中（…詩說1）	36
南宋	朱熹（31）／嚴粲（…詩緝4）／蔡傳（1）／輿地圖志（…輿地紀勝1）	37
元	梁益（詩經旁通…1）／劉瑾（…詩經通釋1）	2
明清	胡廣詩經大全（6）／周斯盛（2）	8

※「作詩時世圖」の引用は、詩の「正變」や百二十九首の詩の成立年代について毛傳、鄭箋、孔疏と朱熹の説とを比較したものである。

それでは、『欽定詩經傳説彙纂』の編纂者はなぜ解説のみを改編し、圖を「詩經大全圖」のままとしたのか。既述したように、「詩經大全圖」が實質的に羅復と劉瑾の圖譜であることは『詩經大全』の凡例に明記されており、『欽定詩經傳説彙纂』の編纂者はこのことを知っていたはずである。しかし、『欽定詩經傳説彙纂』の凡例には、『詩經』解釋には古くより圖譜が用いられたこと、そして「圖は三代の舊を傳えるもの」¹⁹なので収録し、合わせて考證を附したことが記されているだけで、「詩經大全圖」の由來や羅復や劉瑾の圖の正否については、全く觸れていない¹⁹。

『欽定詩經傳説彙纂』が編纂された當時、元代の儒者に對する評價は明代の儒者よりも相對的に高かった。このため、『欽定詩經傳説彙纂』の編纂者は元人の作成した圖であれば、その由來はわからなくとも、何かしら古いものを傳えていると考えた可能性がある²⁰。あるいは、北宋以後、圖は言葉や文字と違い解釋によって見解がわかれることのないものであるという考えがあった²¹。このような考え方から、註釋さえ改めれば、圖を考證する必要はないと判断したのかもしれない。少なくとも『欽定詩經傳説彙纂』

の編纂者が註目したのは解釋の内容であり、圖に何が描かれているかは、それほど大きな意味を持たなかったようである。

第三節 明代における改編

明代では『詩經大全』が多く翻刻され、當然その附録である「詩經大全圖」も翻刻された。また、南宋の「毛詩正變指南圖」や元代の『六經圖碑』の「詩經圖」、羅復の「詩傳圖」も翻刻された。これらの大部分の内容はその底本と変わらない。改編されたことが確認されるのは三種、胡賓「詩經圖全集」と張溥「詩經大全圖」における内容面での改編、そして盧謙、章達「詩經圖」における形態面での改編である。

第一項 内容面の改編

一、胡賓の「詩經圖全集」

「詩經圖全集」は嘉靖年間中後期に胡賓が編纂した『六經圖大全』の一篇であり、全三十圖が収録されている。その項目は次頁の表十六のようになる。

「詩經圖全集」の項目名および内容を明代以前の『詩經』圖譜と比較すると、同圖譜には元代の『六經圖碑』の「詩經圖」および明の「詩經大全圖」と共通する特徴が認められる^{二〇}。

まず、表中の傍線を引いた「毛詩小序」(h1)と「升歌間歌笙詩之圖」(h5)、「詩有六義三經三緯之圖」(h6)、「公車千乘之圖」(h28)から「鳥名く金玉」(h30)の圖譜は、圖と解説ともに『六經圖碑』と全く同じものである。h5は、『六經圖碑』のなかでは「經緯正變之圖」の一部だが、「詩經圖全集」では獨立した圖譜となっている。これらの圖譜は、現存する明代以前の圖譜では「詩經圖」のみに見え、ここから採録したと考えられる。

また、h2とh7、h8も『六經圖碑』から採録されたと見られる圖譜である。

「思無邪圖」(h2)は元代の『詩經』圖譜に初めて見える。これは「詩經大全圖」にも収録されているが、元代の圖とはやや異なる。元代の『六經圖碑』のほうは中央に「孔子言、詩三百、一言以蔽之、思無邪」の一文があり、この左右に朱熹の「善者可以感發人之善心」と「惡者可以懲創人之逸志」という言葉を配している。これに對して「詩經大全圖」では、さらにこの左右に朱熹などの言葉とされる「思無邪、魯頌駟篇之辭。夫子讀詩、至此而有」と「合於其心焉。是以取之、蓋斷章摘句云耳」を加え、この下部にも「其用歸於使人得其情思之正」、「情性是貼思」、「正是貼無邪」という言葉を加え、そ

それぞれの関係性を線で結んで示している。一三〇。「詩經圖全集」の「思無邪圖」(h2)は元代の『六經圖碑』と同じものである。

「經緯正變之圖」(h7)は風、雅、頌の正變に對應する詩篇の名稱を圖示しており、『六經圖碑』と「詩經大全圖」に同様の圖が収録されている。ただし、「詩經大全圖」のほうは圖の名稱が「正變風雅之圖」と異っており、元代の『六經圖碑』、そして「詩經圖全集」にはない朱熹の言葉が附されている。このため、h7は『六經圖碑』に由來すると考えられる。

表十六、胡賓「詩經圖全集」収録圖一覽

h1 毛詩小序 【碑同】	h2 思無邪圖【碑同・大同】	h3 四始圖【碑同・大同】	h4 正變風雅之圖 【碑同・大同】	h5 升歌間歌笙詩之圖【碑同】
h6 詩有六義 三經三緯之圖 【碑同・大異】	h7 經緯正變之圖 (經緯總圖・賦比興兼義圖)【碑同・大異】	h8 十五國風 地理之圖【碑同・大同】	h9 靈臺之圖【碑同・大同】	h10 辟離之圖【碑同・大同】
h11 泮宮之圖 【碑同・大同】	h12 皋門應門之圖 【碑同・大同】	h13 大東總星 之圖【碑同・大同】	h14 楚丘定之方中 圖【碑同・大同】	h15 公劉相陰陽圖【碑同・大同】
h16 七月流火 之圖【碑同・大同】	h17 豳公七月風化之 圖【碑同・大同】	h18 冠服圖【碑 異・大同】	h19 衣裳圖【碑異・ 大同】	h20 佩用圖【碑異・大 同】
h21 禮器圖【碑 異大同】	h22 樂器圖【碑異・大 同】	h23 雜器圖【碑 異・大同】	h24 車制圖【碑異・ 大同】	h25 兵器服圖【碑異・ 大同】
h26 周元戎圖 【碑同・大同】	h27 秦小戎圖【碑同・ 大同】	h28 公車千乘 之圖【碑同】	h29 出車一乘之圖 【碑同】	h30 鳥名、獸名、蟲名、 魚名、草名、木名、菜 名、穀名、金玉【碑同】

※各項目名の後、隅付括弧内にある「碑」は元代『六經圖碑』の「詩經圖」、「大」は明の「詩經大全圖」のこと。「碑」や「大」に続く「異」や「同」は、「詩經圖全集」と「六經圖碑」や「詩經大全圖」の圖解に、圖や解説、または項目名の異同があることを示している。

「十五國風地理之圖」(h8)と同様の圖は、南宋の「毛詩正變指南圖」以來、ほとんどの『詩經』圖譜が収録しており、編纂された時代によって地名が改められている。h8には「遼東、今遼陽省」や「和林城、今嶺北省」といった、元代の『詩經』圖譜にあって明の「大全圖」では削除された地名があることから、元代の『詩經』圖譜、上述した狀況からすれば『六經圖碑』のものであろう。

次に、h3、h4、h6、h9、h17、h26、h27は元代の『六經圖碑』と明代の「詩經大全圖」の兩圖譜に同名の項目が収録されている。このうち「詩有六義三經三緯之圖」(h6)以外は『六經圖碑』と「詩經大全圖」とも同じ圖を収録しているため、「詩經圖全集」がどちらの圖譜によったのか明らかではない。

また、網掛けのある、衣服や器物に關する項目 h18、h25は項目の分類と圖ともに「詩經大全圖」と同一である。ただし、「詩經大全圖」にあつた各器物の文字説明はすべて削除されている。元代の『六經圖碑』にも類似した項目はあるが、こちらは「冠服俎豆圭璧之圖」や「樂器舟車戈矛之圖」のように複數の種類をまとめて一つの項目としているうえ、収録している器物が異なる(次頁の圖二十)。

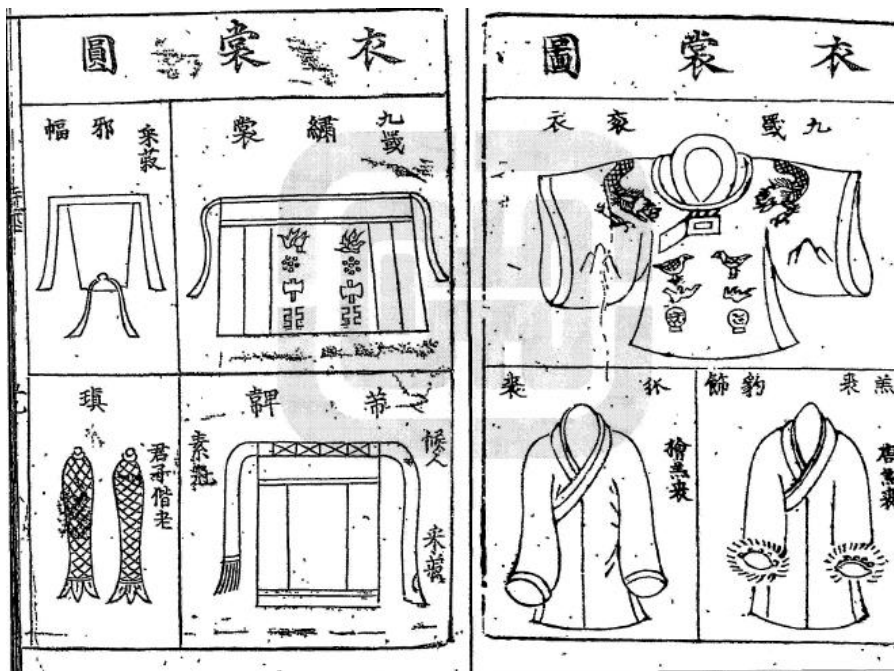
以上のように、「詩經圖全集」の圖には『六經圖碑』と「詩經大全圖」の特徴が見られ、さらにこの二つの圖譜とは異なる圖もある。胡賓は『六經圖碑』と「詩經大全圖」をもとに整理、改編を加えて「詩經圖全集」を編纂したと考えられる。

胡賓が元代の『六經圖碑』に着目したのは、これが「詩經大全圖」より古いというだけではなく、兩圖譜の異同に着目したからだろう。このことは、「毛詩小序」(h1)の順序によく表れている。「詩經圖全集」の順序は概ね「詩經大全圖」に準じており、増補された圖の大部分は『六經圖碑』の順序によつてゐる。しかし、「毛詩小序」(h1)だけは元來「詩經圖」の下端にあつたもので、後の萬曆年間に盧謙、章達が翻刻した『五經圖』では十六番目に配されているのだが、「詩經圖全集」では冒頭に配されている。

「小序」は漢代以來『詩』を解釋する上で重要な根據の一つであつた。しかし、「詩經大全圖」以前の『詩經』圖譜では、元代の「詩經圖」以外にこれを圖示したものは無かつた。一方、元代の『詩經』圖譜である『六經圖碑』や羅復の「詩傳圖」は、朱熹の言説を圖示した「思無邪圖」を冒頭に置き、明の「詩經大全圖」もこれを踏襲した。「詩經圖全集」が「毛詩小序」を冒頭に置き「思無邪圖」より先に示したことは、胡賓が『詩經』の解釋や學習において小序をより重視したからであろう。明代の『詩經』解釋は、天順元年に楊守陳が『詩私鈔』の中で朱熹の言説に拘らず、詩序に基づいた註疏をも『詩經』の解釋に取り入れたのに始まり、小序は次第に重んじられるようになった¹⁴。「詩

『詩經』の解釋の變化も関わっていたと考えられる。

圖三十、「詩經圖全集」の「衣裳圖」



二、張溥「詩經大全圖」にみえる改編

明代に勅撰書『詩經大全』が廣まると、『葉太史參補古今大方詩經大全』のように、『詩經大全』を底本とした書物が編纂された。崇禎年間に編纂されたと推測される張溥の『詩經註疏大全合纂』も、同じく『詩經大全』を底本として諸家の『詩經』註釋を加えた書物である。この『詩經註疏大全合纂』には、『詩經大全』と同じく「詩經大全圖」が収録されている。その内容は大部分が『詩經大全』のものと同じだが、元來末尾にあった「諸國世次圖」と「作詩時世圖」が冒頭に移されており、末尾には兵車を引く軍馬を圖示した「倭駟之圖」が加えられている。

「倭駟之圖」は、南宋の「毛詩正變指南圖」のみに見られる「秦小戎制圖」(a21)の一部である「小戎馬式」と全く同じ圖譜である(次頁の圖三十一)。このため、『詩經註疏大全合纂』の編者である張溥が「毛詩正變指南圖」から採録したことは疑いない。

圖三十一、「倭駟之圖」（右は張溥「詩經大全圖」、左は「毛詩正變指南圖」）



『詩經註疏大全合纂』には張溥の序があるが、圖譜については全く言及しておらず、「毛詩正變指南圖」の一圖だけを補った理由は不明である。

しかし、その理由を推測する一つの手がかりとなるのは、「毛詩正變指南圖」の廣まりである。『詩經註疏大全合纂』より前、萬曆年間ころに編纂された『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』の巻首には「毛詩正變指南圖」が収録されている。同書が「毛詩正變指南圖」を収録したことは不可解である。『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』は朱熹『詩經傳』の註釋書であるのに對し、「毛詩正變指南圖」の内容は漢唐の註疏や北宋の『詩經』註釋を主としている。一方、『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』の内容と整合性があるのは、むしろ朱熹の説を主體とした「詩經大全圖」である。『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』の編者が「毛詩正變指南圖」を収録したのは、おそらく内容面のことを考慮してではなく、吳繼仕以降、連年翻刻された『六經圖』の普及を受けてのことだろう。張溥が

「毛詩正變指南圖」の一部を採録したのも、あるいは同じ理由かもしれない。

なお、清代になり書肆の唐少村が刊刻した徐九一（徐汧）輯『詩經大全』（康熙三十五年）と黃際飛（黃越）校訂『重刻詩經大全』（康熙五十六年）の附録にある「詩經大全圖」は『詩經註疏大全合纂』のものと同じく「棧駟之圖」を収録している。唐少村は『詩經註疏大全合纂』の附録をそのまま収録したのだろう。

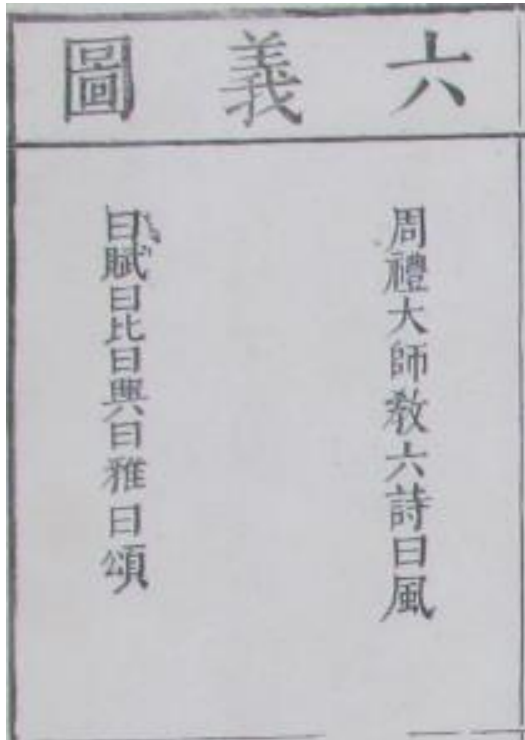
『詩經大全』の附録「詩經大全圖」は國家により編纂された圖譜であり、明代では安易に改編することは憚られたはずである。しかし、『詩經註疏大全合纂』が編纂された明代末期になると、その権威は既に揺らいでいたのだろう。また、勅撰の「詩經大全圖」は全國の學宮に頒布されており、清代にも少なからず傳わっていたと考えられる。唐少村が敢えて改編された「詩經大全圖」を採録したのは、明末に起こり始めた「詩經大全圖」改編の氣運を受け継いだのかもしれない。

第二項 形態面の改編

盧謙、章達の「詩經圖」は、盧謙が江西から持ち帰った「五經圖石本」を、章達が書物の體裁に編纂し直して翻刻した『五經圖』に収録されている。「五經圖石本」、すなわち元代『六經圖碑』では碑の二面に様々な圖譜が刻まれている。これらの圖譜は、譜である「四始圖」（d1）と「思無邪圖」（d6）、器物の圖である「樂器周車戈矛之圖」（d12）と「冠服俎豆圭璧之圖」（d15）を左右の端に配するように、類似した内容の圖譜が左右對稱になるように設計されている。これに對して、盧謙、章達の「詩經圖」は一定の基準にしたがい配列し直されている（**次頁の表十七**）。

まず、冒頭の「四始圖」（i1）から「毛詩小序小序小雅大雅三頌」（i22）までは一覽表である「譜」、そして地圖である「十五國風地理圖」（i12）、天文や軍制、建築、器物などの圖（i13～i29）を列ね、末尾には動植物などの名稱一覽（i30）を置いている。この順序は南宋の「毛詩正變指南圖」や元代の羅復の「詩傳圖」と類似している。『五經圖』にある李維禎と章達の序文にはこれらの宋元『詩經』圖譜には一切言及されておらず、これらの圖譜に基づいたとは考えがたい。當時まず参照するとすれば、恐らくは勅撰の「詩經大全圖」の順序に基づいたのだろう。

ところで、『五經圖』の「詩經圖」には、一つだけ『六經圖碑』には見えない「六義圖」（i3）が収録されている（**次頁の圖三十二**）。先に示した『六經圖碑』の「詩經圖」の項目は清末から民國ころに作成された二種の拓本によったが、特に缺けた箇所は見られず、「六義圖」だけが脱落したとは考えがたい。また、清の康熙四十八年（一



圖三十二、盧謙・章達「詩經圖」の「六義圖」

i30 鳥・獸・蟲・魚・金玉・草木・菜・穀名【d23】	i25 圭璧禮器圖【d15】	i20 辟離圖【d13】	i15 楚丘定之方中圖【d3】	風【d22】	i10 毛詩小序國風【d22】	i6 賦比興兼義圖【d10】	i1 四始圖【d1】
	圖【d12】 i26 樂器雜器車制	i21 皋門應門之圖【d16】	i16 公劉相陰陽圖【d2】	小雅大雅三頌【d22】	i11 毛詩小序小雅大雅三頌圖【d8】	檜曹邕・三頌考【d7】 i7 二南 邶鄘衛 王鄭 齊魏唐秦 陳	i2 思無邪圖【d6】
	i27 周元戎圖【d19】	i22 泮宮圖【d17】	i17 公車千乘之圖【d21】	圖【d4】	i12 十五國風地理圖【d8】	i8 笙歌問歌笙詩圖【d7】	i3 六義圖
	i28 秦小戎圖【d18】	圖【d9】 i23 爾公七月風化	i18 出車一成之圖【d20】	【d5】	i13 大東總星圖	i9 風雅頌【d11】	i4 三經三緯【d10】
	i29 兵器服圖【d12】	i24 冠服圖【d15】	i19 靈臺圖【d14】		i14 七月流火圖		i5 正變風雅之圖【d10】

表十七、盧謙・章達『五經圖』中の「詩經圖」収録圖一覽

七〇九)に『六經圖碑』を翻刻した江爲龍の『朱子六經圖』にも「六義圖」は見えない。このため、「六義圖」(i3)は章達によって増補された可能性がある。

第四節 清代における改編

清代の『詩經』圖譜のなかで、前代の『詩經』圖譜を改編したことが確認されるものは七種ある。このうち、三種は康熙年間に書肆が刊刻した『詩經』舉業書の附録、残りの四種は雍正、乾隆年間に翻刻された宋元『詩經』圖譜の翻刻である。

第一項 『詩經』舉業書の附録における改編

一、姜文燦「深柳堂詩經圖考」

姜文燦が編纂した「深柳堂詩經圖考」は、康熙二十三年（一六八四）の『詩經正解』巻首の附録である。「深柳堂詩經圖考」の典據については、『詩經正解』凡例に「諸書を参考して採録した」とあるだけで、具體的なことは記していない^{一五}。一方、後の『四庫全書總目』は「深柳堂詩經圖考」の内容を「南宋の『六經圖』や明の馮復京『六家詩名物疏』を踏襲しただけであり、その解釋は極めて浅はかだ」と指摘している^{一六}。

しかし、この指摘は必ずしも正確ではない。「深柳堂詩經圖考」全九十七項目（次頁の表十八）のうち、『四庫全書總目』が指摘するように南宋『六經圖』の「毛詩正變指南圖」と、圖、解説ともに同じなのは「楚丘揆日景圖」（j4）、「公劉相陰陽圖」（j5）、「清廟閼宮」（j12）、「秦小戎圖」（j68）の四圖のみであり、「明堂」（j11）は圖こそ「毛詩正變指南圖」のものだが、解説は異なる。

古者、祭天於圓丘、掃地而祭。其禮極簡。故又于季秋之月、大享于明堂、以享上帝、以文王配。傳曰、宗祀文王於明堂、以配上帝。我將之詩、此祀文王所歌之詩也。明堂、周制也。

（「毛詩正變指南圖」の「我將明堂圖」）

天子立明堂者、所以通神靈、感天地、正四時、出教化、崇有德重有道。宗祀先王、祀五帝也。其制上圓下方、八窗四闔、布政之宮。在國之陽、上圓法天、下方法地、八窗象八風、四闔法四時、九室法九州十二堂法十二辰、三十六戸法三十六雨、七十二牖法七十二風、乘九室之數也。方三十六丈通天屋高八十一尺、黃鍾九九之數■三十■四方、亦七宿之象也。

※■は判讀できない箇所。

（「深柳堂詩經圖考」の「明堂」）

表十八、「深柳堂詩經圖考」収録圖一覽

j17 鞞	j89 升斗	j81 圍	j73 冑	j65 旃	j57 籥	j49 圭 (桓圭、信圭、躬圭)	j41 琴	j33 俎	j25 雜佩	j17 袞衣	j9 皋門應門	j1 天文圖
	j90 篋管	j82 祝	j74 干	j66 旒	j58 鞞【末】	璧、蒲璧)	j42 瑟	j34 簋	j26 鞞	j18 羔裘豹	j10 泮宮	j2 月淹日 光為日食之 圖
	j91 旂	j83 籥	j75 戈	圖 j67 周元戎	j59 艾	j51 圭瓊	j43 犧尊	j35 登	j27 縞	j19 狐裘	【指】 j11 明堂	j3 地影蔽 月為月食之 圖
	j92 旒	j84 鼎	j76 戚	圖【指】 j68 秦小戎	j60 矛	j52 璋瓊	j44 壺	j36 爵	j28 睨	j20 繡裳	宮【指】 j12 清廟闕	j4 楚丘揆 日景圖【指】
	j93 旌	j85 鬻	j77 揚	j69 輪・輻	j61 弓	j53 鐘	j45 鬱鬯	j37 罍	j29 筭	j21 芾鞞	j13 罍	【結】 j5 公劉相 陰陽圖
	j94 侯	j86 錡	j78 塤	j70 鞞	j62 虎鞞	j54 鼓	j46 卣	j38 壘	j30 摺	j22 邪幅	j14 弁	址 j6 輿地全圖內 標十五國都故
	j95 決	j87 釜	j79 管	j71 斡	j63 矢	j55 磬	j47 柎黍	j39 几	j31 籩	j23 瓊	j15 臺笠	j7 靈臺
	j96 拾	j88 缶	j80 箎	j72 甲	j64 魚服	j56 笙	j48 福衡	j40 筵	j32 豆	j24 觶	j16 緇撮	j8 辟雍

※「j1」は書中に圖の名稱が記されていないため、ここでは假に「天文圖」とした。

※「毛詩正變指南圖」と同じ項目は隅付括弧の中に「指」。『三禮圖』と同じものは「三」、典據未詳は「末」とした。

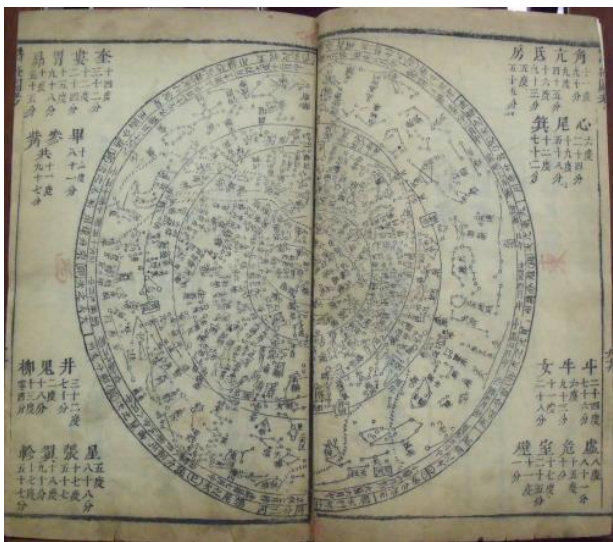
「毛詩正變指南圖」の解説が引用するのは『毛詩』や『周禮』の註疏だが、「深柳堂詩經圖考」のほうは「七十二牖法七十二風」までは『白虎通義』の「辟雍」に見え、その後は北宋の陳祥道『禮書』卷四十「周明堂」に見える一七。

また、「靈臺」(j7)以降の九十一圖は、北宋の聶崇義『三禮圖』からの採録や出典未詳の七圖なのを除き、すべて明の「詩經大全圖」の圖である一八。なかでも圖と解説とも

に「詩經大全圖」と同じなのは「矛」(j60)、「虎韞」(j62)、「魚服」(j64)、「周元戎圖」(j67)、「輪」(j69)、「轂」(j70)、「柷」(j82)、「釜」(j87)、「鞞」(j97)の九項目である。その他の項目の解説は「毛詩正變指南圖」や『毛詩』の註疏、『三禮圖』朱熹『詩集傳』、『六家詩名物疏』などの訓釋である。

さらに、「深柳堂詩經圖考」冒頭の「天文圖」(j1)、「月淹日光爲日食之圖」(j2)、「地影蔽月爲月食之圖」(j3)の天文圖三種は、それまでの『詩經』圖譜に見られない(本頁の圖三十三)。「天文圖」(j1)は明の章漢『圖書編』の「昊天垂象圖」に類似するが、圖中には「昊天垂象圖」にない「赤道」「黃道」を示す円を描いている¹⁹。姜文燦が「昊天垂象圖」を改編したか、他に「赤道」「黃道」を示した圖があり、それを採録した可能性がある。「月淹日光爲日食之圖」(j2)と「地影蔽月爲月食之圖」(j3)は、末尾に錢塘の洪雲來なる人物が著した「交食論」という日月食の原理に関する解説があり、あるいはこの人物が作成したのかもしれない²⁰。

圖三十三、「深柳堂詩經圖考」の天文圖



以上のように、「深柳堂詩經圖考」の内容は「詩經大全圖」を主として、『詩經』以外の圖譜や諸書を広く採録したものであった。採録の基準は『詩經正解』に言及がなく明らかにはしない。だが、編者の姜文燦には、明代以来の標準的な『詩經』圖譜であった「詩經大全圖」を改編することで、新たな『詩經』圖譜を作ろうとする意圖があったのだろうと推測される。

二、趙燦英『詩經集成』

趙燦英が編纂した「詩經圖考」は、康熙二十六年（一六九〇）の舉業書『詩經集成』巻首の附録である。『詩經集成』のなかで、趙燦英は「詩經圖考」の典據に言及していないが、その内容は先述の「深柳堂詩經圖考」とほぼ同じものである。兩圖の違いは「深柳堂詩經圖考」の冒頭にある天文關聯の三圖（j1、j2、j3）と、「輿地全圖内標十五國都故址」（j6）が削られており、圖の順序が一部異なる。

「詩經圖考」の編纂意圖は『詩經集成』の凡例に記されており、ここには、圖譜は科舉受験の學習に必ずしも役立つわけではないが舊來の書物にあることから収録したと、そして古今共通の事物は「天官」、「輿圖」、「物象」の諸書に考察されているため詳細を述べず、異なる事物は失傳する可能性があるため一部を収録したという二點が挙げられている^二。

「詩經圖考」はその名稱と内容から、明らかに「深柳堂詩經圖考」を改編した圖譜である。ただし、改編を行った理由は他書にある事物を省略したというだけで、特に古今で共通するという理由で地圖や天文圖を削ったことは、讀者が参照する上で必要性があったとは考え難い。そもそも、編者の趙燦英は圖譜が「受験學習に役立つとは限らない」とし、収録理由についても「舊來の書物にも附されている」という消極的なものであった^三。このことからすれば、「詩經圖考」における改編は『詩經』の學習や解釋とは別の要因、例えば刊刻費用の削減など、經濟的な側面から行われたのではないかと推測される。

三、高朝璣『詩經體註圖考』

康熙五十年（一七一二）に高朝璣が編纂した舉業書『詩經體註圖考』には全八十七項目の圖譜が収録されており、すべて圖のみで解説はない（次頁の表十九）。

圖譜の典據は、『詩經體註圖考』に示されていない。しかし、『詩經體註圖考』の圖を他の『詩經』圖譜と比べると、大部分は「詩經大全圖」からの採録だと考えられる。書中に「俊駟」圖が見えることから、高朝璣は明代の勅撰「詩經大全圖」ではなく、明末の『詩經註疏大全合纂』か、清代に唐少村が翻刻した「詩經大全圖」を参照したのであらう。このほか、末尾の「視濯視牲圖」は北宋の楊復『儀禮圖』に見える圖である^三。

内容面から見れば、『詩經體註圖考』は「詩經大全圖」の天文地理、器物圖を取り出し、「視濯視牲圖」（k87）を補っただけであり、先述した「深柳堂詩經圖考」のような大幅な改編は見られない。むしろその特徴は、上圖下文の形式で本文中に圖を示したこ

とにある。これは、小説などでは古くより見られるが、『詩経』の圖譜では『詩経體註圖考』までほぼ見られない體裁である（次頁の圖三十四）。

表十九、『詩経體註圖考』収録圖一覽

k11 幌	地理圖	k1 十五國風	k2 琴	k3 瑟	k4 鐘	k5 鼓	k6 壘	k7 筐	k8 管	k9 錡	k10 釜	
k21 弁	壁、蒲壁	k22 壁（穀）	k23 觶	k24 鞞	杼	k15 璜	k16 杼	揆日圖	k17 定中	k18 旄	k19 旗	k20 旌
k31 小戎（輶、輶等）	k32 倭駟	k33 虎	k34 甲	k35 篋	k36 缶	k37 鬻	火	k38 流	k39 縞	k40 籩		
k41 豆	k42 袞衣	k43 筮	服	k44 魚	k45 旒	k46 旒	k47 元戎	k48 決	k49 拾	k50 墳		
k51 篋	星圖	k52 大東總	k53 俎	k54 鞞	幅	k56 邪	k57 台笠	撮	k58 緇	應門	k59 皋門	k60 圭
k61 璋瓊	k62 靈臺	雍	k63 辟	k64 登	k65 罍	k66 干	k67 戈	k68 戚	k69 揚	陰陽	k70 相	
k71 圭（桓圭、佶圭、信圭、躬圭）	k72 壺	k73 柜	k74 鬯	k75 卣	k76 鞞	k77 磬	k78 祝	k79 圍	k80 簫			
k81 管	k82 鼎	k83 泮	衡	k84 福	尊	k85 犧	k86 貝	視牲圖	k87 視濯			

※ k13 「爵」、k34 「甲」、k52 「大東總星圖」、k65 「罍」は書中に圖の名稱が無いため明代の「詩経大全圖」に見える同じ圖の名稱を記した。

高朝瓊は序文のなかで圖も「經書の内容を探究するための手がかり」であり、圖を附すことで「むやみに受験學習の參考書を提供するのではない」と述べている^{二四〇}。『詩経體註圖考』が舉業書の體裁をとる以上、編纂者が本心から圖譜を經學探究の材料と考えていたのかやや疑わしい。しかし、南宋の頃より『詩経』卷首の附録が多かった『詩経』圖譜が、『詩経』本文と容易に對照できるより實用的な形式に改められたことは、『詩経』

圖譜の變遷過程における一つの大きな變化であつた。

圖三十四、『詩經體註圖考』の圖譜



第二項、宋元『詩經』圖譜の翻刻と改編

一、盧雲英「詩經圖」

盧雲英は雍正二年（一七二四）、その祖である盧謙が翻刻した『五經圖』を再び翻刻した。盧雲英『五經圖』の凡例には「底本には解説のない圖があるので「經傳」や他書から節録した」と記されている。實際、盧謙本はその底本となった元代の『六經圖碑』と同じく圖に對應する解説が無いのに對して、盧雲英本には複数の圖に解説が附されている（次頁の表二十）。

表二十に示したように、天文地理の圖に相當する「七月流火圖」（111）から「公劉相陰陽圖」（115）、建築圖の「靈臺圖」（118）から「泮宮圖」（121）、そして衣冠器物の圖である「冠服圖」（123）から「樂器圖」（126）までと「兵器服圖」（131）には、新たに解説が附されており、その内容は明の勅撰「詩經大全圖」と全く同じである。このことから、盧雲英本の凡例にある「經傳」が『詩經大全』を含む明代の『五經大全』を指すことは明らかである（次頁の圖三十五）。

また、盧雲英本「詩經圖」の圖はほとんどがその底本である盧謙本と同じだが、唯一「靈臺圖」（118）だけは圖が書き換えられている（次々頁の圖三十六）。これについては

盧雲英本何かに基づいたのか、新たに描いたのか明らかではない。

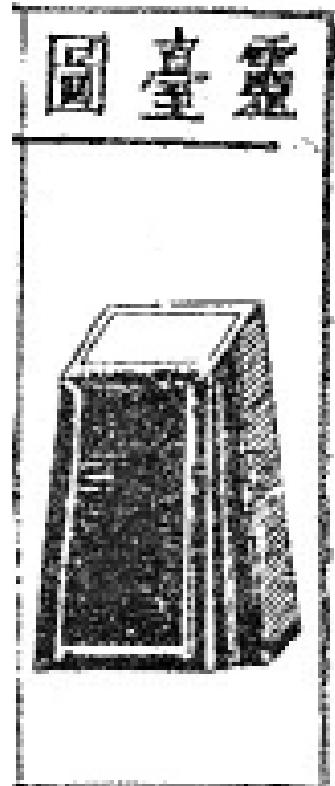
表二十、盧雲英『五經圖』中の「詩經圖」収録圖一覽

11 四始圖	12 思無邪圖	13 六義圖	14 三經三緯	15 正變風雅之圖
16 賦比興兼義圖	17 十五國考・二雅考・三頌考 衛・王鄭・齊魏唐秦・陳檜曹邠・三頌考	18 賦比興三體(風雅頌)	19 毛詩小序國風	
110 毛詩小序(毛詩小序小序小雅大雅三頌)	111 七月流火圖【大全】	112 十五國風地理圖【大全】	113 大東總星圖【大全】	114 楚丘定之方中圖【大全】
115 公劉相陰陽圖【大全】	116 公車千乘之圖	117 出車一成之圖	118 靈臺圖【大全】	119 辟廱圖【大全】
120 皋門應門之圖【大全】	121 泮宮圖【大全】	122 豳公七月風化圖	123 冠服圖【大全】	124 佩用圖(圭璧禮器圖)【大全】
125 禮器圖(圭璧禮器圖)【大全】	126 樂器圖(樂器雜器車制圖)【大全】	127 雜器圖(樂器雜器車制圖)	128 車制圖圖(樂器雜器車制圖)	129 周元戎圖
130 秦小戎圖	131 兵器服圖【大全】	132 鳥獸・蟲魚・金玉・草木・菜穀名		

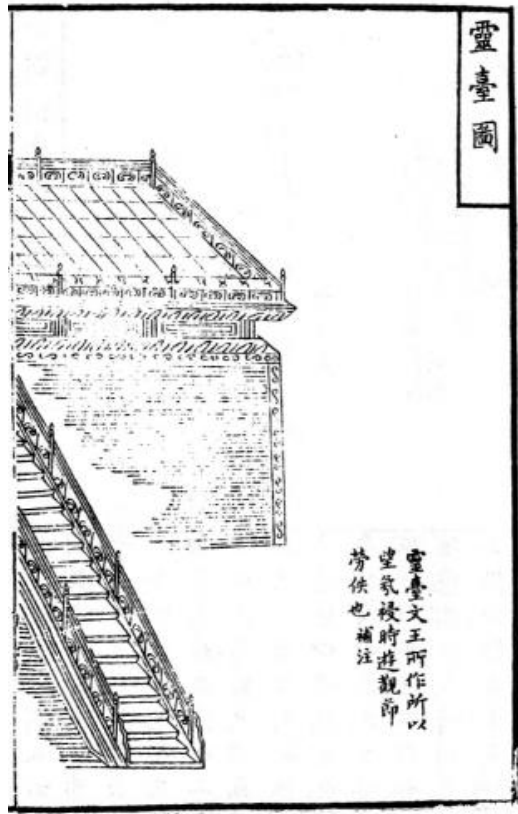
圖三十五、「七月流火圖」(上は「詩經大全圖」、下は盧雲英「詩經圖」)



圖三十六、「靈臺圖」(右は明の盧謙本、左は清の盧雲英本)



靈臺圖



二、王疇「毛詩正變指南圖」

乾隆五年(一七四〇)、王疇が編纂した『六經圖定本』には「毛詩正變指南圖」が収録されている。「毛詩正變指南圖」と題していることから、南宋の楊甲が編纂した同名の『詩經』圖譜の翻刻であるように見えるが、實際の内容は相當異なる(次頁の表二十一)。

『六經圖定本』の王疇の自序には、元の「六經圖碑」、南宋『六經圖』の最も古い翻刻である明の吳繼仕本や、その後まもなく翻刻された郭若維本、既述した清代の江爲龍本や潘宗鼎本といった諸本を對照して圖譜の遺漏や省略を發見したため、南宋の『六經圖』を主とし、元代の『六經圖碑』を副として後學のために校勘を試みたという。

表二十一、王暉『六經圖定本』所収「毛詩正變指南圖」収録圖一覽

m1 詩篇名	m2 作詩時世	m3 周公、召公、衛、齊、鄒、曹、陳、秦、晉、宋世次	m4 族譜	m5 四始圖【碑】
m6 六義圖【盧】	m7 三經三緯	m8 思無邪圖【碑】	m9 正變風雅圖	m10 賦比興兼義圖
m12 十五國風【地理】	m13 楚邱定之方中圖【碑】	m14 大東總星圖【碑】	m15 公劉相陰陽圖【碑】	m16 七月流火圖【碑】
m18 皋門應門圖【碑】	m19 齊國風挈壺氏圖	m20 辟廱圖【碑】	m21 泮宮圖【碑】	m22 出車一乘圖
m24 秦小戎圖【指・碑】	m25 車制圖【碑】	m26 載芟藉田圖	m27 甫田歲取十千圖	m28 大田雨我公田圖
m30 冠服圖【碑】	m31 兵器服圖【碑】	m32 佩用圖【碑】	m33 禮器圖【碑】	m32 器物釋名
m29 我將明堂圖	m23 周元戎圖【指・碑】	m17 爾公七月風化圖【碑】	m11 升歌間歌笙詩之圖【碑】	m1 詩篇名

※表中、圖と解説ともに「毛詩正變指南圖」と同じ項目は網掛けし、『六經圖碑』の「詩經圖」と同じ項目は枠で囲った。圖と解説が異なる項目は、隅付括弧内に、共通する圖、解説の順で示し斜線で区切った。「毛詩正變指南圖」は「指」、「六經圖碑」の「詩經圖」は「碑」、「詩經大全圖」は「大全」、「欽定詩經傳說彙纂」の本文は「傳說」、同書の「詩傳圖」は「欽」、盧謙あるいは盧雲英『五經圖』の「詩經圖」は「盧」と略した。

王暉が参照した資料は「毛詩正變指南圖」の末尾にある「毛詩圖參訂」に記載されている。ここには、「毛詩圖石本」、すなわち『六經圖碑』の「詩經圖」に収録されている「四始圖」(m5)、「六義圖」(m6)、「三經三緯圖」(m7)、「思無邪圖」(m8)、「正變風雅圖」(m9)、「比興賦兼義圖」(m10)、「升歌間歌笙詩之圖」(m11)、「爾公七月風化圖」(m17)は「吳本」、すなわち南宋の「毛詩正變指南圖」の吳繼仕翻刻本では失われた圖譜なので補ったこと、そして「楚邱定之方中圖」(m13)、「大東總星圖」(m14)、「七月流火圖」(m16)、「車制圖」(m25)、「冠服圖」(m30)、「兵器服圖」(m31)、「佩用圖」(m32)、「禮器

圖」(m33)は南宋の「毛詩正變指南圖」に不足のある圖なので、「御書詩經圖」によって補ったという^{二五}。前頁の表二十一にあるように、確かに王暉「毛詩正變指南圖」が収録する圖譜の大部分は南宋の「毛詩正變指南圖」や『六經圖碑』のいずれかに既出のものであり、解説には『欽定詩經傳說彙纂』の本文や「詩傳圖」から採録されたものが散見する。

しかし、一部の内容には、王暉の記した編纂、校勘の經緯とやや異なる点もある。例えば、「六義圖」(m6)は『六經圖碑』の翻刻である盧謙や盧雲英の『五經圖』に初めて見える圖譜であり、『六經圖碑』の原碑のみを参照したのではないらしい。また、「冠服圖」(m30)から「禮器圖」(m33)までの解説は、すべて明代の「詩經大全圖」に見える。この箇所だけ『欽定詩經傳說彙纂』に據らなかつた理由は明らかではない。このように、王暉「毛詩正變指南圖」は収録基準に不明な点はあるものの、全體としては宋元『詩經』圖譜を折衷し、『欽定詩經傳說彙纂』の解説を加えて編纂された新たな圖譜であった。

三、鄭之僑「詩經圖」

「詩經圖」は乾隆八年(一七四三)に刊刻された鄭之僑『六經圖』に収録されている。この圖譜は、乾隆八年述古堂版が最も早いものである。しかし、版によって収録する圖や順序が一部異なる。國立公文書館所藏の昌平坂學問所舊藏本および木村兼葭堂舊藏本によって、その収録項目を示すと、次の表二十二のようになる。

『六經圖』の鄭之僑自序には元代の『六經圖碑』に誤りが多かつたため、諸説を集めて校訂したとある。さらに、凡例には収録内容ごとの校訂方法が記されている。「詩經圖」に關しては、地理圖の誤りは「大全舊本」によって校訂したこと、車服禮器の誤りは「舊圖」を廣く參照して補ったこと、明堂は陳祥道『隸書』と楊氏、李氏の説を合わせたことを記している^{二六}。また、「冠服俎豆圭璧之圖」(n25)の冒頭には「大全」から解説を補ったという註記がある^{二七}。

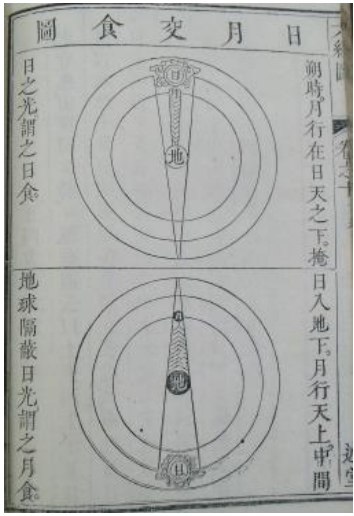
實際に鄭之僑「詩經圖」を他の『詩經』圖譜と比較してみると、圖は地理圖を除き改編されておらず、表二十二に示したように、n3、n7、n10、n12、n13、n15、n20、n23、n27の十九項目に解説を補っている。先に挙げた凡例には鄭之僑が「大全舊本」すなわち明の『五經大全』そして陳祥道『隸書』を參照したとあるが、「詩經圖」の解説のなかで『詩經大全』から補っている項目は「皋門應門圖」(n17)と「明堂之圖」(n23)のみである。ほかの「朱子曰」と朱熹の言辭を引用する箇所は、『欽定詩經傳說彙纂』の「詩

傳圖」と全く同じであり、ここから採録したと考えてよいだろう。また、「四始之圖」(n3)や「公劉相陰陽圖」(n7)のように、『欽定詩經傳說彙纂』から引用した解説に、さらに他書の記載を追加した図譜もある(次頁の圖三十七)。「詩經圖」は凡例と異なり、鄭之僑は主に『欽定詩經傳說彙纂』に依據して『六經圖碑』を校訂した。このほか、北京大學所藏の版本では、表二十二の項目以外に「十五國世次圖」、「作詩時世之圖」、「詩經大全圖」や『欽定詩經傳說彙纂』の「詩傳圖」に既出の圖、「日月交食圖」は姜文燦「深柳堂詩經圖考」に同様の圖(表十八「j1」)が見える(次頁の圖三十八)。鄭之僑の凡例にこれらの圖譜の増補は記されておらず、鄭之僑が加えたものかどうか明らかではない。

表二十二、鄭之僑『六經圖』の「詩經圖」収録圖一覽

n1 十五國風地理之圖	n2 思無邪圖	n3 四始之圖 【大序・欽】	n4 大東總星之圖 【欽】	n5 楚邱定之方中圖 【欽】	n6 七月流火圖 【欽】
n7 公劉相陰陽圖 【欽・指】	n8 關公七月風化圖	n9 二南 邶鄘 衛王鄭 齊魏 唐秦・陳檜曹 邠・周魯商頌	n10 詩有六義之圖 【欽】	n11 經緯總圖	n12 賦比興兼義圖 【傳說】
n13 正變風雅圖 【欽】	n14 升歌間歌 笙詩之圖	n15 靈臺之圖 【不明】	n16 辟廱圖 【欽】	n17 皋門應門圖 【詩經大全】	n18 泮宮圖 【欽】
n19 周元戎圖 【欽】	n20 秦小戎圖 【欽】	n21 公車千乘之圖	n22 出車一乘圖	n23 明堂之圖 【白虎通・禮記大全】	n24 清廟閟宮之圖 【指】
n25 冠服俎豆圭璧之圖 【欽】	n26 樂器舟車 戈矛之圖 【欽】	n27 毛詩小序之圖 【欽】	n28 鳥獸草木之名		

※隅付括弧内には、解説の典據を示した。「傳說」は『欽定詩經傳說彙纂』の本文、「欽」は同書の「詩傳圖」、「指」は「毛詩正變指南圖」、その他は書名を記した。複数の典據があるものは斜線で区切った。



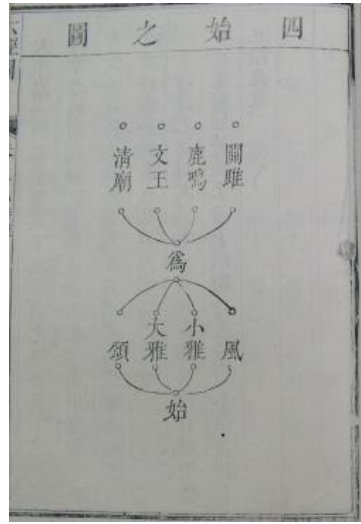
十五國世次圖

契	昭明	相土	昌若	曹圉	冥
振	微	報丁	報乙	報丙	主壬
主癸	湯	外丙	仲壬	太甲	沃丁
太庚	小甲	雍巳	太戊	仲丁	外壬
河亶	甲	祖乙	祖辛	沃甲	祖丁
南庚	陽甲	盤庚	小辛	小乙	武丁
祖庚	祖甲	庚	武乙	太丁	
帝乙	紂				

作詩時世之圖

商	太	甲	之	世
詩		那		

圖三十八、鄭之僑「詩經圖」の「十五國世次圖」、「日月交食圖」



大序以一國之事繫天下之末謂之風言天下之事情四方之風謂之雅雅者正也言王政之所由廢興也故有大小故有小雅焉有大雅焉頌者美盛德之形容以其成功告於神者也所謂四始詩之至也

朱子曰詩之所以爲詩者至是無餘蘊矣後世雖有作者其孰能加於此乎邵子曰刪詩之後世不復有詩者正謂此也

四始圖

關雎 鹿鳴 文王 清廟

爲

風 大雅 小雅 頌 始

朱子曰詩之所以爲詩者至是無餘蘊矣後世雖有作者其孰能加於此乎邵子曰刪詩之後世不復有詩者正謂此也

圖三十七、「四始圖」(右は「欽定詩經傳說彙纂」、左は鄭之僑「詩經圖」)

四、楊魁植「詩經圖」

この「詩經圖」は、楊魁植、楊文源父子が元代の『六經圖碑』をもとに編纂、校訂し乾隆三十七年（一七七二）ころに完成した『九經圖』の一篇である。本書は、『六經圖碑』の「六經」の「春秋圖」を「左氏」、「公羊」、「穀梁」三傳に分け、宋代の聶崇義『三禮圖』や楊復『儀禮圖』をもとに作成した「儀禮圖」を加えたため、『九經圖』となっている。

『九經圖』の凡例には校訂について、禮は「欽定三禮義疏」に依據したとある以外、ほかの資料に言及しておらず、さらに經書によって、あるいは註釋によって様々な解釋があるので、讀者が自身の見解に従えばよいと述べている^{二八}。

楊魁植「詩經圖」の内容を見ると、『六經圖碑』の「詩經圖」通り解説の無い箇所が多い（次頁の表二三三）。しかし、「四始之圖」（n1）、「公劉相陰陽圖」（n6）、「周元戒圖」（n19）の三圖には『欽定詩經傳說彙纂』の「詩傳圖」と全く同じ解説を附している。禮圖と同じく、楊魁植は「詩經圖」でも清の欽定書を参照し、増補したようである。また、末尾には『六經圖碑』にはなかった「作詩時世圖」が補われている。これも、恐らくは『欽定詩經傳說彙纂』から採録したのだろう。このように、楊魁植「詩經圖」は『六經圖碑』の不足を『欽定詩經傳說彙纂』の「詩傳圖」より補った圖譜であった。

『九經圖』の編者楊氏父子が『欽定詩經傳說彙纂』の「詩傳圖」以外の圖譜や諸家の説を採らなかった原因の一つは、『九經圖』の主な編纂目的が經書の學習、なかでも科舉試験対策だったことにある。『九經圖』に寄せられた諸氏の序には、學生が受験學習に努力するほど見聞を狭めていることや、圖譜が經書の解釋に役立ち見聞を廣めるといった編纂意義を擧げている^{二九}。これに對して、編者の楊文源の序には「近頃の科舉は秋に開催され、策問にはしばしば圖學が出題されることから、父が苦心探究して『九經圖』を編纂したことを思う」と記されている^{三〇}。このように科舉のことを念頭においていたため、『九經圖』の「詩經圖」では『欽定詩經傳說彙纂』以外の内容を加えることがなかったのだろう。『九經圖』の「凡例」は南宋の『六經圖』のほか、當時の坊本に圖譜が附されていたことにも言及しており、『九經圖』の編者は他の經書圖譜の存在を知らなかったわけではなく、科舉受験に不要な圖や解説を意圖的に取り上げなかったのだと考えられる^{三一}。

明代に『六經圖碑』を翻刻した盧謙は盧天祥の後裔であり、その事情を知っていたのか、『六經圖碑』の編者については一切言及していない。これに對して、清代ではその編者を朱熹とする説が現れた。

清代でも早期に『六經圖碑』を翻刻した江爲龍は、その翻刻書を『朱子六經圖』と題した。これは江爲龍が底本の編者を朱熹と考えていたのではない。『朱子六經圖』の自序には、康熙四十七年、周子用より「朱熹の『六經圖』を贈られたと記されていることから、江爲龍はそれを信じたのだろう^{三三}。つまり、『朱子六經圖』の編纂より前に、編者を朱熹とする説が行われていたらしい。

清の周中孚は、江爲龍が『六經圖碑』に四書圖を加え、意圖的に「朱子」の名を書名に冠したとする^{三三}。しかし、江爲龍の自序を見る限り、江爲龍は周子用が贈った圖が『朱子六經圖』と言われるもので、これを整理校勘した上で四書の圖解を採録したと述べており、意圖的ではないようである。『六經圖碑』は朱熹の解釋を圖示した圖譜を冒頭に収録していることから、おそらく『六經圖碑』の編纂者が朱熹だという風説があり、江爲龍もそれを疑わなかったのだろう。このためか、江爲龍『朱子六經圖』では、改編は全く行われていない。江爲龍の考えの正否はともかく、その翻刻は朱熹の學問を繼承し、經書考證の資とするために行われたものであった。

第二項 『六經圖碑』の内容や編者に對する疑義

江爲龍『朱子六經圖』から十數年を経た雍正元年（一七二三）、常定遠が『六經圖碑』の翻刻である盧謙『五經圖』をさらに翻刻し『六經全圖』を刊刻した。『六經全圖』に寄せられた諸家の序のなかには、元代の『六經全圖』と他本との異同や編纂年代に關する見解が記されている。牟欽元の序には「漢宋以來、學者は經書を考訂し、その成果を石に刻み傳えたが、現存するのは鵝湖書院の石刻だけである」や「六經の坊本は『六經圖碑』を篇首に附すが、簡略で物事の本末を推し測ることができない」とあり、萬邦榮の序には「盧謙『五經圖』に先んずる『六經圖碑』は『文獻通考』に記載がなく、『六經圖碑』と『五經圖』を比べると、圖の順序や内容の多くが異なる。その理由は明らかではない。（『五經圖』の底本である『六經圖碑』は）あるいは元、明の間に編纂されたものかもしれない」とある^{三四}。

また、江爲龍『朱子六經圖』の翌年に翻刻された盧雲英『五經圖』の凡例は、楊甲『六經圖』の吳繼仕本は何度か翻刻されたが、それらの翻刻本と盧謙の『五經圖』との間には異同が多いこと、そして『六經圖碑』の原序（盧謙『五經圖』の序）には編者の姓名

が無いことから『六經圖碑』は一人の人物によって編纂されたものではないことを指摘している^{三五}。常定遠『六經全圖』と盧雲英『五經圖』の刊刻は全く別個に行われたが、どちらの序にも『六經圖碑』の由来に関する疑義や、『六經圖碑』と他の圖譜との異同が指摘されている。しかし、その異同の理由までは明らかでなかったことから、『六經圖碑』を大幅に改編することはなかったのだろう。

第三項 『六經圖碑』の優位性に関する意識

乾隆年間に宋元の經書圖譜を翻刻、改編した書物には、王疇『六經圖定本』（乾隆五年）、鄭之僑『六經圖』（乾隆八年）、楊魁植『九經圖』（乾隆三十七年）がある。このなかで、鄭之僑は宋元の經書圖譜に對する見解を述べていない。一方、王疇と楊魁植の宋元の經書圖譜に對する意識は書中の記載があり、共通する點がある。

まず、王疇『六經圖定本』の「毛詩圖參訂」は、『六經圖碑』の「詩經圖」に収録されている「四始圖」など八圖は南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」で失われた圖だと指摘している。このことは、元代の『六經圖碑』が南宋の「毛詩正變指南圖」より先に編纂されたことと王疇が認識していたことを示している。また、楊魁植は『九經圖』凡例のなかで「信州本（『六經圖碑』）每經分上下卷、凡十二鉅幅、不載編輯姓氏。自宋楊氏鼎卿、苗氏昌言序刻之後、明吳氏繼仕重刻、已多殘缺（信州本は每經上下卷に分かれ、凡そ十二鉅幅、編輯姓氏を載せず。宋の楊氏鼎卿、苗氏昌言序刻より後、明の吳氏繼仕重刻するも、已に多く殘缺す）」と述べている。この楊魁植の見解も王疇と同じく、『六經圖碑』が先に編纂され、南宋の楊甲や苗昌言（毛邦翰本の序を記した人物）、明の吳繼仕が刊刻を繰り返すうちに『六經圖碑』の内容が缺けたと考えていた。

このように、乾隆年間に宋元の經書圖譜の間に異同が存在する原因を時系列でとらえ、編者が明らかではなく、「毛詩正變指南圖」よりも収録する圖譜の多い『六經圖碑』を最も古い『詩經』圖譜に位置づけ、時を経ることに失われたと考えて圖譜の内容を補おうとした。しかし、南宋の「毛詩正變指南圖」と元代の『六經圖碑』を補う圖譜、他にはほとんど伝わっていなかった。このことが、兩圖譜を折衷する、あるいは勅撰書に依據して『六經圖碑』を改編した理由だと考えられる。

小結

清朝は學校や教育、科擧について明の制度をほとんど變更することはなく、科擧の受験科目も明を踏襲し、『詩經』については朱熹『詩集傳』の解釋を標準とした^{三六}。欽定

「詩傳圖」の編纂に際して、その編者が「詩經大全圖」に基づいたことは、清が明の舊制を踏襲したのと軌を一にしている。

宋元以來、『詩經』圖譜の多くは學習の参考書として編纂されたのと同じく、本章で取り上げた二つの勅撰圖譜も、學習の標準的な解釋を示すために編纂された。ともに學習の参照に供するという點でその目的は變わらないが、勅撰書ではその編纂目的は如何に統一された解釋を世に示すが重要であり、このため、勅撰『詩經』圖譜では朱子の解釋と唐以前の傳統的な解釋のどちらを重視するか、という點が問題となった。

一方、圖は全くそのままに受け継がれた。「詩經大全圖」が羅復と劉瑾の圖譜を収録した明確な根據は、既述したように編纂者の胡廣の經歷が關係していたと推測される。しかし、より時代を隔てた欽定「詩傳圖」の編者は、兩者の圖譜は古くから傳わったという事で何か根據があると考え、敢えて改編しようとはしなかったのだろう。羅復と劉瑾の圖譜の原型と思われるものは現存する宋元の『詩經』圖譜に見えており、「三代の舊」とまでは言えなくとも、古い圖譜によったことは確かである。ただし、宋から元までの繼承過程のなかで圖譜は書肆による改訂を経ており、明清期に解釋の基準として示された圖譜は、實質的には書肆の無名の編纂者の影響を大きく受けたものであった。

また、明代以降、書肆の附録や翻刻本に見られる『詩經』圖譜の改編は、形態面、内容面で様々に行われたが、明代と清代では改編の程度が異なる。まず、『詩經』舉業書の附録の改編は、明代では張溥「詩經大全圖」が勅撰「詩經大全圖」に南宋の「毛詩正變指南圖」の一圖を補っただけだった。一方、清代では天文圖など従前の『詩經』圖譜には見られなかった圖譜が補われたほか、圖譜の構成自體が大幅に變わり、一覽表である「譜」はすべて除かれ、地圖や天文圖、建築圖、器物圖だけが収録された。

また、宋元『詩經』圖譜の翻刻については、明代では盧謙「詩經圖」が『六經圖碑』を書物の體裁に編纂することはあったが、内容面では一圖を増補するにとどまった。しかし、清代では宋元『詩經』圖譜の校勘、校訂が行われ、他書の註釋や圖譜が補われた。このように、『詩經』圖譜の内面に及ぶ改編は清代から盛んに行われた。

これらの改編では、時期によって依據した資料が變化している。明代では先述したように張溥「詩經大全圖」が南宋の「毛詩正變指南圖」を参照したことが確認されるだけである。だが、清代では早期に改編を行った舉業書の附録である「深柳堂詩經圖考」と『詩經體註圖考』の圖譜、そして宋元『詩經』圖譜を翻刻した盧雲英「詩經圖」は主に南宋の「毛詩正變指南圖」や明代の「詩經大全圖」に依據していた。その後に改編が行われた王暉「毛詩正變指南圖」、鄭之僑「詩經圖」の圖の解釋では、南宋の「毛詩正變

指南圖」や明代の「詩經大全圖」の引用が一部に見られるものの『欽定詩經傳說彙纂』の「詩傳圖」からの引用が多くなり、さらに後に刊刻された楊魁植「詩經圖」では『欽定詩經傳說彙纂』の「詩傳圖」以外の引用は見られなくなる。清代に『詩經』圖譜の改編が盛んに行われた原因の一つは、『詩經』勅撰書の編纂に際して行われた附録の改編とその普及であったと考えられる。

そしてもう一つ、改編が行われた原因の一つと考えられるのは、宋元『詩經』圖譜に對する認識の變化であった。『六經圖碑』しか見たことのなかった人々にとって、その編者が不明であるとはいえ、古くから傳わる以上、何か意味があると考えるのは自然なことであつたらう。『六經圖碑』の編者を朱熹と考えた段階では、『六經圖碑』は朱熹の思想を知る重要な資料とされ、世に廣めることが翻刻の目的となつた。しかし、他の圖譜との異同が認識され、編者や異同の問題を解釋しようとした時に誤解が生じた。結果として『六經圖碑』を南宋の『六經圖』より先に編纂されたものと考え、失われた内容を補おうとしたのである。

『詩經』圖譜についていえば、解説の増補に用いられた『欽定詩經傳說彙纂』の附録は、逆れば明の「詩經大全圖」を改編した圖譜であり、「詩經大全圖」は元代の羅復「詩傳圖」をそのまま収録した圖譜である。清代における宋元『詩經』圖譜の改編は、増補も折衷も、結局は宋元『詩經』圖譜と、これをもとに編纂された圖譜をめぐって行われた。そして、誤解から生じた改編が生み出したのは、結果としてこれまでにない新たな圖譜であつた。

第三章 註釋

- 一 本表は主に宮内庁書陵部所藏の永樂年間官刊大字本（四五〇函六號）及び内閣文庫所藏の成化七年刊林羅山手校本（二七五—二五二）によつて作成した。
- 二 『明史』卷四十六「選舉志」には「詩主朱子集傳」とある。また、『四庫全書總目』卷十六「五經大全」に「有元一代之說詩者、無非朱傳之箋疏。至延祐行科舉法、遂定爲功令、而明制因之。廣等是書亦主於羽翼朱傳、遵憲典也」とある。
- 三 朱彝尊『經義考』卷一一一「劉氏詩傳通釋瑾」に引く『吉安府志』には「（劉瑾）肆力治詩、其說宗朱子、而間出其所自得」とあり、同じく引く黃虞稷の言には「其書（『詩集傳通釋』）宗朱子、而錄各經傳及諸儒所發要義、并考其世次源流焉」とある。また『四庫全書總目』卷十六「詩傳通釋」條には「其學問淵源出於朱子、故是書大旨在於發明集傳、與輔廣詩童子問相同」とある。

四 顧炎武『日知錄』卷十八「四書五經大全」には「詩經大全則全襲元人劉瑾詩通釋、而改其中愚按二字爲安成劉氏曰」とあり、朱彝尊『經義考』も顧炎武の言を引いている。また、『四庫全書總目』卷十六は『詩集傳通釋』と『詩經大全』とより詳細に比較して「此書名爲官撰、實本元安成劉瑾所著詩傳通釋、而稍損益之。今劉氏之書尚有傳本、取以參校、大約於其太冗蔓者畧刪數條、而餘文如故。惟改其中瑾案二字爲劉氏曰、又劉書以小序分各篇、是書則從朱子舊本合爲一篇、小變其例而已」と指摘している。

五 胡廣の出身地は『明史』卷一四七の傳による。

六 清初から乾隆年間に至るまでの勅撰經書の編纂經過は江藩撰、鍾哲整理『國朝漢學師承記』（中華書局、一九八三年）卷一を参照した。

七 本表は、四庫全書本（『欽定四庫全書』第四十四から六十七冊所収）、清刊本（國立公文書館所藏二七三—〇二二二）、加賀藩翻刻本（同上経〇八二—〇〇〇一）によって作成した。

八 雍正五年に記された御製序には「皇考聖祖仁皇帝：於春秋、詩經、復命儒臣次第纂輯、皆以朱子之說爲宗。故是書首列集傳、而採漢唐以來諸儒講解訓釋之。與傳合者存之。其義異而理長者、別爲附錄。折中同異間、出己見、乙夜披覽、親加正定」とある。同様のことは同書凡例にも見える。

九 『欽定詩經傳說彙纂』の凡例には「詩有譜、有圖。譜以臚諸國世次而考其時代、圖以存三代以上制作之舊。古人左圖右書、其遺意也。今略存之、其中有辨證者則附著於下」とあるだけで何に依據したかは記されていない。同書の雍正帝の序にも関連する記載はない。

一〇 『四庫全書總目』卷十六「五經大全」には「迄宋末年、乃古義黜而新學立。故有元一代之說詩者、無非朱傳之箋疏、至延祐行科舉法遂定爲功令、而明制因之。廣等是書、亦主於羽翼朱傳、遵憲典也。然元人篤守師傳、有所闡明、皆由心得。明則靖難以後著儒宿學畧已喪亡、廣等無可與謀、乃剽竊舊文以應詔」とあり、元人が師説を守りながら明らかにしている点があるのに對し、明初には元代の學ある人々が絶えて、その教えが傳わらなかったと指摘している。

一一 このような考え方は、圖譜の學術的意義を述べた北宋の鄭樵『圖譜略』（『通志二十略』中華書局、一九九五年所収）の「原學」に見える。「原學」では、宋代までの學問を「義理之學」と「辭章之學」の二つに大別してその弊害を言い、「圖譜之學」こそが實學であると斷じている。また、註十六で引用した明代の李維楨は『五經圖』序文のなかで「諸家書容有穿鑿附會、詩諺經訓。圖則非口談臆、決實與經相發明」と述べている。

一二 「詩經大全圖」は元代の羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の「詩傳圖」と劉瑾『詩傳通釋』の「諸國世次圖」、「作詩時世圖」をそのまま収録していること、そして嘉靖年間ではまず「詩經大全圖」を参照した可能性が高いことから、以下では一々羅復や劉瑾の圖を挙げず、

「詩經大全圖」に依據したものと分析した。

二三 「思無邪、魯頌駉篇之辭」は南宋の眞徳秀『西山読書記』卷二十三「易要指」などに朱熹の言葉として引かれているが、『朱子語類』などには見えない。「夫子讀詩、至此而有合於其心焉」は『詩經大全』の底本である元の劉瑾『詩傳通釋』などに「蘇氏」の言葉として引かれている。「情性是貼思」、「正是貼無邪」は『朱子語類』卷二十三「論語」の「詩三百章」に朱熹の言葉として見える。

一四 朱彝尊『經義考』卷百十二が引く楊守陳『詩私抄』自序による。さらに『經義考』に引かれる正徳から嘉靖年間にかけての學者の見解、例えば王鏊の「詩小序序」や陳鳳梧『毛詩集解』自序、陸深『儼山詩徵』自序などは、朱熹の言説を支持しながらも小序や諸家の説を広く採用することを提起している。

一五 『詩經正解』凡例には「天文、地理、時令、服飾、器用之屬、與夫諸國世次、作詩時世俱各爲一圖、人物則各爲一類、俱係參考諸書採錄、以廣多識」とある。

一六 『四庫全書總目』「詩經正解」條には「大抵襲六經圖及名物疏諸書而爲之。其訓釋亦頗淺易」とある。

一七 陳立撰、吳則虞點校『白虎通義疏證』（中華書局、一九九四年）および陳祥道『禮書』（北京圖書館古籍珍本叢刊）所収影印本、書目文獻出版社、一九九〇年）を参照した。

一八 『三禮圖』からの採録は「几」（j39）、「筵」（j40）、「圭」（j49）の四圖、出典未詳の圖は「靴」（j58）、「決」（j95）、「拾」（j96）の三圖である。

一九 「昊天垂象圖」は章潢『圖書編』卷十六に収録されている。同書は國立公文書館所藏の萬曆四十一年本（三六六一八二）を参照した。

二〇 洪雲來は乾隆『福建通志』卷二十七「職官八・大田縣」に「錢塘人。監生」と見える。

二一 凡例には「獨是古本所傳亦有談及圖繪者、列之篇端、以供博覽、未爲不可。然詩中有古今無異者、如星辰垣野、山川方域、鳥獸草木蟲魚之類是也。有古今不同者、如宮室、車旗、服飾、器皿之類是也。同者已散見于天官、輿圖、物象諸考、茲不及詳。異者不載、又恐古人之制度失傳、余故略載一二、仍標著其意義。所謂未能免俗、聊復爾爾者也」とある。

二三 『詩經集成』凡例には「余聞詩中有畫、描情繪景正在有意無意之間、非特形象而已也。況舉業所尚、惟取考核詳明、證據確實、豈云畫中有詩哉。獨是古本所傳亦有談及圖繪者、列之篇端、以供博覽、未爲不可」とある。

二四 楊復『儀禮圖』は通志堂經解本を参照した。

二五 『詩經體註圖考』の高朝瓊序には「中間間列圖考、便於省覽、亦欲爲窮經之藉、非徒沾沾供帖括資也」とある。

二六 『毛詩圖參訂』には「毛詩圖石本内、四始圖、六義圖、三經三緯圖、思無邪圖、正變風雅

圖、比興賦兼義圖、升歌間歌笙詩圖、幽風七月風化圖、皆吳本所亡、增入。楚邱定之方中圖、大東總星圖、七月流火圖、車制圖、冠服圖、兵器服圖、佩用圖、禮器圖、吳本亦多未備、悉遵御書詩經圖補並註。辟靡泮宮註遵御書改正」とある。

二六 凡例の原文は、地理については「山川形勢、列國地理載在尚書、毛詩、春秋等經俱關緊要、必須位置清楚……查閱原圖、舛錯脫落、難以枚舉……今按大全舊本、逐一較定」、車服禮器は「車服禮器、各有章程……茲不敢傳石刻之訛、多方博采舊圖、有合者摹之、有缺者補之」、明堂は「明堂之制……先儒辨說、紛紛莫定。原碑上亦因之並無註釋、獨存體制而已……今纂陳氏禮書、並楊氏、李氏明堂之說、分載圖下」とある。

二七 註記の原文には「按冠服樂器等圖原碑並無註釋、茲纂大全補入、俾學者觀其器而知義」とある。

二八 凡例のなかで、禮圖の参照資料については「儀禮圖、聶氏崇義最詳。但朱子譏其不純、楊氏復又在朱子後、不經點勘。今欽定三禮義疏純粹周密、凡諸禮節圖悉遵定本」とある。また、經書の解釋に關しては「參訂各家經圖、或略舉大凡、或詳註解說惟就、所據之本、錄其原文、不敢更易。蓋一圖有數經不同者、有數解互異者、先儒辨論紛如聚訟。窮經者各宗所見可也」とある。

二九 陳夢得の序には「楊公輝斗篤學嗜古、家中縹緗萬卷、而古刻圖譜尤多。其所藏六經圖、信州真本也」や「公常念舉業之家所好、雖篤而每苦其無力。是以多隘於見聞。因願纂輯諸圖、專刻成書」とあり、陳士誠の序には「家藏六經圖真本世罕有傳、特以代久年湮、不無殘缺。先生加意補葺、參以諸家論說、又折中于御纂諸經、集爲九經圖。未脫稿而賁志以歿」、劉希周の序には「積歲窮經、并留意于圖考、收錄是書、以信州圖爲本、其間闕失、補以先儒之說。于御纂諸經所有者、則恪遵焉」とある。

三〇 楊水源の序には「楊魁植」又編輯經圖、尚未脫稿。展讀之下、每用愴然。因近科秋開、策問屢以圖學課士、伏念先人揣摩攻苦、纂集成書、精神爲憊」とある。

三一 『九經圖』凡例には「各經歷來坊本亦載數圖。此本異者十居八九、坊本同者亦不遺」とある。

三二 第一章の註釋（九十）を參照。江爲龍の自序には「戊子小春、豫章廣之永豐周生子用爲余乙酉分校所得士、過從宜陽官舍、攜朱子六經圖以贈」とある。

三三 周中孚『鄭堂讀書記』（上海書店、二〇〇九年）卷二『朱子六經圖』には「此本徒以附入四書圖之故、冠以朱子二字、究屬非是。故提要本刪之也」とある。

三四 牟欽元の序には「漢宋以來、諸儒考訂詳明、刻石使傳于世也。維是鵝湖書院遺跡雖存、歲久模糊殘缺失次。六經坊本摘附篇首、又復簡略、不可端倪」とあり、萬邦榮の序に「（『文獻通考』）雖其他遺漏尚多、然使先有所謂六經圖者似所宜錄、而未嘗紀載何與、且予曾假信

州石本與此對校而前後參錯多所不同、其故亦未詳也。（『六經圖碑』）或疑作於元明之間とある。

三五 盧雲英『五經圖』の凡例には「經圖傳爲宋紹興中布衣楊甲所撰、向來刊刻不一家、易則象數鈎深圖……皆與盧公本迥異。攷原序云、作者亡姓名、則非一人所撰、可知凡所借閱賴此本者絶少、則茲刻惡可已哉」とある。

三六 『清史稿』卷一〇八「選舉志」には「（順治）二年、頒科場條例。禮部議覆、給事中龔鼎孳疏言、故明舊制、首場試時文七篇、二場論表各一篇、判五條、三場策五道。應如各科臣請、減時文二篇、於論、表、判外增詩、去策改奏疏」帝不允。命仍舊例。首場四書三題、五經各四題、士子各占一經。四書主朱子集註、易主程傳、朱子本義、書主蔡傳、詩主朱子集傳、春秋主胡安國傳、禮記主陳澧集說。其後春秋不用胡傳、以左傳本事爲文、參用公羊、穀梁。二場論一道、判五道、詔誥表内科一道、三場經史時務策五道。鄉、會試同」とある。

第四章 宋元『詩經』圖譜の影響と消失

歴代の『詩經』圖譜の多くは、南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」を起點として改編を重ね多様化してきたと考えられ、その内容を繼承した圖譜は翻刻のほか、勅撰書や書肆の附録が大部分を占めている。

しかし、一部にこれらとは異なる圖譜、例えば南宋の唐仲友「六義四始圖說」や王柏「二南相配圖」、元代の許謙が編纂した「詩譜」や「豳詩次序」のように、「毛詩正變指南圖」から變遷していった圖譜とは異なる體裁や内容のものがある。その内容は自身が解釋した『詩經』の構成の圖、學習のために『詩經』の要旨の圖、樂器圖や情景畫、動植物圖など様々だが、なかには宋元以來の『詩經』圖譜の影響が見られる圖譜がある。そして、清代末期には情景畫や動植物圖が次第に『詩經』圖譜の主體となり、「毛詩正變指南圖」以來の『詩經』圖譜は姿を消していった。本章では、宋元以來變遷を繰り返して來た『詩經』圖譜が他の『詩經』圖譜に與えた影響、そしてその影響が消失していった過程と背景を考察する。

第一節 宋元『詩經』圖譜の影響

宋元以來の『詩經』圖譜と體裁、内容が異なるものには、『詩經』名物の類書、情景畫や動植物圖を収録する書物、『詩經』考證書の附録がある。以下では、それぞれの書物が宋元以來の『詩經』圖譜の内容をどのように採録したか、そして採録に見られる宋元以來の『詩經』圖譜の位置づけを考察する。

第一項 類書

鍾惺が編者とされ明末に編纂された『詩經圖史合攷』は、『詩經』の名物一五五〇種餘りと名物に關する諸書の記載を集めた類書である。本書は「圖史合攷」と題しているが、圖が附されているのは十七項目のみである（次頁の表二十四）。これらの圖は、各事物の記載に引用される書名や他の圖譜との比較から、ほぼすべて他書から採録したと考えられる。

まず、表中の02から04、06、010、011、013、017の圖と對應する解説には、禮樂の圖解本である北宋の聶崇義『三禮圖』や陳祥道『禮書』、陳暢『樂書』が引用されており、それぞれ『詩經圖史合攷』と同様の圖が収録されている。05、08、09、014、015は解説に圖解本の引用はないが、いずれも『三禮圖』などの圖解本に同様の圖が見える。

表二十四、『詩經圖史合攷』収録圖一覽

																			圖の名稱	卷數	解説に引用のある、または推測される圖(後者は白黒反轉)
o18	o17	o16	o15	o14	o13	o12	o11	o10	o9	o8	o7	o6	o5	o4	o3	o2	o1		周南圖 附十五國風地理之圖	一	
																			琴瑟圖	一	「瑟」に『樂書』を引用。
																			鐘鼓圖	一	「鐘」に『樂書』を引用。
																			管笛圖	一	「管」に北宋の『三禮圖』と『禮書』を引用。
																			魯兕觥圖	一	無し。
																			干圖	一	「干」に『禮書』を引用。
																			三五參昂圖	二	無し。
																			兵舞帔舞圖	三	無し。
																			羽舞皇舞旄舞圖	三	無し。
																			爵籥圖	三	「爵」に『三禮圖』と『禮書』、「籥」に『樂書』を引用。
																			佩圖	五	「佩」に『三禮圖』と『禮書』を引用。
																			小戎圖(總目錄のみ)	八	
																			籩豆圖	十	「籩」に陳祥道『禮書』、「豆」に聶崇義『三禮圖』を引用。
																			袞衣圖	十	無し
																			填箎圖	十三	無し。
																			箕圖畢斗附	十三	無し。
																			笙磬圖	十三	「笙磬」に『樂書』を引用。
																			辟雍圖泮宮圖	十六	無し。

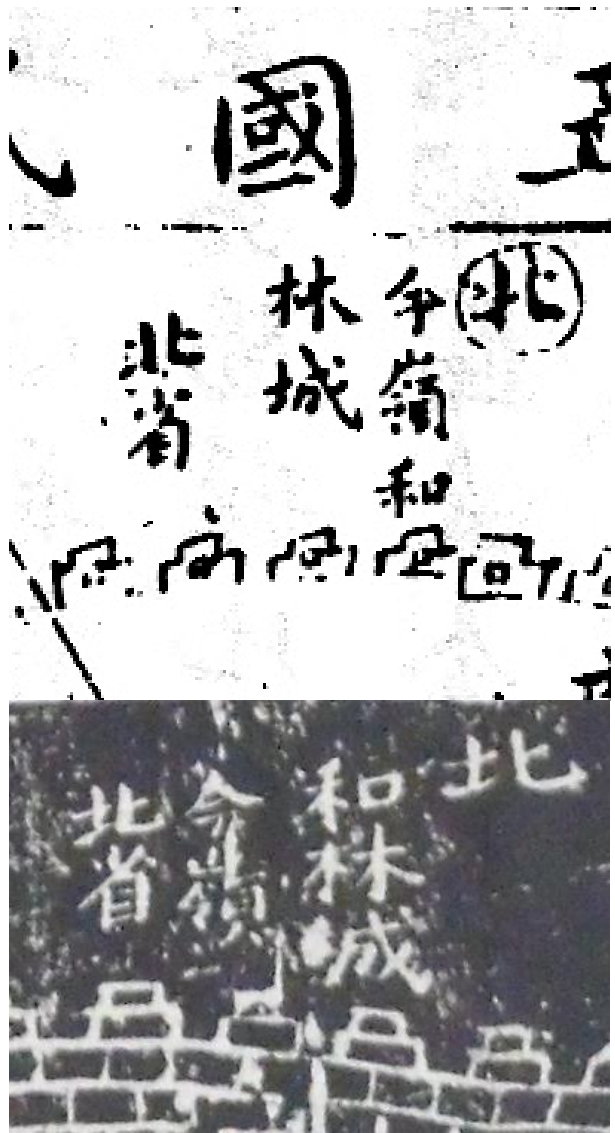
※圖の名稱は、圖に附されている名稱に準じ、附されていないものは總目錄の名稱を記した。また、引用あるいは推測される圖の箇所に記した『三禮圖』の編者は北宋の聶崇義、同じく『禮書』は北宋の陳祥道、『樂書』は北宋の陳暢である。

引用文献のみによれば、『詩經圖史合攷』は禮樂の圖解本から圖だけを採録したと言える。ただし、同様の圖は『詩經』圖譜にもあり、引用と圖だけではどちらの圖譜から採録したかは断定しがたい。

一方、『詩經圖史合攷』の編者が確實に『詩經』圖譜を参照したと確認できるのは、o1とo18である。この二つの圖は先述した禮樂や他の經書の圖解本にはなく、『詩經』圖譜のみに見える。

「周南圖附十五國風地理之圖」(o1)は「遼東、今遼陽省」や「和林城、今嶺北省」といった、元代の『詩經』圖譜に記され、明代の「詩經大全圖」では削除された地名があり、元代の『詩經』圖譜にある地理圖を採録したと考えられる。『詩經圖史合攷』が編纂された明末であれば、萬曆年間に元代の『六經圖碑』を翻刻した盧謙『五經圖』を参照したのかもしれない。ただし、『詩經圖史合攷』の表記は「和林城」を中央に記し、その左右に「今嶺北省」を配する後者に近い。しかし『詩經圖史合攷』の表記は「和」が「嶺」に續いているため、一見すると意味が取りづらい(本頁の圖三十九)。

圖三十九、「和林城」の表記(上は『詩經圖史合攷』、下は『六經圖碑』)

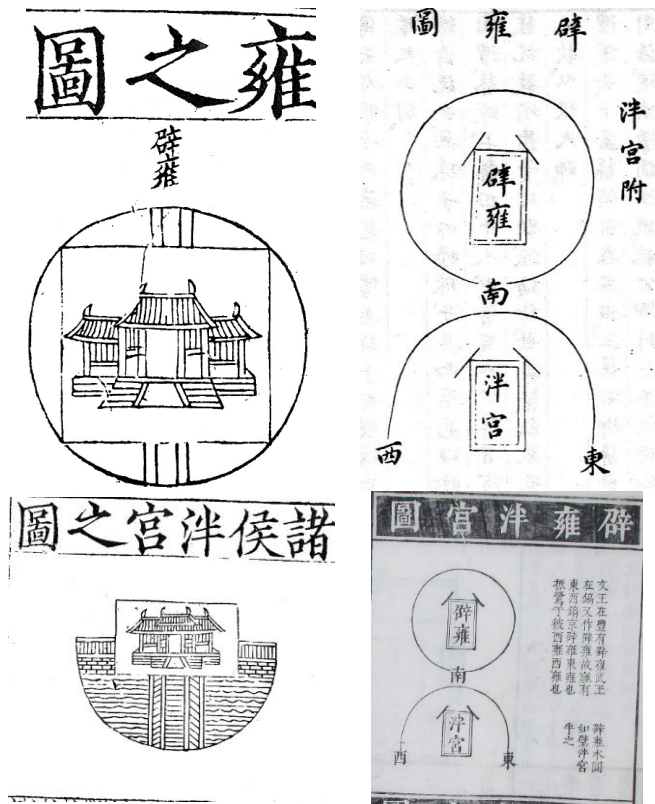


「辟雍圖泮宮圖」(o18)は南宋の「毛詩正變指南圖」と同一の圖である。「毛詩正變指南圖」の辟雍や泮宮は線によって建築物の位置關係を示した簡略な圖である。このように描かれた圖は「毛詩正變指南圖」のみに見え、やや後の紹熙年間(一一九〇〜一一九四)に編纂された『纂圖互註毛詩』の附録「毛詩舉要圖」に辟雍や泮宮の形狀を描いた

圖が収録されて以後、現存する『詩經』圖譜は「毛詩正變指南圖」の翻刻を除き、例外なく「毛詩舉要圖」と同じ圖を収録している。明代には萬曆四十三年（一六一五）に吳繼仕が家藏の『六經圖』を翻刻して以後、複数の人物が『六經圖』を翻刻し、「毛詩正變指南圖」を附した舉業書も刊刻された。『詩經圖史合攷』は當時複數翻刻された「毛詩正變指南圖」のいずれかから辟雍・泮宮圖を採録したのでらう（本頁の圖四十）。

圖四十、「辟雍」・「泮宮」圖

（右上は『詩經圖史合攷』、右下は「毛詩正變指南圖」、左は「毛詩舉要圖」）



『詩經圖史合攷』に収録されている圖は全項目の百分の一程度、その圖の多くは他書から採録したと推測される。また、olの地理圖の表記に見える表記の崩れ方から見て、編者は圖の内容をあまり重視していなかったようである。このように、同書のなかで圖が註釋として大きな役割を果たしているとはいえない。

第二項 情景畫と動植物圖

康熙五十二年（一七一三）に編纂された高儕鶴『詩經圖譜慧解』は、學習を目的として編纂された『詩經』註釋書であり、書中に九十五圖を収録している（次頁の表二十五）。これらの圖の大部分を占める八十九圖は南宋の「毛詩正變指南圖」以來の圖譜と異なり、『詩經』に詠まれた情景を描いた情景畫を収録している。

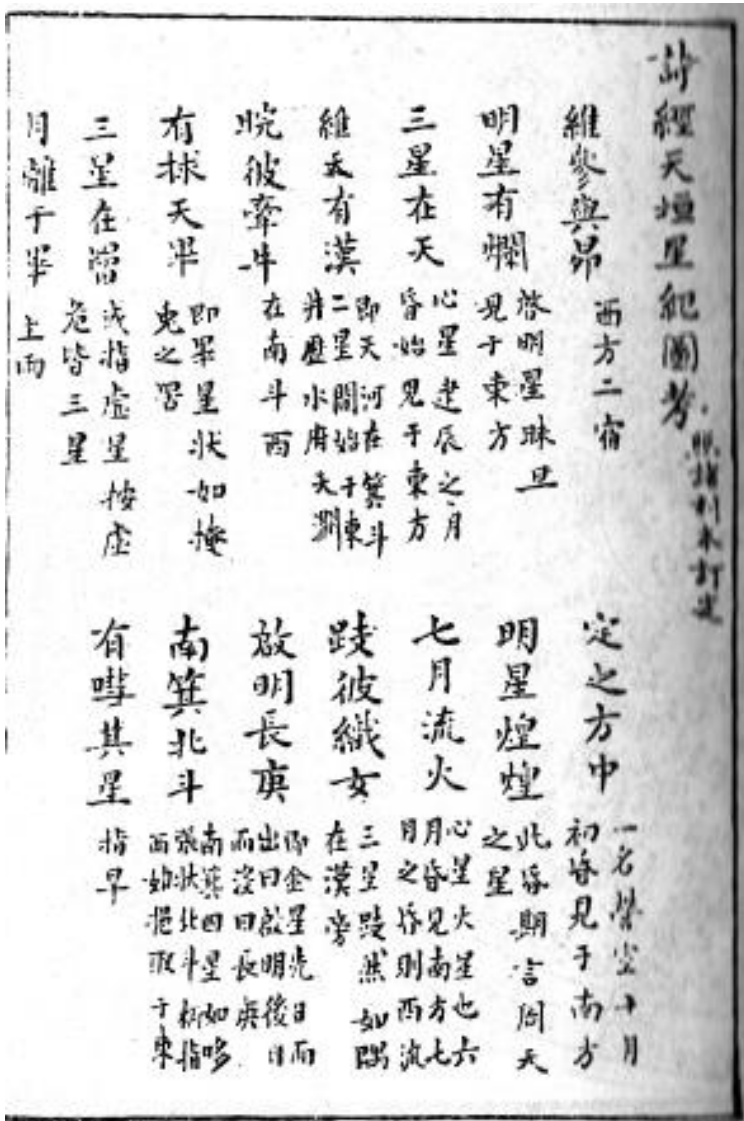
表二十五、高儕鶴『詩經圖譜慧解』收錄圖一覽

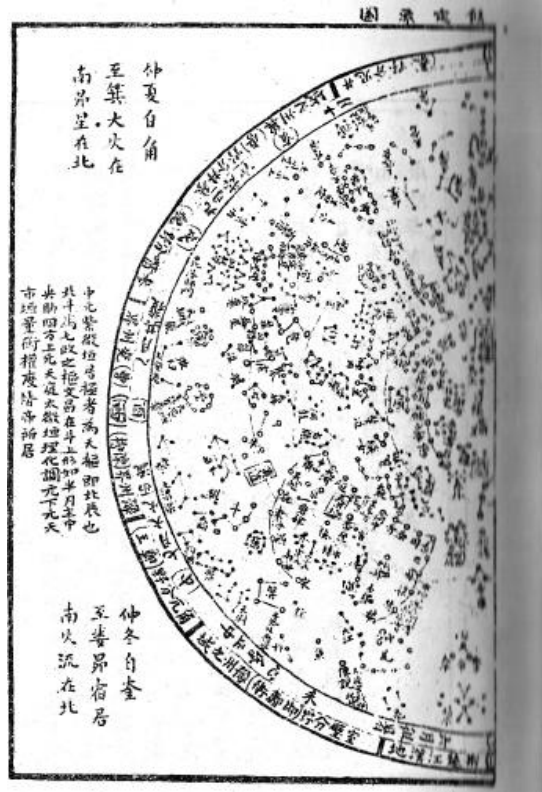
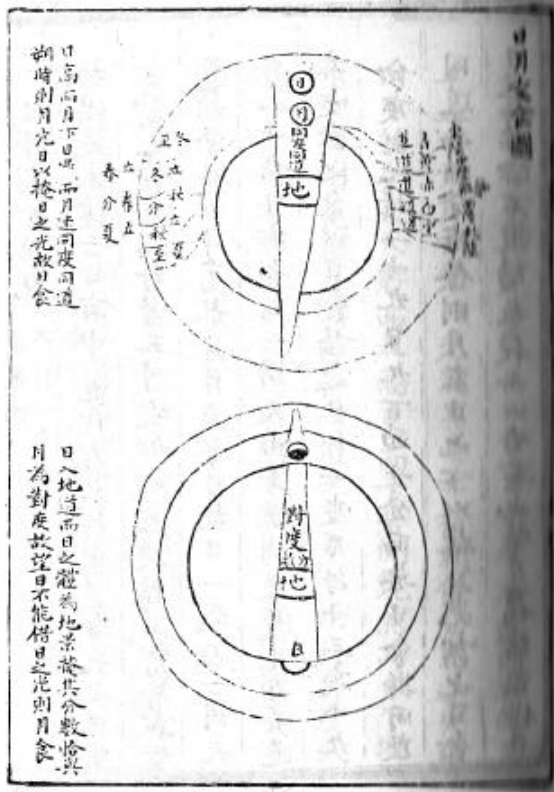
p91 道河周嶽圖【後愚】	p85 民勞圖	p79 爾居圖	p73 大田圖	p67 問夜圖	圖【鶴■】	p61 東山零雨圖二(東■)	p55 享葵剝棗圖【後愚】	p49 八月萑葦圖	伐／艘／輶弓)	p43 小戎車式(輪／幅／轂／梁輈／俊収／公矛／	p37 好樂無荒圖【蓼莊】	p31 縮衣適館圖【唐賢】	■	p25 雲雨桑田(桑田)圖【鄭】	p19 羔裘退食圖	p13 (遵彼) 汝墳圖【■】	p7 樛木圖【唐賢】	p1 詩經天垣星紀圖考	
p92 僖公駟牡圖	p86 板蕩圖	p80 古公遷岐圖	p74 甫田圖	成) p68 考牧圖(我事有)		p62 鹿鳴圖	p56 春酒介眉圖(畫題なし)	圖		p44 七月流火圖	愚) p38 小戎兵車圖【後】	p32 雞鳴昧旦圖		p26 千旄(在浚)圖	圖	p20 標梅迨(待)吉	p8 螽斯圖	p2 十五國星次紀	
p93 頌宮(水)圖	【戴峻】 p87 崧高(嶽降)圖	p81 虞芮質成圖	p75 洛水講武圖	昊天罔極) p69 蓼莪圖(蓼莪)		p63 皇華(遣使)圖	p57 采芡薪樗圖	莊鶴) p51 八月載績圖【蓼】		p45 九月授衣圖【蓼莊鶴】	p39 蒹葭秋水圖	p33 琴瑟靜好圖	【鄭■】	p27 (淇泉) 箴竹圖	p21 騶虞圖【蓼莊】	迎)圖	p9 桃夭圖【?】	辯 十五國故址	p3 十五國地域
p94 景山松柏圖	p88 古甫作誦	p82 靈臺圖【唐賢】	p76 苜蓿草黃圖	鞅掌 北山詩) p70 王事鞅掌圖(王事)		p64 雨雪(載塗)圖	p58 築場納采圖	p52 五月鳴蜩圖		p46 予躬舉趾圖	p40 衡門泌水圖	p34 賢妃戒旦圖		p28 北堂護草圖	p22 柏舟圖	p16 草蟲圖	p10 兔置圖【臣楷】	p4 關雎風始圖	
圍) 附攷(琴瑟／笙簧／籥／壎／篪)	p89 清廟圖	p83 辟雍圖	p77 日月交食圖	p71 楚茨圖	都行狩)	p65 吉月攻車圖(東)	p59 兕觥稱祝(濟堂稱祝)圖【儕鶴】	湖愚者) p53 私豨獻豨圖【石】		p47 婦子饁餉圖	p41 西歸圖	p35 兩肩重錡圖		p29 故宮禾黍圖	p23 雄雉(之詩)圖	【王?】	p11 (樂世) 采芣圖	p5 后妃采芣圖	
	p90 士媚婦依圖	p84 卷阿(矢音)圖	p78 爾雅總圖三幅	其歌) p72 南山圖(南東)	安宅)	p66 鴻雁圖(鴻雁)	p60 東山零雨圖一	p54 斯螽圖	桑圖	p48 春日(爾女)求	p42 鳴鳩圖	p36 陟岵陟屺圖		p30 牛羊下來圖	p24 共姜柏舟圖		p12 漢南游女圖	p6 卷耳圖	

情景畫を収録した理由について、高儕鶴は情景畫の鑒賞が『詩經』に詠まれた内容や主旨を實感し、心を樂しませるためだとしている。これに對して、情景畫以外の六項目の圖譜、「詩經天垣星紀圖考」(p1)、「十五國星次紀候圖」(p2)、「十五國地域辨 十五國故址」(p3)、「小戎車式」(p43)、「日月交食圖」(p77)、「圖譜附」および「附攷」(p95) について、高儕鶴はその収録意圖や典據に言及していない。

これらの圖譜のなかで、「詩經天垣星紀圖考」(p1)は他の『詩經』圖譜には見えない。「十五國地域辨 十五國故址」(p3)は南宋の「毛詩正變指南圖」以來『詩經』圖譜に収録されてきた地圖だが、他の『詩經』圖譜に比べて、清代の地名が詳細に記されている。この二圖は、高儕鶴が獨自に作成した圖譜かもしれない(本頁の圖四十一)。また、「詩經天垣星紀圖考」(p1)と「日月交食圖」(p77)は、それぞれ姜文燦『詩經正解』の「深柳堂詩經圖考」にある「天文圖」(j1)、「月淹日光爲日食之圖」(j2)と「地影蔽月爲月食之圖」(j3)によく似た圖譜である。ただし、細部はやや異なっている(次頁の圖四十二)。

圖四十一、『詩經圖譜慧解』の「詩經天垣星紀圖考」





圖四十二、「詩經圖譜慧解」の「詩經天垣星紀圖考」(右)と「日月交食圖」(左)

同じく宋元以来の『詩經』圖譜を基礎資料として用いたと考えられる書物に、徐鼎の『毛詩名物圖說』がある。『毛詩名物圖說』は専ら動植物の圖と解説を収録しており、その収録数は二百四十六種に及ぶ。

乾隆三十六年（一七七二）に刊刻された『毛詩名物圖說』の刊本には動植物の圖譜しか収録されていないが、その自序には「動植物以外の禮樂、冠裳、車旂の圖は後に刊行する」と記されている^三。徐鼎が編纂した禮樂などの圖譜はこれまで発見されていない。徐鼎には二人の子がいて貴顯となったが、後に零落して没し、徐鼎の著書は散佚して行方がわからなくなったという^四。恐らくこのために、動植物以外の圖譜は刊刻されなかったのだろう。

しかし、徐鼎の編纂構想を裏附ける『毛詩名物圖說』の稿本の一部が北京の中國國家圖書館所藏に所藏されている^五。稿本には目次と一部の圖が残存しており、これから稿本全體の大凡の内容を推測することができる。

稿本の目次（本頁の表二十六）によると、稿本の構成は全十卷、卷六までは動植物、卷七以降以降は禮樂、衣冠、天文地理の項目が立てられている。また、實際に圖と解説が残存しているのは「關雎圖」と「七月流火圖」、解説のみ残存するのは「辟廱圖」、「泮宮圖」である（次頁の圖四十四）。

表二十六、徐鼎『毛詩名物圖說』稿本の目次

卷一、鳥	■、■、■	■三、■、■	■、■、■	卷六、魚	卷七、禮器・樂器
卷八【九魚】、 雜器・兵器	■九、冠服・ 衣裳・佩用	■十、車制・元戎圖・小戎圖・靈臺圖・辟離圖・皋門應門圖・泮宮圖・定星圖・流火圖・大東總星圖・公劉相陰陽圖・豳風七月風化圖・十五國風地理圖	■【中】 ■【下】	■【木上】	■【木下】

※■は破損し不明な箇所、隅付括弧内は朱墨による追加・修正。

なかでも「七月流火圖」は、上部に火星の位置を示した圖があり、下部に解説が附されている。解説のほうは「豳風 七月」詩の「流火」に関する毛傳、鄭箋、孔疏をそのまま記している。これに對して、圖は元代の『六經圖碑』や羅復の「詩傳圖」以來、明清の『詩經』圖譜に多く収録されたものである。このため、徐鼎が何を參照したか斷定

はできないが、『毛詩名物圖説』が編纂された乾隆年間であれば、恐らくは勅撰書『欽定詩經傳説彙纂』の「詩傳圖」だったかと推測される。實際、目次の巻七以降に収録される予定であった「禮器」、「雜器」、「冠服」、「車制」などの項目は、すべて『欽定詩經傳説彙纂』の「詩傳圖」に見える圖譜である。

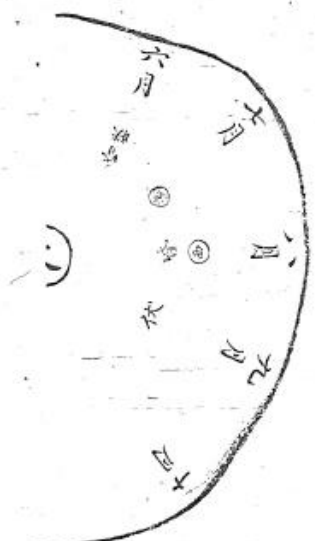
圖四十四、「毛詩名物圖説」稿本の「辟離圖」と「七月流火圖」

辟離圖

鄭箋

王制天子曰辟離諸侯曰洋宮鄭康成曰水旋即如
 股曰辟離以節觀者孔穎達正義水旋即如壁者
 壁神圖而內有孔此水亦圖而內有地猶如壁生水下而
 地高故以明言之以水鏡即所以節約觀者令在外而觀
 也又辟離之制圖之以水圖象天取生長也水潤下
 取其忠澤也張子云辟離古無此在共制其始於
 此及周有天下遂以石天々之學而諸侯不得立焉
 王伯厚玉海辟離者天子之學圖如壁畫之以水
 示圖言辟取辟有德辟水言辟離者取其靡和也
 所以教天下春射秋獮尊季之者五更在南方也
 星之內立明生于甲亞經之文的萬歲

七月流火圖



五月昏中

火

中五日十

秋冬昏其常言星星界取注云星鳥火
 之方星火火之屬畫至武中表宿也即白鳥

毛傳火大火也流下也鄭箋大火者寒暑之候也
 火星中而寒暑退故將言寒先著火所在春秋昭
 十七年有星孛於大辰公羊傳大辰者何大火也左
 傳張超曰火星中而寒暑退服虔云大火火星也
 季冬十二月辛丑中在南方大寒退季夏六月
 黃昏火星中大暑退是火為寒暑之候也
 六月之昏火星始中而先典曰永星火以正仲
 夏注云司馬之戰治南岳之季得則夏氣和夏
 至之氣昏火星中所以五月得火星中者星居
 閏月合季夏火星中前交東方之序蓋以為火
 星中夏中心也不知夏至中星在昏日永星
 火此謂大火也大火次名東方之波有青星稱木
 大火三者又火為中故尚書云舉中以言焉又每三
 十度有奇非將一宿者也季夏中火就謂指心火
 也如此言中則曰永星火謂大火之次非心星也先
 典四時言中星者春夏交舉其次言星鳥星火

また、「辟靡圖」と「泮宮圖」の解説に見える引用文献は、『欽定詩經傳說彙纂』の解説とよく似ている。例えば、「辟靡圖」の解説は次のようになっている。

鄭箋 王制、天子曰辟靡、諸侯曰泮宮。鄭康成曰、水旋邱如壁曰辟靡、以節觀者。

孔穎達正義、水旋邱如壁者。壁體圓而內有孔、此水亦圓而內有地、猶如壁然。水下而地高、故以邱言之、以水繞邱、所以節約。觀者令在外而觀也。

又辟靡之制圓之以水。圓象天、取生長也。水潤下、取其惠澤也。

張子云、辟靡、古無此名。其制蓋始于此。及周有天下遂以名天子之學、而諸侯不得立焉。

王伯厚玉海、辟靡者天子之學、圓如壁、壅之以水、示圓、言辟、取辟有德。辟水、言辟靡者、取其靡和也。所以教天下春射秋饗、尊事三老五更、在南方七里之內、立明堂于中、五經之文所藏處。

網掛け箇所は、『欽定詩經傳說彙纂』の「靈臺辟靡之圖」の解説である。鄭箋の次に孔穎達の正義が来るのは『毛詩正義』の通りだが、その後に張子（張載）の註を引くのは「靈臺辟靡之圖」と同じ構成である。しかし、『毛詩名物圖説』は、「靈臺辟靡之圖」にある引用文の前後をより多く引いており、さらに王伯厚（王應麟）の『玉海』が加えられている。この引用状況と、先述した目次の細目や「七月流火圖」の圖の類似性から推測すると、徐鼎は稿本卷七以降の禮樂、衣冠、天文地理に關する圖譜の編纂に際して、勅撰書の附録などの『詩經』圖譜の圖を基礎資料とし、解説を増補する方法をとったと考えられる。

第三項 『詩經』考證書

清代に『詩經』の内容を考證した書物は多くあるが、圖譜を附したものは尹繼美『詩地理攷略』と方玉潤『詩經原始』など僅かである。

『詩經』の地理を考證した『詩地理攷略』は、その凡例によると、『詩經』の篇目の順に従った王應麟『詩地理考』の體裁を變更して國ごとに分けて考證したこと、古代の地名については早期の地理學の書である『漢書』地理志、『後漢書』郡國志、杜預『春秋左傳集註』、『春秋釋例』、酈道元『水經註』を主要史料とし、清代當時の地理については『大清一統志』に依據したことなどが記されている。また、本文中でも小字註に典據を逐一示しているが、『詩經』圖譜には一切言及していない^六。南宋の「毛詩正義指南

「圖」以來、『詩經』圖譜の多くには地理圖が収録されているのだが、尹繼美は『詩經』圖譜を参照しなかったようである。

一方、方玉潤『詩經原始』の圖譜は全九圖ある（本頁の表二十七）。冒頭の「詩無邪太極圖」（q1）には「從太極元樞錄出」という註記があり、末尾の「作詩時世圖」（q9）には「從傳說彙纂錄出」とある。このことから、「十五國風輿地圖」（q2）以降の八圖は『欽定詩經傳說彙纂』の「詩傳圖」から節録したことがわかる^七。

表二十七、方玉潤『詩經原始』収録圖一覽

q1 詩無邪太極圖（從太極元樞錄出）	q2 十五國風輿地圖	q3 大東總星之圖
q4 七月流火之圖	q5 楚邱定之方中圖	q6 公劉相陰陽圖
q7 邠公七月風化之圖	q8 諸國世次圖	q9 作詩時世圖（從傳說彙纂錄出）

しかし、『詩經原始』の地理圖は、『欽定詩經傳說彙纂』の「十五國風地理之圖」にはない西方の「崑崙」や朝鮮半島の「箕子國」を加えている。また、収録する項目は地理圖と天文圖、そして一部の譜に限られる。

この改編や圖譜の取舍選擇の理由については、『詩經原始』の凡例に記されている。方玉潤は、「圖」と「譜」は後世の人々が自身の考えによって描いたものであり正確だとは言えないが、『詩經』にもとから附されているため削除してはならないと考えていた。特に、古代から變わることのない地理や概要を把握するのが難しい家系、年代については、完全には依據できなくとも、『詩經』を學ぶ者にとって検討材料としての價値があると考え、多少の修訂を加えて収録したという^八。

凡例に見えるように、方玉潤は宋元以來の『詩經』圖譜の内容を受け継いだ『欽定詩經傳說彙纂』の圖譜に對して、古くから傳わったため何かしらの根據はあるかもしれないと考えつつ、基本的には疑念を抱いていた。地理や天文以外の圖を削除した理由は、凡例に「唯制度、名物諸圖、則在所略」としか記していないが、先述した凡例の文脈からすれば、地理や天文と異なり、時代によって變化する制度や名物の圖譜は、方玉潤にとって信ずるに足りなかったのだろう。

第二節 宋元以來の『詩經』圖譜の消失

光緒年間以降、『詩經』圖譜は單行本や書肆が刊刻した『詩經』の附録に多く見られ、これまで九種が確認された。これらは、宋元以來の『詩經』圖譜の内容を収録する圖譜、宋元以來の『詩經』圖譜と情景畫や動植物圖を折衷した圖譜、そして動植物圖のみを収録する圖譜の三種に分類することができる。

第一項 宋元以來の『詩經』圖譜の内容を収録する圖譜

光緒年間以降の『詩經』圖譜のなかで、宋元以來の『詩經』圖譜の内容のみを収録したものは清朝最後の年、宣統三年（一九一）に刊刻された『章福記監本詩經』巻首の附録一種である。同附録に収録されている圖譜は全四十六圖ある（次頁の表二十八）。

四十六圖の典據について、「尋」（r7）圖中に「按冠服樂器等圖原碑並無註釋、茲纂大全補入、俾學者觀其器而知義」という、「原碑」、すなわち元代の『六經圖碑』を採録し、「詩經大全」から解説を補ったことを示す註記がある。しかし、乾隆八年（一七四三）に刊刻された鄭之僑『六經圖』の「詩經圖」では、「尋」圖に全く同じ註記を示している（次頁の圖四十五）。『章福記監本詩經』と鄭之僑の「詩經圖」を比較すると、「尋」（r7）だけではなく、すべての圖と解説が全く同じものである。このことから、『章福記監本詩經』の圖譜は鄭之僑の「詩經圖」から節録したと考えられる。

『章福記監本詩經』が節録した内容は、鄭之僑「詩經圖」の「譜」に相當する箇所や地理天文の圖が全く無く、建築圖（r1～r4）と車馬圖（r5とr6）、そして衣冠、祭器の圖譜（r7～r46）に限られる。これと同様に、『詩經』の附録圖譜では既成の『詩經』圖譜の一部、特に「譜」を節録する例は、南宋書肆の『詩經』圖譜や元代の羅復「詩傳圖」など古くより見られるのだが、衣冠や祭器だけを収録し、宋元以來の『詩經』圖譜ではこの後に収録されていた樂器や兵器を省略した圖譜は、『章福記監本詩經』以前に見られない。「譜」など大型の圖譜を省略するのであれば、附録という限られた紙幅のなかで、必要な圖譜だけを選択したという可能性もある。しかし、『章福記監本詩經』の節録には合理的な理由が見出し難く、明確な編纂意圖をもたず既成の圖譜を恣意的に採録したのかもしれない。

表二十八、『章福記監本詩經』収録圖一覽

聊 r41 升斗 (椒)	r33 罍 (卷耳)	r25 籩 (伐柯)	菽 r17 邪幅 (草)	士 r9 臺笠 (都人)	r1 靈臺之圖
r42 筐 (采蘋)	r34 柜 (江漢)	r26 豆 (伐柯)	r18 雜佩	士 r10 緇撮 (都人)	r2 辟廱之圖
穀璧 / 蒲璧 r43 璧 (雲漢)	r35 卣 (江漢)	r27 俎 (楚茨)	r19 觶 (芄蘭)	罍 r11 袞衣 (九)	圖 r3 皋門應門之
櫨 r44 璋瓚 (棫)	宮 r36 犧尊 (閔)	r28 罍 (行葦)	老 r20 笄 (君子偕)	(鄭羔裘) r12 羔裘豹飾	r4 泮宮之圖
r45 缶 (宛邱)	宮 r37 福衡 (閔)	r29 登 (生民)	r21 縞 (東山)	罍 r13 繡裳 (九)	r5 周元戎圖
r46 管 (采蘋)	r38 鬯 (江漢)	r30 簋 (權輿)	r22 黼 (芄蘭)	裘 r14 狐裘 (檜羔)	r6 秦小戎圖
圭	桓圭 / 信圭 / 躬 r39 圭 (雲漢)	r31 爵 (簡兮)	麇 r23 帨 (野有死)	菜菽 r15 芾輶 (侯人 / 菜菽)	r7 罍
麓	r40 圭瓚 (早)	奕 r32 壺 (韓)	偕老 r24 笄 (君子偕老)	偕老 r16 瑱 (君子偕老)	澳 r8 弁 (淇)

※網掛けは、解説が「欽定詩傳圖」と同様か類似した項目。

圖四十五、「罍」圖の註記 (上は鄭之僑「詩經圖」、下は『章福記監本詩經』)



第二項 情景畫や動植物圖を折衷した圖譜

一、情景畫

光緒二十六年（一九〇一）以降に刊刻されたと推測される錦章圖書局『五彩繪圖監本詩經』は全四冊、収録されている圖譜は全九圖（本頁の表二十九）、一冊目巻首に地理圖の「十五國風地理之圖」（s1）と情景畫「關關雎鳩／琴瑟友之」（s2）がある。このほかはすべて情景畫で二冊目以下の巻首に附されている。情景畫は、一圖に詩二篇の情景が描かれている。

表二十九、錦章書局『五彩繪圖監本詩經』収録圖一覽

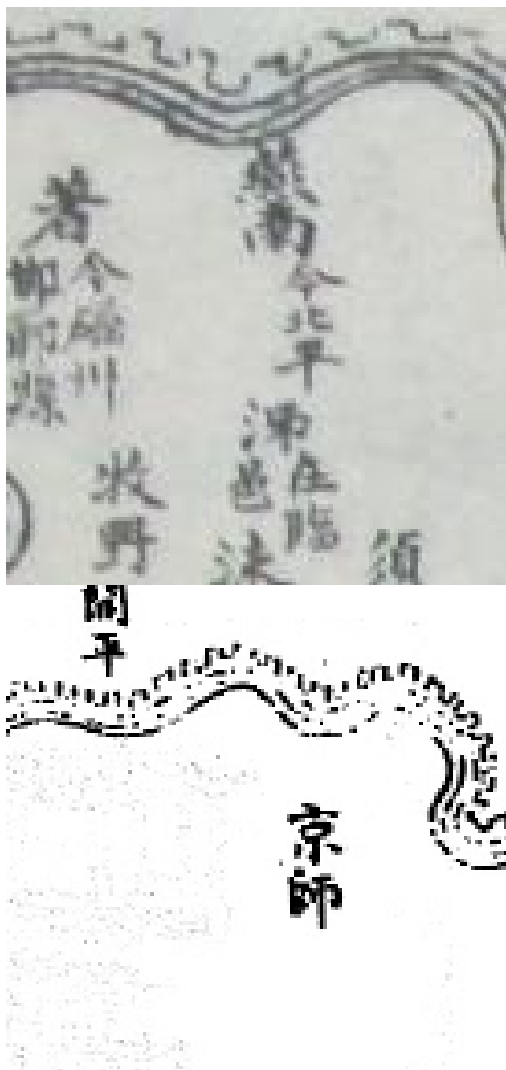
s1 十五國風地理之圖		
s4 大叔于田、乘乘馬、執轡如組、兩驂如舞（鄭風・大叔于田） ／山有喬松、隰有游龍、不見子充、乃見狡童（鄭風・山有扶蘇）	s5 雞既鳴矣、朝既盈矣、匪雞則鳴、蒼蠅之聲（齊風・雞鳴） ／十畝之間兮、桑者閑閑兮（魏風・十畝之間）	s3 采采卷耳（周南・卷耳） ／桃之夭夭（周南・桃夭）
s7 陟彼北山、言采其杞（小雅・北山之什・北山） ／魚在在藻、有頌其首（小雅・桑扈之什・魚藻）	s8 夙興夜寐、洒掃庭內、投我以桃、報之以李（ともに大雅・蕩之什・抑）	s9 瞻卬昊天、有嘒其星（大雅・蕩之什・雲漢） ／率時農夫、播厥百穀（周頌・臣工之什・噶）

『五彩繪圖監本詩經』は書中に圖譜の典據や収録意圖が記されていない。しかし、宋元以來の『詩經』圖譜に見える「十五國風地理之圖」（s1）だけは、その來歴に關する手がかりがある（次頁の圖四十六）。同圖は現在の北京に相當する地域を「燕南、今北平」と記している。『詩經』圖譜の地理圖における北京の表記は、元代では「大都」、明代以降は「北京」とするものがほとんどであり、これまで調査した限り、『五彩繪圖監本詩經』と同様に表記するのは元代の『六經圖碑』とこれを翻刻した清代の鄭之僑『六經圖』のみである。恐らくは、時代の近い鄭之僑『六經圖』から採録したのだろう。『五彩繪圖監本詩經』の圖譜のなかでも地理圖は、『詩經』を學ぶ上で、特に國風の各詩篇を學ぶ上で参照價値はあったと考えられる。これに對して、同書が収録する一部の詩篇の情景畫は、同様に情景畫を収録した高儕鶴『詩經圖譜慧解』と比べて數量も少なく、

参照資料としての役割をどこまで担ったか疑わしい。

圖四十六、「十五國風地理之圖」地名表記

(上は『五彩繪圖監本詩經』、下は『欽定詩經傳說彙纂』)



二、動植物圖

宋元以來の『詩經』圖譜の内容と動植物圖を兩方を収録した圖譜には、宣統三年（一九一）刊刻の小安樂書屋『御纂繪圖詩義折中』と民國七年（一九一八）の上海天寶書局『監本詩經』がある。

小安樂書屋『御纂繪圖詩義折中』は乾隆年間に編纂された『詩經』註釋の勅撰書『詩義折中』に圖を増補した書物である。収録されている圖は全一九八圖である（次頁の表三十（一）と次々頁の（二））。これらの圖の約三分の二を占める一四九圖は岡元鳳『毛詩名物圖攷』の動植物圖である。宋元以來の『詩經』圖譜に見えるものは、表中に網掛けをした天文地理、衣冠、車馬、祭器、樂器、兵器などを圖示した四十九圖である。

『御纂繪圖詩義折中』の圖は、すべて本文中の關聯する箇所（註）に附されており、解説はない。圖が本文や註釋の傍らにあつて相互に参照できるため、解説は必要なかったのだろう。このため、天文地理や器物等の圖は、その典據を明らかにする手がかりに乏しい。しかし、先の『五彩繪圖監本詩經』と同じく、『御纂繪圖詩義折中』冒頭の「十五國風地理之圖」（t1）では北京の地名を「燕南、今北平」と記しており、鄭之僑『六經圖』から圖を採録したと推測される。また、『御纂繪圖詩義折中』には南宋の『毛詩圖說』や『毛詩舉要圖』以來『詩經』圖譜に収録されることになかった「絲衣」（t195）があり、清代の正装が圖示されている（次頁の圖四十七）。

表三十、小安樂書屋『御纂繪圖詩義折中』收錄圖一覽(一)

t100 簋	t89 鴝	t78 茹蘆	t67 兔	t56 鱸	t45 唐	t34 匏	t23 甘棠	t12 芣苢	理之圖 國風地	t1 十五
t101 缶	t90 栩	藥・菌 t79 芍	t68 蕭	t57 鳩	t46 葑	t35 茶	t24 雀	t13 楚		t2 苕菜
t102 苳	t91 蕨	t80 蒼蠅	t69 艾	t58 籩	t47 鶉	t36 流離	t25 羔羊	t14 蓼	鼓・鐘 瑟・	t3 琴・
t103 鯉	t92 小戎	鳴矣 t81 雞已	t70 李	t59 芄蘭	梓・漆 榛栗・ t48 桐・	爵 t37 籥・	虬 t26 鹿・	t15 魴		t4 睢鳩
t104 紵	t93 虎韞	t82 狼	t71 杞	t60 豸	t49 桑	榛 t38 苓・	葭 t27 蓬・	t16 麟		t5 黃鳥
t105 鴞	t94 儻駟	t83 柳	t72 虎	t61 諛	揆日圖 t50 定中	狐 t39 鳥・	虞・ t28 騶	t17 鵠		t6 葛覃
t106 苕	t95 蒹葭	t84 魴鱖	t73 矛	t62 木瓜	t51 旄	t40 萸	t29 柏	t18 蘩		t7 卷耳
t107 蒲	沚 t96 水中	蕒 t85 莫・	t74 鳧	t63 黍	t52 旗	t41 鴻	t30 燕	t19 草蟲		t8 疊
t108 鸞	t97 六駁	t86 輪輻	t75 雜佩	t64 雞	t53 蟲	t42 茨	t31 棘	t20 薇	瘖矣	t9 我馬
t109 蜉蝣	t98 甲	t87 蟋蟀	t76 荷花	t65 蒲	t54 綠竹	t43 筭	t32 雄雉	t21 蘋藻		t10 螽斯
t110 鶉	t99 裳	t88 椒	t77 扶蘇	t66 蕓	芻 竹・王 犀・扁 t55 瓠	象・掃 t44 瑱・	t33 雁	錡釜 t22 篚管		t11 桃

圖四十七、「絲衣」圖(上は『御纂繪圖詩義折中』、下は『毛詩舉要圖』)



表三十、小安樂書屋『御纂繪圖詩義折中』収録圖一覽(二)

胄 尊・貝 衡・犧 t198 幅	柜・鬯 t188 卣・	t177 靈臺	邪幅 t166 芾・	t155 豺虎	決 t144 拾・	t133 常棲	t122 鸛	t111 鳩鳩
	t189 傘	t178 辟廱	笠・緇撮 t167 臺	t156 蔚	t145 隼	t134 魚服	t123 襜	t112 黍
	t190 鷺	鼓 t179 鼉	t168 蠹	東圖 t157 大	t146 鶴	旗・旒 t135	笥・籩 t124	火 t113 流
箴 磬・圍・ 柷・簫・	t191 鼓・	t180 荏菹	t169 藍	t158 鳶	t147 蓬	鯉・鰕 t136 魴	衣・繡裳 t125 袞	t114 蠶
	t192 鱗	登 t181 豆・	t170 綠	t159 鶉	蛇 t148 虺・	柯・臺 t137 萊・	t126 鱗魴	t115 鳴蜩
	t193 旂	t182 鳧鷖	t171 鷺	t160 俎	t149 虺蜴	t138 莪	t127 鹿	・ t116 鳴鴟
t193 蜂	威・揚 戈・ 干・	t183	t172 苕	臙 t161 螟	t150 龜	旃 t139 白	t128 蒿	雞 t117 沙
t194 蓼	陰陽 t184 相	t173 葦	賊 t162 蝨	贏 果負之 蛉有子 t151 螟	戎 t140 元	t129 芩	t118 葵	
衣 t195 絲	凰 t185 鳳	門應門 t174 皋	鴛 t163 鴛	扈 t152 桑	t141 繁	t130 革	苴 t119 叔	
t196 泮宮	圭・躬圭 圭・信 t186 桓	t175 柞	t164 鳶	t153 鸞	t142 鯉	t131 雛	t120 鷓鴣	
t197 茆	t187 壺	t176 檉	t165 鷓	簾 t154 壘・	t143 芑	t132 春令	耀 贏・熠 t121 果	

※ t157 大東圖は書中に名稱が記されていないため、他の『詩經』圖譜の名稱に従った。

先述した『章福記監本詩經』や『五彩繪圖監本詩經』と比べて、『御纂繪圖詩義折中』は圖を多く収録する上、本文中で對應させたり、より新しい事物を圖示するといった工夫を施しており、圖譜を學習の參考資料として供する目的意識を強くもって編纂されたと考えられる。従來の『詩經』圖譜の「譜」や、『毛詩品物圖攷』全二百五十二圖の百圖あまりを採録しなかったことなど、採録の基準に不明確な點は残るものの、學習に供しようとする目的意識があったために、宋元以來の『詩經』圖譜とともにこれまで坊本には収録されることのなかった動植物圖もあわせて収録したのかもしれない。

そして、『御纂繪圖詩義折中』と同じく宋元以來の『詩經』圖譜と動植物圖『毛詩名物圖攷』を収録しながら、對照的な内容となっているのは民國七年（一九一八）、上海天寶書局が刊刻した『監本詩經』である。『監本詩經』に収録されている圖は全四十九圖、すべて卷首に置かれており、解説は削除されている（本頁の表三十一）。

表三十一、上海天寶書局『監本詩經』収録圖一覽

u49 鱗鱮鯉	u41 九罭之魚 鱗鱮	u33 維熊維羆	u25 鳳凰于飛	u17 鴻則離之	u9 維筍及蒲	u1 十五國風 地理之圖
	u42 魚麗 于留鱸鯊	u34 投界 豺虎	u26 我馬 虺隤	u18 雞棲 于時	u10 桃之 夭夭	u2 葛之 覃兮
	u43 魚麗 于留魴鯉	u35 母教 豸升木	u27 麟之 趾	u19 鴟鴞 鴟鴞	u11 華如 桃李	u3 匏有 苦葉
	u44 魚麗 于留鯉鯉	u36 呦呦 鹿鳴	u28 羔羊 之皮	u20 鸛鳴 于垤	u12 折柳 樊圃	u4 彼采 芣兮
	u45 南有 嘉魚	u37 象弭 魚服	u29 無使 虺也吠	u21 鶴鳴 九臯	u13 梧桐 生矣	u5 可以 漚菅
	u46 我龜 既厭	u38 魴魚 頰尾	u30 于嗟 乎騶虞	u22 匪鶉 匪鳶	u14 關關 雎鳩	u6 六月 食鬱及薺
	u47 鼉鼓 逢逢	u39 其魚 魴鰈	u31 有力 如虎	u23 有集 維鷁	u15 維鷁 有巢	u7 食野 之薺
	u48 龍旂 陽陽	u40 必河 之鯉	u32 羊牛 下來	u24 有騶 在梁	u16 雄雉 于飛	u8 薄言 采芣

このなかで宋元以来の『詩經』圖譜に見えるのは地理圖の「十五國風地理之圖」(u1)だけである。この地理圖も『五彩繪圖監本詩經』や『御纂繪圖詩義折中』に類似するが、北京の地名は「燕南」としか記されていない。節録の過程で誤って削除したのだろう。『監本詩經』は先の『御纂繪圖詩義折中』と比べて、収録する圖譜が四分の一度と少なく、これらの圖譜を収録した基準も明らかではない。

第三項 動植物圖のみを収録する圖譜

小安樂書屋『御纂繪圖詩義折中』や『監本詩經』が岡元鳳『毛詩名物圖攷』の圖譜を節録する前には、『毛詩品物圖攷』が清へと傳わり、次第に廣まっっていく過程があった。『毛詩品物圖攷』は天明五年(二七八四)ころに刊刻されており、中國における記載は、早くは光緒元年(一八七五)の丁丙『八千卷樓書目』に見える。このことから、恐らく光緒年間より前には中國へ傳わっていたのだろう^九。この後、光緒年間(一八六二〜一九〇八)までに翻刻されたと推測される木刻本『毛詩品物圖攷』があり、さらに光緒十二年(一八八六)には上海積山書局が、宣統二年(一九一〇)には掃葉山房が翻刻し、掃葉山房の版は民國十三年(一九二四)と民國三十年(一九四一)にも重版された。また、この間には附録として『毛詩品物圖攷』を収録する上海龍文書局『改良繪圖品物圖攷詩經監本』(光緒三十四年)や上海鑄記書局『詩經讀本』(宣統二年)が刊刻されている^{一〇}。

このように、書肆を中心として『毛詩品物圖攷』が廣く刊刻、収録された理由を、一點に帰結することは難しい。光緒十二年の上海積山書局本に序を寄せた戴兆春は、『毛詩品物圖攷』が廣く諸説を集め先賢の解釋を折衷して動植物を考證したことを高く評價している^{一〇}。このような評價の存在が『毛詩品物圖攷』の刊刻を推進したのかもしれない。

また、『毛詩品物圖攷』と、これに先んじて中國で編纂された徐鼎『毛詩名物圖說』の異同も一つの手がかりである。兩書は圖の解説における引用文献の異同、すなわち『毛詩名物圖說』は經史子書以外にも、經義を明らかにする記載であれば網羅的に採録したのに對して、『毛詩品物圖攷』は毛傳、鄭箋、朱熹の『詩集傳』を主として、諸書の記載を折衷したという違いがある^{一一}。先述した戴兆春が『毛詩品物圖攷』の「先賢の解釋を折衷」した點を評したのは、まさに『毛詩品物圖攷』の解説が經書の註釋を根幹に据えていたからだろう。

だが、『毛詩品物圖攷』を『詩經』の附録として収録した坊本、特に解説を削除し圖

のみを収録した小安樂書屋『御纂繪圖詩義折中』や上海天寶書局『監本詩經』の編纂者は、『毛詩品物圖攷』の解説よりも、精緻な圖のほうに價值を見出したかと考えられる（本頁の圖四十八）。これは、學習上の参照價值に着目したこともあっただろうが、明確な基準で『毛詩品物圖攷』の一部を節録するという點からすれば、商品でもある書物の附加價值を高めようとしたのだろう。

圖四十八、「關雎圖」〔右は徐鼎『毛詩名物圖說』、下は岡元鳳『毛詩品物圖攷』〕

雎鳩	
周南	關雎
	
<p>爾雅釋鳥雎鳩王雎郭璞注雎鳩今江東呼之爲雎好在水邊山邊食魚而腹脹經曰雎也亦曰白鷺本名白鷺陸波草木蟲魚疏雎鳩大小如鷓鴣深目上骨露兩州人謂之鷓鴣郭璞注其背曰白鷺倒腹尾上白徐鈔曰雎鳩常在河洲之上高信謂更不移處嚴粲詩緝左傳邠于五鳩備見詩經說雎鳩氏司徒鴻鳩此四壯嘉魚之類是也雎鳩氏司馬關雎之鳩是也雎鳩氏可空布殺也西風之風也雎鳩氏可空大明之屬是也雎鳩氏司事雎鳩也非莊鳩小宛之鳴雎鳩食食食之也杜預注雎鳩雎而有別故爲司馬王法則愚按毛傳雎而有別列文傳云未見乘舟而匹處蓋生有定偶交則變則則與處亦在洲渚其色黃其目深云雌類如鷓似鷓者皆謂雎鳥其鳥之性不濫取以方淑女之德又據通志云</p>	

毛詩品物圖攷卷四

鳥部

關關雎鳩

三子

浪華岡元鳳纂輯

傳雎鳩王雎也鳥類而有別集傳水鳥也狀類雉鷓今江淮間有之生有定偶而不相亂雎並遊而不相狎故毛傳以爲鷓而有別○鷓與鷓通雎鷓鳥也翎翔水上扇魚攫而食之大小如鷓





小結

南宋以來、主に學習に供する目的で編纂された『詩經』圖譜は、『詩經』の名物を集成した類書、考證を目的とした書物、情景畫や動植物圖を収録した圖譜の編纂にあたって基礎資料として用いられ、圖譜の一部が採録された。この一方で、これらの書物の編纂者である高儔鶴や徐鼎、方玉潤は、それぞれ依據した『詩經』圖譜の内容に不足や疑問を感じていた。これは、宋元の經書圖譜に對する意識の變化と異なり、編纂者やその意圖、そして圖譜の根據は明らかでなくとも、古くから傳わったという點に宋元以來の『詩經』圖譜の價値や意義を見出すという認識が清代以降、次第に崩れゆきつつあったことを示している。

光緒年間になると、書肆は錦章圖書局『繪圖監本詩經』のように情景畫を収録したり、中國にもたらされて廣まった岡元鳳『毛詩品物圖攷』を『詩經』の附録に採り入れるなど、從來の坊本が宋元以來の『詩經』圖譜を節録するのは異なる、新たな工夫を行った。商業出版においてこのような新機軸を打ち出す動きが興ったことは、先述した宋元以來の『詩經』圖譜に對する認識の變化と無關係ではないだろう。

このような状況のなかでも、宣統三年の『章福記監本詩經』や小安樂書屋『御纂繪圖詩義折中』は、宋元以來の『詩經』圖譜の内容を附録として採録した。兩書の編纂者が採録したのは、それまで坊本の附録としては見られなかった鄭之僑『六經圖』の「詩經圖」である。これも書肆にとつては工夫の一環であつたのかもしれない。しかし、鄭之僑の「詩經圖」は、元代の『六經圖碑』の「詩經圖」に、明清の勅撰『詩經』圖譜の附録の解説を補つたものであり、從來の『詩經』圖譜と大きな違いはなかった。

結局、岡元鳳『毛詩品物圖攷』の翻刻やこれを附録とする『詩經』が様々な書肆から出版されたのに對して、宋元以來の『詩經』圖譜の内容は、『毛詩品物圖攷』を折衷した『御纂繪圖詩義折中』が民國八年に再版されたのを最後にほとんど姿を消した。南宋の時、「毛詩正變指南圖」が人氣を博したことで廣まり、七百年以上に渡り改編を重ね傳わつてきた『詩經』圖譜の内容は、人々の認識の變化と新たな圖譜の流行によつて廃れていった。

一 『詩經圖譜慧解』影印本（江蘇廣陵古籍刻印社、一九九一年）によつた。

二 「後愚詩說」には「詩之附以圖也、亦風人之餘致也。讀詩者知詩中有畫、即知畫中有詩。故于

三百篇得其可以觀感者。與名人狀其風景、不啻置身其際、使爲臣見而感、爲子見而慕、且于圖陳稼穡之艱、而勞人思婦、宛然在慕也。寧惟是悅心之助爾」とある。また、「詩經圖總目」で

は「三百篇之繪圖也、其來舊矣。曾覽類書畫譜載宋孝宗朝命工部侍郎馬和之繪三百篇圖。因倣其意、以取其易於興感者、列各卷之首、以備古人遺義。俾詩篇之全旨而玩味不厭焉」と述べている。

三 『毛詩名物圖說』の自序には「其他禮樂、冠裳、車旂諸圖、後續梓行。先之鳥獸蟲魚草木者、猶詩之始國風而中雅頌也歟」とある。

四 徐鼎と同時代に編纂された『墨香居畫識』には、徐鼎に二子があり、ともに貴頭になったとある。しかし、後の『墨林今話』には「嗣子某不克家、以窮困卒。撰著散佚、莫可問矣」とある。

五 北京の中國國家圖書館所藏稿本によった。

六 凡例では體裁について「體製與王氏地理攷稍異。彼書一依經文爲次。是編義取分國」とあり、参照文獻については「地理之學、最古最精、推漢書地理志、後漢書郡國志、杜氏春秋左傳集註、春秋釋例、酈氏水經註。是編先徵據五書、而後參以羣書」や「近代長於地學、如顧景范祖禹、閻百詩若璩、顧亭林炎武、高澹人士奇、胡朏明渭、顧錫山棟高、皆最著者。而集大成則莫如大清一統志。洪稚存亮吉著乾隆府廳州縣圖志實本之。是編去取多以一統志爲宗」とある。

七 「詩無邪太極圖」(q1)は元代の『六經圖碑』の「詩經圖」以來見られる「思無邪圖」と、「太極圖」を合わせた獨特な圖解である。典據として記されている『太極元樞』は、向達「方玉潤著述考」(國家圖書館出版社『名家著述考』二〇一〇年所収)に方玉潤の著書として見え、「詩無邪太極圖」も方玉潤自身が新たに作成した圖解であろう。

八 凡例には「詩原有圖有譜、二者均不可廢。但三代制作、去今已遠、後人以意仿圖、未必即肖。唯山川封域、萬古不易、建置雖多、尚可尋討而得。即作詩時世圖、豈盡一一可據。然其大要、亦頗不爽、因略加考訂而附存之、庶學者可一覽而得其時勢之升降、陵谷之變遷焉。唯制度、名物諸圖、則在所略」とある。

九 陳捷『毛詩品物圖考』より見た十八世紀における新しい「知」の形成(川原秀城編『西學東漸と東アジア』岩波書店、二〇一五年)三〇五頁註釋十二には『毛詩品物圖考』の版木が中國へ売却される過程について別稿を用意している」とある。この新たな研究によって『毛詩品物圖考』の流通は明らかになるだろう。本研究ではさしあたり『八千卷樓書目』の記載による推測を記しておく。

一〇 翰林編修戴兆春の序には「東瀛浪華岡氏元鳳著有毛詩品物圖考一書、採擇則匯集諸說、攷訂則折衷先賢、不特標其名、且爲圖其象、俾閱者開卷了然、綜見見聞之類、極形形色之奇、罔不搜采備至、誠有爾雅所不及載、山經所不及詳者、吁、大觀哉」とある。この序における『毛詩品物圖攷』の評価については肖嬌嬌「日本江戸時代岡元鳳『毛詩品物考』的傳播」(四川大

學中國俗文化研究所『新國學』二〇一四年、二七七～二八三頁）がすでに言及している。なお、この序は光緒十二年（一八八六）上海積山書局の版に附されて以降、掃葉山房の版にも附されている。

二 徐鼎の文獻参照の姿勢については、『毛詩名物圖說』の「發凡」に「茲編經傳子史外、有闡明經義者悉摭拾其辭」とあり、岡元鳳については『毛詩品物圖攷』自序に「毛鄭朱三家爲歸、有異同者會粹羣書而折之」とある。『毛詩名物圖說』と『毛詩品物圖攷』の異同については、揚之水『詩經名物新證』（修訂版、天津教育出版社、二〇〇七年）の「詩・文學的、歴史的」に指摘されているほか、莊雅州「毛詩名物圖說」與「毛詩品物圖考」異同論」（中國詩經學會『詩經研究叢刊』二〇一五年第二期、一〇八～一三四頁）は詳細な分析を行っている。

結語

本研究では、書物に収録される『詩經』圖譜の多くに見られる類似性から、その間には繼承關係があると推測した。そこで、歴代の『詩經』圖譜の特色を検討して繼承關係にあるものと、そうでないものを辨別し、圖譜の内容や編纂目的、圖譜に對する意識の變化を取り上げ、『詩經』圖譜の原型の形成と多様化、定型化、改編、消失の過程を考察してきた。この考察結果の要點は以下ようになる。

第一章「歴代『詩經』圖譜の概要と特色」では、筆者が調査した漢代から中華民國までの八十六種の『詩經』圖譜の概要を整理し、歴代の『詩經』圖譜における特色を検討した。

第一節「漢代から北宋までの『詩經』圖譜」では、漢代から北宋までの『詩經』圖譜を考察した。この時期の『詩經』圖譜は歐陽脩が輯佚した『鄭氏詩譜』を除き、ほとんどが散佚した。そこで、現在まで傳わる圖譜の名稱や僅かな記載を手がかりとして特色を検討した。この結果、この時期の『詩經』は「譜」と「圖」に大別された。「譜」は『詩經』を解釋し考證するための資料として編纂されたのに對して、「圖」は『詩經』の情景を描いたと推測されるものが多く、主要な用途は鑒賞に供されるか、『詩經』の意を體得し、人格や倫理の涵養する道德教育であったと考えられる。なかには、唐代の『毛詩草木蟲魚圖』のように、『詩經』中の名物を考證して描かれた圖もあるが、「譜」のように『詩經』を考證し解釋する上で参照されたかは明らかではなかった。

第二節「南宋の『詩經』圖譜」では、南宋の時に編纂された『詩經』圖譜を考察した。この時期の『詩經』圖譜のなかで、個人が編纂した『詩經』圖譜には唐仲友「六義四始圖說」や王柏「二南相配圖」がある。この二つは、『詩經』の「六義四始」や二南の對應といった『詩經』の表現法や構成に關する内容を圖示しており、歐陽脩『鄭氏詩譜』とは關係なく、自説を示すために編纂された。これに對して、楊甲「毛詩正變指南圖」は歐陽脩『鄭氏詩譜』や天文や地理、建築や土地などの制度、車馬や衣冠、祭器といった個々の事物を圖示する、総合的な内容をもった『詩經』圖譜であった。「毛詩正變指南圖」が編纂された當初の目的は明らかでないが、その後と同圖譜を翻刻した人々はいずれも諸生の参照資料として整理、校訂し刊刻しており、學習の參考資料として廣まった。一方、書肆が編纂した『詩經』圖譜は、單行本や、學習に用いられた「纂圖互註本」の附録に見える。これらは、學習に供するという編纂目的のみならず、その内容も「毛詩正變指南圖」と類似していた。

第三節「元代の『詩經』圖譜」では、元代の『詩經』圖譜を考察した。この時期には、許謙が朱熹や王柏の『詩經』解釋に基づき、各詩篇の作成年代や「豳風」の詩篇の順序を再考した「詩譜」や「豳詩次序」を編纂した。これは、南宋の唐仲友や王柏の圖譜と同じく自説を示すために編纂された圖譜であった。

一方、州學に建立された『六經圖碑』や、科擧の標準的解釋とされた朱熹『詩集傳』の註釋書である羅復『詩集傳音釋』の附録「詩傳圖」など、學習に供されたと考えられる石碑、書物の多くの『詩經』圖譜には、南宋の「毛詩正變指南圖」と、書肆が編纂した『詩經』圖譜の両方が収録され、さらに従来見られなかった新たな圖譜や解説が加えられた。また、劉瑾『詩集傳音釋』に収録されている「諸國世次圖」と「作詩時世圖」は、いずれも楊甲「毛詩正變指南圖」に類似した圖譜があり、これを改編したと推測される。

第四節「明代の『詩經』圖譜」では、明代の『詩經』圖譜を考察した。明代では、羅復の「詩傳圖」と劉瑾の「諸國世次圖」および「作詩時世圖」がそのまま勅撰書『詩經大全』の附録として収録され「詩經大全圖」となった。こうして、國家に公認された『詩經』圖譜が初めて登場し、各地に頒布された。この後、樂器圖を収録する呂柟『詩樂圖譜』、『詩經』を學習するための必要事項を圖示した胡明勗『新刊詩經集成圖譜』、『詩經』名物の類書である鍾惺『詩經圖史合攷』も編纂されたが、より多く翻刻され、他の書物にも収録されたのは「詩經大全圖」であった。

また、明代の中、後期にかけては、胡賓「詩經圖全集」のように「詩經大全圖」と元代の『六經圖碑』の「詩經圖」を折衷した圖譜が編纂され、盧謙が『六經圖碑』の「詩經圖」を、吳繼仕、郭若維、陳重光といった人々が南宋の「毛詩正變指南圖」を翻刻しており、特に「毛詩正變指南圖」は舉業書にも収録された。

明代に廣まった勅撰書の附録や翻刻本などの内容は、いずれも宋元『詩經』圖譜の延長線上にあった。しかし、その編纂目的は一樣ではなかった。勅撰書の附録や盧謙の『六經圖碑』翻刻は、宋元の多くの『詩經』圖譜と同じく學習の參考資料として編纂されたのに對して、「毛詩正變指南圖」の翻刻は傳來の少ない宋本を世に示すために行われた。この背景には、勅撰書の附録「詩經大全圖」の普及により、宋元の時に改編を重ねた結果生じた『詩經』圖譜間の異同が次第に知られるようになったことが關係していると推測される。

第五節「清代から中華民國期までの『詩經』圖譜」では、清代から中華民國にかけての『詩經』圖譜を考察した。清代では、それまで見られなかった情景畫や動植物圖を収

録する『詩經』圖譜がわずかに編纂された。しかし、最も多いのは明代と同じく勅撰書や舉業書の附録、宋元『詩經』圖譜の翻刻であった。また、明代の「詩經大全圖」も翻刻され、『詩經』を考證する書物の一部にも圖譜が収録された。これらのなかで、従前の圖譜の内容をそのまま踏襲したのは一部の翻刻だけであり、多くは従前の『詩經』圖譜を改編していた。そして、光緒年間から中華民国初期にかけては、宋元の『詩經』圖譜と類似する圖譜が減少する一方、日本の岡元鳳が編纂した『毛詩品物圖攷』が翻刻され、あるいは『詩經』坊本の附録として収録されて廣まった。

以上、第一章では歴代の『詩經』圖譜について、各時代における特色を指摘した。『詩經』圖譜の類似性に關わる特色としては、北宋以前と南宋以後の『詩經』圖譜の間に、歐陽脩『鄭氏詩譜』を除き、關聯性が見られない點が挙げられる。このことは、南宋以降の『詩經』圖譜の原型が現存する早期の圖譜である『鄭氏詩譜』や、同圖譜を収録した南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」であったことを示している。

次に、南宋以降の『詩經』圖譜の内容や編纂者、編纂目的には、時代によって異なる傾向が存在していたことが挙げられる。収録内容については『詩經』の詩篇の作成年代などを示す「譜」と、天文地理、建築などの制度、器物を示した「圖」が多く、情景畫や動植物圖といった圖譜は、清代以降に初めて編纂された。編纂者については、概ね個人と書肆、國家であった。個人は南宋以降一貫して主要な編纂者であったのに對し、書肆による編纂が明らかな圖譜は南宋と明代末期から清代初期、そして清代末期に多く見られた。また、國家による『詩經』圖譜の編纂は明、清の二代で行われた。編纂目的については概ね三點、『詩經』學習の参考資料、流傳の少ない圖譜の普及、そして『詩經』解釋に關する自説を示すことが挙げられる。南宋以降の『詩經』圖譜で顯著に多いのは前二者であった。

結果として、南宋以降の書物に見える圖譜の多くが類似する背景には、南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」が登場して以降、個人や書肆、國家のそれぞれが「毛詩正變指南圖」を原型とする『詩經』圖譜の編纂に關與し、改編を繰り返していくという流れがあったと推測された。

第二章『詩經』圖譜の形成と多様化」では、北宋の歐陽脩『鄭氏詩譜』と南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」の編纂を『詩經』圖譜の形成、「毛詩正變指南圖」を改編した南宋書肆の『詩經』圖譜、そして兩者に基づき更に改編された元代の『詩經』圖譜の編纂を『詩經』圖譜の多様化と位置づけ、類似する『詩經』圖譜が形成、多様化する過程を

考察した。

第一節「宋代における『詩經』圖譜の形成」では、まず鄭玄『毛詩譜』について、鄭玄が自身の『毛詩』解釋を示すために『史記』の年表と『春秋』の記載によって編纂したこと、そして同圖譜が早くに散佚し、北宋の時に歐陽脩が『毛詩譜』の殘卷や『春秋』や『史記』などの諸資料によって『鄭氏詩譜』を輯佚した経緯を記した。

次に、楊甲の「毛詩正變指南圖」は、七割が天文地理や制度、車馬などの「圖」、三割が『詩經』詩篇の名稱や動植物や器物などの「譜」であった。一部明らかにできる典據により、楊甲は『毛詩正義』のほか、歐陽脩の『鄭氏詩譜』や『詩本義』、蘇轍『詩集傳』、北宋の聶崇義『三禮圖』や陳祥道『禮書』といった禮圖、唐の呂才や北宋の燕肅の漏刻圖など、主に唐や北宋の諸書に基づき「毛詩正變指南圖」を編纂したことが明らかとなった。

第二節「宋元における『詩經』圖譜の多様化」では、南宋の書肆と元代の人々が編纂した『詩經』圖譜の内容を編纂年代順に分析した。なかでも早い時期に編纂された『監本纂圖互註重言重意互註毛詩』の附録である「毛詩圖譜」及び「四詩傳授之圖」は、「毛詩正變指南圖」に見える、ほぼ同内容の圖譜を節略したものである。その後編纂された單行本『毛詩圖說』は「毛詩正變指南圖」に見える圖譜を複数収録していた。『毛詩圖說』の後に編纂された『纂圖互註毛詩』の附録「毛詩舉要圖」はその内容の共通性から、主に『毛詩圖說』に依據し、「毛詩正變指南圖」の内容を補って編纂されたと考えられる。また『毛詩圖說』や「毛詩舉要圖」は他の圖譜を節録するだけでなく、歐陽脩の『詩經』解釋を示した圖譜、陸佃『禮象』や王普の漏刻圖、李樛『毛詩解』などによって、従前の圖譜を改編していた。

元代では、地理圖のみを収録した書物や、「譜」と「圖」を複数収録した圖譜が見られる。なかでも比較的多くの種類の圖譜を収録するのは『六經圖碑』と羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の附録「詩傳圖」であり、兩圖譜には南宋の「毛詩正變指南圖」、書肆の『毛詩圖說』と「毛詩舉要圖」の圖譜の一部が収録されていた。このうち「毛詩正變指南圖」の圖譜はわずかであり、主體は南宋の書肆の圖譜であった。これに加えて、羅復「詩傳圖」では、『六經圖碑』との共通点も見られた。一方、『六經圖碑』や羅復「詩傳圖」では解説が改編されて朱熹の註釋が主體となり、『六經圖碑』では朱熹の『詩經』に關する言説を示した圖譜も増補された。このほか、劉瑾『詩集傳音釋』の附録「諸國世次圖」と「作詩時世圖」は、南宋の「毛詩正變指南圖」や『毛詩圖說』の兩方の特徴を兼ね備えており、この兩圖譜に依據した可能性がある。

以上のように、南宋から元代にかけての『詩經』圖譜の形成と多様化は、楊甲「毛詩正變指南圖」が原型となり、南宋の書肆が同圖譜を改編することで興った。この多様化は、南宋の時、「毛詩正變指南圖」が好評を博して各地で刊刻され、廣く普及したことが契機であったと考えられる。そして、元代では主に「毛詩正變指南圖」から派生した書肆の『詩經』圖譜と、主要な『詩經』註釋であった朱熹の解釋に依據して改編を加えることで新たな『詩經』圖譜が編纂された。こうして、南宋の『詩經』圖譜は改編を重ねてさらに多様化した。一方、この多様化の過程では、原型であった「毛詩正變指南圖」の「譜」に相當する部分が削除され、『毛詩正義』や北宋諸家の『詩經』解釋が改められるなどして、「毛詩正變指南圖」の内容は次第に失われていった。

第三章「『詩經』圖譜の定型化と改編」では、明、清の時に標準的な解釋を示す参照資料として編纂された『詩經』勅撰書の圖譜の登場を、南宋から元代にかけて興った『詩經』圖譜の形成と多様化に對して、『詩經』圖譜が定型化する過程であったと位置づけ、勅撰書の圖譜の編纂と内容の特徴を考察した。一方、この時期には『詩經』圖譜の定型化と同時に、改編も行われた。これは定型化とは對照的な事象だが、同じ時期に發生したことから何らかの關係性があると推測された。そこで、その内容と編纂、改編の経緯を分析し、兩圖譜の異同を比較した。また、改編のなかでも宋元『詩經』圖譜の翻刻では、編者不明の『六經圖碑』をめぐって認識の變化が見られた。この點は、宋元『詩經』圖譜の改編と關わりがあると考えられるため考察した。

第一節「明代における定型の確立」では、明代に永樂帝の命により編纂された勅撰書『詩經大全』の附録「詩經大全圖」を取り上げた。「詩經大全圖」はその凡例に、元代の羅復と劉瑾の圖譜を収録したことが記されている。「詩經大全圖」、すなわち羅復と劉瑾の圖譜の内容を改めて詳細に分析すると、典據の明らかな箇所は一七三箇所あった。このなかでは、個人の言說としては朱熹に關する文獻が最も多く引用されている。さらに、朱熹の思想や『詩經』解釋に關する圖譜が収録されており、「詩經大全圖」は全體的に朱熹の思想が色濃く反映された圖譜であった。

『詩經大全』の編纂者胡廣が羅復と劉瑾の圖譜をそのまま収録した背景には、明が元の制度を踏襲し、科擧のなかで朱熹『詩集傳』を標準的解釋としたことがある。そして、編纂者の胡廣が羅復や劉瑾と近い地域の出身であったことも、収録の背景に何かしら關係があったかと推測される。

第二節「清代における定型の改編」では、『詩經大全』に次いで編纂された勅撰書『欽

定詩經傳說彙纂』の附録「詩傳圖」の内容を分析し、明代の「詩經大全圖」と比較した。「詩傳圖」の編纂経緯は『欽定詩經傳說彙纂』に示されていないが、引用典拠と圖の同一性から「詩經大全圖」の解説のみを改編した圖解であることが明らかとなった。「詩傳圖」の引用典拠は、唐以前の註釋が最も多く、陳祥道が大部分を占める北宋の註釋と、朱熹に代表される南宋の註釋がこれに次いだ。この改編は、『欽定詩經傳說彙纂』の編纂方針、すなわち朱熹の註釋を主としつつ、朱熹の説に合致する、あるいは『詩經』の主旨を補う解釋は廣く採録するという編纂態度に由来していた。一方、圖については「三代の舊」を傳えているという理由により改編されなかった。

以上のように、明清の勅撰書の『詩經』圖譜は、直接的には元代の羅復と劉瑾の編纂した圖解に由来しており、結局は南宋の「毛詩正變指南圖」が改編を重ねた一聯の流れのなかから生み出された『詩經』圖譜であった。清では、明との學術氣風の違いから解説は改編されたが、圖は改編されなかった。「詩傳圖」が「詩經大全圖」に依據している以上、「詩傳圖」の編者は、それが羅復と劉瑾の圖解だと知っていたはずである。しかし、それが何に由来するのか、恐らく明らかではなかったのだろう。この原因は、宋元における『詩經』圖譜の度重なる改編に求められるのだが、「詩傳圖」の編者は、古くから傳わる圖に何かしらの根拠があると考え、敢えて改編しなかった。

第三節「明代における改編」では、まず、それまでの圖譜の内容を改編した胡賓「詩經圖全集」と張溥『詩經註疏大全合纂』を分析した。前者は元代の『六經圖碑』と明の「詩經大全圖」を折衷したこと、後者は「詩經大全圖」に南宋の「毛詩正變指南圖」の一圖を増補したこと、そして、その改編の背景には「詩經大全圖」や「毛詩正變指南圖」の普及があることを指摘した。また、形態面の改編について、盧謙、章達による『六經圖碑』の「詩經圖」の翻刻を分析した。『六經圖碑』は碑の二面に様々な圖譜が刻まれているため、翻刻して書物とする際には圖譜の順序を配列する必要がある。この点について、盧謙と章達は「詩經大全圖」の構成に基づき編纂したと推測される。

第四節「清代における改編」では、舉業書の附録と宋、元、明の『詩經』圖譜の翻刻に見える改編を考察した。舉業書の附録では、清代早期に編纂された姜文燦「深柳堂詩經圖考」は南宋の「毛詩正變指南圖」や明の「詩經大全圖」を折衷した上、『白虎通義』や『六家詩名物疏』など諸書の解説や典拠未詳の天文圖を加えるなど、従来の圖譜を大幅に改編していた。この後の趙燦英「詩經圖考」は恐らく刊刻費用の節約などの原因から「深柳堂詩經圖考」の一部を削除したものであり、高朝瓔『詩經體註圖考』は「詩經大全圖」の圖のみを採録し、上圖下文の體裁をとった初めての『詩經』圖譜であった。

一方、清代の翻刻では、南宋の「毛詩正變指南圖」と『六經圖碑』の「詩經圖」を折衷したり、新たな天文圖を加えるなど様々な改編が行われた。『欽定詩經傳說彙纂』が刊刻される前に元代の『六經圖碑』を翻刻した盧雲英「詩經圖」は明の「詩經大全圖」から解説を増補しているのに対して、『欽定詩經傳說彙纂』が刊刻された後の王暉「毛詩正變指南圖」、鄭之僑「詩經圖」、楊魁植「詩經圖」では『欽定詩經傳說彙纂』によって増補、改編する傾向が強まり、「詩經大全圖」の要素は次第に見られなくなった。このことから、清代の『詩經』圖譜の改編基準に特に影響を與えたのは、『詩經』勅撰書の『詩經』圖譜の普及であったことを指摘した。

第五節「宋元の經書圖譜に對する認識の變化」では、清代でも早期に『六經圖碑』を翻刻した江爲龍『朱子六經圖』の編纂經過より、康熙年間中後期までに編纂者が不明な『六經圖碑』の編者を朱熹とする説があったこと、そして、このために改編が行われなかったことを指摘した。次に、雍正年間の常定遠『六經圖碑』や盧雲英『五經圖』の編纂經緯に見える、宋元の經書圖譜に對する疑義を取り上げ考察した。疑義が抱かれた背景には、宋元の經書圖譜が翻刻され廣まるにつれて、圖譜の間の異同が認識され、特に編纂者の不明な『六經圖碑』の編者や制作年代が問題となったことを指摘した。

最後に、乾隆年間の翻刻本である王暉『六經圖定本』、鄭之僑『六經圖』、楊魁植『九經圖』の編者の宋元の經書圖解に對する意識を考察した。これらの編者は、南宋「毛詩正變指南圖」と元代『六經圖碑』の間に存在する異同や『六經圖碑』の編者が不明な理由を時系列で捉えて『六經圖碑』を最も古い『詩經』圖譜と見なし、これが翻刻されて「毛詩正變指南圖」となり、次第に『六經圖碑』の内容が失われていった、と考えるようになった。このために、失われたと仮定された内容を他の『詩經』圖譜によって増補しようとしたことは、『詩經』圖譜の改編を推進した要因の一つだと考えられる。

第四章「宋元『詩經』圖譜の影響と消失」では、南宋の「毛詩正變指南圖」を原型とする『詩經』圖譜が、これを原型としない『詩經』圖譜に與えた影響、そして「毛詩正變指南圖」以來の『詩經』圖解の内容が次第に書物から消失していく經緯を考察した。第一節「宋元『詩經』圖譜の影響」では、明代の類書である鐘惺『詩經圖史合考』、清代の『詩經』圖譜のなかでも、情景畫を収録した高儕鶴『詩經圖譜慧解』、動植物圖を収録した徐鼎『毛詩名物圖說』、『詩經』の考證書である方玉潤『詩經原始』における宋元以來の『詩經』圖譜の収録状況と引用態度を考察した。この結果、高儕鶴や徐鼎、方玉潤は、それぞれ依據した『詩經』圖譜の内容に不足や疑念を感じており、翻刻の改

編で見られた宋元以来の『詩經』圖譜の價值や意義を見出す認識が、清代以降次第に崩れゆきつつあったことを指摘した。

第二節「宋元以来の『詩經』圖譜の消失」では、光緒年間以降の『詩經』圖譜をその内容から、宋元以来の『詩經』圖譜を収録するもの、情景畫や動植物圖を収録するもの、動植物圖のみを収録するものの三種に区分し、それぞれの収録狀況に考察を加えた。この時期の『詩經』圖譜の多くは『詩經』坊本の附録であり、様々な圖解を収録した理由は明らかでないものの、情景畫や動植物圖の収録は商業出版物に新機軸を打ち出すという、書肆なりの工夫であったと推測される。このような狀況のなかで、鄭之僑の「詩經圖」を節録する坊本も僅かにあった。鄭之僑「詩經圖」はこれまで坊本の附録には引用されることのなかった圖譜であり、これも書肆による工夫の一つであったと考えられる。しかし、その内容は元代の『六經圖碑』に『欽定詩經傳說彙纂』の解説を加えただけで、宋元以来の『詩經』圖譜の枠組みを超えるものではなかった。恐らくこのために、新たに傳わった『毛詩品物圖攷』が人氣を博し多くの『詩經』坊本の附録にも収録されたのに對して、鄭之僑「詩經圖」を節略した圖譜は、數量、種類ともに少なくなり、民國初頭にはほとんど見られなくなったと考えられる。

以上の考察結果から明らかなのは、書物に収録される『詩經』圖譜の多くに見られる類似性の背景に、南宋の楊甲が編纂した「毛詩正變指南圖」が後世の『詩經』圖譜の原型となり、これが個人や書肆、國家によって繰り返して改編されたこと、そして『詩經』圖譜の翻刻が加わり、古い時期の圖譜とそこから派生した圖譜がさらに新たな圖譜を生み出すという、多重的な再生産の構造が存在していたことである。

この構造が形成された要因は、書肆による工夫、勅撰書の圖譜の普及が、これとは内容の異なる宋元『詩經』圖譜の翻刻を促したこと、『詩經』圖譜の間に存在する異同から改編が行われたことなど、時代や編纂者によって様々であった。

しかし、翻刻を除いた『詩經』圖譜は、その原型である「毛詩正變指南圖」を意圖的に伝えようとしたわけではない。『詩經』圖譜の原型が「毛詩正變指南圖」であることは、恐らく南宋の書肆が改編した圖譜が廣まるにつれて次第に忘れ去られたのだろう。そして、元代には編者の不明な『六經圖碑』が建立され、後に翻刻されてその編者と根據をめぐる憶測が改編を促した。また、同じく元代の羅復や劉瑾の編纂した圖譜は編者が明らかかなものであったが、明代には『詩經』勅撰書に収録され、さらに清代にも改編され『詩經』勅撰書に収録されたことで、それが誰の手になるものであったか忘れられ

ていったことだろう。當然、『六經圖碑』や『詩經』勅撰書から節録した舉業書の附録は、その由來が知られることはなかった。結局、時代が下つても編者が明らかであったのは、明代以降、翻刻されて再び世に知られるようになった楊甲の「毛詩正變指南圖」だけであった。『詩經』圖譜の編纂した人々、参照した人々が『詩經』圖譜に見出した意義は、せいぜい古くから傳わったということであり、その根據や來歴は重要な意味を持たなかったといつてよいだろう。このために、古いものに意義を見出す風潮のなかでは改編されながらも廣く参照されたが、新たな『詩經』圖譜が登場したことで急速に失われていったのである。

『詩經』圖解の變遷過程全般について言うならば、多重的な再生産、そして『詩經』圖譜の根據や來歴が看過された根本的な原因は『詩經』圖譜の多くが學習の參考資料だったからだと考えられる。學習の參考資料は廣く學習に供される以上、編者の主張ではなく、一般に受け入れられる内容のものでなければならぬ。裏返せば、廣く受け入れられる内容であれば、いかようにも改編される餘地がある。『詩經』圖譜の原型である「毛詩正變指南圖」も、これを改編した後世の『詩經』圖譜も、その内容は當時廣く行われていた『詩經』註釋や關聯する資料に基づき作成されており、編者自身の見解を示したものではない。このために、『詩經』圖譜はその時々學術思潮の動向を受けて改編されたのだろう。

この一方、改編が繰り返されながら類似した圖解が編纂され續けたことも、『詩經』圖譜が學習と密接に結びついていたことが關係しているだろう。『詩經』の註釋では、歴代多くの學者が自己の見解を示したのに對して、學習の對象となる註釋はそれほど多様ではなかった。特に元代以降、清代に至るまで、科擧において『詩經』の經義は朱熹『詩集傳』に依據すべきことが規定された。『詩經』圖譜は學習の參照資料としていかに改編の餘地があったとしても、改編の根據となる『詩經』の註釋は限られていた。結局、宋元以來の『詩經』圖譜の内容を根底から覆すような變化は、經義の變化ではなく、清末に岡元鳳の『毛詩品物圖考』が流行するまで起こらなかったのである。

それでは、學習の參照資料として新たな解釋を示すこともなく、限られた枠組みのなかで改編され、歴代類似した内容を収録してきた『詩經』圖譜にはどのような研究意義があるのか。本研究の今後の展望と合わせて以下にまとめる。

『詩經』圖譜は『詩經』註釋の一つであり、その研究意義もまずは『詩經』註釋史の観点から考えられるべきだろう。『詩經』圖譜の研究意義は、『詩經』註釋史をどのようにとらえるかによって異なる。もし、前代とは異なる新たな解釋の積み重ねの歴史を『詩

『詩經』の註釋史だとするならば、學習の参照資料である『詩經』圖譜には編者の見解が示されておらず、大きな意義を見出すことは難しい。

だが、『詩經』註釋史の範圍に、註釋の普及や流行、註釋や學習との関わりまで含めるならば、『詩經』圖譜には研究意義があると考えられる。『詩經』圖譜に収録される内容は、南宋の時には漢唐の註疏、歐陽脩、蘇轍が主であった。この後、元代には主に朱熹とその系譜に連なる解釋が収録され、清では漢唐の註疏と朱熹の解釋が折衷された。このように、『詩經』圖譜の収録内容に独自の見解はなくとも、學習に用いられるからこそ時代の變化に對應していた。「毛詩正變指南圖」と繼承關係にある『詩經』圖譜は、いわば時代を映す鏡のような存在であり、その役割は、独自の主張を示すことではなく、その時々で學ぶべき内容を廣く伝えることだった。このような『詩經』圖譜の内容の變遷過程からは、新たな解釋が積み重ねられていく過程と相互に關聯しつつ、これとはまた異なる『詩經』註釋の歴史を構築することができると考えられる。

また、學習の觀點から考えた場合、『詩經』を含む經書圖譜の利用の實態は、かつての學習や科擧試験の内實を知る手がかりの一つとなるだろう。

例えば、元代の程端禮『程氏家塾讀書分年日程』には、圖譜と學習に関する記載が見える。程端禮の家塾では學生が經書を學習する際、まず本文や註釋をすべて鈔寫させた。その際に用いた經書の卷頭には圖譜があったようで、鈔寫にあたっては「先儒諸圖及說、鈔於卷首。圖在啟家者、不可移（先儒の諸圖及び説は、卷首に鈔す。圖は啟家に在る者、移すべからず）」と定めていた¹。また、本研究の考察のなかで取り上げた清代の楊魁植、楊文源父子が編纂した『九經圖』の楊文源序には「（楊魁植）又編輯經圖、尚未脫稿。展讀之下、每用愴然。因近科秋開、策問屢以圖學課士、伏念先人揣摩攻苦、纂集成書、精神爲憊（楊魁植）又た經圖を編輯するも、尚お未だ稿を脱せず。展讀の下、毎に用て愴然たり。近科秋に開かれ、策問は屢しば圖學を以て士に課すに因り、伏して先人の揣摩攻苦を念じ、纂集して書と成し、精神は爲に憊れたり」とある。

この僅かな例からだけでも、圖譜が學習のなかで實際に用いられた状況や圖譜に對する意識、そして科擧と圖譜との関わり的一端が垣間見える。『詩經』など經書が實際にはどのように教えられ學ばれたのか。教育や學習の實態は、讀書人層の知の大系が形成される過程を考える上で大きな問題である。學習の参照資料である經書の圖譜を初めとして、擧業書や日記など、種々の資料を検討することでこの問題を明らかにできるのではないだろうか。

そしてもう一つ、『詩經』圖譜は『詩經』の名物を考證する上でも参照されたい。

一例として、『朱子語類』には「書坊印得六經、前面纂圖子、也略可觀。如車圖、雖不甚詳、然大概也是（書坊六經を印し得たり、前面に圖子を纂め、也た略や觀るべし。車圖の如きは、甚しくは詳しからずと雖も、然るに大概も也た是なり）」とある^二。この朱熹の言葉を記録した黄義剛は紹熙四年（一一九三）の半年間と慶元五（一一九九）からこの翌年初めまで朱熹に師事した人物であること、そして現存する南宋の經書圖譜による限り、「車圖」が収録されているのは『詩經』の圖譜だけであることから、朱熹が見たのは恐らく『毛詩圖說』か『纂圖互註毛詩』の「毛詩舉要圖」のような圖譜であろう^三。この記載からは、朱熹やその門弟の間では『詩經』坊本の圖譜が『詩經』の解釋や考證の資足り得るかを議論していたことがわかる。『詩經』圖譜の内容が『詩經』の解釋や註釋に影響を與えたのかどうか、さらに調査、検討する餘地はあるだろう。

最後に、『詩經』圖譜は、日中における『詩經』解釋の異同を知る上でも研究意義が認められる。日本には中國から傳わった『詩經』圖譜のほか、江戸時代以降、日本人の手によって編纂された『詩經』圖譜も數多く傳わっている。比較的早い時期には新井白石が木下順庵と稻生若水の助力を得て、將軍への進講のために完成させた『詩經圖』がある。その後、尾田玄古『五經圖解』（一七二七年）、淵在寛『陸氏鳥獸草木蟲魚疏圖』（一七七八年）、岡元鳳『毛詩品物圖攷』（一七八四年）、松本愚山『五經圖彙』（『詩經圖彙』（一七九一年）、細井東陽『詩經名物圖解』（一八四八年）などが編纂された^四。

これらの圖譜のなかでも、松本愚山『五經圖彙』はその凡例に清代の王皓『六經圖』を校訂、改編したと記されている。新井白石『詩經圖』と尾田玄古『詩經圖解』は中國の『詩經』圖譜と動植物圖を折衷した内容であり、淵在寛『陸氏鳥獸草木蟲魚疏圖』と岡元鳳『毛詩品物圖攷』、細井東陽『詩經名物圖解』は専ら動植物圖を収録した圖譜である。また、徐鼎の『毛詩名物圖說』は日本へ傳わり文化五年（一八〇八）に翻刻されており、本草學者の小野蘭山とその門弟である春木煥光が同書の内容を検討した『毛詩名物圖說和名問答』も傳わっている^五。

これら一部の内容からだけでも、日本の『詩經』圖譜には中國の圖譜の影響を受けたものが存在するほか、中國ではほとんど見られない動植物圖が盛んに編纂されたことがわかる。日中で編纂された『詩經』圖譜の比較を通じて、兩國の學術風土の違い、そして學術交流の一端を解明できると考えられる。

一 程端禮『程氏家塾讀書分年日程』（黃山書社、一九九二年）卷一による。

- 二 黎靖徳『朱子語類』（中華書局、一九八六年卷一三八）「雜類」による。
- 三 田中謙二「朱門弟子師事年攷」（『田中謙二著作集』第三卷所収、汲古書院、二〇〇一年）二四四頁による。
- 四 新井白石『詩經圖』は宮内庁書陵部所藏。その編纂経緯は、伴蒿蹊『續近世畸人傳』卷二「松岡恕庵、附稻生若水」に見える。細井東陽『詩經名物圖解』は稿本、國會圖書館所藏。尾田玄古『五經圖解』、淵在寛『陸氏鳥獸草木蟲魚疏圖』、岡元鳳『毛詩品物圖攷』、松本愚山『五經圖彙』は刊本であり複數傳來しているため、所藏箇所は省略する。
- 五 神宮文庫に稿本が所藏されている。

主要參考文獻

詩經圖譜

宋

- 鄭玄撰、歐陽脩補『鄭氏詩譜』(『四部叢刊續編』(臺灣商務印書館、一九六六年)收錄の上海潘氏滂喜齋藏宋本影印)
- 唐仲友『帝王經世圖譜』(胡鳳丹『金華叢書』子部、『景印文淵閣四庫全書』第九二二冊所收)
- 『帝王經世圖譜』(嚴一萍選輯『百部叢書集成』九十五收錄、藝文印書館、一九六八年)
- 『監本纂圖重言重意互註點校毛詩』二種(北京中國國家圖書館所藏)
- 『六經圖殘存二種』(國會圖書館所藏マイクロフィルム「國會圖書館攝製北平圖書館善本書膠片」收錄)
- 『纂圖互註毛詩』(臺灣故宮博物院所影印、一九九四年)
- 「毛詩舉要圖」(靜嘉堂文庫所藏)

元

- 胡一桂『詩集傳附錄纂疏』(『續修四庫全書』第五十七冊所收)
- 『詩集傳名物鈔』(嚴一萍選輯『百部叢書集成』九十五收錄、藝文印書館、一九六八年)
- 許謙撰、郭鵬點校『毛詩名物鈔』(『元代古籍集成』經部詩類、北京師範大學出版社、二〇一二年)
- 羅復『詩集傳音釋』雙桂堂重刊本(北京中國國家圖書館所藏)
- 朱熹『詩集傳』宗文精舍刊元刻本(足利學校所藏)
- 劉瑾『詩集傳通釋』(詩傳通釋)』劉氏日新堂元刊本(靜嘉堂文庫所藏)
- 劉瑾『詩集傳通釋』(詩傳通釋)』劉氏日新堂元刊本(北京大學圖書館所藏)
- 劉瑾『詩集傳通釋』(詩傳通釋)』(國立公文書館內閣文庫所藏嘉永二年和刻本)
- 劉瑾撰、劉鐸、李墨宇、馬千惠點校『詩集傳通釋』(『元代古籍集成』整理校勘本、北京師範大學出版社、二〇一三年)

明

- 『詩經大全』永樂年間刻本(宮內庁書陵部所藏)
- 『詩經大全』成化七年王氏善敬堂刊本(國立公文書館內閣文庫所藏)
- 朱熹『詩集傳』司禮監刊(國立公文書館內閣文庫所藏)

- 呂柟『詩樂圖譜』嘉靖十五年國子監刊本（國立公文書館內閣文庫所藏）
- 胡賓『六經圖全集』（北京國家圖書館所藏）
- 胡明昂『新刊詩經集成圖譜』（國會圖書館所藏マイクロフィルム「國會圖書館攝製北平圖書館善本書膠片」收錄）
- 葉向高『葉太史參補古今大方詩經大全』萬曆三十三年刊本（國立公文書館內閣文庫所藏）
- 葉向高『葉太史參補古今大方詩經大全』萬曆三十三年刊本（早稻田大學圖書館藏本）
- 盧謙、章達編『五經圖』（國立公文書館藏紅葉山文庫舊藏本）
- 吳繼仕刊『七經圖』（國立公文書館內閣文庫所藏）
- 楊甲編、吳繼仕翻刻『六經圖』影印本（學苑出版社，一九九八年）
- 郭若維刊『六經圖』（國立公文書館內閣文庫所藏）
- 顧起元『新刻顧鄰初太史硃批詩經金丹』（國立公文書館內閣文庫所藏）
- 鐘惺『詩經圖史合攷』（『四庫全書存目叢書』經部·第六四冊）
- 陳重光『毛詩正變指南圖』（復旦大學圖書館所藏本）
- 徐奮鵬『採輯名家批評詩經刪補』（復旦大學圖書館所藏）
- 『詩經註疏大全合纂』北京大學圖書館藏明崇禎刻本影印（『四庫全書存目叢書』第七十冊收錄）
- 朱公遷『詩經疏義』明刊本（靜嘉堂文庫所藏明刊本）

清

- 『徐九一先生訂五經大全』（國立公文書館內閣文庫所藏）
- 『實際飛先生校訂五經大全』（國立公文書館內閣文庫所藏）
- 姜文燦『詩經正解』（北京大學圖書館所藏本）
- 趙燦英『詩經集成』（復旦大學圖書館所藏）
- 江為龍『朱子六經圖』（『四庫全書存目叢書』第一五二冊）
- 高朝瓔『詩經體註圖考』道光十四年晉祁書業堂刊本（北京大學圖書館所藏）
- 高儕鶴『詩經圖譜慧解』影印本（江蘇廣陵古籍刻印社，一九九一年）
- 潘宗鼎『六經圖考』（復旦大學圖書館所藏本）
- 常定遠『六經全圖』（京都大學文學部圖書館、中國國家圖書館所藏）
- 盧雲英『五經圖』（『四庫全書存目叢書』一五二冊所收）
- 王鴻緒等敕撰『欽定詩經傳說彙纂』（『景印文淵閣四庫全書』經部第八十三冊、國立公文書館所藏清刊本および加賀藩翻刻本）
- 王皓『六經圖定本』（『四庫全書存目叢書』一五三冊所收）
- 鄭之僑『六經圖』（國立公文書館、北京大學圖書館所藏）
- 鄒梧岡『詩經體註圖考大全』道光十四年刊本（北京大學圖書館所藏）
- 徐鼎『毛詩名物圖說』

(北京中國國家圖書館所藏乾隆三十六年刻本および宮城縣圖書館所藏文化五年翻刻本)

楊魁植、楊文源『九經圖』(『四庫全書存目叢書』一五三冊所收)

尹繼美『詩地理攷略』『續修四庫全書』(經部第七十六冊) 収録本(復旦大學圖書館所藏同治三年鼎吉堂刻本)

蔣光煦翻刻『詩集傳音釋』光緒乙丑戶部刊影印本(中國書店、出版年代不明)

方玉潤『詩經原始』(『續修四庫全書』第七十三冊所收)

李先耕點校、方玉潤傳『詩經原始』上下(中華書局、一九八六年)

『繪圖監本詩經』(北京大學圖書館所藏)

『章福記監本詩經』(北京大學圖書館所藏)

岡元鳳『毛詩品物圖攷』上海積山書局版、掃葉山房版(上海圖書館所藏)、森寶閣發

兌本(北京大學圖書館所藏)

『改良繪圖品物圖攷詩經監本』(北京中國國家圖書館所藏)

『御纂繪圖詩經詩意折中』(北京大學圖書館所藏)

上海天寶書局『監本詩經』(北京大學圖書館所藏)

日本

新井白石『詩經圖』(宮内廳書陵部所藏)

尾田玄古『五經圖解』(東北大學圖書館所藏)

淵在寬『陸氏鳥獸草木蟲魚疏圖』(國立公文書館所藏)

岡元鳳『毛詩品物圖攷』(國立公文書館所藏)

松本愚山『五經圖彙』(早稻田大學圖書館所藏)

細井東陽『詩經名物圖解』稿本(國會圖書館所藏)

小野蘭山、春木煥光『毛詩名物圖說和名問答』(神宮文庫所藏)

その他古典籍 整理・校點本、影印本

陳振孫撰、徐小蠻、顧美華點校『直齋書錄解題』(上海古籍出版社、一九八七年)

馬端臨『文獻通考・經籍考』(新文豐出版社、一九六四年)

黃虞稷撰、瞿鳳起、潘景鄭整理『千頃堂書目』(上海古籍出版社、二〇〇一年)

朱彝尊『經義考』(中華書局影印、一九九七年)

『欽定四庫全書總目』(中華書局、一九九七年)

于敏中等撰『欽定天祿琳琅書目』(中華書局、一九九五年)

瞿鏞『鐵琴銅劍樓藏書目錄』(上海古籍出版社、二〇〇〇年)

周中孚撰、黃曙輝、印曉峰標校『鄭堂讀書記』(上海書店、二〇〇九年)

陳鱣『經籍跋文』(『宋版書考錄』北京圖書館出版社、二〇〇三年所收)

- 傅增湘『藏園群書題記』（上海古籍出版社，一九八九年）
- 『中國歷代經籍典』（江蘇廣陵古籍刻印社，一九九三年）
- 朱傑人、李慧玲整理『毛詩註疏』（上海古籍出版社，二〇一三年）
- 『河南程氏經說』（『二程全書』臺灣中華書局影印『四部備要』，一九六五年）
- 嚴粲『詩緝』（『四庫全書珍本』七集所收）
- 蘇轍『詩集傳』淳熙七年刊本影印（『書目文獻出版社』，一九九〇年）
- 姜炳璋『詩序補義』（『景印文淵閣四庫全書』第八十九冊）
- 姚際恒『詩經發題』（嚴一萍選輯『叢書集成三編』十九卷文印書館，一九七二年）
- 陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』（『津逮祕書』所收、藝文印書館影印，一九六六年）
- 聶崇義『新定三禮圖』宋淳熙二年本影印（鄭振鐸編『中國古代版畫叢刊』一、上海古籍出版社，一九八八年）
- 陳祥道『禮書』至正七年福州路儒學刊明修本影印（北京圖書館古籍出版編輯組輯『北京圖書館古籍珍本叢刊』三經部、書目文獻出版社，一九八八年）
- 楊復『儀禮圖』（『通志堂經解』所收）
- 吳承仕『經典釋文序錄疏證』（中文出版社，一九八二年）
- 陸德明『經典釋文』（上海古籍出版社，二〇一三年）
- 陳暘『樂書』（『景印文淵閣四庫全書』第二一冊）
- 朱載堉『鄉飲詩樂譜』（『樂律全書』、『北京圖書館古籍珍本叢刊』第四收錄）
- 『欽定大清會典則例』（『景印文淵閣四庫全書』六百十九冊）
- 朱睦㮮『授經圖義例』（『景印文淵閣四庫全書』第六七五冊）
- 江藩撰、鍾哲整理『國朝漢學師承記』（中華書局，一九八三年）
- 黃宗羲『宋元學案』（浙江古籍出版社，一九九二年）
- 黎靖德編、王星賢點校『朱子語類』（中華書局，一九八六年）
- 程端禮撰、姜漢椿校註『程氏家塾讀書分年日程』（黃山書社，一九九二年）
- 『宋史』（中華書局排印本，一九八五年）
- 『元史』（中華書局排印本，一九七六年）
- 『明史』（中華書局排印本，一九七四年）
- 『清史稿』（中華書局排印本，一九七六年）
- 陳立撰、吳則虞點校『白虎通義疏證』（中華書局，一九九四年）
- 鄭樵『通志二十略』（中華書局，一九九五年）
- 王象之『輿地碑記目』（『叢書集成初編』中華書局，一九八五年所收）
- 李賢等撰『大明一統志』（三秦出版社，一九九〇年）
- 康熙『福建通志』（『中國地方志集成』上海古籍出版社、上海書店、巴蜀書社，二〇一

一年所収)

『光緒重脩安徽通志』(『中國地方志集成』上海古籍出版社、上海書店、巴蜀書社、二

〇一年所収)

李春龍審定、江燕・文元明・王珏點校『新纂雲南通志』(雲南人民出版社、二〇〇七年)

張彥遠撰、長廣敏雄譯註『歷代名畫記』(東洋文庫三〇一、平凡社、一九六三年)

李昉等編『太平廣記』(人民文學出版社、一九五九年)

王應麟『玉海』(江蘇古籍出版社、一九九〇年)

王應麟撰、翁元圻輯註、樂保羣、田松青、呂宗力校點『困學紀聞註』(上海古籍出版社、二〇〇八年)

顧炎武撰、黃汝成集釋、樂保群校註『日知錄集釋』(浙江古籍出版社、二〇一三年)

度正『性善堂稿』(『景印文淵閣四庫全書』第一一七〇冊)

樓鑰『攻媿集』(臺灣商務印書館『四部叢刊初編』、一九七五年)

黃潛『黃文獻公集』(『叢書集成初編』所收、一九八五年)

馮金伯『墨香居畫識』(『中國歷代畫史匯編』第四卷、天津古籍出版社、一九九七年)

『墨林今話』(周駿富輯『清代傳記叢刊』明文書局、一九八五年)

李麟『虬峰文集』(『四庫禁燬書叢刊』北京出版社、一九九八年)

陳思『兩宋名賢小集』(『景印文淵閣四庫全書』第一三六二〜一三六四冊)

著書

日本語

『支那古版畫圖錄』(美術懇話會、一九三二年)

『明清插圖本圖錄』(薄井君入營記念會、一九四二年)

伴蒿蹊『續近世畸人傳』(『東洋文庫』二〇二三所収、平凡社、一九七二年)

阿部隆一『中國訪書志』(汲古書院、一九七六年)

村山吉廣、江口尚純編『詩經研究文獻目錄』(汲古書院、一九九二年)

『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』「解題篇」および「圖版篇」(汲古書院、一九九二年)

竹岡友三『醫家人名辭書』(芳賀登、杉本つとむ等編『日本人物情報大系』、皓星社、二〇〇〇年)

米山寅太郎『圖說中國印刷史』(汲古書院、二〇〇七年)

中國語

王伯敏『中國版畫史』(上海人民美術出版社、一九六一年)

- 鄭振鐸編『中國古代版畫叢刊』（上海古籍出版社，一九八八年）
- 梁戰、郭群一編著『歷代藏書家辭典』（陝西人民出版社，一九九一年）
- 陳廣宏『鍾惺年譜』（復旦大學出版社，一九九三年）
- 上海古籍出版社編『中國古代版畫叢刊二編』（上海古籍出版社，一九九四年）
- 李致忠『宋版書敘錄』（北京圖書館出版社，一九九四年）
- 錢穆『國學概論』（商務印書館，一九九七年）
- 周心慧『中國古代版畫史論集』（學苑出版社，一九九八年）
- 周心慧『中國古代版畫通史』（學苑出版社，二〇〇〇年）
- 上海出版志編纂委員會編『上海出版志』（上海社會科學院出版社，二〇〇〇年）
- 寇淑慧『二十世紀詩經研究文獻目錄』（學苑出版社，二〇〇一年）
- 戴唯『詩經研究史』（湖南教育出版社，二〇〇一年）
- 薛冰『中國版本文化叢書·插圖本』（江蘇古籍出版社，二〇〇二年）
- 洪湛侯『詩經學史』（中華書局，二〇〇二年）
- 周心慧『中國版畫史叢稿』（學苑出版社，二〇〇二年）
- 祝重壽『中國插圖藝術史話』（清華大學出版社，二〇〇五年）
- 劉毓慶『歷代詩經著述考（先秦～元代）』（中華書局，二〇〇五年）
- 張秀民著、韓琦增訂『中國印刷史』（浙江古籍出版社，二〇〇六年）
- 徐小蠻、王福康『中國古代插圖史』（上海古籍出版社，二〇〇七年）
- 夏傳才『詩經研究史概要』（清華大學出版社，二〇〇七年）
- 劉師培著、陳居淵註『經學教科書』（上海古籍出版社，二〇〇七年）
- 揚之水『詩經名物新證』（修訂版，天津教育出版社，二〇〇七年）
- 李先耕『鍾惺著述考』（黑龍江大學出版社，二〇〇八年）
- 劉毓慶『歷代詩經著述考（明代）』（中華書局，二〇〇八年）
- 皮錫瑞著、周予同註釋『經學歷史』（中華書局，二〇〇八年）
- 皮錫瑞著、周予同註釋『經學通論』（中華書局，二〇〇八年）
- 鄭振鐸『漫步書林』（中華書局，二〇〇八年）
- 張之洞著、范希曾補正、孫文泱增訂『增訂書目答問補正』（中華書局，二〇一一年）
- 柯律格著、黃曉鵬譯『明代的圖像與視覺性』（北京大學出版社，二〇一一年）
- 夏傳才『詩經學大辭典』（河北教育出版社，二〇一四年）

論文・雜誌

日本語

- 古原宏伸「詩經圖と孝經圖」（美術史學會『美術史』第十九卷，一九六九年）
- 田中謙二「朱門弟子師事年攷」（『田中謙二著作集』第三卷所収，汲古書院，二〇〇一年）

陳捷『毛詩品物圖考』より見た十八世紀における新しい「知」の形成（川原秀城編『西學東漸と東アジア』岩波書店、二〇一五年）

中國語

- 鄭振鐸「關於詩經研究的重要書籍介紹」（商務印書館『小説月報』一九二三年第三期）
- 王敏、徐自強「石刻『六經圖』記」（國家圖書館『國家圖書館學刊』一九八〇年三期）
- 汪前進「石刻『六經圖』綜考」（中國科學院自然科學史研究所『自然科學史研究』一九九三年一期）
- 楊仁愷「關於馬和之『詩經圖』的一些問題」（南京博物院『東南文化』二〇〇〇年二期）
- 吳長庚、馮會明『六經圖』碑本書本之流傳與演變」（江西省社會科學院『江西社會科學』二〇〇三年二期）
- 吳長庚「六經圖碑述考」（中國孔子基金會『孔子研究』二〇〇三年二期）
- 「嶺南人文圖說之七十二」『六經圖』與鄭之僑」（廣東省社會科學界聯合會『學術研究』二〇〇九年十二月）
- 盧錦堂「詩情書意——『詩經圖譜慧解』國家圖書館古籍善本雜詠之五」（國家圖書館（臺灣）編『全國新書資訊月刊』二〇一〇年十月號）
- 向達「方玉潤著述考」（國家圖書館出版社『名家著述考』二〇一〇年所收）
- 薛景『詩經』圖學概況及研究意義」（『畢節學院學報』二〇一一年一期）
- 楊艷燕『六經圖考』刊刻年代考辨」（上海圖書館學會『圖書館雜誌』二〇一一年七期）
- 揚之水「馬和之詩經圖」（教育部全國高等院校古籍整理研究工作委員會『中國典籍與文化』二〇一二年一期）
- 沈亞丹『詩經圖』…一個宋儒的詩學圖像文本」（中國藝術研究院『文藝研究』二〇一二年九期）
- 李傑榮「漢之唐代的詩經圖」（河北師範大學『河北師範大學學報』（哲學社會科學版）二〇一三年一期）
- 張玖青、曹建國「唐前『詩經』圖考論」（中國藝術研究院『文藝研究』二〇一三年三期）
- 肖嬌嬌「日本江戸時代岡元鳳『毛詩品物考』的傳播」（四川大學中國俗文化研究所『新國學』二〇一四年）
- 莊雅州「毛詩名物圖說」與「毛詩品物圖考」異同論」（中國詩經學會『詩經研究叢刊』二〇一五年第二期）
- 喬輝「楊甲『六經圖』之禮圖考論」（南京師範大學文學院學報二〇一六年三期）

初出一覽

本論文では論の展開上、既発表の内容を加筆、修正した上で大幅に組み替えた。このため、既発表の論文の内容はそれぞれ複数の章節に分散しており、章節ごとに示すと極めて煩雑になる。そこで、まず既発表の論文を列挙して番號を振り、この番號によって章節ごとの初出を示した。

- ① 『詩經』註釋史における「毛詩舉要圖」の意義」(日本中國學會『日本中國學會報』(六十四) 一四三～一五五頁、二〇一二年十二月)
- ② 『詩經』圖解本の變遷——宋から明初まで——
(早稻田大學中國文學會『中國文學研究』(三十八) 十八～三十六頁、二〇一二年十二月)
- ③ 「詩經大全圖」と「詩傳圖」——明清期の勅撰『詩經』圖解について——
(同右『中國文學研究』(三十九) 二十一～四十頁、二〇一三年十二月)
- ④ 「明代『詩經』圖解の變化について——嘉靖年間以降の圖解三種を中心に——」
(同右『中國文學研究』(四十) 三十八～五十四頁、二〇一四年十二月)
- ⑤ 「清代の『詩經』圖解について——前代の繼承と改編——」
(同右『中國文學研究』(四十一) 二十二～四十六頁、二〇一五年十二月)

第一章

第一節 書き下ろし。

第二節 ①、②

第三節 ②

第四節 ②、③、④

第五節 ⑤

第二章

第一節 ①、②

第二節 ②

第三章

第一節 ③

第二節 ③

第三節 書き下ろし。

第四節 ⑤

第五節 書き下ろし。

第四章

第一節 ④、⑤

第二節 書き下ろし。